
神は貴方の守護天使！？

蛹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は貴方の守護天使！？

【Nコード】

N0643C

【作者名】

蛹

【あらすじ】

大いなる存在である神々、それらを束ねる王がいた。【神王】と呼ばれる神々の王が事故で降臨した世界。そこで待ち受ける荒事に嘆いた彼はその世界に神罰と奇跡を起こす…ことはありません。イタズラ好きな神々の王【神王】が異世界で起こすどたばた劇。興味がある事はやってみる。失敗すれば神の力でねじ伏せる。神王が降臨する世界の運命は！？どたばたでファンタジーではのぼのなコメディIPS・完結に向けて、第1話から修正中。もしかしたら矛盾が出てくるかも？

神は旅立つ。(前書き)

目標100話突破!!

どのくらいかかるかわかりませんががんばります。

神は旅立つ。

とある世界のとある可能性のお話。
数多にある世界のほんの一欠けら。
その一欠けらのほんの一部の世界での出来事。

― 神界【アウエンティヌス城 執務室】―

「ウリエル様！神王様がまたいなくなりました！！」

「あの方は…ご自分の立場というものをご理解しておられるのか！？」

【アウエンティヌス城】

数多の世界にある宗教にも出てくる神々が暮らす天界とよばれる世界。

その神の一つ一つが強大な力を持ちながらもそれを治める神々の王の神王が住む城。

純白の城壁に数多の世界から集められた建築材料にしては神秘的な輝くを放つような装飾がされた壮大な城。

その城の執務室で嘆く、この世界の天使と呼ばれる種族の中でもその力の強大さと美しさで四大天使の一人と言われるウリエルは天使の中でも2大女天使とも言われる一人。

深い漆黒のような黒い長い髪と突き刺すような細く、鋭い目を持ち、そのスタイルは女性の理想型と称えられるほどの美貌の持ち主でもある。

三対六枚の純白の翼を持ち、女性としても天使としてもその美しさは天界1とも言われる。

彼女は这个世界でもっとも強大かつ、偉大と言われる神王の秘書であり、お目付け、教育係で幼馴染でもある。

多くの者が神を全知全能と考えているがウリエルから言わせればそのようなことは決してない。

実際、神の身体能力は人間以上だがそれ以外はあまり変わらない。人間との違いは神特有の力があることのみである。

天使は翼があるだけで一部を除いてそのような特殊な力はない。

全知全能に相応しい神は天界を統治する神王のみだとウリエルは思っている。

…これで性格も少しはマシになればウリエルも苦労しないのだが。全知全能と言われる神王もウリエルから言わせればやんちゃでめんどくさがりな幼馴染である。

自分の目の前で息を切らしながらも神王を逃がした失態で冷や汗を掻く自分の部下をギロツと睨みつける。

「警備は何をしているの！神王の執務室の出入り口には私と貴方達で魔法で封印して、見張りもつけたでしょう！？」

そう。確かに入り口と窓には封印の魔法をかけた。

数人がかりの封印結界は神王といえども苦戦する強度のほずである。見張りも屈強な者を2人つけたはずである。

「ウリエル様が執務室から離れた後、神王様があつさりと封印を解き、幻術で幻を見せた見張りの顔に落書きをしていった後に逃げ出したようです」

どうも、数人がかりでも時間稼ぎにもならなかったようだ。

執務中であつたウリエルは思わず、自分の机に頭を打ち付けてしまい、重要な書類が辺りに散らばつたがウリエルは目線もくれずに叫んだ。

「なんで脱走の技術ばかりうまくなるの！他の勉強はサボるくせに

「!!」

「神王様ですから」

あっさり言う自分の部下を腹いせに魔法で黒焦げにした。

しかし、部下の言うことももつともで神王絡みのトラブルの大半の事はそれで済んでしまう。

脱走など大人しいほうだ。

「あゝ、もうっ！どこいったかわからないの？」

黒焦げにされた部下は何事もなかったかのように懷からなぜか燃えていない真っ白な封筒を取り出す。

しかし、その手紙を扱う様子は黒焦げながらもまるで爆弾でも扱っているかのような慎重さである。

「神王様の執務室に封筒がありました」

それを聞いたウリエルの顔は一瞬で青ざめた。
しかも、嫌な汗が体中から滲みだしてきた。

「……………じ、じゃあ、貴方が……」

震えるような声で絞り出すように言うウリエルの言葉を部下は遮るように、ウリエルにとっては死刑宣告をされたかのようにズバツと言いつ放つ。

「【ウリエル様宛】なのでウリエル様がお読みください」

特に【ウリエル様宛】という言葉を噛み締めるかのように強調して言った。

「…どうしても？」

上目使いの目線で言うウリエル。

男であれば誰もが魅了されたであろう。

部下が女性でなければ…。

「神王様の指定です」

「…わかったわよ」

そう言っただけで恐る恐る受け取ると部下は逃げるように部屋から逃げ出した。

しかも、足音が複数ということは聞き耳を立てていたものがいたようだ。

しかし、ウリエルは手の中の危険物体で頭がいっぱいでそれどころではなかった。

（今度はなにかしら？前は開けたと勝手に封筒の中でカエルが召喚されて、封筒からカエルの群れが飛び出してきて、執務室をカエルだらけにしたし…）」

恐る恐る開封するとなにも起きなかった。

安心して中の手紙を開くと次のように書かれていた。

『我が親愛なるウリエルへ』

いい加減に仕事に飽きたからどっかの異世界に数年間ぐらい遊びに行ってくる。

俺のやる予定だった書類は全部残しておいたから全部お前のやる。

100年分ぐらいはあるからそれが終わるまで俺を探すな。

ってか、無理して探さなくてもいいぞ。

その間にどっかの異世界の英雄にでもなつて豪遊してくるんでよろしく♪

PS・なお、この手紙は読み終わったら5秒後に爆発するように魔法をかけた。

ちゃんとお前の頭がアフロヘアーになりようにサービスしておいたぞ。(^ー^-)・

貴方の神ちゃんより『

………

………

…

「あの馬鹿~~~~~!!!!!!!!!!!!」

執務室は光に包まれた。

その頃、神王はというと…

「現段階において、オーデイン様の43杯！神王様が51杯目！！」

とある酒場にて飲み比べをしていた。

城とは裏腹に何処か寂れたごく普通の酒場。

だがこの店の客は酒とこの店の雰囲気酔いしれるのが好きなものばかりであった。

その酒場の一か所でテーブルを囲む多くの神々。

姿形は様々だが気楽で陽気な姿は他の種族と何ら変わる事のない。

「オーデイン様あ~~~~！今月の酒代賭けてんだ！頼むから勝ってくれ

」！
」

そう言つて声援と嘆きの声を送るのは褐色の肌が見えるような薄着の顔が犬のような者。

名をインプウ。

またの名をエジプト神話に出てくる冥界の神、アヌビス。

「やっぱり、いくらオーデイン様でも神王様には勝てなかったな。これでお前は今月禁酒だな」

「くそお~~~~~！！」

アヌビスを笑う紅い鎖で装飾された黒いローブを着た灰色の翼を背に宿した少年。

アヌビスと同じくその身の死を宿したアヌビスの友、名をタナトス。その存在は死そのものともいえるギリシア神話の死を神格化された神。

「さあ、勝負もいよいよ佳境へと入りました！解説のロキさん。現在の状況をどう思いますか？」

「キヤハハハハ」オーちゃんが神ちゃんに勝てるわけないでしょ！オーちゃんも年なんだから諦めたら？」

日本神話の神なのだがなぜかセーラー服を着た若い女子にしか見えない天照大神あまてらすおおみかみと北欧神話の悪戯好きな神でオーデインの義兄弟のロキ。

「な、何を言う…。わしゃあ…まだま…だ現役…じゃわ…い」

と言いつつも口を押さえるのは片目が無く、長い白髭の老人。つばの広い帽子を被り、古臭いが何処か神々しい杖を持っている。

彼こそが北欧神話の神であり、知神とも言われるオーディンである。もっとも今はただの飲みすぎた、ただの爺さんではあるが。

「爺さんもいい加減に降参したら？ポツクリと逝っちゃうよ」

そのオーディンに情けの声をかける青年。
もしくはもっと若いかもしれない。

「まだまだ…」

「無理したら孫のフレイヤちゃんが悲しむよ。」

「なんじゃとおー!!」

目を見開くオーディンに黒い笑みを浮かべる青年。

「あゝあ、フレイヤちゃんが枕を涙で濡らす光景が目には浮かぶな」
「くう~~~~~!!」

ちなみにフレイヤも北欧神話の女神の一人でオーディンの孫。
そのフレイヤをオーディンは目に入れてもかわいいというぐらい溺愛している。
ぶっちゃけ、親馬鹿ならぬ爺馬鹿である。

「どうすんのかな？」

「降参じゃ…。」

「決まった~~~~!!ただいまを持ちまして『第503回 どちらが牛乳に恋してるのか？愛があればできるはず！牛乳早飲み競争』のチャンプは我らが神王様!!」

「~~~~~ウヲオオオオオ~~~~~!!!!」
「~~~~~」

そう、オーデインと勝負していた青年こそが神王。

短い空のように蒼色の髪を逆立てて、赤いバンダナを頭に巻き、白いズボンと緑の服を着ていて、その上から動きやすい金属の胸当てを付けた何処にでもいそうな普通の青年。

今や多くの周りの神々にもみくちやにされ、しまいには胴上げされたこの青年こそが…

「爺さん、約束は守ってもらうぞ」

その多彩な才能から全知全能と多くの者から称えられ…

「しかたないのう…」

多くの神々より強大な力を持っていることから歴代最強と噂され…

「今度、ウリエルの生写真やるからさ」

強大な神々を統括するだけでなく、魔界や地獄界の者たちからも一目置かれる最高神。

「約束だぞ!!」

それがこの青年…

「ああ！（このエロ爺、扱いやすくて助かる）」

【神王】である。

……

……

：

世界を体現する【ユグドラシル】。

世界樹という木という説が主流だが実際は違う。

確かにユグドラシルはオーデインが管理している。

神は世界の管理が仕事である。

繁栄すればそれが悪しき方向に向かないように、滅びようとすればそれを防ぐ、時には良くも悪くも大きな神の試練ともいえる大きな運命を動かすといった調整が神の仕事と言える。

では、神々は世界をどのように管理しているのか。

実は神々の多くはポケットに世界を入れている。

それだけ聞けば神のポケットはどれだけでかいのかと勘違いするだろう。

大きさ、色は1つ1つ違うが見ためはビー玉と同じなのである。

何代か前の神王が考案したシステムでビー玉と同じ大きさなので持ち運びにも便利で世界に干渉するのが楽になったらしい。

この玉を【宝玉】といい、神によってはファッションとして首飾りなどにしている者もいる。

オーデインはこの宝玉を売っている店【ユグドラシル商店】の店主なのだ。

「あれは高かったんじゃないぞ。それをただでやるなんてもつたない」

「勝負に負けたんだからごちゃごちゃ言っなって。後でウリエルの着替え写真もやるからさ」

「こつちじゃ、神王様！」

「ああ（エロジジイ…）」

2人はユグドラシル商店の地下の倉庫をさらに降りた地下保管金庫へと向かっていた。

先ほどの牛乳早飲み勝負、その内容とは…

『神王が勝つたら激レア宝玉を、オーディンが勝つたらウリエルの入浴写真を敗者から貰う』

という最低のものであったのである。

それに神王が勝ち、こうして宝玉の中でもオーディンのおっきの品を頂きにきたのだ。

薄暗い階段を降り、地下水が染み出しているのか水の滴る音が時折聞こえる少し肌寒い通路を通って、地下保管金庫に降り立った2人。そこはただの多くの本棚がある普通の倉庫のように見えた。

しかし、本棚には様々な色と大きさの宝玉とその一つ一つに分厚いファイルが横に保管してあった。

多分、あのファイル一つ一つにその世界の出来事が記録されているのであろう。

神王はその時は知らなかったがそのファイルの名をアカシックレコードと呼ばれる。

オーディンは倉庫の奥から直径8センチほどの蒼い玉をもってきた。透き通るような静かな色であった。

確かに美しさに関して言うなら上等な品であらう。

「きれいなことはきれいだけだよ。大騒ぎするほどの物でもないと思うが?」

オーディンから渡された宝玉を色々な角度から見てみるがこれといつて変わったところはない。

「わかっておらんのか。この光沢、肌触り、色もいいがこの宝玉は人を選ぶのじゃ」

その言葉に怪訝そうにオーディンに顔を向ける。

「宝玉が管理者を選ぶなんて聞いたことがないぞ」

「あたりまえじゃ。わしだって聞いたことないぐらいじゃ。他の者が知つとるわけないじゃろ」

まるでお手上げのようにしわくちな両手を広げる。

「宝玉が選ぶつて宝玉に意思があるのか？」

「あるわけないじゃろ。宝玉自体はただのケース、器じゃ」

そう言つて神王が持つ宝玉をコンコンつと叩く。

「ということは…中の異世界にいる【なにか】が原因か？」

真剣な神王の眼差しに自然とオーディンもその表情を引き締まる。

「もしくはその世界の……。まあ、専門家のわしと神王様がわからんのじゃ。誰に聞いてもわからんのじゃろ」

その結論に2人はあまり納得はいかなかったが仕方ないことである。

「まあ、わかつた。んで、俺は行けるのか、この異世界の中に？」

「この世界の管理者になれば可能じゃが…。」

宝玉の中の世界に対して神が出来ること。

それは【千里眼】【干渉】【降臨】である。

宝玉の中の世界を監視する【千里眼】。

世界を監視し、イレギュラーが発生すれば世界の運命を操作する【干渉】。

干渉は世界に関する全ての事柄を自由に改変できる。

そして、異世界の中に入る【降臨】。

しかし、これでは独裁と変わらない。

世界を自由に作り上げ、理想郷で豪遊する神も昔はいた。

それを取り締まるのがアウエンティヌス城の警備隊の仕事でもある。神王がやるうとしていることはその中の降臨。

降臨は宝玉の所有者である管理者の意思で行くことができる。

つまり、この宝玉の中の世界は管理者がいなかったため降臨できない。

「じゃあ、俺になる！」

はつきりと宣言する神王にオーディンはやれやれと肩を落とす。

「仕事はどうするんじゃ？ウリエルが怒るぞ」

とうかすでに手遅れではあるがこの時はオーディンも知らなかった。

オーディンの言葉にムンツと胸を張り、堂々と言い放つ。

「俺は神王だ！俺が法律！俺が良いならA L L O . K . ！」

何処かの独裁者のようなセリフを言う何度も言うが神々を統べる神王なのである。

「まあ、いつものことじゃがな…」

常に神王の傍にいるウリエルに同情し、哀れみをこめた長いため息をはくオーディン。

この神王のトラブル事を起こす回数は神界1である。

やんちゃで好奇心旺盛。

イタズラ、目立つことが大好きで1日3叫だとウリエルが言う。

つまり、1日3回は神王のせいでウリエルが絶叫することらしい。ちなみに、最低回数である。

多いときは2桁の絶叫が城に響き渡る。

ちなみに、どのようなことを過去にしたかというと…

【三途の川の船頭に幻術をかけ、水恐怖症にして死者の橋渡しをできなくする。】

【魔界の王女に1目ぼれされ、300本の食人薔薇を城宛にプレゼントされた。負傷者258名。】

【ユグドラシルの宝玉を異世界のびーだま？という玩具に変えて神界を混乱】

今回の件でウリエルは絶叫するだろう。

いや、もうしたかもしれない。

というかした気がする。

「契約方法は他の宝玉と同じか？」

「あ、ああ。呪文を唱えるんじゃないが…。」

それを聞いた神王は軽く咳払いをする。

そして、両手で宝玉を持ち、構える。

「えーと、【我、ここに契約す。我はここに楔を打ち込み、創世を誓う者なり。元は世界。素は我。素は元になり、元は素へ返る。この普遍を誓う創世の主とならん。】」

……

……

…

「……………」

「……………」

部屋に静寂が訪れる。

「何にも起きんな」

「……………」

オーディンが残念そうに呟くが神王はピクリとも動かない。

「神王様でも無理なら他の者にも無理だろうじゃない…」

「……………」

その時、オーディンは神王の様子がおかしい事に気づいた。

「…神王様？」

「……………」

神王はオーディンの言葉に反応せずにただ宝玉を見つめる。

「……………」

「……………来る」

「はっ？」

何を言い出したのかと思い、オーディンが近づくと彼もその異変に気づいた。

宝玉が脈動しているのだ。

ドクン、ドクンつとまるで心臓のように。

初めは小さかった脈動も少しずつ大きくなる。

次第に淡い黄色の光の筋が宝玉に現れる。

ありえないことだが宝玉が生きてるみたいであった。

心臓の如く脈動を続ける宝玉を見ると生命が誕生する瞬間を連想させる。

次第に脈動と光は大きくなり、2人を包む。

オーディンはそのまぶしさで目を隠し、光が止み、目を開けて辺りを見回すと神王の姿が消えていた。
宝玉の輝きと共に…。

神は旅立つ。(後書き)

この話は就職活動中に書いているものです。

自分自身に対してあえて言おう！

『さつさと就職場所決めやがれ！』

『決めれるものなら決めてる！』

就職先が決まるのはいつになることやら(泣)

神の降臨。そして、悩殺。（前書き）

ようやく神は貴方の守護天使！？の話のストック7話になりました。
漢字と法律に自動車の資格の勉強と就職活動に学校の宿題のハード
スケジュール！合間合間に書いています。

「1日を48時間にしてください、神様！」

「学校に出ている時間が倍になるぞ。」

「グハッ！」

神の降臨。そして、悩殺。

【王都：パシフィス】

「「「KSYAAAAA!!」」」

「「「GOOOHAAAAA!!」」」

「くっ、数が多すぎる!」

「団長!もう抑えきれません!」

「なんでこんなにモンスターが…」

異常なことである。

王都パシフィスの騎士団長を務めるモリガンは王都の入り口でモンスターを必死にくい止めながらも頭の片隅では今の状況を冷静に分析していた。

モンスターが群れで行動する事はよくあることだ。

実際にゴブリンの群れが近隣の村を襲ったという事件も過去にあった。

しかし、異種族同士で群れをなすことはありえないはずである。

高い知能を持つ魔族達なら手を組んだ前例がある。

だが、下等知能のゴブリンとスライムの群れが共に町を襲うなどありえないはずなのだ。

同時に群れがここを襲撃したのなら異種族同士の争いもあるはずだ。しかし、目の前の敵はむしろ人間ほどではないが統率の取れた戦い方であった。

ゴブリンが兵士を足止めし、スライムが足元から戦う騎士とゴブリンの隙間から襲う。

目の前にこんな光景が広がっていなければモリガンも信じなかっただろう。

王都の周りは高い城壁に囲まれており、さらにその外側を深い水路

で囲んでいる。

王都と外を繋ぐ唯一の出入り口である橋の上では王都を守護する騎士団がモンスター達と戦っていた。

対岸にはゴブリンとスライムの群れが100匹以上控えていた。

騎士団員も死者はいないものの負傷者が多数おり、橋の上にはモンスターの死骸が山積みされていた。

さすがにこれ以上の戦闘は不可能であった。

しかし、騎士団の敗北はモンスター達を町の中に入れることを意味する。

そうならば王都は壊滅的な被害を被る。

それだけは騎士団の誇りが許せなかった。

「団長！橋を落としましょう！」

部下がゴブリンの振り下ろす粗末な棍棒を盾で防ぎながら進言する。その力強さに盾がミシミシと悲鳴を上げる。

モリガンもこのままでは結果がどのようになるかは痛いほどよくわかっている。

だが…

「だめだ！時間が無さ過ぎる！！」

王都を掛ける立派な橋。

その立派さが仇となり、橋を落とすとなると手間がかかり、とてもじゃないがモンスターを足止めしながら行う程の余裕はない。

「では…！」

解決案を模索していたがモンスター達が待っているはずもなく、再び襲い掛かろうとしたその時…

「なんだ!？」

「水？」

騎士団とモンスターの間に直径8センチほどの球体が突然出現した。透き通るような静かな蒼色の球体である。

どこか神々しささえ感じる。

騎士たちもモンスターたちも呆氣に取られるかのように呆然とその球を見つめる。

すると、その蒼い玉は徐々に膨らんでいた。

ついには直径2メートルほどになる。

「新手でしょうか？」

モリガンの部下がフラフラになりながらもその球に剣を構える。

「お前、戦う余力あるか？」

「いえいえ、団長にお譲りしますよ。」

「このやろっ！」

互いに冗談は言っているが立っているのもやっとの騎士団員にモンスターと戦う余力などあるわけがない。

そして、蒼い玉は光輝き出し、爆発するかのように霧散した。

消滅したのかと思いきや、そこには一人の青年が足を抱えて浮かんでいた。

蒼髪の青年。

先ほどの球体と同じ色である。

目を丸くする双方の間で浮かんでいる青年の高度が徐々に下がり、ずっと青年は地面に足をつけた。

そして、ずっとその眼を開いた。

緑色の眼。

空のように蒼い髪と草木のように深い緑の眼。草原のような印象の青年は周りを見渡した後、騎士団とモンスターの群れに目線を交互に向ける。

そして、モリガンと目が合った。

すると青年はモリガンに向けて何を思ったのかニコツと微笑む。

なぜか、モリガンは鼓動が早くなり、顔をほんの少しだけ赤らめてしまった。

[illegible]

モリガンを混乱させるほどきれいに微笑む青年だった。

その青年はモリガンの葛藤を知らずにモリガンに近づいてくる。

美青年という言葉に相應しい顔つきであつた。

周りの騎士団員もモンスターのことを忘れて2人を観察していた。

「あの……？」

その声は男性とも女性とも言えない中性的な声であった。

モリガンには声というよりはハープのような楽器と同じ印象を受けるほど綺麗な声であつた。

「な、なんだ!？」

上ずった声で聞くモリガン。

モリガンの前の青年は言いにくそうにモリガンの目から若干、目を

逸らして言った。

「ここは何処ですか？」

「……はあっ!？」

「えーと……そう!道に迷っちゃったんですよ!」

モリガンは思った。

なんなのだ!この青年は!?

迷子!?

このモンスターと俺達の間いきなり出てきたこいつが!?
モンスターの前でも平然としているこいつが!?

というかあんな現れ方で俺達が信じると思っっているのか!?
モリガンはますます混乱した。

「えーと、お前はわかっているのか？」

とりあえず、モリガンは言葉を発した。

でなければこの状況がいつまでも続くような気がしたからだ。

「はい？」

首を傾げる青年。

「今の状況わかっているのか？」

「何がですか？」

「後ろのモンスターの群れだよ!」

青年が後ろを一瞥した。

モンスター達は突然、出現した青年に怯んでいた。

そのモンスターを見て、青年は顎に人差し指を当てて考え込む。

そして、1言…

「あれがなにか？」

「~~~~!!」

その言葉に言葉を失ったモリガンの様子を見て、察しがついたかのように聞いた。

「もしかして…お困りですか？」

「見ればわかるだろ！ここを通したら町は壊滅だ！！」

怒鳴る様に言うモリガンに青年は世間話の最中に苦勞話を聞かされたかのように…

「大変なんですな〜」

と他人事かのように言った。

「ウガアアアアアッアッアアアア！！！！！！」

あまりにもめちゃくちゃで異質な青年にモリガンは苛立ちで奇声をあげた。

それを見た青年は自分のポケットをあさる。

「落ち着いてください。そんな時にこの『。。。配合牛乳EX これで貴方もフィーバーナイト♪』をどうぞ！」

「誰がそんな怪しいもの飲むか！つてか、。。。つてなんだ！？」

ポケットから出した牛乳（？）はあきらかに黒いオーラを発していた。

呪いや邪気、怨念、恨みが絶妙なバランスで混じったようなオーラである。

ちなみに色は白ではなく赤紫である。

……これを牛乳と呼んでいいのか？

モリガンの当然の疑問に青年は答えた。

「たぶん、カオスじゃないですか？」

「カオスってなんだ!？」

ちなみにカオス＝混沌、無秩序を意味する。

間違っても牛乳に混じって良い代物ではない。

「大丈夫ですよ。これ開発した人は兵器開発の第一人者ですから」
「今、兵器って言ったよな!？危なくて飲めるわけないだろ!！」

確かに飲み物よりも毒物、むしろ、兵器と言った方がしっくり来て
しまう牛乳らしきもの。

「……………」

「その『こいつ空気読めよな。』的な顔はやめろ!」

「団長!！」

「なん…だ…あ、いや、うん……すまん。」

1人の騎士団員の呼び声に振り返ると騎士団員のほとんどが2人に
にらんでいた。

モンスターそっちのけで喧嘩しているのを怒るなという方が無理で
あろう。

泣き顔の団員がいたことには良心がズキズキと痛む。

「すまん。つい……」

「まあ、気にするな♪」

モリガンの言葉に他人事のように言う青年。

「お前のせいだろうが！」

「まあ、気にするな♪」

「するに決まってるだろうが！」

「まあ、気にするな♪」

「おい……」

「まあ、気にするな♪」

「ウガアアアアアッアッアアアア！！！！！！！」

またもや奇声を発するモリガン。

もはや、モンスターのことなど忘れていた。

それを現実に戻したのは諸悪の根源と言っても良い青年の一言であった。

「じゃあ、取引しませんか？」

「何が『じゃあ』だ！？話がつかってないだろ！」

律儀に突っ込みを入れるモリガン。

これがモンスターの前でなければただの漫才コンビである。

その片割れは先ほどとは違うまじめな顔つきで一言。

「あいつらを僕一人で何とかしたら、しばらくの衣食住の面倒を見てくれませんか？」

「はあ！？」

100匹はいるモンスターをなんとかするなど自殺行為である。

モリガンにとってこの青年はやる事成す事の全てが理解不能であっ

た。

「いかがです？」

「できるものならやってみろ！！」

もはや自棄と混乱でそう叫んだモリガン。

その言葉に笑みを零す青年。

「わかりました（これでとしあえずは良しと…。とりあえずどのくらい力が使えるか調べないとな。とりあえず、魔法を試すとするか）」

青年は計画通りにいった事にほくそ笑み、モリガンは若干だけ冷静になった思考で考える。

この青年が少しでも時間稼ぎをしてくれれば…。

騎士団員の体力回復、さらにモンスターの数を減らしてくれれば御の字である。

そう考えたが…。

「100匹ぐらいか。中級魔法で十分かな？」

「お前。魔法が使えるのか？」

一人事を言う青年にそれを聞いたモリガンが聞く。

「珍しいですか？（この世界に魔法の文化が無いのか？）」

不安を隠すように仮面を付けたかのように聞く。

「いや、魔法使いはこの王都にも多くいるが…。杖は無いのか？」
「何ですか？」

「魔法使いは杖が無いと使えないと聞いたが？」

『この世界』の人間は杖を媒介にして、呪文を使う。
人間1人では魔力が小さすぎるのだ。

大半の魔法使いは杖を媒介にして魔力を増幅させた状態でやっと使えるのが『この世界』。

しかし、『神王の世界』では…

「俺は大丈夫ですよ。（杖が…。必要ないが、怪しまれないように後で作るところ）」

「しかし…」

不安そうなモリガンに苦笑する青年。

「ほら。【フレイムアングァー】！」

神王が右手の手のひらをモンスターに向けて呪文を唱える。
そして、手首をくるっと回し、指を鳴らした。
すると…

「「「「「PIGYAAAAA!!」」」」」

巨大な火柱が出現し、モンスターを包み込んだ。
それも100匹全てを包み込むほどの炎である。

その時、発生したエネルギーは光となり、騎士団員の目を眩ませ、
視界を奪う。

しばらくして、騎士団員達が目を開けると…

「「「「「なっ！！！」」」」」

モンスターの影どころか周りの木々をも消滅しており、モンスターのいた場所はクレーターが出来ていた。

青年は振り返り…

「ミッション・コンプリートってことで」

これがこの世界における『神王』の始まりである。

神の降臨。そして、悩殺。（後書き）

思っんですけど後書きって皆さん読むんですかね？
私はよく携帯で読みますけど1回も見た記憶はありませんね。

神をも恐れる存在（前書き）

短編と違って長編の方がアクセス数の伸びが段違いですね。
この調子だと次話辺りで逆転かな？

神をも恐れる存在

状況を整理しよう。

俺はオデインの爺さんとの死闘（？）の末に宝玉を手に入れた。
その宝玉は契約者を選ぶらしい。

契約者とは宝玉の中の世界の創造主、管理者、神となる者。

俺は駄目もとで宝玉と契約をしたら宝玉に吸い込まれた。

気が付いたらモンスターと人間に囲まれていた。

取り乱しかけたが冷静に周りを観察すると人間側のリーダーらしき奴がいたので情報収集のために話をした。

怪しまれないように丁寧な口調で話したところ、あいつらは今いる町の騎士団だったらしい。

そこで、リーダーのくせに頭悪そうな間抜けに取引を持ちかけた。

この世界での魔法の威力も調べられ、衣食住も手に入る一石二鳥。ちよこつとぶつ放したら騎士団が事情を聞きたいとかで城に同行してほしいと言つて来た。

この世界の文化や世界情勢を調べなければならなかったので大人しくついていった。

ここまではいいだろう。

それがなんだ？この国は…

—少し前—

城に連れて行かれた俺。

最初は騎士団の詰め所で事情聴取を受けていた。

しかし、そこに入室してきた別の兵士から国王が呼んでるという伝令を受け、俺は謁見の間に案内された。

警備の兵士が謁見の間に通じる大きな扉を開け、俺は高価な赤い絨毯の上を歩き、奥へと進む。

そこはパーティーが開けるような大きな部屋であるが今は人気がない。

警備の兵士は？と疑問に思ったがとりあえず目の前に目を向けた。そこには、この国の王と王妃らしき者が王座に座っていた。

黒髪のオールバックの王と金髪のショート王妃で王は40代、王妃は30代前半に見える。

俺は王族の前なので頭を下げるために膝を突こうとしたが王が首を横に振った。

ので、立つて口上を述べようとしたがその前に王が玉座から身を乗り出すように…

「よう！とりあえず、おまえは良い奴か？」

「はあ？」

と王にあるまじき砕けた口調で訳のわからない質問をされた。

つい、失礼な返事をしてしまったが王は気にせず笑っていた。

「善人が悪人かって聞いているんだよ」

再び、王は同様の質問をしてきた。

狙いはわからないが少なくとも偽証する必要性は無いので正直に答えた。

「…少なくとも、悪人ではないな」

俺がそう言つと王は目を輝かせた。

「よし！皆の者！歓迎の宴の用意をしろ！今日は飲グハアアアアツアアアアツア！…！」

「そんなんでいいわけないでしょう!」

ガツシリした体つきの王は先ほどの発言により、王妃にグーでぶっ飛ばされた。

王は5メートルほど吹っ飛び、そのまま壁まで転がっていった。スリムなあの体の何処にあのパワーが秘められているのか。

「え〜と…」

俺が呆気にとられていると王妃はこちらに視線を向ける。

「ああ、あれはほっときなさい。いつものことだから」

いつもなのか!?

「…ご希望とあらば」

たとえ、王の体が痙攣してようと俺には関係ない。

ああいうタイプは大人しく従っていれば矛先がこちらを向かない。俺の答えに満足したのか王妃は玉座に座り、ジッとこちらを見つめる。

「あなたの名前は？」

偽証は認めない。

目線がそう言っていた。

まあ、無視するが。

「名乗るほど者ではございません（神王っていうわけにもいかない

しな)」

そもそも、神王に名前は無い。

神王となった時点で名は破棄される決まりなのである。

神王に即位した者にこの例外はない。

神王は神王としか呼ばれない。

即位する前の名前も言いたくない。

あの名前は…

「…訳有りね。まあ、いいわ。とりあえず、君は何者？」

何か勝手に勘違いしてくれたようだ。

訂正する気もないのでそのまま話を進める。

「ただの迷子でございます」

ただし、おもいつきし偽証。

王妃の口の端が引きつった。

「どうして杖無しに魔法が使えるの？」

これは俺のミス。

この世界の魔法のルールや仕組みを理解せずに使ってしまったから。さて、どう誤魔化すか。

「なぜですかね？」

王妃の頬の引きつりが酷くなった。

「どうしてあんなところに現れたの？」

そりゃあ、いきなり戦闘中に現れたら不審だよな。

「神秘ですね」

目つきが鋭くなった。

王妃は震える声で…

「…話す気は無いのね？」

と聞いてきたので俺は満面の皮肉った笑みで…

「はい」

と答えてあげた。

「良い度胸じゃない。」

王妃のコメカミがピクピクと動いていた。

大人しくしているつもりがついからかってしまった。

けど、この王妃…

からかいがいがありそうだな。

「小じわが増えますよ。平常心、平常心」

「大きなお世話よ！」

王座から身を乗り出して反論する。

結構気にしているようだ。

「おせっかきな性分です」

「そんな性分なんて今すぐ捨てなさい！」

「興奮すると血圧が上がりますよ。それほど、若くないんですから」
「なんですって！」

興奮で顔を赤くする王妃。

神王の心の中では小さな悪魔の格好をした神王が大爆笑している。
それを悟らせないように愛想笑いであらかい続ける。

「年を取ると怒りっぽくなるって言いますよ」

「ムキーーーー！！！」

「サルに退化しても年齢は変わりませんよ？つらいかもしれませんが現実を見ましょう」

「キーーーー！！！」

「ほんとにサルそっくりだぞ、エイン」

いつのまにか復活していた王が王妃の隣でそう言った。

…よく生きていたな！？

「あゝなゝたゝ！！！」

せつかく復活した王はエイン王妃にボコボコにされていった。

—少々お待ちください。—

落ち着いたエイン王妃は玉座に座っている。
足元に広がる赤い海に沈んでいる物体は気にしないほうがいいだろう。

「まあ、王都の危機を救ってくれた恩人だし、心配ないでしょう。しかし、再び失礼な発言を發した場合それはそれと同じ運命をたどるのでそのつもりでいるように」

「イエッサー！」

彼女をこの世界の第一級危険物に認定しとこう。

この世界の人間が神に勝てるとは思えないが彼女には逆らってはいけない気がする。

こういうタイプの人が切れたときは大人しくしているに限る。

「ところで…」

「なんでございましょう？」

「まず、その口調を直しなさい。普段の言葉でいいわ」

「はい」

軽い返事ではあったがそれを注意するとやぶ蛇を突くことになりそうなのであえて聞き流すエインであった。

「モンスター撃退のお礼なんだけどモリガンと取引したんですって？」

「誰それ？」

心当たりがなかった。

「貴方がモンスターを倒す代わりに衣食住を保障しろって取引を持ち込んだ相手よ」

「あー、あの頭足りなさそうなおっさんか？」

王の前に連れて行かれる前に自己紹介はされたが興味なかったので半分ほど聞き流していた。

「その頭足りなさそうなアホ面の汚らしいおっさんよ。」

正直に思った悪口を言ったら倍になって返ってきた。

「…嫌いなのか？」

「生理的に」

俺の疑問を即答してきたエイン王妃。

それを聞いた俺は腕を組み、大きくうなずいた。

「納得」

少なくともあの髭は無いだろうと思う。

ゴワゴワで汚らしい。

「あの髭は剃れていったんだがな。おしゃれだって聞かないんだ。あれだとまるで、エインの陰もグハアアアツアツアツアアアアアアアア！」

「このヘンタイ！！何いいたすのよおお~~~~~！！！！」

またもいつのまにか復活していた王はエイン王妃に……合掌。

——しばらくお待ちくださいー

「え〜と」

「…ラブラブなんですな」

「……………うん」

真っ赤に顔を染め、手をモジモジとさせるエイン王妃。

少女のようにウブでかわいらしいエイン王妃に少し好感を持った俺は話を進める。

「条件は飲んでくれるのか？」

少なくとも認めてくれなければ野宿決定である。

「えっ！あー、うん。いいわよ。家以外はすぐ用意できるわ」

あっさり許可された。

さっきの王といい、大丈夫なのか、この国は？

「家は？」

「勝手に決めるわけにもいかないでしょうから候補だけ選んどいたわ。実際に行って選んできなさい」

仕事が早い。

条件を提示してからこの謁見までにそんなに間が無かったのだが。

「はい、ありがとうございます」

以外にもあっさり条件を飲んだ王妃に笑顔でお礼を言った。
すると、王妃は何故か顔が赤くなった。

「（騎士団員に聞いた通り本当にきれいに笑うわね。……………／／／／）」

疑問には思ったが取りあえず、日が暮れるまでに宿を決めたい。

「それじゃあ、失礼します」

「ええ」

「またな。次こそ一緒に酒を飲もう」

「ああ」

俺はさっそく踵を返し、家探しに向かった。

…王、いつの間に復活した!?

………

………

…

「あなた。いつ気がついたの?」

「あいつが俺達をラブラブだと言ったときからだ」

「……………//」

「そういうかわいらしい所も好きだよ。」

これも1つの愛の形であろっ。

神をも恐れる存在（後書き）

もしかしたら就職先によっては北海道を出ることになるかも。

神の力の欠片（前書き）

就職活動と自動車免許と資格検定を2つに学校の試験を2つを抱えているので更新が遅くなりつつあります。遅くても3週間に1話は更新していきたいと思います。

神の力の欠片

【パシフィス城下町】

「この串焼きはうまいな。帰りに別の種類のも買っかな？」

「ねえ、ねえ！あそこのパン屋もすごくおいしいんだよッ！」

「…おすすめ」

城の兵士から住居候補の家までの地図と当面の生活費を渡された俺。しかし、この世界に来たばかりの俺が地図をポンっと渡されてもかなり困る。

だが、運の良い事に住居候補までの案内人としてこの2人のメイドを紹介された。

「あそこのアップルパイってね！とっても甘くてね！りんごの良い匂いがするの！」

1人はショートのに白いメイド服を着た元気な少女。

俺の周りを動き回り、あちこちを指さしながら、この町の良店を教えてください。

名をエルというらしい。

紹介してくれる店の殆どが甘味系中心な所が実に女の子らしい。

「…向かいの定食屋は要注意。サービス、味、衛生管理の全てが3流。個人的に潰れてほしい店ランキング6位。あの残飯をいまだに客に提供している度胸はすごいと思う」

この毒舌はエルの双子の妹のリン。

腰まで伸びるロングの髪に黒いメイド服を着用している。

おとなしいが無口というわけではなく、相手を非難する時はエルの口数をも上回る。

…その店以上に酷い所が5件もあるという所はひどく気になるな。それはさておき、彼女らは二卵性双生児らしく、性格は正反対で容姿もあまり似ていない。

はたから見ると姉妹というより親友みたいだ。

「あつ、喧嘩かな。見てこうよ！」

エルの指さす方に視線を向けると道を塞ぐ程の人で溢れていた。どうも、人だかりの中心で何か騒動があるようだ。

中には店を放り出して見学している者もいた。

…いいのか、それで？

「…案内は？」

リンがエルを軽く睨みつけながらおとがめる。

まあ、この案内は王妃からの命令であり、実質は仕事だからな。

「だって、気になるもん。お兄ちゃん、いいでしょう？」

リンの言葉に剥れつつも俺の右手に抱きつき、ぶらぶらと揺らしながらおねだりしてくる。

しかし…

「危ないから駄目」

わざわざ危険な場所に行くこともないだろう。

というのは建前で早く家を見つけてゆつくりと休みたいだけなのだが。

「ムウッ！」

俺の言葉に不満を感じ、さらに膨れるエルの頬。
苦笑し、頬を掻きつつも先に促した。

「さっさと行こう」

「ムウッ！！」

ガシツと俺の腕にしがみ付くエルに対抗意識でも燃やしたのか、今度はリンが負けじと俺の左手にしがみ付いてきた。
両手に花と言えば聞こえは良いが実際は唯の重石だ。

「…お姉ちゃん、行こう？」

「はい」

エルの説得に成功した俺達が人ごみを避けて、手前の道を曲がろうとしたその時。

風に乗って中心の喧騒の声が聞こえた。

「だから、謝りなさいって言ってるの！」

「そのババアが悪いんだろぅが！」

「ぶつかってきたのはそっちでしょう！」

どうやら人ごみの中心では女性と男性が言い争っているようだ。
珍しくもないがリンとエルはこれを聞いて、ピタツと止まる。

「この声って…？」

「…まさか？」

どうもこの喧噪の中心人物に心当たりがあるらしい。

「知り合いか？」

「たぶん…」

「…でも、今はお城にいるはず」

確信ではないようだ。

一応見ていっても問題はないだろう。

「確認してみようか？」

「「うん」」

俺らは喧騒の中心に入っていた。

野次馬を掻き分けていると2人とはぐれてしまった。

小さい分、人の隙間に入り込みやすいみたいだ。

店をほったらかしにしている者、貴族のような身なりの者、おこちやまの群れ…。

それらを掻き分けて喧噪の中心に行くと…

「あんだ達が余所見してるからお婆ちゃんが怪我したんでしょう！」

「知るか！ぼーっと立っているからだ。」

「なんですって！」

尻餅をついているお婆さんの前で若い女性がガラの悪い3人組と言
い争いをしていた。

どうやら3人組がお婆さんとぶつかり、その拍子でお婆さんが頭に
怪我を負ったようだ。

いつのまにか、リンがお婆さんの傷口をハンカチで押さえてた。

「痛い目に遭わないうちに謝りなさい！」

「やんのか、コラアッ!!」

「痛めつけてやるうぜ!」

「おう!」

そういつて、喧嘩が始まった。

わざわざ喧嘩を促すような発言をする女性とそれにあっさり乗る男達。

はつきり言って呆れるほど馬鹿だ。

3人に囲まれた若い女性はすぐにやられるかと思いきや、足技を主体とした素早い動きで相手を翻弄しつつ、徐々にダメージを与えていく。

相手の足と急所を中心に狙いつつ、囲まれないように動き回る。

囲まれそうになると距離を取り、フェイントを混ぜつつも徐々に相手の体力を奪う。

それらを効率よく使い、うまく立ち回っている。

動きを見る限り、ある程度は訓練しているようだ。

しかし、未熟な所も多々ある。

このままでは…

「捕まえたぞ!」

ついには囲まれ、一人を攻撃しているうちに後ろから別の相手に羽交い絞めされた。

「ーッ!」

女性は焦って暴れるが体格が違いすぎるために逃げ出す事は出来ない。

男達はニヤつきながら女性を囲む。

「そのまま捕まえてろよ」

そう言つて男の1人が腰に刺さつた短剣を抜き出した。
眼はすでに狂喜に満ちていた。
典型的な悪人の目である。

「後悔させてやる!」

そう言つて一歩近寄り…

「鼻折られたんだ! やつちまえッ!」

短剣を逆手に持ちかえ…

「にがさねえ!」

短剣を頭上に掲げた。

「離せ!」

このままではやられるだろう。
…しかたないか。

「ちよつといいか?」

「「「ああッ!」?」」」

3人組が一斉に振り返る。

揃いも揃つてすさまじい顔であつた。

悪人顔の代表として選ばれそうな顔であつた。

さぞかし、子どもの頃は大変であつたであろう。

…変な所で同情してしまった。

「いや、失敗面じゃなくてそっちの子」

「…何っ！！！」

3人組はさらに顔を歪ませる。

…実はモンスターではないのか？

そう思わせるほどひどい顔であった。

それはさておき…

「私？」

そう言つて怪訝な顔を浮かべる女性。

俺は女性に近づき、軽い殺気で男達を委縮させながら会話する。

「そう。君はなんでお婆さんを庇つたの？」

そう問いかけると女性はまるで当たり前のことを聞かれたかのように呆けた表情となった。

「決まってるじゃない。そこのお婆ちゃんを助けるためよ！」

そこには頭から血を流しながらも女性を心配し、オロオロするお婆ちゃん。

隣には呆然とするリンの姿も確認した。

「なんで？」

「えっ？」

「なんでその人を助けたの？助けても何にも得しないのに。そんな事しなければ今みたいに殺されそうにならなかっただろ？」

いくらなんでも3人相手は無理だということはこの女性もわかっていたはずである。

それでも立ち向かった。

勝てない戦い、利益の得られない争いに。

疑問に思い、どうしても聞きたかった。

「助けるのに損得なんて考えるつもりはないわ」

はつきりと返された。

思案すらせずにそう返された。

「君にとって人助けは日常の一部なの？殺されそうになっても後悔しない？」

「しないわ。それが私が望んだ事だもの。それに、殺される気もないわ」

周りの野次馬は見ているだけ。

それこそが普通。

それが人間である。

なのに、この人は助ける事こそ普通だと言った。

それは異常。

正しい善行。

だからこそ、出来ない。

自分の身の方が正義より大事なのが人間。

けれど、この人は自分の信念を選んだ。

しかも未だに勝つ気である。

「君は本当にきれいな人だね。外見もだけど、何よりも心が。多くの者を見てきたけどそこまで自分を貫ける己を持った人なんてそう

「そういない」

驚愕に近い。

それほどまでに衝撃だった。

自身にとつての人間という個に対する常識。

それをこの女性が覆したのだから。

「なっ、何言ってるのよッ！」

いい人だと思った。

この人だったら力を使ってもいいかと思う程に。

『他世界の争い、騒動には不干涉』

こういった他世界に関わった際の神等における、基本とも言える制約に背くことになっても。

「気に入ったよ。特別に対価といった取引無しで助けてあげる」

そう言つて男達に向き合う。

「はあ！？お前バカか？」

「3対1で勝てるわけ無いだろ！」

「ばっか」

低レベルな侮辱に呆れた俺はため息を吐き、こいつらの後学のために侮辱の見本を言つてやった。

「下等生物にバカにされる覚えはないね。いい加減目障りなんだよ。鼻がひん曲がりそんな悪臭を振りまきながら、醜い姿で町の皆の目を腐らせるのはやめてくれないか。それに3人がかりで女性に襲いかかる汚いやり方もむかつく。性根が腐ってるところか発酵してる

んじゃないか？つてか、すでにお前ら汚物レベルっていうか存在してることもむかつく。さつさと土にかえれ！いや、駄目か。大地が汚染される。どうやつても自然界に分解されそうにないから消滅しろ。手段はどうでもいいから他の人に邪魔にならない内に消えてしまえ」

…俺も得意とは言えないがあいつらよりはマシであろう。

その証拠にさらに顔を歪ませた3人は表現できない顔となった。そして、羞恥と怒りで赤くなった顔で一言。

「『ぶつ殺すッ！！！！』」

3人組は女性を放し、全員が短剣を片手に俺に襲い掛かる。

野次馬は悲鳴をあげて、ある者は目を逸らし、ある者は逃げ出した。俺は心底呆れていた。

どうもこの世界の人間の戦闘能力は低いようだ。

この程度のスピードで神々の王である俺を殺せるつもりらしい。

あまりにも遅いので少し考える。

先ほどのモンスターの群れに魔法を使った所、威力が衰えているということは無かった。

他の神々は宝玉の中に入った時点で力が制限される事があるらしい。それを危惧していたが魔法に関してはその心配はないようだ。

試していない力は俺自身の身体能力、神としての神力。

神は全員に神特有の力【神力】を持つ。

全ての神が力を持ち、力の種類も色々である。

オデインであれば【宝玉を生成できる力】。

この力は神界でも10人ほどしか持たない珍しい能力である。

ウリエルにはそういった力は無い。

彼女は天使であって、神では無いので神力は無いが魔法の腕は神界でもトップクラスである。

俺にもあるが宝玉内でも使えるかわからないのでこいつらで試そう。
身体能力も衰えていたら面倒なので一緒に検証してみる。

「【万物創造 《刀》】！」

俺は右手を上に掲げて力の発動を宣言し、頭の中でとある物を明確にイメージする。

過去にとある世界の神から見せてもらった物。

その形、重さ、手触り、触感…。

一つ一つを正確にイメージを重ねることに俺の手の上でそれが明確に姿を現す。

現れたのは刃渡り150センチの太刀。

詳しくは知らないが大太刀というのに分類される、その神の世界にある剣だそうだ。

これが俺の力でありとあらゆる物を《創造》する力。

まあ、ありとあらゆる物というと若干の制限があるため語弊があるが言ってしまう俺は無から望む物を作り出す。

それが俺の神力の【万物創造】。

若く、未熟者の俺が神王である理由。

その1つがこの能力。

無から有を生み出すことはこの世の原則を無視した力。

世界すら俺に従う。

俺は150センチの大太刀を構えた。

そして…

「陰天陽地神道流剣術 【一閃無月】」

3人組を目の前まで引き付け、太刀で横薙ぎに斬りつける。
自分を中心に円を描く様に。
それをただひたすら速く。

目にも映らぬ速さを追及し、影すら映らぬ斬撃。

その1振りです人まとめて叩き斬った。

一瞬の間の後、3人は白目を向き、糸が切れたように崩れ落ちる。周りの野次馬は静まりかえる。

当たり前だろう。

目の前で人がいきなり倒れたのである。

俺が剣を構えていた事で切ったという事は推測できるであろうがそれが眼に映らなかったのであるから。

先ほどの女性が恐る恐る話しかける。

「…こ、殺しちゃったの？」

「んなわけないだろう。峰打ちだ。ちゃんと呼吸してるだろ？気絶しただけだ」

それを聞いた野次馬も安心する。

だが、峰打ちというのは嘘だ。

本当に斬った。

斬ったが怪我をさせてないだけだ。

俺が斬ったのは《意識》のみ。

意識を斬って、気絶させたのだ。

普通は形の無い《意識》など斬れない。

しかし、これを持ってきた神は自慢げにその力を語っていた。

普通ではありえないものさえも生み出せる力。

俺が望めば、世界がそれに従う力。

まあ、とりあえず…

「ミッション・コンプリート」

野次馬の歓声があがった。

お年寄りを救った女性と圧倒的な強さで3人組をねじ伏せた青年に

対して…

神の力の欠片（後書き）

作品の種類が少ないので短編に挑戦しようかと思っています。

神は危険と隣り合わせ（前書き）

いつのまにかデビュー作（？）の『悪魔な魔女と悪魔な悪魔のある日』のアクセス数をぶっちぎってました。

もし、100話までいったらアクセス数はどのくらいになるのだろうか？

神は危険と隣り合わせ

騒動を終えて俺は太刀を腰に引っかけた。

消す事もできるが人目につくのでとりあえずの処置だ。

とはいっても観衆の前で何も無い所から太刀を取り出したのだが…
何とかなる…だろう。

とりあえずお婆さんのところへ行った。

先ほどの女性も呆けた表情ではあったがすぐに気を取り直し、お婆さんへと駆け寄る。

「お婆ちゃん。頭の怪我大丈夫？」

女性は心配そうにお婆ちゃんの頭の傷を見る。

「大丈夫だよ…。ありがとうねえ…。」

弱弱しくも笑顔で答えるが明らかに無理をしていた。
その証拠に頭の怪我からはいまだに血が流れる。

「リン、急いで医者へ連れて行くわよッ！」

「…頭の怪我は動かすと危険です。私が連れてきます」

切羽詰まった女性と淡々としているが悲痛な表情のリン。

まあ、この世界の文明レベルでは無理だろうな。

…出し惜しみすることもないか。

「ちよつといいかな？」

「何？」

目に涙を浮かべる女性。

赤の他人に涙を浮かべられる女性に当事者でなければ呆れていたであらう。

そこまでに意外であった。

とりあえず、お婆ちゃんに近寄り、傷の状態を確認する。どの個所がどの程度の損傷なのかを正確に確認していく。

「…お兄ちゃん？」

「リン。知り合いなの？」

「それは後で」

俺は傷口に右手を添える。

イメージするのはこの人の正常な状態。

皮膚、筋肉、頭蓋骨、脳の在るべき形。

皮膚の張り、筋肉の着き方、頭蓋骨の形、失われた脳の一部。

それを正しく、正確に、在るべき形を明確にイメージする。

そして…

「【万物創造 《回帰》】」

この人を在るべき形に戻す。

逆再生にも似た光景。

そこには傷跡も残っていない。

「…すごい」

感嘆の声を上げるリン。

「あんたッ、杖無しで魔法が使えるのッ!？」

驚愕する女性。

「まあね」

魔法では無いのだが説明が面倒なのでそう言っとく。

それに厳密に言えば傷は治っていない。

俺の力で怪我をする前の状態に戻したのだ。

説明するとややこしい。

本当は秘匿するべき力なのだがどうも色々ありすぎて気分が高揚し、浮かれているようだ。

そう言えば…？

フツと辺りを見渡し、探すも姿は見えなかった。

「そういえば、エルは？」

「…姉さん？」

リンに問いかけるとリンも辺りを見渡し始めた。

「エルもいるの？」

どうやらこの女性は双子の知り合いのようだ。

とりあえず、エルは何処なのか？

女性は手を組み、少し考えていたがフツと漏らすように呟く。

「いないならこの近くだと……あの店ね」

「…たぶん」

そう言つて女性が指さした先は…

「さっきのパン屋？」

先ほど、エルがアップルパイがおすすめと言ったパン屋であった。近寄って見るとお勧めだけあって歴史を感じさせるようなモダンな雰囲気のお店だ。

窓から見える多種類のパンはふつくらとしていて実においしそうであった。

3人でそのパン屋の戸を潜ると扉に設置された鐘の澄んだ音が響く。焼きたてのパンの匂いが鼻を擽り、従業員の元気な声が返された。店内のスペースの半分は販売コーナーで残り半分は喫茶になつてゐるようだ。

自分で選んだパンを店内でコーヒーと一緒に食べられる形式の店になつてゐた。

フツと店内を見渡すとあるテーブルで山のように積み上がったパンの山があつた。

どんな客か興味を持ち、場所を変えてパンで隠れた席を覗き見る。そこにはさまざまなパンに囲まれて涙を流しながらパンに齧り付くエルがいた。

「…姉さん」

呆れたように頭を抱えるリン。

女性をその光景を見て、苦笑していた。

エルもその声に気づき、大慌てでパンを飲み込んでいく。

「ふい、ふいんふあん、ふいふふえふあああああゝッ！」

そう言つて食べカスだらけの口を拭いもせずにリンに抱きつくエル。

「本当にこの子は…」

「なんで場所がわかつたんだ？」

「この子は迷子になると甘い匂いに引き寄せられてやけ食いの。それも泣きながら」

リンにしがみつき、目をウルウルさせているエルの頭をリンが優しく撫でていた。

しかし、エルがいなくなってからこの店に入るまで30分もたっていない。

その間にエルはテーブルの上にあったパンを食べ続けていたことになる。

テーブルの上には大量の銀アルミが乗っかっていた。

パンの下に引いてある銀のアルミである。

ざっと数えると30個分はある。

エルの身長は130センチほどしかない。

道案内の最中も色々なものを買い食いしていた。

この体の何処に入っているのか。

「エル。ゴミはテーブルの上に乗せないで捨てなさいっていつも言ってるでしょう」

そう言ってテーブルの上のゴミを近くにあったゴミ箱へと捨てる女性。

ゴミの量に驚きもしない所を見るとこれがエルの普通みたいだ

「あれれ？なんで姫様がいるの？」

食べかけのパンを片手で持ち、女性に話しかけるエル。
というかすでに食事を再開していた。

「…今は勉強に時間ですよね？」

「グサッ！」

ジト目のリンの言葉に過剰演技で仰け反る女性。
そのまま崩れ落ちていった。

…あれ？

「姫？」

そう問い返すと双子メイドはこちらを見た。
そして、堂々とした態度で…

「姫様は姫様なんです♪」

「…そうなんです。」

そう力強く言い放った。
意味がよくわからない。

「…すまんが通訳してくれないか？言葉が理解できない」

話題の女性に聞くと呆れた表情を返された。

「いや、通訳って…。まあ、いいわ。私はティニア・セイヴィオール。
この国の王女であり、この子達の姉代わりよ。」

………

………

…

「あのバカ王と王妃の娘！？」

「そっちに驚くの！？っていつか人の親をバカって言わないでくれる！…気持ちは痛いほど判るけど」

ズーンと何かが圧し掛かったかのように肩を落とす女性、改め、ティニア王女。

その悲痛な表情に思わず同情した。

「…苦労してるんだな」

「……うん」

あの2人と親子だとその苦労は想像するのは容易い。
この人も言いづらそうだったが最後には肯定した。

「お兄ちゃん。なんで王女ってことには驚かないの？」

「そんなちっぽけなことは気にしない」

それなら俺が神々の王だってことを知ったら皆ショック死するぞ。
言わないがな。

「…さすがお兄ちゃん」

リン、褒めてもらったのはうれしいが何が『さすが』なんだ？

「あんた達に兄弟なんていたの？」

そう問うティニア王女。

そういえば、二人とも俺の呼び名が共に『お兄ちゃん』だ。
意識したら背中がむず痒くなってきた。

「ううん。お兄ちゃんはお兄ちゃんじゃないけどお兄ちゃんはお兄ちゃんだからお兄ちゃんをお兄ちゃんって呼んでるの」

早口言葉のようなエルの説明。

「…なの」

呟くように最短で肯定するリン。

俺とティニア王女は揃って頭を抱えた。

「…通訳お願いするわ」

「無理だ」

言いたいことは判るが自分の言葉では表現しづらい。
とりあえず、スルーしよう。

「とりあえず、どうする？」

「説明は！？」

王女が何か言っているが無視する。

そつえば、お腹が減ったな。

俺がジッとパンを見ていたらエルが提案した。

「皆で残りのパンを食べましょうッ！」

「…オー」

その言葉で王女を除いた皆が席に着く。

「ちょっと！？あんた達無視しないでッ！」

すでにリンと俺はパンにとりかかっていた。
豊富な種類で思わず目移りがする。

「色々あるな。おすすめは？」

エルに問うとキラキラした目で立ち上がり、スツとパンを差し出した。

それはさながらソムリエのように。

「野いちごのクリームタルト！甘酸っぱい野いちごとろけるように甘いクリームのハーモニー」

「ぜひ、お試しあれ」

そう言つて差し出されたパン。

いかにもサクサクしてそうな生地。

クリームと野イチゴの甘い芳香。

見た目と匂いで判断する限りはうまそうだな。

そう言えば飲み物が欲しいな。

フツと視線を感じ、振り向くと王女がこちらを睨みつけていたが俺にはもはや関係ない。

テーブル脇にあったメニュー表を手に取り、じっくりと眺める。

「おつ。ウォータードリップのコーヒーがあるな。マスター！コーヒーをカップで1杯と牛乳をジョッキで3杯ッ！」

個人的にパンと牛乳の組み合わせは最強だと思う。

特に豆パンと牛乳は黄金の価値に相当する。

豆パンを一口齧り、飲み込む前に牛乳を含む。

牛乳に豆の甘みを溶けだし、口いっぱい広がる味わい。

コーヒーは個人的に好きだから注文した。

「エルはねえ、りんごジュースッ！」

「…カップチーノ」

2人の注文を聞き、メニュー表を置くと後ろから変な音が聞こえた。
振り向くと…

「……グスッ」

誰も相手にしなかったからか泣き出した。
さすがに気が引けたので小声で双子に尋ねる。

「（あれはどうするんだ？）」

テーブルを乗り出して聞くと2人は笑顔を向けてきた。

「（またお勉強さぼって城を抜け出したんですからほっときましょう
うゝ）」

「（…罰）」

…彼女は王女で君らはメイドだよね？
君らの方が偉そうなんだが？
フツと鳴き声が一瞬途絶えた。
恐る恐る振り向くと…

「どうして無視するのぉぉおゝッ！！」

ついに暴れだし、手当たりしだいそこいらにある物をこっちに投げ
出した。

つて、あぶなッ！！

「うわっ！」

「姫様！椅子を投げないでください！」

パン、イス、テーブル…癪癪を起した子供のように暴れる王女（！？）

そこにスツとリンが近寄り…

「…姫様。あんまりオイタが過ぎますと《あの事》ばらしますよ」

ボソツと呟いた。

ピタツと動きを止め、顔を青ざめる王女。

「…ごめんなさい」

ティニアは掴んでいた花瓶を静かに下ろし、完璧な土下座をしてみせた。

もはや、王女としてのプライドは無い。
というかなぜ土下座を知っている！？

「すっげ、止まったよ」

リンはこちらに向けて、控え目にピースをした。

エルはリンにチヨコチヨコと駆け寄り、問いかけた。

「リンちゃん。何を知ってるの？」

「…クスクスッ」

リンは笑うだけで何も答えなかった。

…この子も王妃についてこの世界の第一級危険物に認定しよう。

神は危険と隣り合わせ（後書き）

友人が「CD屋で恥ずかしくて買えない曲はここで取るといいよ。」
って言って、あるサイトを紹介してくれました。

友よ、CD屋で買えない曲とはなんだ？

ちなみに、俺はレンタル中心です。

神に命名せし乙女達（前書き）

風邪引きました。

外では雨が降ってます。

雷が鳴ってます。

企業説明会に参加してきました。

明日はテストが3つあります。

宿題があります。etc

……暇が欲しい

神に命名せし乙女達

「あんたが噂の変質者だったの…」

パン屋でお茶をしながらティニア（ため口でいいらしい。）に俺自信に関して説明していた。

旅の途中でフツと立ち寄ったこの町の入り口で騎士団とモンスターの戦闘があつたので手助けをした事。

その褒美として衣食住を提供してもらえたこと。

先ほど国王と王妃に事情説明をしに行ったこと。

家を選ぶためにエルとリンを案内人として紹介されたこと。
嘘を交えながら事情を話した。

……って！？

「誰が変質者だ！？」

俺がいつそんな事をした！？

ティニアは苦笑しながらからかう様に衝撃の噂を告げた。

「あんたってモリガン騎士団長を悩殺したんでしょう？モンスターと騎士団員の前で」

「取引を持ちかけたただけだ！誰が男の、しかも、あんなキモイ髭ゴリラに誘惑するかッ！？」

しかも、悩殺って何だ！？

異性に対して使う言葉だろう！？

セクシーな服を身に纏う俺が体をくねらせて髭ゴリラを…。
想像しただけで寒気がしてきた。

「そうよね。どうせならイケメンを誘惑するわよね」

いやらしい笑いで俺に言うティニア。

王妃よ。

貴方は娘にどんな教育をしてきたんだ!?

俺は少々興奮してポロツと口走ってしまった。

「俺は生粋の女好きだあああああ~~~~ッ!」

…エコーがかかった気がする。

店内の客が俺に変質者を見る目で注目した。

「お兄ちゃん。はずかしいから叫ばないで…」

顔を手で隠すも指の隙間から真っ赤な顔が見え隠れするエル。

「…無様」

その言葉は痛いぞ、リン。

俺は静かに席に座る。

顔が羞恥で熱くなってきた。

もういやだ。

帰りたい。

ティニアは笑いを堪えていたがフツと思い出すかのように呟いた。

「それはそうと…」

「俺はホモじゃないぞ」

「さっきのは冗談よ。それは置いといて…」

「置くな。破棄しろ」

っていうか忘れる！！

俺の言葉にティニアは目頭を押さえていた。

呆れているのかもしれないが先ほどの言葉は聞き捨てならない。

「わかったわよ！わかったから話進めていい！？」

バンツとテーブルを叩き、憤慨するティニア。

またも注目されるかと思ったが誰も視線を向けていなかった。
むしろ、背けられた。

「ああ」

了承すると溜息を洩らし、真面目な顔で聞いてきた。

「あんたの名前は？」

まあ、当たり前疑問だよな。

「世の中にはな。知らない方がいいってこともあるんだ」

額に何かをぶつけられた。

テーブルに転がったそれを見ると千切り、丸められた銀紙。

ティニアが指で弾き、ぶつけられたようだ。

地味に痛かった。

「何かっこつけているのよ。つまりは訳有りなんでしょう？」

「じゃあ、それで良い」

ズビシッと先ほどより勢いよく放たれた銀の玉。

予想していたのでサッと避けたがティニアの手元を見ると玉の数が

10を超えていた。

「からかつてるの!?!」

「そういうわけではないんだが…」

神王と名乗るわけにもいかないしな。

偽名も良いのが思いつかないし。

「だから、私達もお兄ちゃんって呼んでるんです」
「…です」

という2人のメイド。

エル程ではないがリンの前にも結構な量の銀紙が重なっていた。
今も結構な大きさのピザパンを手にとっていた。

「それじゃあ不便でしょう。…よし、さっきのお礼に私が名前をつけてあげるわ!」

「へっ!?!」

なぜかティニアがそう宣言した。

「あつ、私もやりたい!」

「…考える」

これに参加表明する2人。

そう言つて2人で頭を抱えて同じ格好で悩みだした。
こういった所は双子らしい。

「まあ、かまわないが…」

嘘だ。

実は結構うれしい。

実をいうと【神王】と呼ばれるのは嫌いだった。

神王は役職名で俺個人の名前ではない。

ずっとそれに不満を持っていた。

自分の名前がある人をうらやましくも思った。

「じゃあ、第一回 命名しちゃおう」大会」

笑顔でそんな事を言い出した。

「わーい！」

「パフパフ」

大喜びで拍手するエルと口で楽器の音を出すリン。

異常にテンションが高かった。

反比例するかのように俺のテンションは急降下。

不安になってきた。

3人はお互いに牽制していたが1人の少女が名乗り出た。

「んじゃあねえ、エルからがいい！」

トップバッターはエル。

言うのは良いが口元は拭きなさい。

「いいわよ。どんなの？」

そう言ってエルの口元をハンカチで拭くティニア。

王女とメイドっていうより、年の離れた姉妹だ。

「え〜と、……【アンズ】お兄ちゃん！」

スパ〜ンツと素晴らしい音を奏でたハリセン。
あんまりな名前だったので咄嗟に創造してしまった。

「却下だ！つてか明らかに女の名前だろうー！」

どこのバーの源氏名だ！？

「じゃあ、【リンゴ】、【ミカン】、【ミント】、【キウイ】…」

スパパパパ〜ンツと4連撃を与えた。

「全部果物の名前だろう！それにどちらかといえば全部女の名前だ！」

涙眼で見つめるエルの横でリンがボソツと呟いた。

「…ミントはハーブの名前」

「リンは黙っててねえ」

微笑みながらリンを注意する。

リンが脅えて、ティニアの後ろに隠れたのは気のせいだろう。

ティニアがリンを抱えて俺から少し離れたのも幻であろう。

エルが泣き顔なもの……

「えっ！？」

「グスッ……ごめんなさい……。一生懸命かんがえ……た……グスッ」

すぐさま抱き締めました。

すかさず、頭を撫で、笑顔で告げた。

「いや、いい名前だと思うよッ！もう本当はすっごくうれしいんだあ！ありがとう、エル」

「エヘヘッ」

エルはすぐに泣き止み、うれしそうに笑顔になる。

泣き顔には昔から弱い。

この世で1番苦手なものといってもいい。

昔、幼子たちに囲まれて一斉に泣かれた時はこっちが泣きそうになった。

「…次」

ティニアは疲れたようにリンに促した。

「リンか、頼むよ」

「…うん」

リンならエルよりしっかりしているから大丈夫であろう。

…大丈夫だよな？

リンはすでに考えていたのか、さらっと告げた。

「…【ウィシュトシワトル】」

随分な名前だった。

人名なのか？

「長いんじゃないの？」

そういう問題なのか？

ティニア、額から嫌な汗が流れているぞ。

「…他国の神様の名前なの」

「神！？」

…偶然だよな？

「どんな神なの？」

教養ありそうな王女という立場の者でも知らないとなるとマイナーなのかもしれない。

リンはテーブルの端を指さした。

そこにはコシヨウや粉チーズなどのトッピングや調味料。

リンの指が指し示すのは…塩が入った入れ物。

「…塩の神」

「「はあ！？」」

…ソルト？

いや、海の塩……だよな？

「…お塩の神様の名前」

「しょぼくない？」

俺も同意見だ、ティニア。

そんな名前は正直言っただけ下させてもらっつ。

「リン。他にないか？」

「…【セントオトル】」

まさか…

「何の神の名前だ？」

真顔でリンは先ほどのピザパンを指さした。
ピザの神？

「…トウモロコシ」

指の先にあつたのはトッピングの黄色いトウモロコシ。
狙っているのか？

笑った方がいいのか？

ティニアにアイコンタクトすると眼を背けられた。
肩がなぜか震えていた。

…後で復讐してやる。

「…どう？」

無表情だが瞳だけはキラキラと輝いていた。
なんか心が痛い。

「さ、参考にさせてもらっよ」

「…うん」

俺の言葉にうつすらと笑顔になる。

どうやら、本気で俺の名前を考えてたようだ。

いくらなんでも神王の俺が塩やトウモロコシの神の名前を借りるな
どできない。

いくらなんでも情けなさすぎる。

こうなれば…

「ティニア。期待しているぞ」

「えっ！？…え〜と？」

頼む！

お前がいい名前を思いつかないと俺は果物がアホ神の名前を名乗る
ことになってしまう！！

数秒か、数分か、数時間か。

長い、長い時間が過ぎたように感じた。

「…【クロトス】」

しばらく考えていたティニアはボソツと呟いた。

今までの中では1番人名っぽい。

「それも由来があるのか？」

「子どもの頃ね。お父さんが呼んでくれた絵本の主人公の名前。世界に災いが降りかかり、世界中の人が絶望していた中でたった1人でそれに立ち向かい、世界に光を取り戻した若者。それも全ては愛する幼馴染のため。そのために命をかけて立ち向かったの。それが英雄 【クロトス】」

思い出すかのようにそう言った。

お気に入りのお話なのかもしれない。

やさしい顔つきで一言一言を大事そうに話してくれた。

「ウルウル…」

「…お姉ちゃん。言葉で言わないでください」

いい名前だと思う。
由来の話も好きだ。

「どう…かな？」

不安そうに見つめるティニア。
気に入った事は気に入ったのだが…

「その名前。俺が貰ってもいいのか？」

「えっ!？」

「英雄の名前なんだろう？」

「いいんじゃないんですか」お兄ちゃんだってこの国を救ってくれたんだし」

そう言つてエルに笑顔を向けられる。

「…ピツタリ」

リンも賛成した。

思わず、2人の頭を撫でてしまった。

2人はくすぐったそうな、恥ずかしそうな感じだった。がされるがままに身を任せた。

「ティニア。貰っていいかな？」

「ええ、いいわよ。【クロトス】」

「ありがとう」

俺は姿勢を正し、改めて3人に向き合う。

「それでは、改めて自己紹介をしよう。俺の名前は今からクロトス。

この名でこの世界を生きていくことを今ここにいる3人に誓う！」

そして、もう1つ決めた。

この世界にいる間は【神王】ではなく、【クロトス】として生きていく。

それが俺の決意と3人に対してのお礼でもある。

帰り方も判らないし、しばらくは【クロトス】としてこの国で生きていくと思う。

…帰っても書類仕事如山ほどあるだろうし、暫くは休暇という形で楽しもう。

頑張れ、ウリエル！

遠くでウリエルの悲鳴が聞こえた気がするが幻聴であろう、きっと！

神に命名せし乙女達（後書き）

塩とトウモロコシの神の話は本当にあります。

神の家探し（前書き）

忙しくて小説が中々書けなくなってきました。

私はこの小説を現段階で投稿している話の7話先まで書いてたら1つ投稿するようにしているのですが今回投稿する話の4話先からの展開が不満になり、手直しすることにしました。

公表するものなので自分なりに満足のいく物にしてから投稿しようと思うので少々遅くなるかもしれませんがもし、続きが気になる方がございましたらご理解をお願いします。

なお、最低1週間に1話は投稿しようと思います。

8月までには落ち着くと思います。

神の家探し

パン屋を出た俺達はティニアと別れて新居探しを再開するつもりだったのだが。

「ここから一番近いのは…ここね。さあ、出発ッ！」

いつのまにか地図を片手に俺達の先頭に行くティニア。

そして、ティニアの地図を持つ手にぶら下がるエル。

どうやら自分が道案内をしたかったらしく、しきりに交代を申し出ていた。

とにかく、ティニアも一緒に同行してくれるそうだ。

「いいのか、王女なんだろう？」

そうは見えないが。

そうは思いつつもリンに聞くと渋々頷いた。

「…半分は勉強をさぼりたいからだけど、もう半分はクロにいため。…見逃します」

まあ、半分でもうれしいから良しとしよう。

それと俺の名前が決まった事により、皆の俺に対する呼び名も変わった。

ティニアは【クロトス】。

エルは【お兄ちゃん】。

リンは【クロにい】。

エルとリンは俺を兄と呼ぶことには変わりないらしい。理由を聞くと昔から兄が欲しかったという事らしい。

さて、俺の住居候補はというと…

― 1 件目 ―

「いくらなんでも大きすぎる」

「そうね」

啞然とする俺と苦笑いで同意するティニア。

「1人で暮らすには大きいね」

「…お掃除大変そう」

エルとリンも同意した。

王妃、これはさすがに無いと思うのだが？

そこは昔は商人の家だったらしく、高さ10メートルの冗談みたいな巨大な門をくぐると大きな豪邸があった。

白を基調とした大きな家で庭には定期的に手入れがしてあるのか色様々な花が咲き乱れている。

遠くには小さな林もあり、乗馬も出来るほどの広大な庭だ。

ただし、門から玄関まで300メートルはあり、いくらなんでも1人でこの小国の城並みの大きな家には住みたくない。

「次だな」

俺達は豪邸の中も見ずにその場を後にした。

たぶん、王妃も冗談でリストに載せたのだろうがここを借りたら一生頭が上がらなくなる。

― 2 件目 ―

体を撫でる風が心地よい。

緑豊かな庭だが先ほどの豪邸とは打って変わって程々の面積だが気品ある。

俺はこの家のロフトで紅茶を楽しんでいた。

「いい眺めだな」

先ほどと違い、2階建ての家で1人で住むには十分。
家の前からは《王都全体が一望》できる。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

フツと家の入口に目をやると死にかけのティニアが倒れていた。
顔を真っ赤にし、呼吸も苦しそうだ。

「大丈夫か？」

紅茶を差し出すとかぶりつく様に飲みだす。
一瞬で飲み干すと無言で空のカップを差し出されたので注いでやる。
しばらくして落ち着いてきたのかボソツと言。

「無理……」

そう言っで力尽きるように倒れた。
見渡すとお子様2人の姿が無かった。

「エルとリンは？」

「途中で……力尽きた」

ここは王都の領土内の山の中腹で山道を4時間登ってきた所にある。

その間にある今にも崩れそうな細い橋、急流の川を渡り、冗談みたいな数の階段を登ってたどり着く。

さすがに2人には無理だったか。

ティニアも肩で息をしていた。

このぐらいで息を切らすとは脆弱な種族だな。

ミズガルズの大蛇（全長350メートル）の群れに追いかけられた時の方が大変だったぞ。

蛇の癖に速かったなあ。

1時間ぐらい逃げ回って飽きたから全部ぶっ飛ばしたけど。

「次行くわ…よ」

「いや、無理するなよ。顔が青いぞ」

いまだに息を切らすティニアを少し休ませてから下山した。

2人は階段で気絶していた。

ここの住人はどうやって生活してたんだ？

――3件目――

「お兄ちゃん。ここは駄目」

住居候補の家の前でエルにそう告げられた。

見た目は今までの中で一番まとも。

交通面でも問題なしだ。

「なんでだ？」

特に却下する理由が思いつかなかった。

「周りの店で甘い物が売ってないから！」

「俺が住むんだぞ？」
「テヘッ」

はにかんだ笑顔で誤魔化された。
まあ、他にも候補はあるからいいが。

― 4 件目 ―

「クロにい」

今度はリンが俺の袖をひっぱって呼びとめた。

「なんだ？」

「…ここは駄目。お城から遠い」

そう言っ指差す先には遠くに見える王城。

「これじゃあお兄ちゃんの家遊びに行きづらいね」
「ここも却下ね」

そう言っって当然っといった顔で同意するティニアとエル。

「貴様ら、俺の家だっってこと忘れてねえか？」

つい、言葉が乱暴になってしまったが3人はさっさと次に行っってしまった。

… ちょっと、空しい。

………

………

…

「ないねえ」

「ないわね」

「ないな」

「……」

色々周ったが俺達が気に入る物件は無く、一旦城に戻ることに
なった。

リストの半分を見て回ったがこれだっ！というものが無かった。

「今夜はどうするの？」

ティニアの質問に思い出した。

宿無しだ、俺。

寝る場所がない。

「まあ、家が無いから宿屋か野宿かな」

だいぶ暗くなってきたし、何処かの公園でも探すかな。

気温もそれほど低くないので一夜ぐらいは大丈夫だろう。

ウリエルにばれたら説教だな。

…説教で済むか？

たぶん、炭にされるな。

「姫様。お城に御泊めすることはできませんか？」

エルがティニアにそう問うが部外者を城に止めるなんて出来るわけ
ないだろう。

「できるわよ。今夜は城に泊まりなさい」
「できるのかよッ!？」

警備上の問題とかあるだろうがッ!？

「今日のお礼よ。結構楽しかったし」

そういえば、王族だったんだもんな。

王女がいうなら大丈夫…か？

…王や王妃に会った時も思ったが大丈夫なのか、この国？
まあ、この国の将来よりも今日の宿だ。

「ありがとう」

「い、いいのよ別に…」

お礼を言うと顔を赤くしたティニアが少し早歩きになった。
そんなスピードだとチビツ子2人が追い付けないだろうに。
2人が逸れていないか確認しようと思いつき振り返る。
そこにはエルしか居なかった。

「リンちゃん？」

エルは辺りをきょろきょろと見回していた。
俺も探す特にそれらしい人影は見えない。

「どうしたの？」

誰も付いてこなかったのでティニアが戻ってきたようだ。

「リンちゃんがないんです」

エルがそう言うのと今になって気づいたらしく、辺りを見渡す。

「あれ？」

外は徐々に日が落ち始め、お店も閉まっているところもちろはら出始めた。

この時間帯に店に入ったということはないだろう。

「リンちゃん！」

「リン〜！」

二人が大きな声でリンを呼ぶが返事はない。

時間が経過するに連れて、徐々にその顔を青くしていく。

「何かあったのかしら!？」

「どうしよう!？」

わたわたと慌てる2人に見ていられなくなった。

「ちょっと待ってる」

俺は二人を落ち着かせてから力を使うために目を閉じる。

あまり、使いたくないのだがこの世界に来てからガンガン使っている気がする。

とにかく、イメージ。

創造するのは物質のイメージでは無く、概念のイメージ。

リンを出来るだけ正確にイメージする。

イメージの中ではリンがスタスタと何処かへ歩いて行った。

リンが歩いた道には足跡とそれを伝う様に銀色の糸が落ちていた。

その糸を手繰り寄せる。
その先にはリンがいるのだから。

「【万物創造 《羽》】」

俺は右手から力で羽を出現させて、上に放り投げると羽は路地裏に飛んでいった。

俺は《リンのところまで飛んでいく羽》を創造した。
物質と違って、形のない概念の創造だからかなり負担と時間もかかる。

しかも、なんでも創造できる訳でもないので実はこれもできるかは半信半疑だったりする。

とりあえず、あの羽はリンのところまで案内してくれるという事だ。

「あつちだ！」

「何で判るの？」

「秘密」

魔法って言っても信じないだろうしな。
こんな魔法ないと思うし。

「あんたって秘密事が多いわね」

「気になるか？」

「聞かれたくないんでしょう？信じてるわよ」

この世界はお人よしが多い世界なのかもしれない。
見ず知らずの男を城に招待するほどに信じてくれる。
エルもリンも王妃も王女もおかしい程にお人よしだった。

「…ありがとう」

少なくともこの世界に好感は持てた。

「待ってくださいっ！」

…エルを忘れてた。

………

………

…

路地の間をしばらく走っていると大通りから外れた細い通りに出た。
所々の建物には歴史を感じられるものが含まれていた。

「いた！」

ティニアが指さす先にはリンは通りの端でしゃがんでいた。
怪我しているのか！？

「リン。大丈夫か？」

声をかけるとリンは顔を上げた。
見る限りでは怪我はなさそうだ。

「…うん」

逸れた事による罪悪感が、少し罰が悪そうに顔を俯かせながら答えた。

「何があつたの？」

心配そうに声をかけるティニア。
リンは顔を俯かせながら呟く。

「…ネコちゃん」

「「へっ!？」」

「…怪我したネコちゃん。この中入った」

そう言つてリンが指さした先には…

「……?」

そこは元々は喫茶店なのだろう。

煉瓦の壁には枯れかけた蔓が這い、壁の根元には手付かずの花壇があった。

ゴミや落ち葉で汚れた花壇や店周りは何処か哀愁を誘った。

その喫茶店に人の気配は無い。

扉の下には元々はネコを飼っていたのか、ネコが入る小さな入り口が付いていた。

「ここから入ったのか？」

「…うん」

「心配でネコを追っていたら私達と離れたの？」

「…ごめんなさい」

俺とティニアの代わる代わるの追及に身を徐々に小さくするリン。
とりあえず、入口へ近づいてみた。

近くで見るとよりその店の年代を感じられる。

ドアに手をかけるとギシギシと音を立てるがドアは開けられるようだ。

「鍵が開いてるみたいだし、とりあえず入ってみるか？」

「空家なのね」

リンとエルがドアの隙間から建物の中に入った。

俺も入ろうとするとフツと扉の横に貼られた張り紙が目に入った。

「『空家 入居者募集中』か。ずいぶんと古くなってるな」

―エル視点―

「みんな〜、どこ〜〜！それと、ここはどこなの〜〜ッ!？」

神と幽霊（前書き）

検定試験が終わりました。

今月はハツチャケます！

目標は長編10話更新、短編2話投稿！

神と幽霊

軋む扉をゆつくりと開けると初めに古い木と埃の匂いが鼻を通った。中に目をやると埃に覆われた板張りの床に目が付き、店の中心にそびえ立つ堂々とした大木をそのまま使った柱がこの店の年季を語っている。

店の右側のカウンターになっており、カウンターテーブルも埃は被っているが破損は無い。

店内のほとんどのテーブルや椅子は撤去されており、いやに広く感じる。

窓は板で塞がれていたために薄暗いが天窓からの降り注ぐ光がこの店を何処か幻想的な雰囲気醸し出していた。

「なんでかはわからないけど…すごいな」

「うん。なんか不思議な感じがする」

2人はその店の雰囲気魅了されていた。

なにかはわからないが人を引き付ける《何か》がこの店にあった。

2人があちらこちらに視線を向けている間にリンは店の奥に足を開ける。

歩くとその足跡がまるで雪原の様にくつきりと埃の上に跡を残している。

キシッ、キシッと音を立てる床。

断続的な音が途端に止んだ。

「…ネコちゃん」

店の中心の柱の影からリンの呟く声が聞こえた。
その声を聞き、2人もそこに向かう。

「いたのか？」

問いかけるクロトスにリンはカウンターテーブルの一角を指差す。点々と小さなネコの足跡の先にいたのは足から血を流す純白のネコ。それはこちらをじっと見ていた。

そのネコは流れる血と同じ紅い目をしており、こちらを警戒しているのか微動だにしない。

一歩、リンが足を前に出すと威嚇のために唸りだした。身を震わせ、己が心を強く、相手を拒絶する。

さらに一歩、リンは臆することなく、前に足を出す。

2人はリンにネコを任せ、見守っていた。

リンはネコの前まで身を近づけ、ジッと目を見つめる。

「…怖くない」

そつと、リンがネコに手を伸ばした。

ネコのすぐ手前まで手を伸ばし、そこで手を止めてじつとネコを見つめる。

「…怖くない」

ネコは何かを察したのか威嚇を徐々に治めていった。

そして、じつとリンの目をただ見つめる。

しばらくの間、1人と1匹が見詰め合っていた。

廃墟と化した薄暗い店のカウンターで見詰め合うネコと少女。天窓から注がれる光に浮かぶ黒いメイドの少女と純白のネコ。

それはさながら1枚の絵画をような光景であった。

その永遠とも思える一瞬。

ネコは小さく鳴き、リンの伸ばした手の指を舐めた。

「…ありがとう。信じてくれて」

リンは白いネコを柔らかく抱き、微笑んだ。
黒いメイド服に黒髪、黒目のリンが白いネコを抱く姿は見守っていた2人の目を緩ませる。

「よかったね、リン」

「…うん」

ティニアの言葉に頬を赤く染め、きゅっと白いネコを大事そうにかえるリン。

クロトスはリンの抱くネコに顔を近づけ、ジロジロと観察する。

「珍しいな。白くて赤目のネコなんて」

「病気なのかしら？」

そう言つてネコの頭を撫でるティニア。

ネコはその手を気持ちよさそうに受け入れていた。

どうやらリンの仲間である2人も受け入れてくれたようだ。

「…生まれつきだって。」

薄暗い部屋の中でボソツとささやくリン。

廃墟、少女、長い髪、囁くような声。

まるで幽霊だな。

そんな失礼な事をクロトスは心の中で思った。。

「何でわかるの？」

「…そう言ってるから」

ティニアの質問に先ほどと同じ抑揚のない口調で返すリン。
リンはそういうがここには3人以外は誰も姿が見えない。
しいて言えばネコのみ。

「えつと、誰が？」

ティニアの当然とも言える質問。

リンは片手に猫を持ちかえ、空いた手をスツと持ち上げる。

「…その人」

リンが指差した先には埃だらけの椅子が1脚だけポツンと置いてあるだけだった。

「誰もいないじゃないのよ」

唯の椅子である。

ティニアにはそうとしか見えなかった。

ただ、一方のクロトスは驚愕とも言える声を上げた。

「リン、見えるのか!？」

「…昔からそうなの。クロにいつも見えるの?」

リンとクロトスに通じ合った何か。

ティニアは目を細める様に椅子を見るが何処をどう見ても椅子である。

何処にでもあるような木製の椅子。

埃を被ったそれは少々傷や染みもあるが特に変わったところは無い。

「何かなの？椅子しかないじゃない」

何か頭を抱える様に考え込んでいたクロトスはそのティニアの声に顔を向けた。

「お前は見えないんだな？」

「だ〜か〜ら〜っ！何がって!？」

確認するようなクロトスに少しいらだってきたティニア。

自分だけ解らない、仲間はずれの様な自分。

それに不快な思いを感じた。

それを感じたのかクロトスは…

「今見えるようにしてやる」

そう言った。

なぜかその言葉に慌てたのはリンであった。

それはまるで有り得ない事を見たような驚愕。

「…できるの？」

「秘密だぞ」

クロトスは椅子しかない場所に近づく。

そして、そこにいる《何か》に触れるような仕草を行う。

そしてイメージするのは薄い布のようなもの。

何かを包み込むようなそれはその《何か》の形を浮かび上がらせる。
そんなイメージを思い浮かべる。

「【万物創造 《具現》】」

椅子の周りが輝き、光が収まるとそこに一人の男性が座っていた。
50代ほどの男性でバーテンダーの服を着ていた。

ティニアには突然現れたように見えたが実際はクロトスたちが店に入った時からそこにいたのだ。

ただ、見えなかっただけ。

ただ、感知できなかっただけ。

そういう類の力が無いと見えない。

彼はこの世に存在しないはずの者だから。

「ゆ、ユウレイ……」

クロトスが力を使ってティニアにも見えるようにしたが彼女は怯えていた。

青白い体で向こう側が透けており、足も無い。

クロトスも見えた目を生きていた時と同じにもできた。

しかし、それでは幽霊らしくないという拘りのためにわざわざ、この形で具現したのである。

その幽霊の彼は何かに気づいたかのように自分の両掌を見つめ、自分のお腹に目を移し、なぜか子供のようにはしゃぎ出した。

「《おおおおおおおおお~~~~~つ!》」

そう叫びながら空気がもれ出した風船のように店中を飛び回る。

実にハイテンションな幽霊であった。

暫く飛び回っていた幽霊だが急に空中でなぜか煙を出しながらブレーキを掛け、3人の目の前にドリフトをしながら止まった。

「《すごいんですねえ。見えるだけでもすごいのに他の人にも見えるようにするなんて。さぞ、名の知れた魔術士なのですね》」

その声は近くで聞こえているのに遠くで聞こえるような不思議な声であつた。

「昔から器用なんでね。勉強以外はある程度できるんですよ」

「…十分すごい」

やれやれと溜息を吐くクロトスに驚愕するリン。

「《いやゝ、長年この店で働いていましたが今までお会いした魔術師の中ではダントツの実力ですよ》」

「…尊敬する」

「いやゝ、照れるなゝ」

どのような存在であろうと褒められても悪い気はしないらしい。

2人の絶賛とも言える評価に本気で照れている。

呆気に取りられていたティニアはようやく覚醒。

頭を振って立ち上がると

「なんであなた達は普通に幽霊と話してるのっ!？」

吠えた。

その声に振り替える2人は悩みだした。

「いや、なんでって言っても…」

「…なれてるので」

力が抜けたのか尻もちを付くティニア。

そこに幽霊はギュンツと弧を描くような軌道を凄まじいスピードで近寄ってきた。

そして、真白に輝く歯（生前）を輝かせて笑顔を向けてきた。

「《若い子が小さなことを気にしちゃいけませんよ》」

「十分大きいわよ!」

「大丈夫だって。害はないから(∵大半はな)」

ボソツとクロトスが何かを呟いたようだがティニアの耳には入らなかったようだ。

「《私はどこにでもいる自縛霊ですよ》」

「そんなのいないわよ!」

首を傾げて自身を指さす幽霊。

その存在を否定するティニアの服の端を引っ張るリン。

それに気付いたティニアはリンに顔を向ける。

「∵お城にも何人かいる」

「言わないで、リン!怖くなるから!」

クロトスは2人を無視し、幽霊に話を聞きだし始めた。

正直、早く他の物件も見に行きたいだけなのだが。

「あんたはこの店の店主だったのか?」

「《ええ∵。ですが、去年に心臓をわずらってそのまま...》」

ヨヨヨツと涙を流しながら崩れ落ちる幽霊。

3人はこのハイテンションな幽霊に不快感と言えいいのか、言うなれば『ウザい』と感じてしまう。

「ずっとこの店にいたのか?」

殴りたくなる感情を抑えて、クロトスがそう問うと霊はポケットからメモ帳のような物を取り出した。

それはマスターの霊と同じく透けているメモ帳で彼はそれをペラペラと捲りだす。

「《んゝ、たまに町に散歩に行きますがだいたいは家にいますね》」

その言葉に3人は疑問を持った。

3人は顔を見合わせるとクロトスが代表で質問した。

「自縛霊じゃないのか？」

「《自縛霊ですよ？》」

顎に人差し指を当てながら首を傾げる50代の男性。

正直、見苦しい。

「自縛霊っていうのは未練があって因縁のある場所に取り付く幽霊のことを言っただぞ」

目を見開く様に驚く幽霊。

初めて知ったようだ。

「《そうなんですか？じゃあ、やめます》」

「どっちなのよ！？」

あっさりと己の存在を捨てる幽霊につっこむティニア。

幽霊に対する恐怖はもはや消えていた。

「《未練はあるんですが店に未練は無いんです。十分満喫しましたし》」

そう言つて彼が笑顔を浮かべた。
充実感に満ちた笑顔、満ち足りた微笑み。

「…何が未練なの？」

リンの言葉にその笑顔に陰りが出た。
苦笑い。

その笑顔を向けた先には…

「《…貴方が抱いてるネコですよ》」

そう言つて透けた指でリンが抱いているネコを指差す。

「…このネコちゃん？」

リンがネコの顔を覗き見るとジッと大人しく、リンに身を任せていたネコはリンの目を見つめ返した。

「どういうことだ？」

「《このネコは私の唯一の家族なんですよ。1人身の私にはこの子が私の心の支えでした》」

霊はリンの傍に近寄り、ネコに手を伸ばす。

生前もよく撫でていた頭。

それが今はどんなに優しく、強く撫でようとしても触れることもできない。

通り過ぎた己が手のひらをジッと苦笑しながら見つめ、再び、言葉を紡ぐ。

「《しかし、私が死んでからこの子は1人で生きていかなければならず、外で生きようにも変わった見た目から他のネコには苛められ、人間にも気味悪がられてしまっ…》」

「…かわいいそう」

リンがネコの頭を撫でるとどこか悲しそうに鳴くネコ。

悲しいのは生まれながらに異端、誰にも受け入れなかった事が唯一に受け入れてくれた彼に撫でられることが無くなった事か。

「このネコが心配で成仏できなかったのか？」

「《ええ。私に出来ることは…》」

何処からか流れるのは笛の音。

室内なのに何処からか風が吹き、彼の周りにはポツリ、ポツリと青白い鬼火が現れる。

「《この子に害をなす者の枕元に立つことしか…》」

「呪ったの!？」

恨み辛みを乗せた怨念に満ちた声。

それを聞いた事でいまさら恐ろしくなったのか音を立てて後ずさるティニア。

しかし、幽霊は大声でそれを否定する。

「《とんでもない!毎日枕元に立って朝までこの子の素晴らしさを教えてあげただけですよ。この子は私が店に入ると鳴いて挨拶してくれるやさしい子だとか、毎朝顔を舐めて起こしてくれる面倒見のいい子だとか、この子の美しさとかなどもう色々と!この白い毛並みの艶!肌触り!色!そして、この宝石のように美しく、炎のように赤い目!実にすばらしい!》」

白いネコについて熱く語る幽霊のバックにはゴウゴウと燃える炎が見える。

いや、鬼火が霊に呼応するかのように真っ赤に燃えあがっていた。その光景に3人どころかネコすらも引く。

さらに言葉を続ける霊に3人は顔を寄せ合い、こそこそと会話を交わす。

「（ちょっと！幽霊つてもっと暗いものじゃないの？幽霊にしてはテンション高すぎるわよ？）」

「（たまにいるんだよ。開き直って、無駄に元気な幽霊らしからぬ幽霊が）」

「（…生前より元気なものもある）」

そう言って肩を落とすクロトス、リン。

2人ともそう言った霊にいい思い出が無いようだ。

こそこそと会話中の3人を余所に霊はさらにヒートアップしていた。

「《そもそもネコというものは…あつ、すみません！この子のことになるとつい熱くなってしましまして…。昔はそれでネココンマスターって言われてしまつて…》」

彼はその言葉を皮切りにシュンツと体を小さくする。

比喩ではなく、本当にサイズが見る見るうちに半分以下になり、さらに小さくなっていく。

「…クロにい。ネココンつて何？」

「たぶん、ネココンプレックスの略なんじゃないか？」

クロトスとリンの会話が耳に入ったティニアも会話に参加した。

「じゃあ、ファザコンやロリコンっていうのもその仲間なの？」

ガキンつと音を立てて石になるクロトス。

確認するがティニアはこの国の王女である。

王族、貴族、御姫様…、少なくとも日常会話に入る言葉ではない。

「…おい。一国の姫がなんでそんな言葉を知ってる？」

普通は周りがその手の情報は退ける筈の言葉。

では、なぜに同じ王族のクロトスが知っているのか。

言ってしまうえば彼は『王でありながら不良』であるから。

王族は仕事を抜け出して賭博場には行かない。

大敗したからと言って一日中、酒を飲んだりしない。

後日、胴元のイカサマが発覚したからといって数日間行方不明になり、ある日、血まみれになりながらも笑顔で堂々と帰ってきたりはしない。

ともかく、ティニアは何でもないかのようにその理由を口にした。

「小さい頃にパパが教えてくれた。《ティニアは将来はファザコンになりなさい。パパはロリコンだからティニアはファザコンだな。小さいころから大人になった娘と一緒に風呂に入ったり、一緒に布団で寝たりするのがパパの夢だったんだ！》って言ってママにボコボコにされてたわ」

…いいのか、これでこの国は？

そう思い、頭痛で頭を押さえるクロトス。

視界も滲みだしてきた時、くいつと袖を引っ張られた。
見るとリンがこちらに顔を向けていた。

「…クロにい。ファザコンって何？」

クロトスの頭にさらなる頭痛が襲った。

「…リン。世の中には知らない方がいいこともあるんだよ」

何とか崩れ落ちそうな自分の体に鞭を打って言葉を紡ぐ。

「…ロリコンも？」

「リンの場合はむしろそっちの方が知っちゃ駄目！」

クロトスの危機迫る剣幕に後ずさるリン。

「……………わかった」

かなりの間があったが了承の言葉を聞き、表情を緩めるクロトスを見て、ホッと胸を撫でるリンであった。

「《あの〜。それでお願いがあるのですが》」

恐る恐る幽霊は会話に入ってきた。

というか自分そっちのけで会話を進められて寂しくなったようだ。

「…何？」

リンが聞きなおすと幽霊は身なりを正し、その場でスッと頭を下げた。

彼は深々と頭を下げた状態で今までとは打って変わって真剣な声色でクロトス達に懇願した。

「《このネコを飼ってくれる方をさがしてくれませんか?》」

彼はネコの身を案じていた。

ネコは彼にとって友。

いや、家族であつた。

その身が異端のために、色が違うというただそれだけのために生きることすらまならぬ。

その身を念で縛られ、拘束された霊。

彼にとってその念、鎖は『家族の心配』だつた。

「そうしたら安心できるのか?」

クロトスの言葉に顔を上げた彼の顔は真剣である。

必死に、祈る様に射抜く様にクロトスと目を合わせる。

「《はい。お願いします》」

スツとティニアに視線を移すクロトス。

「兵士やメイド達に聞くことはできるけど…」

そう言つてぶつぶつ言いながら指を一つずつ折っていく。

動物好きはもちろんの事、それにより仕事に支障のでないであろう人選。

「…姫様」

いくらか候補を絞つていたところに掛けられた呟くような声。

「何、リン?」

「…私が…飼ってもいいですか？」

ジツと言葉と共に眼で訴えている。

ティニアも最初にリンを候補には挙げていた。

リンとネコに出来た縁。

彼女のためにもそれが一番良い形にはなるであろつ。

だが…

「あなたはお城に住み込みでしょう。…さすがに、お城ではさすがに飼えないわ」

そう言葉にするティニアとギユツと唇を噛み締めるリンは寂しそうにじつとネコを見つめる。

心なしかネコのほうも寂しそうな目をしていた。

見つめ合う3人を見て、クロトスは誰にも気づかれないように溜息を吐いた。

頭を軽く掻き、思案するかのように目を瞑る。

そして、しばしの沈黙の後に目を開くと彼は提案を口にする。

「取引しないか？」

目線がクロトスに集まった。

クロトスの目線の先にいたのは…

「《取引ですか？》」

霊である彼。

微かに頷くクロトスはピツとリンが抱くネコに指を指す。

「俺がこのネコを飼う」

その言葉に目を見開く霊。

眼には歓喜の色が浮かんでいた。

「《本当ですか！？》」

そういつて興奮のために顔同士が接触するぐらいにクロトスに迫る霊。

あと数センチで色々とやばい状態になるという所でクロトスの右足が跳ね上がり、ピンポイントに霊の顎に直撃。

霊体の身を難無く蹴りあげ、その衝撃で吹き飛んだ霊は天井に直撃……というかの所で天井をすり抜けた。

そのまましばらく落ちてこなかったが心配は誰もしなかった。

遠くの方から《ひゃほほ……いつ！》とか《ウキヤキヤキヤッ！》とか実にうれしそうな奇声が聞こえていたからだ。

「……いいの？」

リンの不安や喜色が混じった瞳で問いかける姿に苦笑を浮かべるクロトス。

ポンとクロトスはリンの頭に手を置いた。

「俺じゃいやか？」

笑みを浮かべて優しく問いかけるクロトス。

そのクロトスの問いにリンが顔をブンブンと横に振る事で否定し、それがクロトスにまた苦笑を誘った。

「……うれしい。ありがとうクロに」

涙を浮かべるリンにクロトスは頭の上に乗せていた手を除け、その場から一步引く。

それに入れ替わる様に歩み寄ったティニアは屈んでリンに視線を合わせる。

そして、そつとリンの涙を自分の指で拭ってあげた。

「よかったね、リン」

「…はい、姫様」

微笑みを浮かべる2人を見ていたクロトスはいつの間にか隣にいた霊に視線を向けた。

霊もその視線に気づき、笑みを浮かべ、クロトスと向き合う。

「《それで私は何を差し出せばいいんです？取引ということは私は何か差し出さなければならぬでしょう？》」

「話が早いな」

「ちよつと！幽霊にまで何か要求するの！？」

ティニアにはクロトスが相手の弱みに付け込んで取引しているように見えるのだろう。

まるで先日のもンスターとの戦い時のように。

しかし、これはクロトスが己に戒めた制約であった。

彼が神力を使う時に自分で決めた条件。

彼の神力を多用すると世界が混乱する恐れがある。

それだけ彼の神力は世界に対する影響力が強い。

だから彼自身以外のために使う時は取引を持ちかける。

彼自身にも相手にも制限をかける。

自分が傷つく覚悟があっても叶えたい《何か》がある者にしかこの力を使わないと決めていた。

「《幽霊の身ですから差し出せる物なんてありませんよ?》」

全てを失った存在。

いや、己が存在すらも失ってしまった化け物。

残ったのは己が身を縛る鎖のみ。

しかし、彼にもまだ残っている物はあった。

「大丈夫。俺が欲しいのはあんたの《許可》だ」

己が意思、己が意思を音で他者に伝える声。

彼に残っている唯一と言っている程の物だ。

「《何を許可すればいいんですか?》」

「俺がこのネコを飼う代わりにこの店を継ぐあんたの《許可》が欲しい」

それは誰もが思ってもいなかった契約であった。

「《えっ!?!?》」

呆然とし、固まった霊。

その眼は驚愕で目を大きく見開き、驚きの程が覗える。

「ちょっと！まさかここに住むの?」

ティニアが慌てるのも無理はなかるう。

廃墟同然のここに住むというのだ。

利点などあるはずがない。

「そうだが?」

それを何てことが無いかのように肯定するクロトスに詰め寄るティニア。

「今までにもつと綺麗で広い家もあったでしょう？なんだってこんな埃だらけの場所になんか…。」

ここよりも広い家、きれいな家、豪華な家。
此処以上の場所はクロトスにはあった。

「このネコにとってここが《家》だからだ」
「えっ？」

ただ、このネコには此処以上の場所は無いのだ。
それがクロトスが持ちかけた契約の理由だ。

「このネコだって主人が亡くなっているのにこうやって足を引きずりながらもこの店にやってきた。このネコにとってここが家なんだよ。だったら、ここで飼うほうがネコにとっても幸せだと思う。それに、この幽霊だって本当にこの店に未練が無いならここにいないだろ。だから、この店を俺が継いだら安心できるだろ？…俺も喫茶店って興味あるし」

照れ隠しのように一言付け足し、顔を赤くしてそっぽを向くクロトス。

袖が引かれ、顔を向けるとリンがひしっとクロトスの腕に抱きついていていた。

肩が震え、顔は見えないが髪の間から見える小さな耳は赤く染まっていた。

「《あ、ありが…とう…ございます》」

一方、霊は感涙の涙を流していた。
今日初めてあった人がここまで理解してくれる。
自分のために、もう1人の家族のためにここまで考えてくれる。
肉体を失った筈の己の身にあるはずもない胸が血が滾る様に熱くなる。

「どうだ。条件には不満か？」

涙を拭い、地に頭を擦りつける様に懇願した。

「《ぜひ…ぜひお願いします！貴方ならこの子を任せられます！
》」

その様子を慌てて止めようとしたクロトスはフツと何かに気づいたかのように周りを見渡す。

そして、ニヤツとまるで悪戯を思いついた子供のように笑みを浮かべると肩膝をつき、霊に手を差し伸べる。

「あんた。俺の手を握れ」

突然言われた言葉に霊は感激による混乱で特に意識もせずに言われた行動に従う。

「《こうですか？》」

幽霊がギュツとクロトスの手を握った。

先ほどの霊を蹴り上げたことも含めると、彼には霊と接触できる力があるようだ。

クロトスは霊の目をじつと見つめ、まるで暗示をかけるかのように一つ一つの言葉を霊に語る。

「目を瞑って、生前のこの店の光景を頭の中で思い浮かべる。物の配置を特に」

「《…はい》」

スツと目を閉じ、念じるその姿は何処か神に祈る姿に似ていた。

「その色。その模様。その傷。その細部に至るまで鮮明に」

「《…はい》」

クロトスはティニア、リンにもそれぞれに目線を移した。

しかし、その眼は今まで見た事は無かった。

何か別の何かを見る様な。

まるで別人であった。

「お前らも目を瞑ってろ」

その声は無機質な空白な印象がした。

声を聞いた瞬間、背筋が冷たくなる怖さがあった。

「何をするの？」

恐る恐る聞いたティニアの声は震えていないだけ上等であった。さすがに王族と言ったところか。

「契約の印だ」

それ以上は語る事がないという様に目線を逸らすクロトス。

「よくわからないけど目を瞑ればいいのね」

「…これでいい？」

全員が目を瞑ったことを確認してからクロトスは意識を集中する。

クロトスの頭に霊と握った手を通じて過去の店のイメージが流れ込む。

そして紡ぐは己にのみ許された、世界を従える命令の言葉。

「【万物創造 《回帰》】」

神と幽霊の思い出（前書き）

資格試験合格！

1級の検定が通りました！

なんの検定かは秘密。

神と幽霊の思い出

「【万物創造 《回帰》】」

俺は幽霊の思い出の中のイメージを参考に力を発動させた。
俺の足元を中心に光が部屋を包み込む。

しばらくすると光が収まっていった。

「全員目を開けていいぞ。」

「「…あつ！」」

「…おおー！」

わずか数秒。

その間に別世界が広がっていた。

いや、場所は変わらない。

在るべき姿に戻っただけなのだ。

埃だらけだった店内は綺麗に輝き、ピカピカであった。

椅子やテーブルもきちんと配置されており、カウンター内の棚には
カップや皿が整理された状態で収納されていた。

ティニアとリンが目を丸くする中、幽霊はテーブルやカウンター、
棚をフワフワと飛んでまじかで見ていた。

「《このテーブルの足の傷…この子が爪を研いだ時の傷だ…。こっ
ちは常連のお客様方からいただいたカップや皿…。…なんで？私が
亡くなってから処分されたはずなのに…。》」

「本物じゃないぞ。あんたの記憶から作り出した偽者だ。でも、こ
れこそがあんたの店だろ？」

「《はい。まったく同じです。…あの時に戻ったみたいです。》」
「あんたの店を俺が自由にしたらあんたから許可を貰った意味がな

いだろ？あんたの思い出の店とこのネコの家は俺が守っていく。だから、安心してくれ。」

「…私も守る。」

「私もね。」

「《本当に……ほんとうに……ありがとうございます……。》」

幽霊は顔を覆い、涙を流す。

この人だったら大丈夫だ。

この人達に会えてよかった。

色々な物が胸の中を渦巻く。

ただ、歓喜。

身を震わすほどの喜びが体を駆け巡る。

「成仏の仕方はわかるか？」

「《言葉では言い表せませんがわかる気がします。もう未練はありません。》」

清らしい顔でそう答える幽霊。

「そうか。それじゃあ、お疲れ様。」

「…さよなら。」

「お元気で……っていうのもおかしいか。」

死んでる奴にそれはないと思うぞ、ティニア。

「《それでは……。》」

「…ねえ。」

「《はい？》」

「…この子の名前はなんていうの？」

そういえば、聞いてなかったな。
幽霊は苦笑しながらも答えた。

「《決めていませんね。元々は野良猫だったので。よろしければ、貴方が名付親になってもらえませんか?》」

「…いいの?」

「《貴方がいいのです。この子の心を開いた貴方が。》」

「…わかった。」

「《それでは…》」

幽霊は淡く光り、霧散した。

ネコが寂しそうに小さく、本当に小さく鳴いた。

「逝ったな。」

「…うん。」

俺たちは幽霊が消えた空間をしばらく見ていた。

しかし、いつまでもそうしてはいられないのでリンにさっそく聞いてみた。

「リン。名前はどつするの?」

「…ゆっくり考える。」

確かに。

このネコの一生に関わることもんな。

「いい名前つけてくれな。」

「…うん。クロにいい。ありがとう。」

リンの嬉しそうな顔を見ると本当にリンにロリコンという言葉の意

味を教えなくて良かったと確信する。

「言つたろ。取引だつて。俺も得したからお礼を言う必要はないさ。」

「うそつき。でも、やさしい嘘は好きよ。」

即行で嘘がばれた。

恥ずかしいので話を変える。

「さて、コーヒーでも飲むか？さっきので道具も材料もあるし。」

「そうよ。クロトスつて喫茶店なんてできるの？」

「言つたろ。勉強以外はある程度できるつて。」

「…コーヒー牛乳。」

「私はブレンドで。」

「少々お待ちを。」

ウォータードリッ普が好きだが時間がないのでネルドリッ普の準備をする。

ミルで豆を挽き、それを抽出。

店内にはコーヒーの匂いがたちこむ。

抽出したコーヒーをカップに注ぐ。

「はい。お待たせしました。」

「いい匂い…。」

ティニアは砂糖も何も入れずにそのまま飲む。

「…………。」

一口飲んでそのまま固まった。

「不味かったか？」

「…クロトス。お世辞抜きで城のよりおいしいわよ！」

本当らしく、ティニアは目を輝かせる。

「それは良かった。はい。リンのコーヒー牛乳。」

「…ありがとう。」

甘えに仕上げたがコーヒー豆の味も楽しめるようにした。

「城のは高級な豆を使ってるのになんでこっちのほうがおいしいの？」

「入れ方で味は大分変わるからな。」

下手な奴のは本当に不味いからな。

ティニアは両手でカウンターを叩き、立ち上がって俺に言った。

「クロトス。毎日私にコーヒーを入れに来て！」

「店があるから駄目だ。」

店を譲り受けた意味がないだろ。

「じゃあ、私が毎日来る！」

「…駄目です。お城が大変なことになります。今日だってお勉強さぼりましたでしょう？」

「ウグツ！？」

そういえば、そうだったな。

「…クロにい。私はネコを見に毎日来るね。これもおいしいし。」

そう言つてコーヒー牛乳を1口飲む。
どうやら氣に入ってくれたようだ。
リンの口の周りにコーヒー牛乳のお髭が付いたのでハンカチで拭きながら答えた。

「ああ。いつでも来な。」

「リ〜ン〜！それはないんじゃないかな!？」

睨みつけるが今までとは違い、やさしい感じがする。
本気で怒ってはいないのだろう。

「私は休憩時間やオフの時にいきます。」

「ズルイ!」

ティニアはむくれた。

俺は苦笑しつつも二人をなだめる。

「おやつも作つたけど食べる?」

「食べる!」

「それはそうとさ。」

「何?」

「…どうしたの?」

さっきから疑問に思っていたんだが。

「エルって何処行つたの?」

……

……

…

「「あつ!?!」」

「「どうするの?」」

「「…後で。」」

そう言つてデザートに手を伸ばす。

エル。ごめん。

大丈夫……だよな?

—エル視点—

「ヒック…ヒク、スンツ…グスツ」

ケーキ28個目に突入。

泣きながらケーキを食べていた。

神と幽霊の思い出（後書き）

最近思うんですけどこの話ってコメディじゃなくてファンタジーじゃないのか？

あと、10話突破したら番外でも書こうかなと思っています。

番外 幼馴染の天使との記憶（前書き）

MTの仮免試験合格！

神は〜！？の話もこれで10話！

アクセス数も中々の数！

色々な記念に番外を書いてみました。

私自信は番外というものは好きではないのですが興味ない方は読みとばしてください。

ウリエルが1話にしか出てないのが不憫だったもので…。

番外 幼馴染の天使との記憶

神界【アウエンティヌス城 上級執務室】

神々が住む神界。

その中心に山のようにそびえ立つ純白の城。

神々の頂点に立つ【神王】が住む場所であり、神界を含む宝玉などの世界を管理、保護をする場所【アウエンティヌス城】。

その中の上級執務室は神の中でも徳の高い神、4大天使、そして、神王のみが入ることを許される部屋。

主に、神界と神々を管理を中心とする仕事は全てここで処理される。今ここにいるのは2人。

1人は三対六枚の翼を持つ4大天使のウリエル。

目つきは鋭いがその美しさは神界1とも言われる。

その長い黒髪は窓から入る日の光を反射させ、輝きを放つ宝石のようである。

彼女は今日の報告書を両手で抱え、部屋の中で一番大きい机の前で佇む。

その机を挟んで座っている者。

空のように蒼い髪。

宝石がはめられた王冠。

薄い緑色の所々に金で装飾された服を纏う者。

ウリエルの幼馴染であり、神々の王。

それが【神王】。

全知全能に相応しい方なのだがイタズラ好きの性格にはウリエルも苦労している。

「お腹減った…。」

「我慢してください。」

お腹の音を鳴らしながら、机に突っ伏す神王。
2時間前に昼食を食べたばかりだというのに。

「魔獄緑の樹海の木苺のジャムを添えたヨーグルトとクラッカーが
いいな。」

「わがままはおやめください。」

「じゃあ、敬語やめろよ。」

「他の者に示しが付きません。」

「この部屋には誰もいないぞ。」

この部屋にいるには神王とウリエルだけである。

「…誰が魔獄緑の樹海の木苺を取ってくるんですか？」

何事も無かったかのように聞くウリエル。

神王は揚げ足を取る事もなく、しばし考える。

「……………コック？」

「殺す気ですか!？」

「食材を調達するのもコックの仕事だぞ。」

「魔獣の住処に行けるコックなんていません!騎士団でも2級以上の
騎士じゃなければ行けませんよ!」

「魔獄緑の樹海の木苺が一番ヨーグルトに合うんだぞ。」

「そんなこと知りませ…………ま、まあ…おいしいのはわかりますが…。」

「

【魔獄緑の樹海】

昼でも夜のようにくらい樹海。

その木々は数百年生きているものがざらにあり、太さが数十メートルの大樹も珍しくない。

そこには様々な生物が住んでおり、巨人すら飲み込む植物、それを餌とする草食動物、それを餌とする昆虫などの常識が通じない樹海だが、そこに群生する果物は高級品とされ、城でも中々手に入らない。

よほどの者でない限りは果物を食べる前にその生物に食われるからだ。

「ともかく！仕事が溜まってるんですからさっさと終わらせてください！」

「へいへい。」

そう言つて姿勢を正し、書類を確認する。

「あれ？」

「どうかしましたか？」

神王が1枚の書類に目を止める。

「魔獄緑の樹海の生態調査報告書によると森の東側が騒がしいそうだ。」

「変ですね。東は爬虫類の縄張りで比較的静かなはずですけど？」

さつきとはうつて変わつて真面目な顔となる神王。

ちゃんと公私で態度を分けているのだ。

仕事の時はどの神、天使よりも頭は回る。

…長続きしないのが難点だが。

「現段階で手の空いてる騎士団は？」

「1級、2級の騎士団は全て任務に就いています。」

「ミカエル、ラファエル、ガブリエルは？」

この3人はウリエルと同じ4大天使で上級執務室に入ることの許されている天使である。

「ミカエルは六道の最下層の閻魔様と会合、ラファエルは他世界の視察、ガブリエルは2日酔いです。」

「ガブリエルの給料10%カット。」

「はい。」

この時、神王の目が光ったのを見逃さなかったウリエル。

長い付き合いのため、何を考えてるかわかってしまうのは良いことなのであろうか。

「しかたない。俺が行く。」

そう言って立ち上がり、部屋を出ようとする。

「仕事は？」

ウリエルは部屋を出ようとする神王の背中と言った。

ノブを握ったところで固まった神王は傍目には平然と答えた。

「調査も仕事だ。」

「言い訳ですね。ただ、木苺を取りに行きたいだけでは？」

図星を指されたようで肩がピクツと動いたのをウリエルは見逃さなかった。

ウリエルの方を振り返った神王は子どもが言い訳をするように明後日の方を見ながら言った。

「神王である俺がルールだ。」

「独裁者の台詞ですよ。」

「なってみたいねえ、独裁者。」

「おやめください。」

とは言うもののウリエルにはわかっている。

幼馴染でもある彼女にはこの人はそんな事は永遠にしないだろうと。国の政治も周りの神や天使の意見はできるだけ聞くようにしている。重要な用件に対しての独断など彼はめったにしない。

面白くなりそうな事を除いてだが^{イタスラ}。

説得は無理だと考えたウリエルは神王が今日中に処理するはずの書類を指差す。

「今日処理する報告書はガブリエルに回しとけ。今日中に終わらなかったらボーナス30%カットだとも伝える。」

「かしこまりました。」

夕方のは起きるはずなので二日酔いの頭で泣きながら机に向かうだろう。

「それじゃあ、行ってくる。」

「お供します。」

ウリエルは手に持った書類をガブリエルの机に置いた。

ちやっかり、自分の分もガブリエルに処理させるつもりである。

「いやだつて言っても付いてくるんだらう?」

「貴方のお守りすることも私の仕事ですから。」

そして、彼女自身の意志。

「それじゃあ、樹海デートに行きますか。」

「お弁当を持っていく?」

「ウリエルの料理はおいしいからな。楽しみだ。」

「貴方の方が料理は得意でしょうよ。」

「ところでさつきから敬語は使わなくてもいいのか?」

「デートは仕事じゃないでしょ?」

「言い訳だな。…じゃあ、デートに出発。」

本当のデートだったらいいのに…。

本人も自覚しない心の奥深くで思うウリエルであった。

……

……

…

【魔獄緑の樹海】

「静かすぎないか?」

「変ね?」

2人が樹海東側の搜索を始めてから1時間。

天に届くほど大きな大樹の地面から出た根っこを潜りながら進む2人。

爬虫類どころか生物1匹見当たらない。

「地面に何かが這いずり回ったような後ぐらいしかないわね。」

「……………」

地面は大きな何かが這いずり回った後が所々にあり、地面がデコボ

「している。」

「そういえば、この時期って……。」

右手で頭を掻きながら呟く神王。

「なにかあるの？」

ウリエルの質問のは答えず、周りを見渡す。

「この辺って断崖があつたよな？」

「ちよつと待って。………地図によると北の方にあるわね。」

地図を取り出して確認すると確かにある。

「確かそこだと思っただけど……。とりあえず、行ってみよう。」

独り言をいいながら歩き出す神王を慌てて追うウリエル。

「何があるの？」

そうウリエルが尋ねると神王は薄ら笑いを浮かべて答えた。

「行つてからお楽しみ♪」

「そう言われてもトラブルしか起きた事ないじゃないの……。」

ため息を吐くウリエルと神王がしばらく歩くと断崖が見えた。

白い岩盤で出来ており、所々に人1人が入れる洞窟が空いている。

ここに来る途中でウリエルは気づいたが森にもあつた何かが這いつた後はこの断崖の穴に続いていた。

「ここは？」

「巢だよ。さつき思い出したんだけどこいつらって今が繁殖期なんだよね。だから、気性が荒くなつて森が騒がしくなつたんじゃないの？」

しかし、周りのは生き物の姿は見えない。

「何の巢よ？」

ウリエルが尋ねると神王は辺りは見渡しながらウリエルの方を見ずに答えた。

「爬虫類。」

「…ねえ？この森にいる爬虫類って？」

いやな予感がしてきたウリエル。

ある程度予想はしているが神王に聞いたのは否定してほしかったからかもしれない。

「【ヨルムンガンド】、【バジリスク】、【ウロボロス】、【ヒュドラ】かな？」

「全部上級の魔獣じゃないの！」

上級の魔獣の強さは1匹で小さな村なら数分で廃墟にできるほどである。

「一度魔獣の卵を見たかつたんだよね♪」

神王は目を輝かせながらウリエルに機嫌良く言った。

「そんな事のために魔獣の巣のど真ん中に私を連れてきたの!？」

「デートなんでしょう?」

「こんなデートありません!」

人並みのデートを心の片隅で期待していたウリエルは愕然とする。
それに気づかずには神王はため息を吐きながら諭す。

「ウリエルの声が大きいから皆起きちゃったじゃない。」

「……………えっ?」

ウリエルが周りを見渡すと小さいので子どもの大きさ、大きいものになると全長数百メートルの大蛇達に囲まれていた。

「ちょっと多すぎないかしら?」

ちよつとどころか大きいのは4匹程度だが小さいのは見渡す限り埋まっている。

「大量発生だな。」

神王は慌てずに淡々と答える。

「このままほつとくとやばいんじゃないの?」

こんな異常事態にもウリエルは平然と聞く。

この程度で驚いていては神王の幼馴染や4大天使は務まらない。
ウリエルの言葉にハッと気づき、叫ぶ。

「木苺が全部食べられちゃう!？」

ガクツとウリエルの力が抜けた。

「町や城に被害が出るでしょう!」

お城の騎士から神王様のつつこみ役という不名誉な称号を与えられているウリエルはすかさずつつこみを入れる。

ちなみに、ウリエルはその称号を自分が付けられている事を知らない。

「真面目だね。」

「仕事中ですから。」

幼馴染の顔から4大天使の顔になるウリエルを見た神王は不満顔となる。

「デートじゃないの?」

「魔獣駆除の仕事をできました。神王様、お一人でやりますか?」

「やだ。」

「それでは、及ばせながらお手伝いさせていただきます。」

「できれば、敬語はやめてほしいなあ。」

「仕事中ですので。公私は分けてるんです。」

ウリエルは焰の剣・盾を魔法で呼び出す。

両手から炎が噴き出し、それが2つの形と為す。

それは真っ赤に燃えた刀身の剣・盾の1組で名を「ミスティルティン」。

天使のウリエルを主人と認めた神の剣。

神王も自分の武器を召喚する。

片手を上空に掲げ、下に振ると真っ黒な剣が突如として握られている

た。

剣の名を【グラム】。

長さ2メートルの長剣で剣の柄、刀身全てが黒い魔剣。
神の王を主人と認めた魔の剣。

『主。デートだから連れてけないって言ってなかったか？』

何処からともなく声が神王の周りで響く。

「仕事が入っちゃった。」

神王は右手に持った剣に向かって話しかける。

『我を置いてった天罰だな。』

「神王に罰を与える奴がいてたまるか。」

『では、さっきかけた呪いだな。』

「お前、後で醤油に漬け込んでやる。」

『なぜに醤油なんだ、主？』

「お前って醤油の色をしてるから。」

『今まで斬ってきた相手の血が染み込んだ色だ。』

「牛乳に漬け込めば白くなるのか？」

『全力で拒否する。』

この自分の色が変わえられるかもしれないのが魔剣【グラム】。

喋り方は固いがお茶目なところもあると神王談。

「じゃあ、片付けますか？」

『心得た！』

「4大天使の一角、熾天使のウリエル。参る！」

神王とウリエルは背中合わせになり、大蛇と対峙する。

ウリエルが何度か剣を振り払うとその度に刀身から炎が噴き出し、大蛇達を襲う。

吹き出る永久の業火は大蛇の群れを飲み込み、一瞬にして灰と化す。ウリエルはある程度片付いたら近くの大蛇に接近して切りつけた。

斬られた大蛇は傷口から炎が吹き出て、内部より焼かれる。

さらに近くの大蛇に1太刀浴びせたらすかさず次の大蛇のもとへと向かう。

噛み付こうとしたり、体当たりする大蛇を避けながらすれ違い様に次々と斬りつける。

ウリエルの戦い方を【風】と喻えている騎士達がいる。

相手の動きに逆らわずに流れる動きは山々を吹きぬく風という印象を受けるからだ。

だが、本当だったら仕事とはいえ、大蛇も駆除したくないのだろう。その証拠に剣の炎で森を焼かないように手を抜かれており、さらにいつのまにか張っていた結界で森を保護している。

それを見ていた神王もウリエルの優しさを汲む。

「グラム。森に被害を出したくない。1撃で決める！」

「心得た、主！」

ウリエルの方はあらかじめ片付いたが神王の前は大蛇の群れが獲物を見る鋭い目つきで威嚇していた。

神王はグラムを横に右手に持った剣を大蛇の群れに向ける。

「【万物創造《付加》】」

グラムに氷の力を付加させる《創造》をして、ゆつくりと剣を腰の横に備え、抜刀の構えを取る。

とは言っても鞘がないので右手に持った剣を腰の左に備え、左手を

剣の腹に添える簡略式だ。

「陰天陽地神道流剣術 【氷演】。」

剣を振り払うことで神王の力と魔剣の力の波動が放出された。

目に見えない氷原の風のような力の波が扇状に広がっていき、大蛇の群れを包み込む。

その波動を受けた大蛇の群れは一瞬にして凍っていった。

神王の足元から大蛇の群れの間の地面には霜が降り立ち、大蛇の群れは声をあげる事も無く、氷のオブジェと化した。

「【閉幕】。」

神王がオブジェに背を向け、指を鳴らす。

その音の空気の振動に反応するかのようにオブジェにヒビが入る。

一瞬、辺りに静寂が起こる。

すると、一斉にオブジェが粉々に砕け散る。

その光景を戦闘の終えたウリエルが呆れた目で見ていた。

「凍らせるまでいいですが指を鳴らして崩れる仕掛けをする必要はないのでは？」

「そのほうがかっこいいだろう？」

実に満足そうで充実感に満ちた笑顔で答えた。

「理解できません。」

「異世界で読んだ本にこれのお手本となった技が載っていたんだ。」

「それで、かっこよかったから真似したんですか？」

頭痛がする頭の痛みをこらえる。

ウリエルの言葉に神王は力強く反論する。

「違う！アレンジだ！！ってか、駆除終わったんだから口調直せ。」
「…その無駄にかっこつける癖はやめた方がいいんじゃない？」

駆除を終了したと判断したウリエルは敬語をやめた。

4大天使ではなく、幼馴染としてのウリエルに思考を変える。

ウリエルの口調に満足した神王は先ほどより、幾分明るく答えた。

「俺のストレス発散法だ。事務仕事なんかやってると暇でしょうがないからな。」

「それじゃあ、さっさと戻って報告書の処理をお願いね。」

「…木苺が心配だな！ウリエル、グラム、行くぞ！」

そう言っただけで足早に歩いていった。

その後ろ姿に苦笑しながら呟く。

「…逃げたわね。」

「主、情けないぞ。」

主人の対応に文句をいうグラム。

神王はグラムを納める鞘を《創造》し、背中に背負いながら言う。

「そんなこというやつは木苺を食べさせないぞ。」

『我のような剣には口が無いから元々食えん。』

喋れるからといって口があるわけではない。

どちらかというとテレパシーに近いからだ。

「俺の神力で食べられるようにしてやるつか？」

『出来るのか?』

剣に表情はないが声の感じからすると驚いているようだ。

「お前の主であるこの神王様は何でもできるのだよ。」

少しだけ誇りながらグラムを背中中の鞘に差し込む。

『：食事というものに前々から興味があった。主よ、頼む。』

「城に戻ったらさっそくやるよ。」

『かたじけない。』

そっけないが神王には嬉しがっていることはわかった。
しかし、フツと疑問に思ったことをグラムに聞いた。

「性別はどうするんだ?」

剣なので性別はない。

両性にすることもできるがやはり、本人（本剣?）の意見が重要である。

『よくわからん。ウリエル殿はどちらがいいと思う?』

性別というものをいまひとつ理解できていないグラムは後ろで話を聞いていて、くすくす笑っていたウリエルに聞いた。

「そうね。声は低いし、その口調だと男じゃないの?」

「女でも面白くないか?」

『我はこだわらんから好きに決めてくれ。』

2人と剣は再び、森の中へと入っていった。
その姿は王と部下ではなく、子どものような幼馴染である。
願わくばこの2人に幸多からんことを…

神的喫茶店宣伝方法（前書き）

北海道でも暑い…

神的喫茶店宣伝方法

「…なんか足りないな。」

「何がよ？十分だと思っけど。」

先日、幽霊から店を譲り受けたクロトスは3人の客にぼやいた。

1人はコーヒーを飲む金髪の女性。

スタイルは良く、顔も明らかに美人の部類に入る。

王妃譲りの金髪の髪は後ろで束ね、腰まで伸びている。

揉み上げも胸の所まで伸びており、たまにチラリッとシルバーのイヤリングが髪の間から覗きだす。

服も城下の人よりは上等の布地でティニア自身の魅力を引き出していた。

見た目だけでなく、ただのコーヒーを飲む仕草にも品を感じる。

それもそのはず。

この女性、ティニアはこの国のお姫様なのである。

その左右の席には黒と白のメイド服を着た少女がいる。

腰まで伸びるロングの髪と同じ黒いメイド服を着用しているリン。

シヨートの髪に白いメイド服を着たエル。

2人は双子でティニアに仕えるメイド兼妹分なのだそう。

リンはコーヒー牛乳、エルはアップルジュースを飲んでいた。

また、リンの頭の上にはネコが乗っかっていた。

幽霊より頼まれたこの白いネコはリンによく懐き、エルがうらやましがっている。

エルにはなぜか懐かない。

手を伸ばすとなぜか威嚇される。

さて、この3人にぼやいたこの喫茶店の主人であり、ネコの飼い主である男。

神を統べる存在である神王。

この世界に入ってからクロトスという名前を貰った。
今の神王の状況をウリエルが知ったら絶叫のあとで倒れるかもしれない。

さて、その神王が無意識に呟いた言葉に3人が反応する。

「…もう店も開ける準備ができたんでしょう?」

「絶対流行りますよ。」

「でもな。」

クロトスがいささか不満そうな顔をする。

「何が不満なのよ?」

「なんか…面白くないんだよな。」

クロトスがコップを拭きながら言う。

ちなみに、クロトスに今の服は幽霊が着ていたものと同じデザイン。
バーテンダーに格好に頭には赤いバンダナ。

初めてその格好を見た女性陣は顔を赤くして見とれたのは言うまでもない。

「喫茶店になんで面白さを求めるのよ?」

「なんか普通なんだよな。刺激がないっていうか…。」

なぜに喫茶店に刺激を求めるのであろうか。

リンとエルは首を傾げながらも真面目に提案する。

「…強盗が入るとか?」

「火事になるとか?」

「幽霊がいた時点で十分じゃないのよ!」

…一応本人達は真面目に答えた。

「あんなの日常茶飯事だろ？」

「んなわけないでしょう！？」

一般人にはそうであろう。

神、天使はほとんどは見る事ができるのでクロトスにとっては見えることが当たり前なのだ。

「リンちゃん。なんの話？」

「…姉さんは知らなくていいの。」

幽霊のいた現場にはいなかったエルはリンに耳打ちするが夜に怖くてトイレにいけないこともあるエルに教えるのはかわいそうだと思つたリンは言わなかった。

…もっと効果的な場面の時に有効に使おうと思ったただけかもしれないが。

「な〜んか、しつくりとこないんだよね〜。」

この神王が嫌う物の1つが【平凡】である。

そのおかげで神界で何度騒動を起こしたことが。

その度にウリエルが何度絶叫したことが。

しかし、基本的に神々は騒動やお祭り騒ぎが大好きなために大きな混乱はなかった。

むしろ、一緒になって行う神もいた。

その神王もただの喫茶店では納得がいかならしい。

「なんかさ。国中を驚かす店の宣伝方法ってないかな？」

拭いていたコップをカウンターに置き、両手を広げてクロトスは尋ねる。

「どんな宣伝よ？」

そう簡単にあるわけない。

しかし、エルはジュースを飲み干すと満面の笑みで言う。

「爆発させるというのは？」

「何をよ！？」

エルはその質問に答えず、ティニアを挟んで座っているリンがコーヒ―牛乳を飲み干し、コップを置くとボソツと答えた。

「…お城？」

「それいいな！」

ポソツと手を叩き、賛同するクロトス。

「駄目に決まってるでしょう！？」

「…え〜。」「」

寸分の狂いもなく、いつも一拍ほど間を持って話すリンでさえも合わせて不満を洩らす。

「国を崩壊させるつもり！？」

「それはそれで面白いかも。」

「クロトス？…スリツブスワヨ？」

「…ごめんなさい。」

さすがエイン王妃の娘であるとかロトスは思う。
殺気が半端じゃない。

王妃が修羅だとするならばティニアは鬼の表情である。
…牙や角が見えるのは錯覚であろう。

「…じゃあこれは？」

そう言っただけでリンが一枚のチラシをカウンターの上に出した。

「闘技大会参加者募集のチラシ？」

「リン。それもちょっと…」

ティニアは気が進まなさそうに言った。

エルも賛成しているとは言えない顔をしている。

「何か問題があるのか？」

「一応、国内で一番人気で歴史がある大会なんだけどね。」

「… 昨年の参加者76人。内、49人重症。」

「ようは危険なんですよ。」

2人はクロトスの身を案じて大会の危険性をクロトスに教える。
確かに優勝すれば大きな宣伝にはなるう。

しかし、3人にはとてもではないがクロトスが優勝できるほど強そうには見えない。

「それで優勝したら何が出るんだ？」

「賞金100万ケリーと前回優勝者への挑戦権よ。」

100万ケリーは一般人の5年分の生活費に相当する。
それを考えると結構な額である。

しかし、この世界に来たばかりのクロトスにはその金額の大きさはピンとこない。

「その前回の優勝者って強いのか？」

とりあえず、挑戦権がないと戦えない優勝者が気になったので尋ねる。

すると、ティニアは苦笑しながら意外なことを言った。

「モリガンの弟よ。」

「……はあっ？」

クロトスにとってはあまり関わり合いたくない奴の名前が出てきて顔をしかめる。

「騎士団長モリガンの弟なのよ。国内最強の騎士で普段は放浪の旅に出てるんだけどその時だけ国に戻ってくるの。」

「優勝すればそいつと戦えるのか？」

リンとエルのコップに飲み物を注ぎ足しながら尋ねる。

顔はティニアの方を向いているがコップからこぼれることなくキチンと注ぎ足されている。

「大変よ？今回の大会は国外にも募集したから。」

「モリガンの弟が最強っていうのがムカつく。大会でぶっ潰す！」

「そこなの！？」

変な所でやる気になったようだ。

目が燃えているぐらいやる気になるほどモリガンを毛嫌いしているのだろう。

「それに優勝すれば宣伝になるだろ？」

「【最強のマスターが入れるコーヒーを飲める喫茶店】って感じ♪」

「…頑張つて。」

「おう！」

リン、エルは賛成のようだ。

もちろん不安ではあるがリンはクロトスを信じているからこそ大会参加を提案し、エルは漠然としながらもお兄ちゃんなら大丈夫だろうという期待をしていた。

2人ともチンピラ3人を1瞬で倒し、その後も数々の不思議な力を見せてきたクロトスなら大丈夫ではないかという期待を持っていた。しかし、ティニアだけは不満、いや、心配していた。

「そんな簡単にいくわけないでしょう！」

それを聞いたクロトスはカチンツときたのかティニアにある提案をする。

「なら、賭けるか？」

「えっ？」

「俺が優勝し、モリガンの弟に勝てなかったらお前の願いを何でも聞いてやる。俺が勝ったら俺の願いを叶えろ。」

ティニアは考えた。

確かにチンピラには勝ったが国内最強に騎士に勝てるとは考えられない。

それに、大会には猛者が多く参加する。

それを考えれば…

「……………いいわよ。乗った！」

「リンとエルが証人な。（この世界の人間が神の王に勝てるわけないしな。どんな屈辱的なことをやらせようかな♪）」

「わかったわ。（国内最強の騎士に勝てるわけないわ。何してもらおうかしら？アレもしてもらいたいけどやっぱり…デート…かな。）

「

「ふっふっふっふっふ…♪」

「エへへへッ♪」

2人とも笑っているがお互いの視線が火花を散らす。リンとエルは飲み物を持って2人から距離を開ける。

触らぬ神に祟り無しと思ったからだ。

片割れが本当に神だとも知らずに…。

神とネコの名前（前書き）

今回の小説内の様々な神の名前は海外の神話に登場しています。

神とネコの名前

「《パシフィス国主催第142回 セヴィオール武闘会。日にちは10日後。ルールは武器は自由で急所攻撃なし。相手を場外か戦闘不能、棄権させた場合に勝利とし、相手を殺した場合は失格。》って所ね。要約すると。」

ティニアは大会の詳しい内容を俺に説明していた。

この大会は初代国王が国の兵士を鍛えるために行った事がそもそもの始まりらしい。

それが今やお祭りとなってるとの事だ。

「…注目は前回優勝者の【双剣のシュダ】、【海竜のイアン】、【断罪のオルガ】、【雷光のミハネ】、【幻視のミナ】。」

「その海竜や断罪っていうのはなんだ？」

「その人たちの2つ名よ。」

「シュダちゃんも強いけど、他のも強いのはいるんだよ。」

国内最強の騎士をちゃん付けで呼ぶエル。

怖い物知らずなのか子どもならではの無邪気な性格のためなのか。

「しかも、今大会から他国の人も招待するから強敵はもつというわけね。」

「いいじゃない。楽しそうで。」

こついうのを欲求不足っていうんだっけ？

「今だったら賭けは無しにしてあげてもいいわよ。」

「じゃあ、無しで。」

「…って、エー！駄目よ！！ぜつつたい駄目～～！！！」

必死なティニアの叫びに俺たちは耳を押さえる。

冗談で提案したが俺に命令できるチャンスを逃すつもりはないらしい。

少し耳鳴りがするが俺はティニアをなだめる。

「冗談だよ。わざわざ勝ち戦を捨てるようなマネなんかするわけないだろ。」

「へへ。せつかくチャンスをあげたのに後悔しないわね？」

…どの口がそんなことを言った？

「姫様がそのチャンスを拒否しませんでした？」

「お黙り！！！！！」

「はいいいっつつ！！！！！」

「…ねえさん、ほっときなさい。」

血なのであろうかこの国の王族の女性は皆怒ると怖い。
エルも半分泣いている。

「それで、クロトスは何を使うの？」

「何が？」

「大会で使う武器よ。素手で戦うわけにもいかないでしょ。」

この前の3人組のレベルなら楽勝だけだな。
大会に出てくるレベルか…。

「んん。いや、素手でも大丈夫だけど？」

「馬鹿にしてるの！？相手は剣や槍も持っているのよ！」

「お兄ちゃん。さすがに無理があるよ。」
「…危険。」

3人は反対するが問題ないだろう。
もしもの時は…

「【万物創造 《ナイフ》】。」

俺は右手に刃渡り10センチほどのナイフを《創造》した。

「これでも？」

「「「……………」」」

3人は驚き、口を開けていた。
突然出現したナイフ。

魔法で出したようにも見えるが俺は魔法を使うのに必要らしい杖は
持っていない。

「さっきから気になってたけどそれって何なの？」

どうやらティニアは俺の創造する力に興味を持ったらしい。

「不思議なんです？」

「…魔法でもないように見える。」

3人が俺が創ったナイフを不思議そうにジロジロと見る。
この世界には無い技術だからな。

「方法は秘密だ。」

俺って何度秘密って言ったかな。

「…それも訳有りなの？」

ティニアは寂しそうな表情で俺を見る。

…ふざけてごまかすか。

「いや、その方が面白いから。」

俺は二ヘラ〜と頬を緩めた。

ティニアは頭を押さえる。

「あんたって…。なんか頭が痛くなるわ。」

「病気か？」

「あんたが原因よ！！」

そついわれても、本当のことを言うわけにもいかないし…。

「とりあえず、武器はなんとかなるがその前に決めなくちゃならないことがある。」

「なに？」

むしろ、武器を決めるより重要ではないだろうか。

「ネコの名前と店の名前だ。」

店はともかくとしてネコに名前がないのは寂しい。

…名前を呼ばれない寂しさは俺もわかるから。

「まだ決まっていなかったの？」

ティニアはとづくに決まっているものだと思ってたらしい。

「ネコはリンの担当なんだが…。」

俺がそう言つとリンはおそろおそろ言つた。

「…色々と迷つてゐるんです。」

「ちなみに候補は？」

候補すら俺は聞いてない。

俺たちはリンの言葉を待った。

そして、リンの口から解き放たれるネコの名前は…。

「…【バステト】。他国のネコの神様の名前。」

……………はいつ？

「リンちゃん。可愛くないと思うよ。」

エル？なんでそんなに楽しそうなんだい？

「…【ニユクス】。夜の女神の名前。」

……………。

「リン。それは却下よ。」

「…【ゲブ】。大地の神。」

リンのネーミングセンス以前に何ゆえ微妙な神をピックアップして

くるのか。

俺の名前の時も神様の名前をあげていたな。

「なんで神様の名前にこだわるんだ？」

俺の当然の疑問にリンは言いにくそうに言う。

「…不老不死だから。」

「えっ？」

「…お父さんやお母さんのように死んだりしないから。」

「……………」

「リンちゃん……………」

俯くリンを心配そうにエルが慰める。

ティニアも気まずそうにリンを見る。

2人は両親を亡くしているらしい。

けど……

「じゃあ、王妃様と王様がリンとエルの両親だな。」

「「えっ？」」

2人は驚いたように俺を見た。

ティニアは理解できていないようだ。

「ティニアは2人の姉代わりなんだろ？ だったら、ティニアの両親は2人の両親でもあるだろ？」

「そうよ。あなた達は私の妹なんだから。」

俺の言葉にティニアは賛同した。

少なくともこの3人の間に王女とメイドという立場をこえた絆があ

るように見える。

「…クロにいい。」

「姫様…。」

照れたティニアは鼻の頭を掻きながら提案する。

「それと。いい加減にその姫様ってやめない？プライベートはお姉ちゃんって呼んでほしいな。」

「「……お、お姉ちゃん。／／／」」

2人が顔を真つ赤にしながら言うとティニアはうれしそうに2人を抱きしめた。

2人もさらに顔を赤らめたが逃げようとはしない。

ティニアの目の端に光るものがあつたことは見なかったことにしよう。

「でも、王様がお父さんっていうのはちょっと…。」

「…私も。」

俺も同じ立場だったらいやだな。

「ひどい！あんなろくでもない馬鹿でも私の父親なんだからね！」

「お前が一番酷いと思うぞ。」

「…フフツ。」

リンに笑顔が戻った。

陰口を言っではいるが本心からいやそうには見えない。

あんな馬鹿でも人を引き付ける何かがあるのかもしれない。

神と神話と欠けた仮面（前書き）

ゴメンナサイ。

更新がとてつもなく空いてしまいました。

色々あつて落ち込んでましたが良い事があつて復活しました。

それに、こんな小説でも予想以上に読んでくれる人が多かったのも励みになりました。

ありがとうございます。

神と神話と欠けた仮面

王様と王妃を親として認めた2人（王様に関してはしびしび）。リンは神様の名前にこだわらずにネコの名前を決めることにはなったのは良いがアイディアはなかなか出ないようだ。

「リンちゃん、どうなの〜？」
「…むう。」

エルは問いかけるがリンは右手こぶしをほっぺに当てて考え込んでいる。

「クロトス、参考になりそうなのは何かないの？」

ティニアが苦笑しながらも俺に助け舟を求める。
今度は頭を抱え込んで考え出したリンのほっぺを指で突つつきたい衝動を抑えながら俺も苦笑する。

「そうだな〜。」
「…むう。」

リンはかれこれ30分ほど悩み続けていた。

…そろそろ店の名前もみんなで決めたいのだがな。
ティニアの6杯目のコーヒーの御代わりを淹れながら俺はそう思っていた。

しかし、参考になりそうのものか。
この世界の歴史や文化はあまり詳しくないからなあ。
…そつえば、あいつはどうしてるかな？

「そうだな。天使って知ってるか？」
「もちろんよ。」

ティニアは馬鹿にするなっという目で俺を睨む。
俺はこの世界の宗教や伝説は知らないから馬鹿にしたわけではないんだが。

「その中でウリエルっていう天使がいるのは？」
「それは知らないわ。」

どうやら天使はこの世界の神話でも出てくるらしいな。
ウリエルの話をしたのは他世界ではなぜか神界と共通する神話や伝説が残っている場合があるからだ。

特に徳の高い神やウリエルのような天使はたびたび出てくる。
今をもっても理由はわからない。

調べようにも過去の事を調べようがない。

これが歴史の話であれば資料や遺跡などが残っているが伝説というのは御伽噺に近い物がある。

ようは証拠や痕跡が無い。

では、誰がどうして神界の存在を知り、その話を残したのか？

それは俺や城の学者でもわからない。

…その話は置いておこう。

それよりもティニアが気になる言葉を言った。

「そもそも、天使に名前があるの？」

「…はあっ!？」

何を言っているんだ？

「天使って神の奴隷みたいなものなんでしょう？」

「はあっ！？どういうことだ？」

天使と神は徳による立場や位は違うが差別や偏見などない。
ましてや、天使が奴隷などのように扱われたなど聞いた事がない。

「…クロにいは神話を知らないの？」

「こっちではどういいう言い伝えなんだ？」

リンはできるだけ詳しく説明してくれた。

この世界には神は2人いたらしい。

1人は空の神、もう1人は地の神。

空の神は言った。

『神は下界に干渉するべきではない。我らは世界を見守るべきだ。』

地の神は言った。

『我らが作った世界だ。どうしようと我らの勝手だ。壊れたなら新

しいのを作ればいい。』

空の神は言った。

『彼らも生きている。同じ生命として扱うべきだ。』

地の神は言った。

『違うな。あれは玩具だ。作り物の命と我ら神が同等な訳なからう。』

『

互いの意見は決して交わることは無かった。

その結果が世界終末戦争【ラグナロク】。

世界支配を目論む地の神。

世界の存続を訴える空の神。

戦いは騒然を極めた。

空は赤く染まり、地は天変地異が頻発した。

その戦争で戦っていた兵士は全て天使。

神はお互いに戦場には一切出陣せずに天使同士を戦わせていた。
神の命令に逆らえない天使達は同族で数百年殺しあっていた。
その悲しい戦いは第3者の手によって終止符を打たれた。

それが人間。

数百年の間に人間は神や天使の力を学び、別世界の神を召喚すること
に成功した。

その神は2人の神を封印し、天使達も開放された。

「…これが私達に言い伝えられた神話。」

「常識よ。」

……。

「お兄ちゃん？」

……。

「クロトス？」

…。

「…クロにいい？」

ズガアーン！！！！

「……っ！！！！」

「…恥さらしが！誇り高き神々がそのようなことを天使を行使させたのか！」

「クロトス！どうしたの？落ち着いて！」

「……………すまん。取り乱した。」

俺としたことが…カウンターを叩き壊してしまった…。

作り話かもしれないが誇り高き神が天使にして良いことでは無い。それを考えると我を忘れてしまった。

…この世界では【神王】ではなく【クロトス】として生きると決めたのに。

つい、【神王】としての自分を出してしまった。

リンとエルを…怯えさせてしまったな。

「リンもエルも…ごめんな。」

「…大丈夫。クロにこそ大丈夫？」

「手は怪我してない？」

怯えさせたのに2人は俺の心配をしてくれた。

怪我が無い事を見せると3人は安心した。

「ありがとう。怖がらせたな。」

俺がそう言つと3人はなぜか微笑んだ。

「…そんなことない。」

「そうですよ。」

「むしろ…嬉しかったかな。」

「えっ!？」

ティニアの言葉に俺は聞き返した。

怖がらせたのに嬉しい？

「…初めてクロにいが素顔を出した。」

リンの言葉に俺は固まった。

「今までは私達といてもどこか一線引いてる感じがしてたけど初めて感情を出してくれた。」

俺は神王としての自分を隠すので精一杯だった。

「お兄ちゃんは天使様のために怒ってくれた。やさしいから怒ってくれた。天使様も【シンオウ】様も喜ぶよ。」

俺は正体を隠そうと3人に自分を偽り続けてきた。

それが3人には一線を引いてるように感じたのだろう。

…この3人にだったら…俺の正体を言っても大丈夫な気がしてきた。極力言わないようにするが。

「ありがとう…って待った。今なんて言った？」

妙に聞き覚えがある言葉があったような。

「？天使様も【シンオウ】様も喜ぶよって所？」

「…え〜と、【シンオウ】って……なんだ？」

まさか…。

「…さっき言った召喚された神で戦争に終止符を打った神。その神は自分を【シンオウ】と名乗ったそうです。」

え〜と…

【シンオウ】＝【しんおう】＝【神王】＝【俺】

……

……

…

「ふうう。（落ち着け。俺は名前は【クロトス】だ!）」

また3人を驚かすわけにもいかない。

とりあえず落ち着こう。

俺にそんな記憶は無い。

ということは過去の神王が行ったかもしれない。

それだとこの世界の神話は事実だということのなる。

「本当に大丈夫なの、クロトス?」

ティニアが俯いてた俺の顔を覗き込む。

……優しいな。

「大丈夫だ。その神はどうなったんだ。」

「…世界をその世界の生命に任せ、元の世界に戻っていったそうです。」

ということとは元の世界に戻る方法もあるということだ。

しかし、来たばかりなのでしばらくは戻る気は無い。

元の世界に戻ってもウリエルに書類を押し付けられるだけだしな。

いや、その前に説教か。

そういえば、置手紙にイタズラしかけたんだっけ。

……ほとぼりが醒めるまでここにしよう。

それにこの3人とも一緒にいたい。

「クロトス？」

「そうだ。俺はクロトスだ。」

「知ってるわよ。本当に大丈夫？」

この世界ではクロトスなのだ。

神王ではなく、クロトスとして楽しもう！

「姫さ…じゃなかった。お姉ちゃん（うにょにょ）…」

「そうなの？」

「リンちゃんもそう思うよね？」

「…うん。」

「それじゃあ、いくわよ。」

「…せいの！」

パシーーーーン！！

「痛っ！何するんだ！？」

いきなりティニアに頭を叩かれた。

「本当ね。叩いたら直ったわ。」

「オモチャと一緒にするな！」

「でも、リンとエルが…。」

俺はリンとエルをにらんだ。

この俺の鬼をも震え上がらせる睨みで二人は慌てだす。

「ち、違いますよ！私達は関係ないです…！」

「…全部お姉さまのせい！」

「ちよっと！リン、エル！？」

2人はティニアに罪を擦り付けた。

俺に何かあったと思い、気を紛らわすためにティニアを唆したのである。

…おもしろそうなので俺も乗った。

「ほう…。ティニア。覚悟は出来ているだろうな？」

「ちよつと？わ、私じゃないわよ。リンとエルが…。」

「…お姉さま。人のせいにするなんてそれでも一国の王女ですか？」

「リン！何を…！？」

さすがリン。

そのメイド服のように腹黒い。

完全にティニアを悪役に仕立て上げた。

「お兄ちゃん。お姉ちゃんがねえ、私達に罪を擦り付けようとするの。」

エルは嘘泣きで俺に言い寄る。

…かわいい。

「大丈夫だ。俺が教育するから。」

そう言うとき青ざめる顔が1つとほっとする顔が2つ。

「3人共！私は…。」

「ティニア。」

俺はにこやかに…ニコヤカニホホエミカケル。

「…何よ？」

「【体罰】【呪い】【嫌がらせ】のどれがいい？…お前の運命の選択だ。」

雰囲気を出すために最後の一言はできるだけ低い声で脅す。個人的には嫌がらせの方が得意なんだが。

「どれも嫌よ！」

ティニアは1歩だけ後ずさる。

それに対して俺は気づかないふりをする。

「それじゃあ、罰にはならないだろう。」

俺はオーバーにため息を吐く。

「私はリンとエルがやれって言うから…。」

矛先が自分達に向かないように2人がトドメを刺す。

「お兄ちゃん。お姉ちゃんが全く反省してないよ。」

「…全部いきましよう。」

リン、エルがそう提案した。

黒い羽と尻尾が見えそうな気がしてきた。

2人とも笑っているがどこか黒い。

「そうだな。面倒だし、全部行くか。」

きつと今の俺にも羽と尻尾が見えるだろう。

「い、いや！」

「あつ！逃げた。」

ティニアが席を立ち、店の出口へと走り出した。

俺から逃げられるとも思っのかな。

…俺も十分腹黒いな。

「【万物創造 《檻》】」

ガシャーーン！！

「…お見事。」

「さすが、お兄ちゃ…。」

ガシャガシャーーン！！！！

「「…えっ！？」」

逃げ出そうとしていたティニアの頭上で底抜けの檻を《創造》し、落として捕らえた。

…リンとエルも別々の檻で捕らえた。

「え〜と、お兄ちゃん？」

「叩いたティニアも罪を擦り付けたエル、リン共々教育だ。」

おふざけでも人に罪を擦り付けるのはいけない。

というよりも俺を叩くように言っただ諸悪の根源はお前らだろうが！
ちよつと痛かつたんだぞ！

「…クロにいい。これあげるから私は出して。」
「なんだ。」

そう言つて数枚の写真をポケットから出した。

…リン？本当にこれはナンデス力？

「…お姉さまの着替え生写真。」

「お兄ちゃん！私はお姉ちゃんの下着渡すから！」

そう言つてエルもポケットからピンク色の…。

ティニアの名誉のために省略しよう。

ともかく、それをポケットから出した。

つて2人ともいつも持ち歩いているのか？

「なんであんだ達がそんなもの持つてるのよ！？」

ティニアは羞恥で顔を赤くしながら怒鳴った。

リン、エルはティニアの方を向き、声を揃えて言った。

「「万が一のため」」

「どんなときに使つつもりよ！」

さすが双子。

見た目は違つが考えることは一緒なんだな。

「それじゃあ、誰がどの罰を受ける？」

「「全部お姉ちゃん（お姉さま）が受けます。」」

「私は悪くないのよ！クロトス、信じて！」

…お前ら、必死だな。

「めんどくさいから全員に全部いこう！」

そう言った途端、全員の顔が青ざめた。

といったものの冗談なので軽い罰を与えるだけのお遊びだ。

「それじゃあ、天罰！」

「「「ーーーーっっ！！！」」」

…声にならない悲鳴ってこういうものなんだな。

ー10分後ー

「ちよつとスツキリしたかな。」

「私達で発散しないですよ！」

「…クロにいい、酷い。」

黒焦げでヌルヌルのティニアとリンは半泣きで俺に訴える。

ちよつと、やり過ぎたかな。

エルは声も出ないらしい。

「悪かったな。デザート奢るから許してな。」

「「「やったー」」」

そついうと3人が手を取り合って喜んだ。

エルもいつのまにか復活している。

俺は苦笑しながらも昨日のうちに作った店で出すメニューの試作品を運ぶと3人の目の色が変わった。

デザートからツマミに家庭料理、レストランで出す高級料理などの

様々な料理をカウンターに並べていく。

「好きなだけ食べていいぞ。全部おごりだ。」

「『いただきます！』『』」

そう言っただけで目の前の料理に手を出した。

3人は1口食べるごとに笑みを浮かべる。

3人が食べているうちに俺は名も無きネコにミルクの用意をした。
お前もいい加減に名前を決めて欲しいよな？

「リン。いい加減にネコの名前を決めてあげよう。」

俺がそう言っただけでリンの食べる手が止まり、ふっと思いつくように呟いた。

「『【ウル】。』」

「お兄ちゃんが言っていた天使様の名前を縮めたの？」

「『それに、天使様の羽ってこの子と同じ白だから。』」

そう言われてみればこのネコの純白の毛の色は天使の羽に似ている。

「いいんじゃないの？変な神様の名前よりは。」

ティニアも賛同する。

「お前もそれでいいか？」

ネコは短く、まるで肯定するかのように鳴いた。

カウンター内にいたウルはカウンターの出入り口からリンの傍に歩いていった。

「…これからよろしくね。」

それに答えるかのように鳴いたウルは何処か嬉しそうに笑っているように見えた。

神の錯乱！？（前書き）

就職が決まった。

車の免許も取った。

資格試験も終わった。

やっと一段落つきました。

最近更新していなかった分を取り戻そうと思います。

神の錯乱！？

【セヴィオール武闘会闘技場関係者席】

この闘技場で1番警備が厳しい観客席。

それが王族及び関係者しか入ることの許されないVIP席。

そこには国王、王妃、ティニアがいる。

普段はラフな格好のティニアも今回は王族の格好で席に座っている。
この席はバルコニーになっており、観客席の中でも1番高い所にある。

武舞台全体を見渡せる良い席であり、警備にも抜かりはない。

バルコニーを包むように結界魔法が何十にも張られており、バルコニーの入り口には城の兵士が警備に立っている。

そこに2人のメイドが入る。

「失礼します。」

「…失礼します。」

「遅い！」

リン、エルはバルコニーに入る早々にティニアに怒鳴られた。

ティニアはいささか不機嫌そうだった。

王様と王妃の前であるためにこやかに対応するが心の中ではその理不尽さに怒りを感じている2人。

「選手控え室からここまでどのくらいかかっているのですか？」

「…これでも急ぎました。」

ちなみにこのバルコニーと選手控え室は武舞台を挟んだ反対側にあ

る。

会場を1周分の距離を急いできた2人の額には汗がにじんでいた。

「それで？クロトスの様子は？」

ティニアは2人の言い分など聞かずに尋ねた。

本当は自分が控え室にいるクロトスに会いに行きたかったのだが王女の自分が1人の選手を贖済にするわけにもいかない。

もし、王女が控え室にいたら大騒ぎになってしまうだろう。

そこでリンとエルに様子を見に行ってもらったのだ。

「お兄ちゃんは…そのう…遊んでいました。」

エルはなんとも言いずらそうに答える。

「遊ぶ？」

控え室で他の選手とポーカーでもしているのかと考えたティニア。

「…周りの選手を挑発して遊んでいました。」

その予想をリンが打ち壊す。

「あいつは何をやってるのよ!？」

今大会の参加者人数は196名。

予選はA～Jブロック分けられ、1ブロック20人に1つの控え室を与えている。

予選はバトルロワイヤルで舞台上でそのブロックの20人が一斉に戦うのだ。

無茶な戦いだがこの予選方法を決めた国王によると…

『その方が面白そうだし、早く終わるだろう。俺はティニアの大会での衣装の打ち合わせがあるからこの話は終わりだ!』

…だそうだ。

つまり、クロトスは控え室のブロック内の選手全員を挑発している。必然的に試合ではクロトスは集中攻撃を受けるだろう。

そのことを考えるとティニアは頭を抱えた。

リン、エルも苦笑いであつた。

「どうしてあのバカはそんなことをしているの!?!」

普通はわざわざ自分の不利な状況を作るバカもいないだろう。

「ハンデだそうです。」

エルは苦笑いで答えるしかなかった。

エル自身も最初に聞いた時は耳を疑った。

「…『普通に戦ったら面白くないだろう?こんなチンピラくずれに負けるわけないし、弱い者イジメも好きじゃない。一斉にかかってきたら100兆分の1の確立でかすり傷ぐらいはこいつらでも傷つけられるかもしれないがな。一応、手は抜くが…助かったよ。女がいたら戦いづらいけど可哀想な顔の男しかいないから少しぐらい歪んでも人生に影響なさそうだから安心した。』って大声で言っていました。それを聞いた控え選手達が睨みつけていました。」

リンはクロトスの声を真似て1字1句正確に伝えた。
それを聞いたエルとティニアは…

「リンちゃん。お兄ちゃんの声マネ、うまい」
「……………」

ティニアは本当に頭痛がしてきた。

そういえば出会ったときもチンピラを挑発していた。

しかし、その時は3人だったが今度は20人だ。

ティニアは心の中でこっそりと神にクロトスの安全を祈っていた。
その神がこれから大会に参加するとも知らずに…

神は白いネコ！？

「レディゝス エゝンド ジェントルメン！」

騒がしい闘技会場が一斉に静まり返る。
観客の全員がある場所に視線を集める。

「厚化粧のババアに賭け事で家庭崩壊寸前の腐れジジイ！血の流れる闘技場に小さな子どもを連れてきたマッドマザーにファンキーファザー！ようこそ！！金と血、名誉と快楽を求める闘技場へ！！」

そこには実況席で仁王立ちする1人の男。

「今、ここにいるのはゲームとは名ばかりの合法暴力が許された戦いに参加したクレイジーとそれを見るクレイジーのみ！！」

長い赤いマフラーを首に巻き、マフラーの端は風にたなびいている。

「選手が求めるは金！名誉！！そして血肉踊る戦い！！！」

白いスーツを身を纏うのは血のように赤毛の長髪の若い男性。

「俺たちが求めるのは興奮！恐怖！！そして、血肉踊る戦い！！！」

胸ポケットにバラの花を刺す、シルクハットをかぶるこの男を人はこう呼ぶ。

「今日は狂い、奇声を上げ、雄たけびを挙げろ！選手はバーサーカー！我らは残虐非道の狂人！共に、この闘技場を血のワインで満た

「そうではないか！！」

└

└

└

【鬼人伯爵】。

幼き頃より、髪を血で染めていると言われるこの男は戦いを狂氣的に愛する。

今回のような大会があると聞くと世界中を渡り歩く狂人。

この男が歴代のこの大会の司会を務めている。

「それでは第1回戦！！1回戦は20人のバトルロワイヤルというクレイジー！提案者の国王もたまには面白い事をやるじゃねえか！今回は解説としてお馴染みのマッドサイエンティストのレイがきたぞ！！」

伯爵が素晴らしい終わつたと同時に伯爵の隣で爆発が起きた。

その爆発の煙は黄色で煙が晴れると煙と同じ色の髪的女性がいた。白衣を着た30代と思われる女性で両手はポケットに入れている。

「けほっ、ゲホッ。ね、レイ……。毎回言ってるがその煙で登場するのはやめろ！」

「あら？わかつてないわね。科学者は何処からともなく現れると昔から決まってるのよ。」

レイはポケットからタバコを取り出し、火を点けるとしゃあしゃあ
と答え、タバコを吸う。

「知らねえよ。ババアの時代の決まりなん……ふあちゃあああああ
あああつつ！！」

伯爵が言い終わる前にレイは伯爵の眉間にタバコを押し付けた。

伯爵はその熱さにテーブルのコップに入った水を額にぶつ掛ける。

「伯爵。女性にババアなんて言っちゃ駄目よ。そんなんだから恋人の一人や二人できないのよ。」

何事もなかったかのようにポケットから次のタバコに火を点けて、吸う。

「……てめえに言われたくねえよ。いい年こいて未だに独身で友達はいない。皆結婚して自分だけ余った……」

レイは伯爵の口の中に火のついたタバコをほおりこんだ。

もはや、叫び声を出ない。

伯爵はコップの水で鎮火しようとするがさっき使ってしまった。

そこで、レイのコップを奪い、水を口に含んだ。

「それ。お酒よ。」

「ふあ あああああ ああああ ああ ああ あつ あつ ああ あつ ああ あ！！！！！」

!

—少々お待ちください—

「それでは、生け贄となる選手の入場だあああ……！！！！」

会場の医療チームの回復魔法で火傷を治療した伯爵は大きく叫んだ。
ちなみに、リンの酒は仕事ということで没収された。

「第1試合は……おおっと！ 今大会の有力株の【断罪】のオルガの登場だ！！」

選手入場口から現れたのは4メートルを越す巨人ともいえる男。色黒の肌に裾がボロボロのズボンのみの格好で一発で木を切り倒せそうな斧を担いでいる。

柄の長さを合わせると男と同じぐらいの大きさである。

長いばさばさの黒髪に鉄の仮面をつけた姿は伝説のフランケンシュタインを想像させる。

「大会で見るたびに思うのだけど、……本当に人間？」

会場にいる多くの者がそう思っているだろう。

他国からきた観客は恐れおののいている。

逆に国内の観客はオルガに声援を送る。

「さて、ここで残念なお知らせだ。耳の穴をかつぱじってききやがれ、愚民共！！」

「何かあったの？」

タバコをふかしながらレイは聞く。

大会運営委員会から周ってきた通知書を見ながら、伯爵は声を高らかに叫んだ。

「第1試合に出る予定の20選手中18名は……棄権して逃げ出しやがったとよ！ざけんじゃねえええっ……………！！！！！！」

一斉に会場中にブーイングが鳴り響いた。

しかし、誰があんな化け物級の大きさの男に立ち向かえるのであるう。

「がああああああっああああ！！！！次の試合行くぞ！！第2試合…

…。」

「ち、ちよつと！第1試合はどうするのよ？」

「相手がいねえだろうが!？」

「自分で18人が棄権って言ったんでしょ？2人残ってるのではなくて？」

伯爵は荒い息を治め、ゆつくりと通知書を見直した。

「…でもよ？誰があのかけ物に勝てるって言うんだ？対戦者の名前、見たことないから初出場の奴だぞ？」

「やらないわけにもいかないでしょう？」

2人は小さな声で相談し始めた。

その相談は数分かかり、観客が訝しげた頃。

「第1試合をはじめろぜ！【断罪】のオルガに立ち向かうクレイジ―を通り越して愚か者の選手だ。皆はそいつが死なないように祈りやがれ！！クロトス選手の入場だ！！！！！！」

観客が選手入場口に視線をやると…………固まった。

選手入場口より現れたのは…………白いネコだった。

正確には白いネコのきぐるみだった。

会場中が静寂に包まれた中でネコは舞台まで歩き出した。

ピコッ

ネコが一歩足を出すと静寂の会場に確かに聞こえた。

ピコッ

ネコが歩くたびに音が鳴る。

ピコッ

どうやら、足に音の鳴る仕掛けがしているらしい。

ピコッ

両手を振りながら子どもが行進のように歩くネコは舞台上がるとめにせりあがっている舞台の階段に足をかけた。

ピコッ♪ピコッ♪ピコッ♪コテッ…

数段の階段を上りきった所で足を引っ掛けて転んだ。

しばらく動かないネコだったが突然に起き上がり、頭をプルプルつと振る。

そして、しっかりとした足つきでオルガから5メートルほど離れた場所で止まった。

会場中が復活してない中で静寂に包まれた舞台の大きな男の前でネコは片手を顔の横辺りまで上げて言った。

「にゃあ〜」

静寂。

そして、怒号。

ある者はその非常識さに怒りの叫び。

ある者はその可愛さに黄色い叫び。

ある者は理解できずに奇声の叫び。

叫びが交じり合い、すさまじい奇声のスコールが舞台に降り注ぐ。

「何たる！何たるクレイジー！！これはなんだ！大きな斧をもったネコが白くてかわいらしいオルガの前に立ちふさがった！！！！？」

「いや、逆よ！」

もはや、まともな思考の持ち主なら混乱必須であろう。

混乱を極めた会場。

そこへ1つの怒号が響きわたる。

「静まりなさい！！！！」

再び、静寂。

観客の視線は一点に集中した。

すなわち、エイン王妃のところへ。

王妃は椅子から立ち上がり、会場中を見渡す。

「大会規約には服装に制限はないわ。ルール違反はしてない。よつて、このまま試合を続行します！」

そう言うのと椅子に座り、ティニアに耳打ちする。

「あれって……『彼』よね？」

「……………たぶん。」

ため息を吐くティニアの後ろではエルとリンがこそこそとささやき合う。

「お兄ちゃん、本当にあの格好で出るんだ。」

「…控え室であの格好でいた時は冗談かと思ったのに。」

お互いに冷や汗を掻く2人。

そんなことも知らずにクロトスというところ…

「にゃん」

「……………キャー！！！！」

次々と会場中の女性をとりこにしていた。

顔をふいたり、手（前足？）を振るなどで会場中にアピールし、女性だけではなく子どもも引き付けられた。

ネコ（クロトス）が手を振ると女性や子どもも手を振り返す。

「え〜と、ここでやつと大会運営委員会からの通達が届きやがったぞ！え〜、『かわいいから許可』…。」

通達書（ピンクの便箋）は丸文字でかわいらしく書かれていた。伯爵はげんなりしてそれを投げ捨てる。

大会運営委員会役員は全員が40歳以上。

ちなみに、これを書いたのはトメさん（56歳）。

便箋の端にキスマークもあつたとかなかったとか。

「やつた♪」

伯爵の言葉を聞いたレイは小さくガッツポーズした。

「レイ。なんでお前が喜ぶ？」

レイは照れ隠しにタバコを吸い、空に向かって吐くと伯爵の方に作つた無表情で言い放つた。

「私はネコが好きなのよ。」

ネコVS断罪の巨人（前書き）

この話で第16話。

20話にはまた番外でもやるつもりですがアイデア無し。

一応はリンとエルを主役に書こうかなと考えています。

… 2人を使ってティニアでもいいじめようかな？

ネコVS断罪の巨人

クロトスは機嫌が良かった。

派手な事、驚かす事などの目立つことが趣味と言っていていいほど好きなクロトス。

特にサプライズといった他者を驚かす事をこよなく愛する。

そんなクロトスにとっては今の状況は最高であった。

クロトスは考えた。

大会で自分の店を宣伝するにはどうすればいいのか？

ただ優勝するだけではむさつくるしい男しか来ないだろう。

『大会優勝者が経営する喫茶店』

…とても女、子どもがくるとは思えない。

クロトスが目指すのは酒場ではなく、喫茶店。

穏やかで落ち着きの空間とひと時を提供する憩いの場。

けっして、腕自慢の酔っ払いが高笑いするような場所を望んでいるわけではない。

では、どのようにすれば良いのか？

その答えが…

「ニヤア~~~~」

クロトスが鳴くたびに歓声があがる。

クロトスが出した答え。

それが『店のマスコットキャラが大会優勝者の喫茶店』である。

別にクロトスが優勝しなくても良いのだ。

重要なのは『店の宣伝をするために優勝する』のであって『クロトスが優勝』する必要はないのだ。

それからクロトスは本屋でネコの絵が描かれた本を買い、それを見ながらウルを観察し、この【ウルちゃんマスコット】を【創造】

したのだ。

2足歩行の白いネコ。

クリクリの大きな目は赤いというよりもピンクに近い。

白い尻尾はクロトスが動いたびにフリフリとかわいらしく動く。

見た目はモコモコしていて動きずらそうだが実際は側転や宙返りもできる優れもの。

クロトスの力だからこそ実現できる最高の戦闘用人形なのだ！

「気を取り直して行くぞ、野郎共！会場中の女性があいつに黄色い歓声をあげるからといってそんなに嫉妬と殺意をふりまくんじゃねえ！」

と言いつつも伯爵もクロトスに嫉妬の眼差しを送っている。

それを見ていたレイはタバコの煙を伯爵に吹きかける。

「モテない男のひがみでしょうよ。小さいわねえ。」

「……レイ、お前の発言で会場中の男の殺気が増大したぞゴラアアッ
！！」

会場で男達が血走った目でクロトスを睨みつける。

カップルでの観客は彼女が舞台上のネコに虜にされて彼氏が嫉妬する。

純粹に試合を見に来た観客（主に男）は大会自体を汚された、悪ふざけが過ぎると非難する。

おもしろがっている観客もいるが大半の男性客を敵にまわしたクロトス。

クロトス自身もそれに気づいている。

「（けど、試合が終わる頃には変わるだろうな。）」

きぐるみの中で黄色い歓声をあげる女性が見たら一気に熱が冷めるような黒い笑いをするクロトスであった。

会場中にいる者はそれに気づかずにいる。

そして、いよいよ始まる。

「ああー！もう、始めるぞ！第1試合開始！」

伯爵の開始と共に会場中に…

「グウルアアアアアアッーーーーー！！！」

響き渡る雄たけび。

喻えるなら【獣】。

オルガは見た目は化け物みたいだがれっきとした人間である。

オルガは狩猟民族の戦士である。

彼は獲物と戦うときは必ず雄たけびをあげる。

そうすることで熊のような大きな獣でもすくみあがり、身動きが取れなくなる。

獣でそうなるのだから人間もそうなる。

彼は相手を威嚇してから狩るといれっきとした戦法で戦う人間なのである。

この恐怖に打ち勝つ者こそ彼と戦う資格のある戦士なのである。

会場中がすくみ上がる中、クロトスはというと…

「にゃあ」

シユタつと右手をあげて、鳴く。

それはどこからみても挨拶。

熊を目の前にするネコが挨拶をしているように見える。

そのあまりにも異様な光景に会場中がずっこける。

オルガは怯まずに一発で人を粉々にできそうな斧を振りかぶる。
それを見たクロトスはただじっとオルガを見据える。
そして、その斧が振り落とされ

……

……

…

なかった。

「どうしやがった、オルガ？」

オルガは斧を片手で振り上げたまま微動だにしない。

伯爵は怪訝そうにオルガを見る。

仮面をしているので表情はわからないがぼさぼさの髪の間から見える耳は真っ赤になっている。

振り上げた斧を持つ手もプルプルと震えていた。

「怒りで震えていやがるのか？ あんなふざけた格好の奴が相手だから？」

「違うわ。葛藤してるのよ！ 彼にはできないのよ！」

レイは力強く拳を握り締めて言う。

「何がだ？」

「あんなにかわいいネコを自分の手で攻撃する気持ちと戦士としての気持ちがあつかり合っているのよ！ さすが、会員ナンバー1桁に属するだけはあるわ！」

実況席の机を叩くほど興奮して語るレイに伯爵は逃げ出したくなってきた。

「とりあえずだな…色々と聞きたいが『会員』ってなんだ？」

レイはグルンッと首をこちらに曲げて伯爵の顔の至近距離で言う。

「王都公認猫愛好会、通称【マタタビ飯の会】の会員ナンバー8番の通称【抱き虎のオルガ】。彼の愛虎は13匹。寝るときはいつも愛虎に囲まれながら寝ているそうよ。」

「猫愛好会じゃないのかよ!？」

伯爵の顔にレイの裏拳が入った。

レイは拳についた伯爵の鼻血をハンカチで拭く。

「虎もネコ科よ。差別はいけないわよ。」

伯爵はなれた手つきで鼻にティッシュを詰める。

このようなことはめずらしくないようだ。

「…もしかするとお前もか？」

嫌な予感がした伯爵はおそろおそろレイに問うとレイの目がキラ／＼と光り、胸ポケットから金色の会員カードを出す。

「会員ナンバー1番の通称【猫神のレイ】会長とは私のことよ!」

「お前が会長かよ!？」

ズバツと言い放つレイに伯爵は思わずツツコミを入れてしまう。

この2人の掛け合いはこの大会の恒例の催しでもある。

観客はコントとして見ているが本人たちは真面目である。

「しかも、国王公認よ。補助金も出ているわ。会員のネコミミビキ

二のコスプレ写真と引き換えにね。」

「エロバカ王がああっ……！！！」

所変わって実況席の反対側にあるVIP席。

そこには逃げようとする国王の首根っこを掴み、引きずるエイン王妃。

「……貴方、ちよっつと裏にきなさい。」

「エイン？あんな、俺は国民がどんなことに興味があるかという調査としてだな………ギヤアアアアアアッ……！！！」

周りの兵士や観客が慌てないところを見るとこれも恒例らしい。さて、この間にクロトスはあることを考えていた。

「（さてと、どうやって勝つかな？）」

化け物じみても所詮は人間である。
負ける可能性など微塵もない。

「（剣だと……返り血できぐるみが血に染まるかもな。）」

血の滴る剣を持った返り血で赤く染まった白かった（過去形）ネコ。
……あきらかにホラーである。

目立つのは好きだがそういう目立ち方は好きでは無い。

「（魔法だと……後のサプライズのために取っとくかな。）」

1度に色々出すと勝ち進むごとにネタが無くなる。
もはや、ステージでショーをやるかのごとく考えるクロトス。

「（それだと、肉弾戦かな？）」

返り血も少ないので汚れる心配もない。

とりあえず、それでいこうと考えたクロトスはいまだに斧を振り上げたままのオルガを見る。

未だに耳が真っ赤であった。

「（とりあえずは………試すかな……）」

クロトスはきぐるみの中でゆつくりと目を瞑る。

そして、目を開けると同時に殺気をオルガに叩き込んだ。

「っーーーー！！！」

先ほどまでクロトスのネコ姿に見とれていたオルガの体がビクッと震え、すかさず斧を体の前に構えた。

彼は生きるために大きな獣や魔物とも戦ってきた。

自分より大きな獣を狩り、森で会う魔物を退治したりなどで生計を立てていた。

そのオルガの……狩猟民族の本能が告げたのだ。

【アレハ……オソロシク……ツヨイ。】

本能が【アレ】を拒否する。

本能が【アレ】から逃げると言う。

本能が【アレ】は普通ではないと言う。

本能が……

「オルガ……だっけ？」

体が震える。

自分にだけ聞こえる声でネコの姿をした【アレ】が話す。

【アレ】が何か言っているがオルガには聞こえない。

本能が【アレ】を恐怖する。

本能が【アレ】には勝てないと悟る。

本能が…

「お前は【合格】だ。お前は強い。強いから俺を恐れる。」

自分の中の時が止まった。

【アレ】は何を言っている？

「俺の名は【クロトス】だ。あんたと戦える事を誇りに思う。」

本能が【アレ】を拒否する。

オルガは【クロトス】の方を向く。

本能が【アレ】から逃げると言う。

オルガは【クロトス】に斧を構える。

本能が【アレ】は普通ではないと言う。

オルガは【クロトス】を戦士と認める。

本能が【アレ】を恐怖する。

オルガは【クロトス】との勝負に心から歓喜する。

本能が【アレ】には勝てないと悟る。

オルガは【クロトス】に叫ぶ。

「我が名はオルガ！我が全身全霊をもってお相手する！」

オルガは斧をステージ場外に投げ捨てた。
あれは人と戦うための武器ではない。

あれは脅かすための物である。

大半の者はオルガの大きさに萎縮し、大きな斧で恐怖する。

しかし、目の前のような本当に強い者には己の拳で粉碎する。

己自身の強さで戦う。

目の前の者は己が拳で交えられる強さを持つ。

斧を捨て、拳を固く握り締めて構えたオルガを見たクロトスはきぐるみの中で楽しそうに微笑み、構える。

実況席や国王の醜態を見ていた観客も2人の様子に気づき、息を飲む。

「オルガって……喋れたんだな！グハッア！」

レイは伯爵に顔面に裏拳で黙らしながらも舞台からは目を離さない。
しばしの静寂……

……

……

…

そして、……時が……動く。

オルガはクロトスに拳を振りおとす。

クロトスは向かってくる自分の顔より大きな拳をステップで横に避ける。

クロトスが避けた拳は舞台に叩きつけられ、石板の舞台にヒビが入る。

避けたクロトスにオルガは数多の拳を振り落とすがクロトスに触れることはない。

オルガの攻撃で徐々にボロボロになっていく舞台。

舞台の所々にはオルガの拳によるクレーターができている。

余裕を見せながら拳を避けていたクロトスだが突如、バランスを崩す。

オルガの拳によるクレーターに足を引っ掛けたのだ。

チャンスと見たオルガは回転し、勢いに乗った丸太のような足での足払いを放つ。

オルガの筋肉でパンパンの巨大な足では後ろ回し蹴りに等しい。迫る蹴りを飛んで避けるクロトス。

空中で浮いたままのクロトスに間髪いれずに蹴りでの回転を乗せた裏拳をクロトスに放つ。

会場中の観客が吹っ飛ぶと考えただろう。

オルガもこのまま場外に吹っ飛ばして終わりと思った。

クロトスは迫るオルガの拳を掴み、拳を足蹴に拳の上で跳ね上がった。

オルガのような大男でなければクロトスの体重を支えられなかったであろう。

オルガが振り落とそうとする前にクロトスはオルガの頭上に飛び上がったのだ。

オルガが上を見ると同時にクロトスは空中を【蹴った】。

オルガの拳を掴んでいた時に力で空中に蹴ることができる空気を【創造】していたのだ。

蹴った勢いで加速するクロトスはオルガの顔の目がけて落ちてくる。急に加速したクロトスにオルガは一瞬だけ動きが止まってしまふ。

急降下したクロトスはオルガの目頭を勢いのまま蹴りつける。

「グッ！」

顔を蹴られたオルガは足が崩れ落ち、片手について右手で目頭を押さえる。

着地したクロトスは片手をついている方のオルガの手を掴んだ。

「うおおおおらああアツツ!!」

クロトスは自分の何倍の大きさのあるオルガを振り回す。
そのまま場外に叩きつけようとしたクロトスだが…

「……あっ!？」

きぐるみを着ているクロトスの手はもちろんネコの手である。
指はほとんどないので掴むというよりは手でオルガの手を挟んで振り回していた。

そして、オルガの戦いによる汗も要因の1つであろう。
そのような状態で通常の何倍もの体重のある大男を簡単に振り回せられるはずもなく…

ヒュウウー……ズガアー……ン!

滑って飛んでいったオルガは観客席へと飛んでいった。
なお、オルガの墜落地点にいた観客のほとんどは避難できた。
…【ほとんど】ではあったが。

あまりのことに会場中は静まり返る。

オルガに下敷きになっている観客のうめき声を除いてだが。
頭から落ちていったオルガはピクリとも動かない。

審判が駆け寄るがオルガに反応は無い。

徐々に会場中の視線がクロトスに…白いネコに集まる。
きぐるみの中で冷や汗をかいているクロトスはとりあえず…

「…にゃあ」

鳴いてごまかしたがその泣き声は静寂の会場に沈んでいった。

神とアルバイト

「ありがとうございます！」

最後のお客が去る時のドアのベルが鳴る音が店内に響く。

闘技大会終了後の店の客足は上々だった。

試合終了時の観客の反応を見ると失敗だったかと思ったがクロトスのネコ姿を忘れないのか多くの女性客がたびたび来店した。

お客は店内の落ち着いた雰囲気魅了され、出てきた料理に舌鼓を打つ。

噂が噂を呼ぶにつれて大会終了後のこの1週間でこの町の名物になった。

クロトスは疲れた体に鞭を打って未だに店内にいる客ではない常連の相手をする。

「やっぱり女性客が多いわね。」

ケーキを食べているこの国の王女。

「ネコの中身がバーテンダーのおにいちゃんだって知ったら皆驚いてましたね。」

イチゴミルクを飲む白い服のメイド。

「…当然。」

ミルクたっぷりのコーヒーのすすする黒いメイド。

「…お前ら、いい加減に帰れ。」

「店の手伝いをしてあげたのにその言い方はないんじゃないの？」
「お前はしてないだろう！」

ティニアは苺ショートケーキを食べ終わり、モンブランに取り掛かる。

ちなみに、このケーキで14皿目である。

外は夕焼けを過ぎた暗闇。

この国の王女がお忍びでこの喫茶店に来ていることは城の皆知っているが遅くまでいると心配するだろう。

王女を毎日のようにこの喫茶店に行く事を許している王様と王妃も寛大というかなんというか…。

この1週間はリンとエルには喫茶店のウェイトレスをしてもらっている。

王女専属のメイドだけあって、てきぱきと仕事をこなす。

おかげでクロトスは料理に集中することができ、店の味を落とす事も無かった。

「あんたもすっかり喫茶店のマスターね。」

「そりゃあどうも。それと、いいかげんにしないと太るぞ？」

クロトスが指をさした先にはティニアの16皿目になるアップルパイがある。

最後のひとかけらを口にしようとした時にティニアの動きがピタッと止まる。

その後、視線を漂わせていたティニアは冷や汗を浮かべる。

「えっと…甘い物は別腹だから太らないのよ。」

「どっという理屈なんだ？」

「…乙女の神秘という乙女の体のブラックボックスよ。」

訳のわからないごまかしをするティニアは最後の1口を口にする。

「んっ」本当においしいわね」

至福の表情を浮かべるティニアに太りやすくなる呪いをかけてやるうかと考えるクロトス。

「でも、最近は料理目的の男性のお客様も増えましたね。」

リンの言うとおり最初は女性客が多かったが料理の噂が広まりだし、徐々にではあるが男性客が増えだしていた。

「おかげで大忙しですね。」

エルはイチゴミルクを飲みながら言う。

特に今日は休日ということもあり、多くのお客が来たためにウェイター2人は大忙しであった。

本当はティニアも手伝うつもりであったのだがリンの説得により却下された。

そもそも、王女を手伝わすなどメイドの2人が許すわけもなかった。

「おにいちゃん。私達も毎日手伝えないからバイトを雇った方がいいんじゃない？」

「賛成。クロにだけじゃ大変。」

実際にベテランのメイドの2人が手伝ってギリギリなのである。

エルの提案にリンが賛成したことも当然である。

「バイトか」。中途半端や興味半分だと困るしなあ。」

「半端な人だと逆に邪魔になるんじゃないの？」

クロトスとティニアは難色を示す。

確かに提案には賛成だが今の業務をこなせる人物はそうはいない。
しかも、王女がたびたび来るので口が堅く、信用のできる者となる
と…。

「お城の人を派遣…は無理ね。」

「無理ですね。」

「…大会期間中は皆忙しいです。」

大会運営に城の人は朝早くから夜遅くまで仕事をしている。

メイド2人は王女の専属であるために王様と王妃の許可を得て、こ
こにいる。

3人には心当たりはいない。

クロトスにもいるはずがない。

この世界に来たばかりのクロトスには知り合い自体少ない。

数少ない友人も目の前の3人ぐらいである。

…【この世界】には…。

「でも、帰れないしなあ。」

手助けを呼ぼうにもクロトスはこの世界から出る方法がわからない。
色々試したが出る事は出来なかった。

クロトスはコップを磨きながらアレコレと考えるが良いアイディア
は出てこない。

「国外から派遣してもらおう？」

「姫様、信用の出来る者で仕事の出来る者となると…。」

「…難しいですね。」

3人がアレコレと考えてくれるがクロトスが窓の外を見ると完全に日が暮れていた。

「今日はお開きだ。あまり遅いとお城の皆が心配するだろう？」

「そうね。じゃあ、今日はこれで。」

ティニアはテーブルにお金を置くと3人はドアへと向かう。

「おにいちゃん。私達もできるだけ手伝いには来るけどアルバイトの事は考えた方がいいよ。」

「…お城の人にも声をかけとく。」

「ありがとうな。リン、エル。」

クロトスはリンとエルの頭を撫でる。

リンは顔を真っ赤に俯き、エルは照れくさそうに笑いながらうれしそうに撫でられる。

「私にはお礼は言わないんだ…。」

ティニアはリンとエルの様子見て微笑ましく、やや嫉妬を含みながらクロトスに言う。

ティニアの言葉に苦笑しながらクロトスはティニアの頭を優しく撫でる。

「ティニアちゃんもいい子でしたねえ」

真っ赤になったティニアはクロトスの足を踏もうとするがクロトスがさかさず足を引いたために空振りに終わった。

「リン、エル！帰るわよ！！」

怒るというよりもすねたティニアを見たメイド2人は苦笑しながらクロトスに手を振りながら店を出た。

クロトスは店の戸締りをして明日の準備をする。

準備を終えたクロトスは自分用にコーヒーを入れてカウンターで一息つく。

足元にはウルがクロトスに甘えている。

クロトスは足元からウルをカウンターに乗せる。

「ウル。アルバイトを雇おうかと思って思うんだ。けど、色々難しいんだよね。」

ウルは尻尾をフリフリと揺らしながらクロトスの言葉に耳を傾ける。

「俺はこっちに來たばかりだから知り合い自体少ないからなあ。」

クロトスはコーヒーをすすりながらため息を吐く。

「神界から応援を呼べればいいんだけど…あっちの世界に行けないからなあ…。」

クロトスはカウンターに突っ伏す。

ウルは励ますようにクロトスの指先を舐める。

クロトスがウルを撫でると気持ちよさそうに喉を鳴らす。

「なんとか応援を呼べたらなあ…。」

クロトスは何度か魔法や力で元の世界に戻ろうとはしたが世界同士の境界線ではじき返される。

何度やっても出る事はできなかった。

……【出る】事はできなかった…？

「……ウル。もしかしたら、何とかできるかもしれないぞ！」

ウルは小首を傾げるがクロトスは店の中心にある柱に駆け寄り、柱を3回蹴る。

そして、なにやら普通の人では発音すら難しい呪文のようなものを唱える。

すると、柱を中心に直径2mほど穴が床に空いた。

その穴は底が見えず、深い闇が続いている。

「ウル。ちょっとだけお留守番を頼むよ！」

そう言って穴に飛び込むクロトス。

店にはウルの了承を伝えるかのような泣き声が響いた。

神と地下空間（前書き）

最近は毎週日曜日に投稿しています。

この話で18話。

21話まで書き上げました。

20話にまた番外をやらせていただきます。

神と地下空間

クロトスが穴に飛び込んでしばらく降下していくと穴の底に光が見え始めた。

クロトスが穴を抜け出した先は海だった。

何処を見渡しても広がる青い海。

上空には青い空があり、クロトスを通った穴がポツンとあった。

さらに落ちるクロトスの下には空に浮かぶ島があった。

何処かの小島をとてつもなく大きなシャベルで掘り出したような島は海から1000mほどの高さに浮いている。

島の中心には山、それを取り囲むような森林、島の半分は砂浜になっているがもう半分は岩場になっている。

クロトスは砂浜に何事もなかったかのようにゆったりと降り立つ。

数千mも落ちてたはずなのにその衝撃は皆無であった。

クロトスは服に付いた砂を軽く払いながら森の中へと進む。

森は深く、太陽もさえぎるほどだが妙に静かである。

聞こえるのはクロトスが木々を掻き分ける音、風で葉や木々が揺れる音。

生き物の鳴き声が聞こえないのである。

いや、気配すらない。

しかし、クロトスは気にせずにとんどん森の奥へと進んでゆく。

ここはクロトスが力で【創造】した空間。

店ではできない元の世界に戻るための大掛かりな魔法や実験をするために創ったのである。

しかし、それでは空や海を創る必要は無い。

だが、それには理由がある。

この王都：パシフィスは巨大な大陸の中心にある。

王都は森と山に囲まれており、海産物などは町から仕入れている。

しかし、新鮮な海産物が手に入るわけもなく、多くは日持ちのする

保存食であり、生の物は結構な額となる。

そのためにこの王都内の飲食店は肉料理や野菜料理が中心である。魚が食べたかったら馬で数時間かかる港町に行くしかないのだ。

クロトスはその王都の食糧事情に目をつけた。

そんな王都に新鮮な魚料理を安く提供できたらどれだけの話題となるであろうか。

すでに実験としてクロトス自身が海で捕らえた魚介類を下の海に放している。

ようは下の海は巨大な生け簀なのである。

今のところは特に問題もない…ことも無い。

前にクロトスが下の海を泳いでいたときにイカの群れが泳いでいた。そこまでは特になんでもない。

… 全長10mほどのイカの群れでなければ。

もちろんクロトスはそのような馬鹿でかいイカを放した覚えはない。クロトスが過去に放したのはごく普通の大きさのイカである。

クロトスがそのイカに目を見張っていると脇から現れた巨大な魚がイカを捕食しようとしていた。

クロトスにはその魚にも見覚えはなかった。

心当たりはある。

大きさを考えなければ…。

細長い体。

銀色に光る体表。

口先はほんのりと黄色い。

… たぶん、サンマ… であろうとクロトスは考えた。

たしかにクロトスはごく普通の大きさのサンマを数十匹ほど放った。10mのイカを捕食しているのは30mはあるであろう巨大なサンマ？である。

… クロトスは見なかったことにした。

しかし、そういうわけにもいかないのでクロトスはそのことを今後どうしようか考えていると森を抜けた。

そこは広大な草原であった。

至る所に花が咲き乱れ、自然の息吹が溢れるかのような場所であった。

クロトスはなるべく花を荒らさないようにできるだけ花が咲いてないスペースを探す。

10分ほど歩き、希望通りの場所を見つけたクロトス。

クロトスは力で魔方陣を【創造】する。

クロトスがここに来た理由。

クロトスはこの世界から出ることはできなかった。

この世界と元の世界を繋ぐことは出来るのだ。

しかし、その境を通ろうとすると壁のようなものにぶつかる。

力を使っても通る事が出来なかった。

では、向こうからではどうだろうか？

ただの疑問であった。

しかし、可能性があるなら試す。

それに漠然とした予感がある。

【これは成功する】という予感。

「これで…完了！」

クロトスは魔方陣を書き上げた。

魔法陣のような細かなものは力を使っても慎重に少しずつでなければ創ることはできない。

魔法、特に魔方陣は少しの書き間違いで何が起るか分からないような不安定なものなのである。

「さ〜て、でつきるカナ♪でつきるカナ♪」

クロトスはアドリブで作った謎の歌を歌いながら体をほぐす。

別に体をほぐしても魔法に影響はないのだが気分の問題である、

「……………」

クロトスは何気なしに右腕を振るが何も起こらない。

「あつちの世界だつたら無詠唱でも召喚できたんだけどなあ。」

傍目にはただ手を振っただけに見えるが一流の魔術師でも出来る者が少ない無詠唱での魔法を行っていたのだ。

しかし、そもそも召喚魔法というのは超上級の魔法である。

無詠唱での召喚魔法など常識外である。

それをことも簡単に言うクロトス。

「手応えはあるんだけど…やっぱり、狭間の壁みたいなのが邪魔しているのか？」

と言いつつも笑うクロトス。

可能性が現実と化すかもしれない。

クロトスが向こうの世界に渡るよりも明らかに抵抗が弱かったのだ。クロトスが魔法陣のほうを向く。

「やっぱり、魔法と力の併用でむりやりぶち抜くしかないか！」

すでに笑いは歓喜と化していた。

体が震える。

ワクワクする。

不思議な高揚。

「【彼の地は幻。紡ぎし現の扉を縛りしは怨鎖。】」

クロトスの言葉に共鳴するかのように魔法陣が光り輝く。

「【万象の理をもって開く虚偶の狭間。】」

光は徐々に強く、時には雷に似た閃光を放つ。

「【果たせ。盟約と汝の誓いを！】」

強烈な光が辺りを、クロトスを包み込む。

「【万物創造 《召喚》】！！」

神と降臨する者達（前書き）

蛹です。言い訳させてください。

基本毎週日曜日に投降していたのですが学校の課題にかかりつきりで投降できませんでした。

毎日や二、三日で投降している方々をすごいと思ったこの頃です。

o r z

神と降臨する者達

「【万物創造 《召喚》】！！」

……

……

…

光が徐々に収まるにつれて、魔法陣の中心にあるものが姿を現わす。それは漆黒の長剣。

刀身、柄、何もかもが黒い剣。

いや、1箇所だけだが違う色があった。

柄についている小ぶりの宝石。

ルビーのようだがその赤い色は血の色を連想させる。

その赤が剣をよりいっそう禍々しい物にみせる。

クロトスは地面に刺さっている剣を無造作に抜く。

軽く振って土を払うと懐かしさに顔をほころばせる。

まるで、久しぶりに家族に会うかのような…。

「久しぶりの召喚はどうだった、グラム？」

クロトスは剣に話しかけた。

一見、愛用のものに話しかける人のようにだが何処からともなく声が響く。

『荒っぽすぎるぞ。もう少し、丁寧に呼べ。』

「仕方がないだろう。この世界とあつち繋がりにくいから召喚が難しいんだ。」

『確かに空間の境目で壁のようなものがあつたな。ここは何処だ？』

「オーデインの爺さんから貰った宝玉の中。：入ったら出れなくな
った。」

刹那、永遠にも感じる静寂が辺りを包む。

『…無様だな。』

「うるせえ！」

クロトスが剣を睨む。

『だが…無事でなによりだ。主よ。』

それを聞いたクロトスは顔を緩ませる。

「…会いたかったよ。グラム。」

クロトスが語る相手。

魔剣【グラム】。

神の王を主人と認めた魔の剣。

クロトスの絶対無二の相棒兼親友。

それが今、クロトスが握っている黒い剣。

『主はこの世界で何をやっているのだ？世界征服か？』

「…人を魔王みたいに言うな。支配するのは神界で十分だ。」

神王であるクロトス。

この世界の支配もできなくはないかもしれないがめんどくさい。

『それでは各地の町を修行がてらに破壊して周っているのか？』

「…お前の中では俺はどんな奴なんだ？」

『破壊神。』

「折るぞ！」

某天使に言わせれば『あれだけ破壊しておいて何をいうの！』というかもしれない。

『山を我を使つてハニワの形に変えたり、魔法薬の実験中にイタズラして爆発を起こしてお城に穴を開けたり、魔界の無礼者の領主の領地をクレーターにしたり、この前はウリエル殿とケンカで…。』
「…ゴメンナサイ。」

具体例を言われて謝るしかないクロトスであつた。
剣に頭を下げるクロトス。
その姿は傍目にも情けない。

『まあ、良い。それでは何をしているのだ？』
「それは上で話そう。それについて手伝つてほしいから呼んだんだよ。」

そう言つて店に帰るために魔法陣に背を向ける。

「城の方はどんな感じだ？」

『……………主よ。』

「どうかしたのか？」

『それについては……………。』

剣のために表情はうかがい知れないが声の感じからすると言いにくいことを言おうとしている感じがする。

突如、クロトスの後ろから強い光が放たれる。

後ろを見ると魔法陣が先ほどと同じく光り輝いていた。

クロトスは何もしていない。

本人も何がなんだかわかっていない。

先ほどと同じ強烈な光が辺りを、クロトスを包み込む。

『あの方から聞いてくれ。』

………

………

…

光が収まるとそこには…

「…お久しぶりですね、神王様。」

長い黒髪の女性。

「な、何でお前がいるんだ!？」

クロトスの前の女性の背中には三対六枚の純白の翼。

「そんなことはいいじゃないですか。…それよりもです。」

元々鋭い目つきがキツとさらに鋭くなる。

「——ッ!」

いつもは透き通るほど白い肌は怒りで赤くなる。

「勝手に城を抜け出した…覚悟は出来ていますね!！」

怒れる天使。

4 大天使の一角、熾天使のウリエルの降臨である。

—しばらくお待ちください—

「いつもいつもっ！貴方のせいで私がどれだけ苦労しているか！！」

クドクドとウリエルの説教は永遠とも言える時間続いている。

これはクロトスにとってであり、実際は1時間程度である。

休憩もなしにひたすら聞かされているクロトスは心持ち小さくなつて聞いている。

『ウリエル殿。主も反省しているようだし、心配だったのはわかるがもう少し主の事情も…』

「グラムは黙ってなさい！」

『…了承した。』

太古の魔剣をも退けるウリエルの剣幕。

「…ふう、しかし、それもそうですね。とりあえずはこれぐらいにしますか。」

もはや、クロトスの魂は抜け落ちてかけているかのように真っ白になっっている。

口からもや（魂？）のようなものが出ているようにも見える。

「神王様！」

「はいっ！」

クロトスは思わずその場で起立する。

そんなクロトスにウリエルはかすかに微笑んだように見えた。

ウリエルはクロトスの胸に顔を埋める。

いきなりのことで対応できないクロトスがあたふたしているとウリエルの肩が震えているのに気づいた。

落ち着きを取り戻したクロトスはウリエルをやさしく抱きしめる。

「ほんっ…本当にい…心配した……んですよ…。」

「敬語やめろよ。」

やさしく、いつもどおりにたしなめる。

「他のっ…ものに示しが…ヒクッ…付きま…せ…。」

「ここには誰もいないぞ。」

ウリエルがぎゅっとクロトスの服を掴む。

「あんたは…いつもい…つも私を……グスッ…置いてっ…て…。」
「…ごめんな。」

号泣。

王と臣下ではない。

幼馴染の涙。

クロトスも本当は会いたかった。

言葉では恥ずかしい。

だから想いを乗せてウリエルを抱きしめる。

再開を祝して。

クロトスはウリエルが落ち着いてから上の喫茶店に連れて行った。

「落ち着いたか。」

「グスッ…うん…。」

クロトスはウリエルをカウンターに座らせてウリエルにコーヒーを出す。

グラムもカウンターに乗せている。

ウリエルは鼻を鳴らしながらコーヒーをすすする。

「なつかしい…。貴方がいれたコーヒーなんて久しぶりね。……本当においしい。」

ウリエルはその一滴まで大事そうにコーヒーを飲む。

「昔から泣き虫癖は直ないんだな。」

「いつ、いつの話をしているのよ！」

赤くなるがこのやりとり自体を実に嬉しそうに感じている。

グラムは二人の邪魔をしないように喋らない。

そのグラムにウルはカリカリと爪で引っかく。

尻尾を振っている所を見るとグラムが気に入ったようだ。

『我が名はグラム。以後お見知りおきを。汝の名は？』

「ニヤア〜♪（カリカリッ）」

『そうか。共に主をしたう者同士、仲良くしようではないか。』

「ニヤニヤ〜♪（カリカリカリッ）」

『それで…できればそれはやめていただきたいのだが。』

「ニヤ〜？」

『いや、引つかかれるぐらいでは傷つきはしないのだがムズムズするのだ。』

「ニヤ〜」

『おお！わかっていただけたか！？』

「ニヤ〜」（ペシペシッ）」

『…汝は我を侮辱しているのか？』

「ニヤ〜」（ペシペシペシッ）」

話を通じているのかいないのか、ウルはグラムにネコパンチを浴びせる。

その様子に気づいたウリエルは先ほどとは違う意味で赤くなる。

「カワイイッー」

ウリエルはウルを抱き上げる。

頬ずりしている姿は何処にでもいる女の子である。

「ねえ！この子の名前は？」

「ウルだよ。ウリエルの名前から貰ったんだ。」

「えっ！？」

ウリエルはウルをジロジロと眺める。

ウルも先ほどからジッとウリエルを見つめている。

「はじめまして、ウリエルって言います。よろしくね」

ウルはウリエルの自己紹介に答えるかのように鳴いた。
ウリエルはユルユルだった顔をさらに緩ませる。

『主。早く説明してくれないか？この世界の事。この世界での主の生活を。』

「私も聞きたい。」

クロトスは話した。

オーデインに貰った宝玉から始まったこの世界での出来事。

喫茶店を経営するのに色々と手伝ってくれた王女とメイド達の事。
その宣伝のために大会に出ている事。

『実に興味深い。』

「その子達に一度会ってみたいわね。」

一通り聞いた2人（1人と1刀？）はそのような感想を漏らす。

「朝には来ると思うぞ。喫茶店の手伝いをしてきているから。」

「いい子達なのね。」

「…ああ。」

やさしげな微笑をするクロトスに安堵するウリエル。

神界で突然いなくなったクロトスを1番心配したのはウリエルである。

いなくなるのはいつものことなのであるがどうしても心配してしまう。

クロトスがやるはずだった仕事を片付けていた時ときおりため息を漏らす事もあった。

この様子だと心配ないだろうと真実を知るグラムは思った。

『我を呼んだのはその大会のためか？』

「人間相手にお前を使うのは卑怯だろ？お前には喫茶店を手伝ってもらおうと思っただけ。」

『…最凶の魔剣と呼ばれた我が人間をもてなせというのか?』

確かにグラムを人間相手に使うことなど爪楊枝を持つ相手にライフルを構える事に等しい。

魔界では『死神の恩寵を受けし魔剣』『神殺しの魔剣』『死を告げる魂食の魔剣』などの異名を持つ魔剣。

その魔剣がウェイトレスをするなど名が穢れるというものだ。

「いいじゃない。これも経験よ。どうせ暇していたんでしょ?」

その魔剣も実際は1日中宝物庫にいることもある。

昔は常に血を浴びていた時期もあった。

その時の持ち主はクロトスではなかったが。

『ウリエル殿。我にもプライドというものが…。』

「頼むよ。グラムしかないんだ。」

『……主の頼みだ。了承した。』

「ありがとう。」

しぶしぶながらも了承する。

主の命令は絶対…というわけではないがクロトスという個人からの頼みとして了承した魔剣グラム。

主従という関係は2人には無いに等しい。

クロトスという友人の頼みを聞いた。

クロトスとグラムはそういう関係である。

「さて、私も安心したし城に戻るわね。」

そう言ってコーヒートを置くウリエルにクロトスの動きはピタッと止まる。

「…ああ、ウリエル。」

実に言いにくそうにウリエルを呼ぶクロトス。

「何？私は手伝えないわよ。城での仕事を放り出すわけにもいかないもの。」

「それなんだけどな…。」

頭をかきながらウリエルから視線を逸らす。

「……帰れないんだ。」

「……………はあっ！？」

思わず反応が遅れるウリエルにクロトスがトドメの一言。

「この宝玉って入る事は出来るんだが出るのは俺でも出来ないんだ。」

しばらく動きが止まっていたウリエルが正気にかえるとクロトスに掴みかかる。

「ど、どうするのよ！？あんたがいない性で城は仕事が山のように溜まってるのよ！それをほとんど不眠不休で私が片付けてたのよ！」
「いや、そういうふうになってると思ったからグラムだけを呼んだんだけどウリエルが勝手にこっちにくるから…。」

ブンブンとクロトスを揺さぶっていたウリエルの顔が下を向く。
クロトスからはウリエルの顔は見えないが肩がフルフルと震えていた。

「ウリエル？」

「どうするのよ~~~~!!!!」

夜間の王都に女の絶叫が響きわたった。

番外2 秘密の報告書（前書き）

今回は20話記念で王と王妃が主役。
最近になって気づいた。

「王様の名前決めてない!？」

…ごめんなさい。

今後に出番があったら名前をつけます。

…… つかないかも？

番外2 秘密の報告書

夜中のある王族の寝室。

そこには普段の煌びやかな格好とは違う男女。

ピンクのネグリジェを着ているこの王都の王妃であるエインは同じベットで寝ている夫であり、この国の王の隣で一冊の本のようなものを見ていた。

時折、笑みを漏らすエインの気配に隣でモソモソと王が起き出した。

「…起きていたのか。」

「ごめんなさい。起こしちゃったわね。」

目をショボショボとさせている王はエインに微笑む。

「かまわないさ。何を見ているんだ？」

エインが持っていたのは黒い革張りの本。

「リンとエルの報告書よ。ティニアの事やお城、町に関することで気づいた事をコレに書いて提出させているでしょう？」

「…ああ、そういえばそうだったな。」

寝ぼけているのか首をまわしながら答える王。

「どんな事が書いてあるんだ？」

「見る？」

「最近はその若者のところに入り浸っているだろう？クロトス…と
か言ったか？」

毎日のように男の所に入り浸る娘。

メイド2人が一緒ではあるが親としては心配である。

「年頃の娘の親としては気になる？」

「あいつの夫にはこの国の王になってもらうつもりだからな。変なやつだったら困るだろう。」

「フフッ…それもそうね。」

照れ隠しに顔を背ける夫に微笑むエイン。

「見てもいいか？」

「ええ。」

王がエインの持っている報告書を覗き込むが見た瞬間に言葉をなくす。

●月 日 記入 エル

今日は王女様はお勉強です。

そして、今日も逃げ出しました。

逃げ出した王女様とケーキを食べました。

楽しかったです♪

「……これじゃあ報告書じゃなくて日記だろうが。」

報告書の隅にはクレヨンでケーキと人間の形をした何かが描かれていた。

多分、リンとエルにティニアなのであろう。

一番大きな人間の絵、ティニアなのであろうが手が以上に伸びていてケーキを驚掴みにしている。

子どもらしい下手な絵であるが王は何処か温かみを感じた。

「あの子達はまだ14歳よ。子どもしくてかわいいじゃない♪」

クスクス笑うエイン。

それを見て王は頭を掻く。

「それもそうか。」

「それよりも…『今日も逃げ出した』ということはたびたび逃げ出しているのね。」

突如として母親の顔になるエイン。

「元気があつていいんじゃないか？」

「限度があるわよ。今度、教育係に問いたださないと。」

怒り顔のエインを見て先ほどまでの眠気が吹っ飛ぶ王。

「そ、それよりも次だ。」

*月▲日 記入 リン

本日の仕事はお客様の観光案内兼住居探し。

お客様は他国から来た、この国の恩人とのこと。
名は不明のためにこれより乙と呼称する。

姉はさっそく乙を兄と呼んでいた。

町を案内していると町の荒くれ者達と争っている王女を発見。

劣勢の王女様を乙は救助。

戦術は異国の剣術と考えられる。

また、杖無しでの呪文詠唱可能性有り。

至急、調査されたし。

王女と合流後にはぐれた姉とパン屋にて合流。

そこで乙の名を『クロトス』と呼称することが可決。

これより乙をクロにいと呼称する。

クロにいの住居探しを開始するものの条件該当物件は皆無。

その後はクロにいの希望により元は喫茶店だった場所に決定。

廃墟に近かったために4人での掃除と買出しを開始。

食器、家具などの住居に関する費用は国が支払うという話でしたの

で私が立て替えた料金は経理を通して請求しました。

「これを書いたのは本当にリンなのか？」

エルと違ってしっかりとした文字だがリンにしては文章が長い。

あまり多くを語らないリンの事をよく知っている王にとつては信じられない。

「そうよ。普段はシャイで無口だけど文章だとおしゃべりになるのね。」

「口調はどっちも子どもらしくないけどな。」

「責任感が強いだよ。妹のために大人に混じって仕事をしていたから自然と言葉使いも大人びてきたのよ。」

「あいつらがこの城に来てから何年だったかな？」

王はどこか遠い目をする。

「9年よ。あの子達が5歳の頃に協会から貴方が引き取ったんでしよう？」

「ティニアは城から出れなかったからな。友達になってくれればと思っただが。」

「今じゃあ姉妹同然だものね。」

「俺は養子にしてもよかったんだがな。」

「振られたものね。」

「しかたないさ。あの子達が選んだ道だ。それに親子じゃなくても支える事はできる。」

と言いつつも少々残念そうに言う王。

「それもそうよね。…それよりも。」

「ああ、わかっている。娘に手を出す愚か者にはそれ相応の罰を与えよう。」

2人はこの報告書を見て初めて王女が荒くれ者に襲われていた事を知った。

このための報告書でもある。

「次のも見ようか。」

今日はおにいちちゃんの喫茶店に遊びに行きました。

今日も王女様はお城を抜け出しました。

喫茶店にはネコさんがいました。

おにいちちゃんは宣伝のためにお城を爆発させる話をリンちゃんとしていました。

結局は大会に出ることになりました。

少し残念でした。

「「……………」」

2人はある1文に注目する。

『おにいちちゃんは宣伝のためにお城を爆発させる話をリンちゃんとしていました。』

「さらつとすごいことが書いてあるな。」

「まさか…しないわよね?」

冷や汗を流すエイン。

「わからんぞ、リンだからな。」

「…それもそうね。」

腹黒さは国内1と城内で噂されるリン。

ちなみにエインも王もリンのイタズラの被害者である。

さらに言えば先ほどのクロトスの喫茶店に関する改装費用はクロトスが力を使ったのでお金はほとんどかかっていない。

これを世間では『水増し請求』という（このお金は3人の喫茶店で

の飲食代となっているので王女公認）。

「警備の強化をしておくか？」

「…一応しておきましょうか。」

月▼日 記入 リン

パシフィス国主催第142回 セヴィオール武闘会開催当日。
王女様のご命令で参加者控え室に行くとクロにはネコさんの格好
をしていた。

控え室ではクロには周りの選手を挑発していた。

しかし、試合開始には行方不明になっていた。

クロにはあの人達は逃げ出したというので大会本部に通達。

試合はオルガ選手との一騎打ちだった。

勝敗はクロにいが勝利だが試合終了後にクロにいは落ち込んでいた。

宣伝やらサプライズがどうのと呟いていた。

王女様と姉と一緒に喫茶店で祝勝会をすることになった。

途中の道でボロボロの男達が裏道で倒れていたのを見た。

クロにいの控え室にいた人達に見えたが気のせいであろう。

町の美観に関わるので後でお城の兵士に掃除してもらった。

「…見なかった事にしないか？」

「…その方がいいかもね。」

□月 日 記入 エル

今日はおにいちやんの喫茶店を手伝いました。
女性のお客さんがいっぱい来ました。

王女様が手伝うと言いましたが邪魔なのでリンちゃんに説得してもらいました。

リンちゃんが王女様に何か言ったら王女様の顔がみるみると青くなりました。

何を言ったか聞いてもリンちゃんはクスクス笑うだけで教えてくれませんでした。

時々リンちゃんはイジワルさんです。

午後にオルガのおじちゃんが来ました。

店に入ろうとしたら大きすぎて店に入れませんでした。

かわいそうなので今度ケーキを持ってってあげようと思いました。

「あのオルガが喫茶店？」

「ケーキを食べるの？」

2人はオルガが喫茶店でケーキを食べる姿を想像してみた。

……

……

…

「っプツッ！」

見た目が熊のようなオルガがケーキを食べて満面の笑みを浮かべる姿を想像して思わず嘖き出す2人。

「そ、そう言えば猫愛好会の【マタビ飯の会】会員だったな。」
「結構かわいいところがあるのね。…それはそうと。」

突然ピタツと笑いをやめるエイン。
むしろどこか怒っているように見える。

「その【マタビ飯の会】って国王公認だったわね？」

一気に青ざめる王。

「補助金も出してるんだっけ？」

「そ、その話はもう終わっただろう？」

「それもそうなんだけどね。…思い出したらムカついてきたわ。」

「だから…そのう…な。」

しどろもどろの王に詰め寄るエイン。

「会員のネコミミビキニのコスプレ写真と引き換えて話だったわね？」

「あ、アハハツ…。」

笑ってごまかしながら後ずさる。

「そんなに私より若い子がいいのかしら？」

「それは無い。」

「…エツ!？」

キッパリとした否定に思わずどもる。

「俺はお前の方がいい。」

「…え、えつと。」

徐々に顔を赤くしながら狼狽するエイン。

「エイン…。」

「貴方…。」

………

………

…

―― 後日報告 ――

- 1 主女の勉強時間が2時間延長
- 2 城内の警備強化
- 3 国内で行方不明者3人
- 4 オルガにエルよりケーキの贈呈。
- 5 数カ月後に王妃の妊娠発覚

神とウェイトレス（前書き）

卒業準備で忙しくなりました。

更新待ってくれていた人はごめんなさい。

…そんな人はいるのかな？

神とウェイトレス

「ひゅめさまー!!」

城に響き渡る年老いた声。

年老いた執事が追いかけているのはこの国の王女。

「ジュニアール！貴方は年寄りの癖に元気良すぎよ！」

「このジュニアール！まだまだ若いもんには負けませんよ！」

実に3時間弱。

この2人は城内をとてつもないスピードで走り回っていた。

すでに一緒に執事と共に王女を追いかけていた兵士達は力尽きていた。

「ティニア様！いい加減にお部屋にお戻りくださいませ！お勉強の時間はとくに過ぎておりますぞ！」

「私は忙しいのよ！」

城内の通路の曲がり角をドリフトの如く煙をあげながら突っ走る2人。

2人は通った道はもはやボロボロである。

「いつもいつもお城を抜け出して、嘆かわしい！」

「私の勝手でしょうよ！」

ティニアは前方に飾られた花瓶を後ろへ投げる。

「甘い！」

ジュニアルは左手の袖口から出した短刀を右手で掴み花瓶を音も無く真つ二つにする。

さらに左手の袖口をティニアに向かって振ると手裏剣が幾重にも発射される。

「無駄よ!」

ティニアは壁を蹴って上に駆け上り、天窓を突き破る。

手裏剣はそのまま突き当たりの壁に突き刺さる。

青筋を浮かべたティニアは服に付いた細かいガラスなどを払い、天窓からジュニアルを怒りの混じった視線で見下ろす。

「私に当たったらどうするつもりよ!？」

「そのような柔な鍛え方をした覚えはないですぞ。痺れ薬を塗ったので当たり所によっては死にはしませんぞ。」

「殺したら意味ないでしょう!？」

「……みねうちだから大丈夫じゃよ。」

「その手裏剣は刃を落としてないじゃない!」

当たったら確実に……であろう。

痺れ薬も痛みもなくあの世へ行ける手助けにしかない。

「…ジュニアル。いい加減にあきらめたら?護身のための戦闘訓練では負けっぱなしだけど体力と足の速さは私のほうが上よ。」

「確かに現役の傭兵だった時代よりは身体能力は落ちましたが…」

ジュニアルは袖から出した鉤爪付きのロープをティニアのいる天窓に引っ掛ける。

「経験と知識なら負けませんぞ！」

「どれだけ隠し持つてるのよ!？」

ロープをものすごい速さで登る姿はとても老人とは思えない。
ジュニアルは元傭兵で先代の国王の時代から仕えている。
幼少の頃よりティニアに護身術を教えてきた先生でもある。

「今投降するなら勉強時間を8時間増やすだけにしておきますぞ。」

「多すぎよ!そんなに勉強したら死んじゃうわよ!？」

「昔から相手が死ぬ一步手前を見極めるのは得意ですから安心して
ください。」

「できるわけないでしょ!!！」

屋根に登って来たジュニアルにツツコミを入れながら走って逃げる。

ジュニアルは袖口から飛針を無数に飛ばしてその姿を追う。

無数に放たれる飛針はティニアへと向かうがその姿を捉えることはなく、その全てが屋根に突き刺さり、あるいは屋根の下へと落ちていく。

身をひねり、動きに緩急をつけて避けるがついにティニアは屋根の端に追い詰められる。

飛び移れる場所も無く、飛び降りるには高すぎる。

前方には袖をティニアに向ける執事。

「もう逃げられませんぞ。」

「そのセリフって悪役みたいよ。」

「確かに個人的に善行より悪行の方が好きですが？」

ニヤリと笑う執事は実に不気味に見えたティニア。

「そもそも普通の執事は王女を武器で攻撃しないわよ。」

「私だつて本当はこんな事をしたくはないのですが王女様のための思つて心を鬼にして泣く泣く…。」

「…その割には日々武器が凶悪になっているわよ?」

「最近では逃げる王女様を仕留めることが数少ない老人の趣味ですからね。」

「悪趣味にも程があるわよ!? 付き合つてられないわ!」

そう言つてティニアは屋根から飛び降りた。

ジュニアルがあわてて駆け寄り、下を覗き込むとティニアは空中を飛んでいた。

良く見ると城の外壁から城外にかけて細いワイヤーが張られていた。それも目を凝らさなければ見えないほどの極細のワイヤーの上をティニアは滑っている。

ティニアの靴は特注でワイヤーどころかナイフでも切れる事は無い。それもジュニアルがティニアに足技主体の格闘術を教えたためにナイフ持ちの相手とも戦えるようにとティニア自身が鍛冶屋に作らせたものである。

ティニアはそのおかげで難なく城外へと消えていった。

「今日も逃げられたわい…。弟子の成長を喜ぶべきか嘆くべきか…。」

ため息を吐きながら天窓へと戻る。

フツと思ひ直してもう一度ワイヤーを見る。

「王女様にはワイヤーを用意する時間は無いはずじゃが?…協力者は…帰つたらお置きじゃな。」

ジュニアルの脳裏には王女と小さなメイド2人の処罰を考えなが

ら天窓をを潜り、廊下に降り立ったが追跡でボロボロになった廊下を見た。

「その前に…わしがメイド長のお仕置きから生きて帰る事が先じゃな。」

ため息を吐くジュニアルの前方からはドシドシと恰幅の良いメイド長が般若の表情でこちらに向かっていた。

………

………

…

「ごめんなさい、待たせたわね。」

「王女様」

「…前回より脱出タイムが長いですね。」

クロトスの喫茶店の前ではメイド2人が待っていた。

元気いっぱいの黄色いワンピースを着たエルと毎回のティニアが城から脱出するタイムを計り、メモしている薄い水色のエルと同じワンピースを着るリン。

噂ではティニアの脱出タイムを予想する賭けが城内の秘密のブームらしい。

ちなみに王様も参加しているとか。

「本当にありがとうね、2人とも。おかげで今回もジュニアルから逃げられたわ。」

「お礼はおにいちやんが作ったケーキの奢りですからね」

「わかってるわよ。…でも、リンはどうして協力してくれたの？いつもだったら私が勉強さぼるのを注意するのに。」

「…あの爺さんが細かい事をネチネチと……コホンッ……察してください。」

「クスクスッ…わかったわ。」

どうやらジュニアールに怒られた仕返しのようなのだ。

そういえば朝に他のメイドからリンが花瓶の水を取り替え忘れたことでジュニアールに怒られていたと聞いたのをティニアは思い出した。

「そういえばどうだった、アルバイトの件？」

リンはティニアの質問に浮かない表情で首を横に振る。

「そう…。」

ティニアは城のメイド等にクロトスの喫茶店を手伝ってはもらえないかと訪ねたが大会期間中は皆忙しいらしく断られた。

今日だって3人とも色々と仕事があったためにここに来たのは夕方になってしまった。

「2人とも。考えても仕方ないですし、入りましょう。」

エルは2人を急かすように今にも涎を垂らしそうな表情で2人の袖を引っ張る。

リンは勢い良く扉を開き、ドアに付けられたベルが響く。

「いらつしゃいませ〜！」

「「「……へっ!?!」」」

そこにはウェイトレスの格好をしたいるはずの無いウェイトレスが

いた。

驚きもあつたが3人はその女性に見とれていた。

長いサラサラな黒髪に吸い込まれそうな漆黒の瞳。

その鋭い目は見ているだけで吸い込まれそうである。

赤を基調としたウェイトレスの制服は女性のスタイルの良さを惜しげもなく際立たせる。

「3名様ですか？」

「…あつ、はい。」

「かしこまりました。どうぞ、こちらの席へ。」

3人は案内されるがままに席へと案内される。

3人は顔を合わせるが誰もその女性を知らないようだ。

「失礼します。」

そう言つてテーブルに冷えたお冷を置いたのは先ほどとは違うウェイトレス。

肩までかかった白銀の髪の無表情の少女だ。

リンとエルと同じくらいの年に見えるが胸が比べ物にならなかった。双子であるがリンよりエルのほうが若干大きいのだがそれでも小ぶりな方である。

この年ではそれぐらいが普通だがこの少女はレベルの桁が違った。ティニアが自分と比べたほどである。

本人の名誉のためにどちらが大きいかは秘密にしておこう。

「ご注文がお決まりになりましたら………ウリエル殿、注文が決まったらどうするのであつたかな？」

「私達を呼んでもらうのよ。『ご注文がお決まりになりましたらお呼び下さい』で良いの。」

「了承した。そういうことだ。決まったら呼べ。」

「グラム、ちゃんとやりなさい！」

「我はこの方が喋りやすいのだ。」

「これも貴方の勉強よ。…ごめんなさいね。この子は世間知らずなところがあるから。」

そう言つて頭を下げる長身のウェイトレス。

「いつ、いえ。構いません！…あ、あのう？」

「何かしら？」

「おにいちゃんはどうしたんですか？」

慌てて質問しようとしたティニアだが先にエルに質問される。いつもならカウンターにいるクロトスが今はいないようだ。

「おにいちゃんって貴方の兄弟？」

「…クロにいはこの店のマスター。」

首を傾げる黒髪のウェイトレス。

「あの、この店の主人のクロトスさんはいらっしゃいますか？」

「あら。この店にクロトスさんという方はいませんよ？」

一瞬、その言葉が理解できなかった。

「ウリエル殿。主のことではないのか？」

「あゝ、ねえ？貴方達の言っているクロトスさんって蒼色の髪で赤いバンダナを頭に巻いている人？」

「あ、はい。そうです。最近はバンダナを巻いてないですけど。」

最初にクロトスに会った時は頭にバンダナを巻いていた事を思い出すティニア。

最近巻いている所を見ていないが。

「もしかして…貴方がティニアさん？」

「えっ！そうですけど…。」

「じゃあ、貴方達がリンちゃんとエルちゃん？」

そう言つて2人を見る。

「そつでゝす」

エルは元気良く返事をし、リンは頷く。

「あら、話は彼から聞いています。私はウリエルと言います。彼とは昔からの友人です。」

そう言つて微笑みながら会釈する。

「あ、はい。私はティニア＝セヴィオールと言います。この国の王女をしております。」

「メイドのエルです。リンちゃんとは双子なのです。」

「…リンです。」

そう言つて慌てながらも挨拶に慣れているティニアは落ち着きを取り戻しながら挨拶する。

エルは無邪気に、リンは警戒しながらも挨拶を交わす。

「ほら。貴方も挨拶しなさい。」

そうやって先ほどの少女を呼ぶ。
少女はトコトコと歩いてくる。

「我はグラムと言う。以後、お見知りおきを。」

そうやって恭しくスカートの端を持って挨拶する。
その姿にため息を吐くウリエル。

「貴方は喋りが固すぎるわよ。その姿のときはもう少し女の子っぽく喋りなさい。」

「長年この口調なのだから突然変えろと言われても難儀だぞ。」

無表情の顔をウリエルに向けて言い返す。

「似合わないし、そんなの可愛くないわよ。」

「女が可愛くするのは男の種子を得るためだろう？我には必要ない。」

「貴方のその変な知識は何処から得てるのよ!？」

言い争うを2人に着いていけない3人はただその様子を眺めている。
その様子に気が付いたウリエルは咳をして誤魔化すウリエル。

「彼ならコーヒー豆が切れたからって仕入れに行ったわよ。」

「あ、そうなんですか。」

「ウリエル殿。この娘達が主の女達か？」

その言葉にウリエル、ティニアは噴き出し、リンは顔を赤くし、エ
ルは理解していないために首を傾げる。

「なっ、ななななななあ!？」

「なんてこと言うのよ!？」

ティニアは言葉が口から出ず、ウリエルは顔を赤くしながら叱る。

「ウリエル殿が正室としたらこれで側室は5人だな。跡継ぎには心配ないな。」

「「「「「なあっ!？」」「」「」」

グラムを除く5人が驚きの声と多種多様な表情を浮かべる。

顔が赤くなる者が2人、想像したのか顔を俯かせる者、頭を掻いて照れる者。

本人の名誉のために誰の事かは明かさないようにしよう。

「えーと、正室とか側室って…おにいちゃんって偉い人なの？」

「「そこなの!？」」

エルのずれた質問にティニアとウリエルがすかさずつつこみを入れる。

ちなみにリンは想像（妄想）で真っ赤になって頭から煙が出ている。

「知らないのか？主が何者なのかを？」

うなずく2人。

「おにいちゃんは昔の事は何も言わないから…。」

寂しそうに言うエル。

ティニアも悲しそうな表情を浮かべる。

ウリエルは優しくそうな表情でフワッとエルを抱きしめる。

驚くエルの顔の目の前でウリエルは幾分悲しみを交えた微笑みを見

せる。

「私達もあの人が何者かは言う事はできないけど…貴方達にないつか話してくれるはずよ。だから、あの人が話す決心が付くまで待つてあげて。あの人は貴方達を大切に思ってるわ。」

「本当？」

「ええ。昨日、貴方達の話をおの人が話してくれたの。その時の表情が楽しそうで…優しくて…ちょっとだけ妬いちゃった。」

ペロツと舌を出すウリエルに明るい表情を取り戻すエル。

「だから、信じて待つてあげて。」

キュツと抱きしめる力を強くするウリエルをエルは抱きしめる。

「最初から信じてるよ。だって、私達のおにいちゃんだもん。」
「ありがとう。」

抱きしめあう2人を見守るティニア。

その時、店内に來客を告げるベルが鳴る。

「ただい…まあ…あつ？」

帰ってきたクロトスが見たのは抱きしめあうエルとウリエル。
ティニアは呆然とし、リンは未だに妄想中で顔を赤くしている。
この状況を見てクロトスは……

「……失礼しました。」

扉を閉めようとしたらいつの間にかウリエルが扉を押さえていた。

「…何しているの?」

ウリエルが睨みつけるとクロトスはイタズラを思いついたような笑顔で言った。

「ウリエルがロリコンだったなんて知らなかったよ。俺はそういうのに偏見はないから安心しろ。」

「っ、そんな訳ないでしょう!」

「他にどう想像しろと?」

抱きしめあう美女と美少女。

実はティニアもこっそりと心の中で同意していた。

「そもそも、あんたが悪いんでしょう!」

「なぜに!?!」

「ちよつと、こっちに来なさい!」

手を掴まれて店の奥に引きずられるクロトス。

店の奥に連れて行かれたクロトスはウリエルと2人でひそひそと小声で話す。

「…どこまで話したの?」

「何を?」

「貴方の正体よ。」

言われて若干躊躇するクロトス。

「…何も話していない。偽名を名乗っている。」

「なんで?あの子達なら大丈夫じゃないの?」

「……………」

黙り込むクロトスにウリエルが1つの可能性を聞く。

「怖いのか？拒絶されるのが。」

ビクツと震える。

「それとも、神王として見られるのが嫌？」

「…どっちもだ。」

「あの子達なら大丈夫そうじゃないの？」

「…こつちの世界には神話があるんだ。」

「神話ぐらいどの世界にもあるでしょう？」

「この世界では神王が出てくる。しかも、世界の救世主として称えられている。」

「それは……………」

確かにそれでは言いにくいかもしれない。

彼女らにとっては自分は神様と言ってるに等しい。

普通は信じないし、人によってはそれだけではすまない。

「だから、俺はこの世界では『クロトス』として生きていこうと思っただんだ。」

「それでも、私はあの子達なら……………」

「…わかってるよ。」

クロトスはウリエルに背を向けて店に戻ろうとする。

「決心がついたら…………俺が話すよ。きつと、何時の日か……………」

「あまり待たせちゃ駄目よ。待たせすぎると余計に悲しませちゃう

から。」

クロトスは返事をせずに店へと戻っていった。

「本当に……不器用なんだから。」

ため息は静寂に消えていった。

神とウェイトレス（後書き）

グラムの事は伏線なので間違いではありません。
今後の話で説明します。

神と乱闘パーティー（前書き）

いつのまにかアクセス数が3万を超えていました。
この場を持つてお礼を申し上げます。
そして更新の遅さに苛立っている方々。
誠に申し訳ございません orz。

神と乱闘パーティー

日も暮れた城の会議室には十数人の者達が集まっていた。

部屋に置かれた輪状のテーブルには大会運営委員代表数名、城の大臣等が渋い顔で王と王妃の座る席を見る。

同じテーブルに座る王と王妃は2人して分厚い書類の束をパラパラとめくって読む。

この書類の束は国民及び、他国の大会観戦者の要望感想書である。国内の至る所に記入場所が設けられており、これによって大会の課題点や感想を参考にして大会に反映することができるのだ。

普段だったら『。』がゴミだらけで汚い』、『あの選手がかっこよかった』などが中心なのだが今回はほとんどが1つの話題に集中していた。

会議室の一端の壁の中央には『クロトス選手の着ぐるみは許可か否か』と書かれた紙が大きく貼られていた。

「5：5ではあるけど若干は反対派が多いのね。」

「おもしろくて良いと思うんだがなあ。」

読み終わった王と王妃はそれぞれの感想を漏らす。

「もう少し詳しく分析しますと賛成派は女性、子どもが中心。反対派は老人や男ですね。」

「特に老人は貴族が多いですから無視はできない状況です。」

大会運営委員会側から若い男性2人が報告する。

この国には貴族がある程度の政治権力を握っている。

この国の貴族はそれほど強い権力は持っていないが他国では貴族が独占的に政治を行っている国もある。

それでも無視や蔑ろにすると色々と問題が起きてくる。

「どうせ時代の移り変わりに着いていけない頭の固い連中だろう。未だに己の権力が通用すると疑わない妄信家の貴族の老人だな。」

「そういうことは影で言いなさい。」

王の言葉を王妃が注意するが周りはそういう事ではないと心の中で思う。

「エインは反対か？俺は大会も盛り上がるし、それに俺はあいつは優勝候補だと思っっているんだが。」

「私も反対ではないんだけどねえ。けど、反対派を無視するわけにもいかないでしょう？」

「老人以外は男共の嫉妬だろう。」

「だからと言ってもねえ…。」

徐々にヒートアップする2人の話し合いに周りは黙って聞いているだけだった。

以前に2人の話し合い中に声をかけた者は田舎へと帰っていった。その時に同席していた者達はその時の様子を他の者に語ることはなかった。

唯一語った田舎へと帰った者は友人に田舎へ帰る理由を聞かれた時に疲れた笑顔で語った。

『お前も同じ目に遭えばわかるよ。…鬼ってあの方達のような人のことを言うんだろ？』

それ以来は2人の話し合い中に声をかけるとこはタブーとなった。ある人を除いて…。

「お父様、お母様！」

会議室のドアを開けて入ってきたのはこの国の王女であるティニア
「セヴィオールであった。

その声を聞いた2人は話し合いをやめて、満面の笑顔でティニアを
迎える。

「ティニア！どうしたんだ？お前が会議室に来るなんて珍しいな。」

ティニアは2人のところに近づくと2人に耳を貸すようにジェスチ
ャーをする。

王と王妃はそれにしたがってティニアとともに会議室の端にこそこ
そと移動する。

周りの者達はなるべく目を逸らす但耳はそちらへと向けている。

それに気づいたティニアはそちらの方に振り返る。

ティニアの顔を見た者達は一斉に顔を青ざめて、ティニアのいる反
対側の部屋の角に逃げる。

今ここに新たなタブーが誕生した。

後の語ったこの場にいた者の1人は「さすが…あの2人の子どもで
すよ。…俺も田舎に帰ろっかなあ。」と語った。

人払いを終えたティニアはこっそりと2人に言う。

「クロトスからの伝言『女性の固定客もできたからネコの着ぐるみ
は脱いでもいいけど出来れば何か面白いイベントでも考えてくれ。
俺だけバトルロワイヤルをしてないから面白くない。』だって。」

さっきは臣下達がいだったので敬語だったが普段は敬語抜きで話してい
る。

この親子は基本的に堅苦しいのは嫌いなのである。

今は小声なので普段通りの言葉で話したティニアの言葉で両親はク

ロトスの試合を思い出していた。

「そういえば、あの試合だけはオルガとあの青年だけの1対1だったな。」

「オルガに恐れをなして逃げ出したって聞いてるけど。結構かわいい人なの…。」

「「ブハッ!」!」

王妃が最後に呟いた言葉を聞いて王とティニアは同時に噴き出した。もつとも噴き出した理由は違うが…。

「ママ?あの人の何処がかわいいの!?!」

「そんなこと…ないぞ。ククッ…あいつは結構かわいいところが…あははっ!」

絶句しながらも何とか聞き返すティニアに王は反論するが前にリンとエルの報告書の内容を思い出して笑ってしまう。

王妃も思い出してしまったのか一緒になって笑っている。

「ママ、パパ!?!」

「す、すまん。こっちだけで笑ってしまっただけ。」

「でも、…クスッ。」

王妃は未だに顔を真っ赤にしながら笑っている。話せる程度には落ち着いていた王は頬をかいている。

「それで…なんの話だったかな?」

「クロトスの着ぐるみでしょう!」

「ああ、そうだったなあ。さて…どうしたものか。」

王はしばらく考えていたがこの着ぐるみの件以外のある問題を思い出した。

「おい。大会運営委員会！」

「は、はいっ！」

部屋の隅っこで怯えていた連中の中から先ほどの若者の男性の片割れが反射的に返事をする。

もう片方の運営委員の男性は返事をしなかったことを心の中で安堵する。

今のあの3人に関わり合いたいと思う者はこの隅っこで怯えている連中の中にはいない。

反射的に返事をしてしまった男性は後悔で泣きたいのを堪える。

「この前の報告で大会出場選手の辞退が相次いでいるとあったな。」

「はい。主に他国の選手なのですが想像以上の大会のレベルの高さに加えて、記念出場や次の対戦相手に勝てないと思うと怪我をする前に辞退するといった者が多い事が理由だと考えます。」

「本当に最近では軟弱な者ばかりだな。しかし、……決めた！」

何か閃いたようだが会議室にいるほとんどの者は不安になった。

こう見えても王は国内髄一の切れ者と言われ、たびたびその頭脳で国の危機を救っていたが今回のような娯楽やそれほど重要なものではないものに対しての閃きはろくでもないものがほとんどである。

真面目な時は誰よりも頼れる王だが普段は親馬鹿の馬鹿王である。それを知っているからこそ不安を感じれずにはいらなかった。

「何を……決めたの？」

ティニアが恐る恐る聞くと王は満面の笑顔だが子どものような笑み

で言った。

「望み通りの『イベント』だよ。」

「確かにイベントを考えると……だがな、ここまで大事にしなくても良かったんだぞ。」

クロトスがいるのはとあるホテルのパーティ会場である。豪華なシャンデリアはもちろんの事ながらテーブルの上には贅沢な食事が並べられている。

この部屋には大会運営委員会の上層部や大会を勝ち抜いた選手らしき者達が集まっていた。

その人たちも今は礼服を着ており、この場を満喫している。

クロトスが部屋の奥の方を見ると上の方に『大会初戦突破記念祝杯&緊急発表パーティー!』と書かれた垂れ幕がある。

「たかが初戦を突破したぐらいで大げさなんだよ……。」

「ところがそうもいかなかったんだよ。おにいちゃん。」

クロトスが振り向くといつもとは異なる服を着たエルがカクテルの乗ったトレイを持って立っていた。

いつもはメイド服が基本だが今回は男物のバーテンダーの格好をしていた。

しかも、クロトスにはその格好に見覚えがあった。

「その格好は？」

「エヘヘおにいちちゃんとお揃いのを作ってもらったの！…似合う？」

その場でくるっと周ったエルは上目づかいでクロトスに尋ねる。

子どもっぽいエルがこの格好だと美麗な青少年のような印象を持ってしまう。

それがどこか色っぽく見え、クロトスは見ていてなぜか顔が赤くなる。

「ああ、とても似合うよ。大人っぽく見えて綺麗だよ。」

「…………エヘヘッ」

クロトスが素直に感想を言つとエルは顔を真っ赤にするもうれしそうに笑う。

「そういえば、さっきのはどういう事なんだ？」

「えっ……ああ、あれね。大会第一試合でおにいちちゃんが舞台を壊したから修復で時間がかかって予定の半分以下の試合しか消化できなかったでしょう？」

「ほとんどがオルガがやったことだぞ。」

実はオルガ対クロトスの試合。

あまりにもでたらめな試合内容に舞台はボロボロ。

観客席にも被害が出る始末。

舞台の修復に観客席の保護のために急遽に結界を張るなどのことがあったためにその日の予定の試合を半分も消化できなかったのである。

「それで1回戦後半の試合は後日という事になったんだけど……大半が棄権しちゃったの。」

「はあ!？」

「しーっ!…あまり大きな声を出さないで。」

エルは口到人差し指を立てて注意する。

クロトスはそれを見て、しゃがんで顔の高さをエルと同じ高さに合わせてとこそそと話す。

「それで大会は大丈夫なのか？」

「その…全体の6割が辞退しちゃって予定ではトーナメントだったんだけど今回のことで穴だらけなの。選手によっては2試合連続不戦勝の人もいるの。」

「なんでそんなことになったんだ？」

「辞退したのは大半が他国からの出場選手と記念で軽い気持ちで受けた選手なの。予想以上の試合のレベルの高さに加えて、次の相手の選手に勝てないと思ったら逃げ出す選手が多いみたいなの。…本当は秘密なんだけどおにいちちゃんの2回戦の対戦予定だった選手も逃げ出したって。」

「…情けない。」

クロトスは頭を押さえて嘆くがクロトスが試合中に見せたオルガの巨体を軽々と場外に投げ捨てた事も辞退者続出の今回の件に貢献している事を知らない。

「そういうことでその他の問題も一挙に解決するために今回の緊急発表でその対応策を王様が言っただって。あつ、これいる？」

「貰っよ。」

エルはトレイから蒼いカクテルのグラスをクロトスに渡す。

飲んでみると果汁の酸味の香りの効いたもので結構おいしかった。

「結構いけるな。」

「リンちゃんオリジナル特製カクテル『アイリス』だよ。」

もう一口飲もうとする所だったクロトスの動きがピタツと止まる。

「リンっていくつだったっけ？」

「私と同じ15だよ？双子だもん。」

小首をかしげるエルと硬直するクロトス。

15歳でカクテルを作るリン。

『未成年なのにお酒？』とか『オリジナルなら味見はしているはずだよな？』とか色々と頭の中に浮かぶが最終的なクロトスの結論。

『…リンなら不思議じゃないか。』

喫茶店の経営でも調理の手伝いをするリン。

その腕前はクロトスほどではないがかなりのものだった。

この王都に来た初めの時にティニアが襲われていた時もティニアが危なくなった瞬間に素人とは思えない殺気を放っていた。

クロトスが出て行かなければリンがああ荒くれ者達を排除していたとクロトスは知っていた。

『まあ、リンはリンだし、俺は関係ない。』

だからといって避けるとか変な目で見るということはない。

普段はやさしいし、気が利く。

性格の腹黒さを除けば1級のメイドであり、良き友人である。

目の前のエルにとっても仲の良い姉妹である。

「おにいちゃん、どうかしたの？」

「なんでもないよ。アイリスってどういう意味なのかって考えてたんだ。」

心配そうに見るエルを誤魔化す。

エルは空になったトレイで口元を隠した裏で意味ありげににやけながらクロトスの疑問に答える。

「アイリスは花の名前だよ。花言葉は『貴方を愛す』だよ。」

「ふん、変わった名前だな。おいしいからいいけど。」

「……おにいちちゃんって人から鈍いつて言われない？」

「……よくわかったな。なんでかは分からないんだがな。」

ため息を吐いてエルはチラツとカクテルと同じ色をしたクロトスの蒼い髪を見る。

クロトスは意味が分からなかったがとりあえずカクテルに口をつける。

飲み終わったところで会場の照明が一気に落ちた。

ざわめきの中で会場の奥の一点だけがライトで照らされる。

そこにはいつのまにかステージがあり、そこには2人の人影があった。

「派手に飲んでやがるか！？最後の晩餐になる奴もいるんだから好きだけ喰らっていいけ！」

そこには大会とは逆に黒いタキシードを着る鬼人伯爵と……

「……そしてブクブクに太って死ぬがいいわ。」

背中が大きく開いたセクシーなドレスを着た不機嫌なレイがいた。

「なんで初っ端から不機嫌なんだ？」

「お仕事だからお酒は飲めないし、この会場って禁煙なの。レイさんってお酒とタバコがあれば生きていけるって公言するぐらい好きだから。」

クロトスとリンはヒソヒソと小声で話す。

ここからだ結構距離があるがそれでもレイが不機嫌なのははっきりと分かる。

「静かにしなさい！あんたのせいで私の仕事が増えたんだから！エルも一緒になつて喋るんじゃない！」

「はいっ！！！」

レイの突然の一喝に勢い良く返事をする2人。

隣にいた伯爵はレイの大声をまともに受けて耳鳴りを起こした。

「まったく。伯爵もさっさと始めなさい！」

「わかったよ！…こほんっ、今回集まってもらったのは2回戦から若干のルールの変更があるからだ。」

いきなりのことで動揺の声がいたるところであがる。

「黙れ！俺だって昨日聞いたばかりなんだよ！それに他国の奴は知らないかもしれないがこの大会ではそう珍しくない。むしろ、本番前に知らされたお前らはラッキーなんだよ。」

「その度に私達の仕事が増えるのよ。…まあ、援助金を貰っている立場だから反論はしないんだけど。」

レイの言葉で全員に元凶であろう王様の顔が頭の中に思い浮かぶ。

「というわけでトーナメント表は組みなおし！不戦勝が決まっていた選手も無効！今後の試合も特別ルールを追加！文句は受けつけねえ！」

伯爵の言葉が終わると同時に怒号が響き渡る。

クロトスとエルは同時に耳を塞ぐ。

「こんなんじゃあ暴動が起きるんじゃないのか！？」
「対応策は用意してるんだって！」

クロトスとエルの距離でも大きな声を出さなければ聞こえないほど騒々しい。

ステージには数人の選手が抗議のために近寄る。

「ふざけんじゃねえ！俺は3試合先まで不戦勝が決まっていたんだぞー！」

「そう。残念だけどそれも無効よ。」

会場に似使わない分厚い鎧を着た大男は怒りで体を震わせて、手に握っていたトゲトゲの大きな鉄球が付いたモーニングスターの柄を握り締める。

「こんなの……こんなの認められるかあっ……！！！」

男はモーニングスターを振りかざす。

クロトスは止めようと走るために前かがみになる。

「武装メイド隊、スクランブル！」

レイが腕を上上げて指を鳴らす。

途端に男が持っていたモーニングスターは複数の亀裂が走り、ただの鉄片となって床に転がり落ちる。

男が突然のことに呆然としていて、いつのまにか四方八方から鋭い剣の切っ先が向けられていた。

クロトスは見ていた。

会場の隅から1人のメイドが男の武器をレイピアで一瞬にして切り刻んでレイの前に立ちふさがったのを。

会場内で彼女の動きを追えた者はどれだけいたのであろうか。

その動きに続くように至る所からレイピアを腰に携えたメイド達が男を包囲した。

「ずいぶんとおもしろい奴らがいるんだな。」

「お城の武装メイド部隊っていう特殊警備部隊なの。レイさんの前にいるのが隊長のメイアさんで私の先輩なの。」

ショートカットの鋭い目をしたメイドはレイピアを仕舞うとレイを睨みつけた。

「……チツ。」

「いきなり舌打ちはないんじゃないかしら？」

「仕事じゃなければめえなんて絶対に助けねえのによ。……チツ。」

「あら、奇遇ね。私も王妃様に止められなければ貴方なんて呼ばずに私の発明品であの男をミンチにするのに。」

「だから私達が呼ばれたんだろうが。研究室に引きこもって怪しげな研究が趣味の男1人でできない奴の発明なんて信用できるわけねえだろうが。……フツ。」

メイアは口元を緩ませる。

その様子レイは青筋を浮かべて同じく口元を緩ませる。

「男は関係ないでしょう。あんただって筋肉ばっかで女としての魅力がないから男ができないんじゃない？」

2人ともニコニコと笑いながら目線で火花を散らす。

「……あの2人って仲良いんだな。」

「何処を見ればそう思えるの!？」

ポツリと言ったクロトスの言葉にエルが信じられないというように聞く。

「本当に嫌いあっていたら皮肉も言わないで立ち去っているだろう？ケンカするほど仲が良いって言うし。」

「そんなもののなの？」

「だとしてもケンカするなら他のところでやれってんだよ。場所を考えろってんだ。」

2人の後ろにはいつの間にか伯爵がカクテルを持ってレイとメイアから隠れるように2人を壁にして立っていた。

「伯爵のおじちゃんも仕事を放棄しちゃ駄目です。ステージでまだ司会の仕事があるんですよ。」

「あの2人がケンカしている傍でなんて怖くてやってられるか。双子メイドの白い方だって仕事さぼってそいつと喋ってるじゃねえか。」

「私は良いの。今日はおにいちゃんがくるからお手伝いとしてきてるの。それと、その呼び方はやめて。」

「だったら俺もおじさんはやめろ。俺はまだ若い。」

「じゃあ、ヘタレ伯爵。」

「余計悪いわ！」

伯爵はエルと顔見知りらしく、2人の様子をクロトスはカクテルを飲みながら眺めていた。

チラッとステージを見るとレイとメイアは未だに言い争っていた。

「…………折角だから何か食べるかな？」

長くなりそうなのでとりあえずは腹を満たすためにクロトスは近くの冷めかけた料理が乗ったテーブルに向かった。

神とメイドとの乱闘騒ぎ（前書き）

そろそろ30話の番外編を考え出さないと…。

番外1はウリエルとグラム。

番外2は王と王妃と間接的にメイド2人。

………ティニアとクロトスのデートにしようかしら？

神とメイドとの乱闘騒ぎ

「…まだやってたのか。」

クロトスが小皿に料理を取り終えて元の場所へと戻ってくると未だにレイとメイアは火花を散らし、エルと伯爵はお互いの呼び名から昔の事について言い争っていた。

「前回の大会の時だつて——っ！」

「……先に食べてるかな。」

エルが珍しく怒鳴っているがクロトスは気にせず料理を頬張る。さすがに王国主催だけあって味は良い。

「白ガキだつて俺のおやつを——っ！」

「…うまい！良い野菜使ってるな。」

いつの間にか呼び方が変わっていたがクロトスは皿に乗っている料理のおいしさに頬を緩ませる。

特に料理に使われている野菜の味は絶品であった。

「6年前だっけ？貴方が隣国で——。」

「これは隠し味に…果物の果汁を入れてるな。」

ステージではレイがメイアの過去の失敗談を語る。

クロトスは全神経を使つて、料理の味を盗むことに没頭する。

喫茶店で同じ料理を出すと値段が高すぎるので参考にして違う料理に生かしたい。

「それだつたら貴方だつて——！」
「……ごちそうさまつと。さてと……。」

メリアが言い返し始めたと同じくしてクロトスは皿の上の料理を食べつくした。

空の皿をテーブルに置いて、周りを見渡す。

会場にいたはずのほとんどの選手は酒に酔いつぶれていた。

武装メイド部隊もただのメイドとなって酔いつぶれた選手に毛布をかけている。

「……」——「ッッ!!」「……」

「……【万物創造 《水》】。」

言い争っている4人の上から滝のように【創造】した水を落とす。

ステージ上の2人は言い争いに夢中だったために避けることもできずにステージから流された。

エルと伯爵もびしょ濡れとなって、滝の勢いに負けて尻餅をついていた。

会場中の床もクロトスが【創造】した水で水浸しとなり、酔いつぶれた選手が慌てて起きだす。

床は拳ほどの深さまで水が溢れかえる。

「いい加減に進めてくれないか？明日の喫茶店の準備があるから早く帰りたいんだけど。」

いつのまにかテーブルの上に立っているクロトスはレイと伯爵に言った。

クロトスが周りを見ると他に数人の選手がテーブルの上に立ち、水に濡れるのを避けていた。

他の選手は会場が一瞬で水浸しになったためにほとんどの者がびし

よ濡れである。

つまり、テーブルに立っている者はその一瞬で判断してテーブルに登って水を避けたのである。

クロトスはその選手の顔を覚える。

その者達が強者と判断したために。

「貴様ッ！」

会場の隅に流されていたメイアは立ち上がってレイピアを抜き、クロトスに詰め寄る。

クロトスはチラッとメイアを見たが興味なさそうに視線を外し、レイを見る。

「酔いつぶれている奴だっているんだからさっさと用件を済ませてくれないか？ 特別ルールの説明を受けてないんだが。」

「ーッ、降りて来い！」

無視されたメイアはテーブルに立つクロトスに向けて、剣の先を向ける。

エルは頭を押さえながらメイアに告げる。

「メイアさん、怪我しちゃうからやめてよ！」

「エル、貴様も貴様だ！ 仕事をさぼってたのを見ていたぞ。だいたい、こいつの怪我の心配などする必要などない！」

「そうじゃなくて、怪我をするのは……！」

「うるさいっ！」

メイアはエルの忠告を無視してクロトスに襲い掛かる。

メイアはテーブルの上のクロトスの左足をレイピアで貫こうとした。普通の者であれば痛みも無く、貫かれたであろう。

クロトスはため息を吐き、貫かれる瞬間に左足を上げて、メイアのレイピアを踏みつける。

メイアはすかさずレイピアを引こうとするがそうする前に意識を失う。

クロトスがさきほど置いた皿をメイアの額に向けて右足で蹴ったのだ。

額に皿の縁の後を残して、床に崩れ落ちそうになる。

クロトスは一瞬でテーブルから降りてメイアを支えて、床に崩れ落ちるのを防ぐ。

そして、駆け寄ってきた武装メイド部隊にメイアを渡した。

メイドは複雑そうな表情で一礼をしてメイアを抱えて会場から出て行った。

「…怖いのが優しいのが良く分からないわね。」

「早くしないと次はレイさんの番ですよ。」

ボソッと洩らすレイに忠告したのはいつのまにか横にいるエルであった。

「それと、おにいちゃんは優しいの。」

なぜかご機嫌のエルはレイの言葉を訂正する。

「それじゃあ、ご機嫌を損なわせないためにも（私の身の安全のためにも…）早く終わらしましょうか。」

心の声が聞こえた気がしたエルだがレイは軽くドレスを絞ってステージに立つ。

「特別ルールは……というよりもルールの改変ね。それはルールの

緩和！殺し、急所攻撃 e t c の大部分の制約を自由とし、助っ人も1人だけ認めます。他のことについては本部に問い合わせてください。以上で解散。」

レイは逃げるように会場から出て行く。

一瞬の静寂の後に再び怒号が会場を埋め尽くした。

神と王女の逆襲（前書き）

投降がとてつもなく遅れました。

祖父が亡くなり、そのためにこのようなことになってしまいました。色々と忙しかったのですがようやく落ち着き、久しぶりに投降します。

神と王女の逆襲

パーティーの次の日。

その日の営業を終えた喫茶店にはお馴染みのメンバーが集まっていた。

店内のテーブル席にはメイド2人と王女、カウンター席にはウェイトレス2人、カウンター内にはクロトス。

それぞれが遅いおやつのケーキやらパスタなどを食べている。

「ティニア。」

「ん〜？」

クロトスの呼びかけにケーキを食べる手を止めるティニア。

「大会のルールのことなんだが…。」

「あつ、やっぱり不満だった？」

「俺が頼んだ面白いイベントという点では文句は無い。けど、特別ルールの内容は大雑把過ぎないか？」

ティニアは苦笑しながら頬を掻く。

その際に頬にケーキのクリームが付いたが気が付いていない。

エルが言おうとするがリンがそれを止めた。

「あのルールはパパがノリで考えたものだから。」

「止めるよ!」

「あれで結構頑固なのよ。周りがゴチャゴチャうるさいからならいつその事無しで良いだろうって。」

この世界に来たばかりのウリエルとグラムは呆れ、言葉が出ない。

「…なんというか、そんな王でよくこの国が滅びませんでしたね。」
「良く言われるわ。」

なんとか言葉を紡ぐウリエルに苦笑いで返すその王の娘。

「王にも色々いるのだな。」

グラムがチラツとクロトスを見るが喫茶店のマスター兼神々の王は視線を逸らした。

「王様なのに書類仕事はたびたびサボっちゃうよね。」
「…お城も何度も抜け出しますね。」

エルとリンの愚痴にウリエルはじろつとクロトスを睨む。
何処かで聞いた愚痴に心当たりのあるクロトスは冷や汗をかく。

「おかげでお城の人はその度に大騒ぎ♪」
「…ストレスでやめていった者も数知れず。」
「…もう勘弁して（くれ）…。」

ティニアとクロトスには耳の痛い話に降参の意を表す。
父親の恥と他人事とは言えない愚痴。

2人は泣きたい気持ちになる。
エルとリンはなぜクロトスが止めるのかわからなかったがクロトスの落ち込みように追求するのは可哀想と思い、止めた。

「そつえば、おにいちちゃんは助っ人は誰にするの？」

暗い雰囲気となった場の様子に慌ててエルが話を変える。

「助っ人は1人なんだっけ。…じゃあ…」

「…王女様は駄目ですよ。王族がそんな危険な大会に出れるわけないでしょう？」

リンに先に釘を打たれたティニアは押し黙る。

「って、リン？私のことは『お姉ちゃん』って呼びなさいって前に言わなかったかしら？」

突然、思い出したかのようにティニアがニヤニヤと笑顔でリンに言う。

「ーっ!？」

それを見たリンは顔を真っ赤にしながら逃げ出そうとする。

逃げるリンをティニアは両手でガツシリと掴み、持ち上げて自分の膝の上に乗せる。

膝の上でじたばたとするリンをティニアは抱きしめて耳元で囁く。

「『お姉ちゃん』って呼んで欲しいなあ…」

そう言って耳にふうつと息を吹きかける。

「ひニヤアっ!？」

ビクツと体を硬直させて大人しくなったリンにティニアは追い討ちをかけるように耳を唇で挟むように囁む。

「アッ……ハウッ……。」

「ほはっ、はっはふおほへえふあんふえいいふあふあい（ほらっ、さっさとおねえちゃんって呼びなさい）」

甘噛みをしながら喋るティニアとそれに反応しながら顔を真っ赤にして荒い息を吐くリン。

エルとウリエルは顔を真っ赤にしながらも目を背けようともしめようともしない。

グラムに関しては理解できてないというよりも知識がないのでただなんとなく観察しているだけである。

クロトスも呆然と見ていたがハツと気が付くと一瞬でハリセンを《創造》する。

それをノーモーションでティニアの頭を叩く。

「教育的指導っ！！」

スッパーンっと心地よい音が喫茶店に響き渡り、後には頭を押さえるティニアとウリエルの影に隠れる真っ赤な顔のリンがいた。

「何するのよ！」

「何してるんだよ！？」

先ほどの傍目からみたら誤解されるような光景であろう。

泣きついてきたリンにウリエルは苦笑しながらも頭を撫でてあげている。

「『お姉ちゃん』って呼んでくれないからちょっとした教育をしただけでしょー！」

「やるなら人のいないところでやれっ！」

「それもおかしいわよ！？」

クロトスの言葉にウリエルがつっこむ。

そして、ウリエルはとりあえず二人をなだめる。

「クロトスはいくらなんでも女の子に手を出さない！ティニアさんも仕返しにしてはやり過ぎよ。」

ウリエルの言葉にしぶしぶながらも落ち着く。

「それと……ティニアさん。そのやり方は誤解されるわよ。」

首を傾げるティニアにウリエルはため息を吐き、こっそりと耳打ちをする。

「そういう趣味の人ってことよ。……もしかして、本当に男よりもそっちが好きなの？」

ウリエルが囁くように言つとティニアは顔を真つ赤にする。ちなみに、ウリエルの囁きは喫茶店内の者に丸聞こえである。その反応にウリエルは更に何事かを囁く。

「そんなじゃあ……。」

「—っ!？」

突如として声にならない叫びをあげて顔どころか全身を真っ赤にしたティニアはリンの傍へ行き、土下座をする。

[illegible]

い！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！……」

「おつ王女様！頭を上げてください！リンちゃんも良いよね！」

土下座をしながら何度も謝るティニアとそれを慌てて止めるエル、エルの問いに何度も首を頷かせるリン。

それを見ながらクロトスはウリエルにこっそりと聞く。

「……何を言っただ？」

「うふふっ」

怪しげな笑みを浮かべるだけで何も答えないウリエル。

グラムはその光景を見ながらも首を傾げるだけであった。

神のパートナー

先ほどの出来事から落ち着いたところで一息入れるために皆に新しい飲み物を出すクロトス。

「えっと、助っ人の話…だったわよね。」
「…そう…ですね。」

ティニアとリンは何事も無かったかのように振舞おうとするが顔は未だに赤い。
とりあえず、周りの者はそれに合わせてあげた。

「じゃあ、私が出るよ」
「却下！」
「ぶう〜。」

エルの出場希望の意見をティニアとリンがバツサリと断ち切る。
2人はエルがある程度の戦闘訓練は受けていることは知っている。
しかし、それでも大会に出場できるほどのレベルではない。
というよりもあきらかに2人には他の理由があるのだが…

「（クロトス（クロにい）と一緒に戦うのは私っ！）」

2人はお互いを牽制し合うかのように目から火花を散らす。
拒否されて頬が膨れるエルはクロトスに上目使いでねだる。

「おにいちゃん〜」
「ダメ。それに相手はもう決まってるし。」

ちょっとかわいいと思ってしまったが我慢して断るクロトス。
そう言つてクロトスはカウンター席に目を向ける。
そこには優雅にコーヒ―を飲むウェイトレス。

「ウリエルさんなの？」

「…エツ？」

今気が付いたかのようにウリエルはコーヒ―から視線を上げる。

「ウリエル殿が助つ人なのか？」

「聞いてないわよ？」

「今言つた。」

グラムとウリエルの言葉をさらりと返す。

ニヤリと笑うクロトスにウリエルは淹れたての熱いコーヒ―をクロトスの顔にかけなくなるが勿体無いのでなんとか我慢する。

その代わりにウリエルは笑顔で殺気を発しながらクロトスを視線で射抜く。

「お前だつたら楽勝だろ。」

その視線を無視し、さも当然のようにウリエルに言う。

「女性に戦わせようとする男の人ってどうかと思うけど？」

ウリエルの皮肉をクロトスはそれがどうしたと言わんばかりな態度で返す。

「んなもん知るか。大体そういうのはか弱くて怪我しそうな女性に對してだ。素手でそこら中の男共を血の海にできる奴には必要ない。

」

ウリエルの笑顔が若干引きつる。

「貴方だつてそんな事簡単でしょう？大会だつて貴方1人で十分じゃないの？」

徐々にヒートアップしていくクロトスとウリエルの言い合いにティニアは慌てて止める。

「ストップ！クロトス！ウリエルさんを大会出場させるなんて危ないわよ！」

ティニアの言葉にウリエルの動きがピタツと止まる。

「…クロにいの助っ人は私。ウリねえは応援して。」

リンのささやかな主張にウリエルの整った顔に青筋が出来る。

「ウリエルおねえちゃんも落ち着いて。おねえちゃんが弱いのはわかってるから。」

ぶちんつつつ！…！

ティニア、リン、エルの何気ない一言でウリエルの何かが切れた。

「私が…人間相手に危ない？…弱い？代わりが子ども？……ふふっ
っ」

近くにいたクロトスとグラムにのみ聞こえるような小さな声でぶつぶつと呟くウリエル。

クロトスとグラムは怪しく禍々しいオーラを放つウリエルから逃げ出したい気持ちを何とか抑える。

今までの経験上、この状態のウリエルの前で下手に動く場合によつては血を見る。

「…出るわ、その大会。」

「危険で…うぶっ！」

ティニアが止めようとするがその言葉を言い終える前に一瞬にしてクロトスとグラムがカウンターからティニアの横に移動して、その口を手で塞ぐ。

ティニアとリン、エルはあまりの速さに反応すら出来なかった。

ウリエルはコーヒーを見ながらぶつぶつと何かを言っている。

「頼むからこれ以上は危険だからあいつを刺激するな。」

クロトスの小声ながら必死の言葉にうなづく一同。

しかし、好奇心旺盛なエルはクロトスに聞く。

「おにいちゃん、……ちなみに、言ったらどうなるの？」

恐る恐る聞くとクロトスは恐怖、グラムは苦笑いで答える。

「……あの状態のウリエルに余計な事を言ったとある奴は……内臓をぶちまけた。」

「その後で主は毎回ウリエル殿をなだめるのに苦労してる。ある時は殴られ、蹴られ、泣き付かれ、燃やされ……。」

「…冗談？」

2人の話にリンが冗談と思ったがクロトスが首を横に振る。

「俺の目の前で殺りやがったんだぞ。だから、命が惜しかったからよけいな事を言うな。」

「了解。」

さすがに笑い話では無いと悟った3人は命を守るために了承した。その証拠に先ほどティニアの口を押さえていた2人の手は恐怖で震え、かすかに汗ばんでいた。

「言つとくがあいつにこれから『弱い』は禁句だ。死にたくなかったら言うな。」

「貴方も…余計な事は言わない方が身のためよ？」

耳元で聞こえるウリエルの声に体がビクツと硬直するクロトス。

錆び付いた機械のように軋みをあげながらゆっくりと振り向くとウリエルはカウンター席からは動いていない。

視線だけはクロトスの方に向いている。

それなのに5人は尋常じゃないプレッシャーで指1本動かすことすらままならない。

「それ以上言つと……。」

プレッシャーがさらに増大した。

窓が、壁が、喫茶店中がそのプレッシャーガタガタと震えていた。

「…わかった。それで、出るのか？」

クロトスが返事をすると同時に喫茶店内に充満していたプレッシャー

「は無くなった。」

落ちて着くためにもクロトスとグラムは元いた場所に戻ってコップの飲み物を飲む。

ティニアは今の出来事を忘れようと無言でケーキに手を伸ばし、エルとリンはパスタをもくもくと食べる。

「他に当てが無いんでしょう？しょうがないから出てあげるわ。」

「サンキュー」

ため息を吐きながらコーヒーを飲むウリエル。

「我が出ては駄目なのか？」

グラムが聞くとクロトスは若干悩む。

「お前の場合は肉弾戦しか駄目だぞ。」

「じゃあ、辞退しよう。肉弾戦だと胸が邪魔で戦にくい。」

そう言っで自分の胸に両手を当てる。

ウリエルは無言でグラムの頭を叩く。

「グラムさんってお胸大きいよね。」

「…姫様といい勝負。」

「リン。それは言わないで。」

メイド2人はグラムの胸をまじまじと見つめる。

ティニアはリンの言葉に若干落ち込む。

「どうやったら大きくなるの？」

エルの疑問にティニアはピクツと耳を大きくする。
リンも顔を赤くしながら真剣な表情で聞こうとする。

「これは主が大きくしたものだから我は知らん。」

喫茶店内の時間が止まり、温度が数度下がったような錯覚が起きる。

「誤解を招く言い方をするな！」

いち早く立ち直ったクロトスは全力で反論する。

「この体は主が作ったものであるっ？」

「間違っではないが言い方が悪い！」

空気が冷え切った店内のテーブル席では燃えるようなオーラが放たれている。

チラッとクロトスがテーブル席を見ると3対の瞳がクロトスを射抜く。

「変態！」

「…ロリコン。」

「おにいちゃん…。」

クロトスは睨むティニアの言葉が心臓を抉り、無表情が逆に怖いリンの一言が精神を切り刻み、うつすら涙をためるエルの呼び声に大切なにかが崩れ落ちる感じがした。

「ウリエル殿。我は何か間違っと言ったか？」

よくわかっていないグラムはウリエルの服を引っ張って聞く。

「貴方……実はわざとやってない？」

グラムの疑問に苦笑いを浮かべるのが精一杯であった。

神の相手は美しき兄妹！？（前書き）

なんとなく話も折り返しではないかという印象を受けます。

目標は100話だったけどこの分だと50話かな。

この試合が終わったら影が薄いティニアの話を入れようかと思えます。

神の相手は美しき兄妹！？

大会2回戦当日。

大幅なルールの改変にも関わらず、観客達にはそれほど大きな波紋は無かった。

観客に言わせれば、これぐらいで動揺しているようではこの国で生活するなど無理という意見もある。

他国にとってもほとんどの選手が棄権してしまい、トーナメント表がガラガラになった試合などよりはこちらの方がおもしろいということとなった。

大半の選手も平和的な話し合い（武力行使）でしぶしぶではあるが了承した。

それでも不満はあるわけで……

「…ねえ、帰ってもいいかしら？」

闘技場の舞台にはすでに不満を洩らすウリエルとクロトスがいた。クロトスは頭にバンダナ、白いズボンに緑の服という動きやすい格好である。

これはクロトスがこの世界にきたばかりのときに着ていた服である。ウリエルはレオタードの上から動きやすいように腰から足元にかけて切り開かれた薄地のドレスのような服であった。

右の胸から肩にかけて白いミスリルの肩当と腰には片刃の剣を収めた鞘が備え付けられている。

格好全体が白で統一されているために何処か神々しさを感じる。

しかし、その神々しさもウリエルの表情が影をさす。

「俺だけにアレの相手をしろっていつのか？」

ウリエルが実に嫌そうな表情で不満を洩らす横でクロトスが前を指差し、ウリエルの要望を断る。

2人はこの試合は気が進まなかった。

その原因は2人の目の前の人物。

クロトスが指差すもの。

そこには2人の男女。

男はいかにも魔術師といった緑のローブに杖といった格好の線の細い美男子、女は軽装の鎧を身にまとったスレンダーな美女剣士。

その2人はお互いの両手を取り合い、見つめ合っている。

何をしているのかというと……

「あゝ、お兄様！彼らが私達の事を見ているわ！きつとつらやましいのね！私がお兄様とこんなにくつついていることが！」

そう言つて甘えるように男の魔術師に抱きつく女剣士。

「違つぞ、妹よ！彼らは見とれているのだらう！我らの愛の形を！その美しさに！神々しさに！我らの全てに嫉妬しているのだ！」

女剣士に抱きつかれている男の魔術師は両手を空へ高々と掲げながら高らかに叫ぶ。

「あゝ、お兄様！そうなのね！彼らはお兄様の美しさがうらやましいのね！」

頬を染めながら女剣士は男の魔術師に言うが微妙に話が噛み合っていない。

「そつだ！我らの愛の前では神々さえも嫉妬するのだ！！」

男の魔術師も話が噛み合っていない。
しかし、2人はそのようなことなど気にせずにお互いを抱きしめあった。

………

………

…

「第2回戦！緊急連絡で知っているとは思うがルールが変わった！知らん奴は後で確認しろ！」

実況席では伯爵が苛立ち混じりで叫んでいた。
何処か急いでる印象を受ける。

マニュアルではこの時に変更となったルールを説明するのだが伯爵は省いた。

「ちよつ、ちよつと、伯爵！マニュアルと違います。それに、レイ博士がいらないみたいですけど！？」

慌てて大会実行委員の係員が飛んできた。

「こんな試合なんてさつさと終わらせろ！俺はあいつらのような変態は死ぬほど嫌いなんだ！レイなんて『生理的に受け付けられないわ』とか言つて選手専用の治療室に行ったぞ！」

その係員に伯爵は怒り混じりで言い放った。

「そんなっ！？困りますよ！大体、近親相姦なんて他国では認められている所も…。」

係員はそう反論する。

確かに他国には独自の文化と法律、宗教などがある国もあり、近親相姦を認めている国もある。

「あいつらはそれにオカマ、ホモも付いているんだぞ！」

「……………はっ？」

伯爵の言葉に係員のみならず会場中の観客の頭に？マークが浮かぶ。

ちなみに伯爵と係員の会話はマイクを通じて会場中に流れている。伯爵は係員に舞台上でイチヤついている選手2人のプロフィールデータが書かれた書類を投げ渡す。

「これが何か？」

「あの女剣士は《男》だ！あれは《妹》じゃなくて《弟》だ！ここを見る！」

そう言つて伯爵は係員が持っている書類の一箇所を指差す。

係員はその一箇所……『選手の性別』の欄に注目する。

……………『性別 〃 男』。

しかも、係員の視界の隅にあつた『趣味』の記述が目に入った。

『最近の趣味は〴〵お兄様との〴〵。〴〵プレイかな（ハート）』

…係員の顔が青くなつた。

ちなみに舞台ではイチヤイチヤする兄妹（弟）がさらに行動がヒートアップしている。

「しかも、オカマなホモで近親相姦なんて最悪の組み合わせだろうが！俺が魔法を使えたらあいつらを灰にしてやるぞ！」

「でも、仕事ですから…。それにあいつらの国は恋愛自由がモットーですから。たとえば、男同士であろうとハーレムであろうと動物で

あろうと結婚できるんですし。」

「ハーレムまでは俺だって認めるさ！むしろ歓迎だ！だが、あれは駄目だ！むしろ、動物の方がましだ！」

実況席では係員が伯爵を説得しているが伯爵の言葉に会場中の男が同意している。

女性に関しては子どもの目を塞ぐ者もいれば、ジッと見つめる者やなにやらメモをする者と様々である。

「あの人の意見に同意するわ。この世界から駆除しないと駄目よ。いえ、他の世界にもあつては駄目ね。」

ウリエルは害虫を見るような目で心底嫌そうな表情である。

「それはわかるが…俺らはこれからアレと戦うのか？」

クロトスはもはや人間として扱っていない。

目の前には免疫のない者には目を背けなくなる光景が広がっている。

「…近づきたくもないわ。あの人の言うように灰にしましょう。殺しも有りなのよね？」

いかにも当然そうなんでしょうといった顔で聞く。

「ルールが変わったから有りだけど…魔法は駄目だぞ。この世界は杖がないと魔法を使えないらしいから。」

「そんなもの知らないわよ。アレに近づく方が嫌よ。」

クロトスの言葉に耳を貸さないウリエルにクロトスはため息を吐く。

「色々と怪しまれるから魔法は使いたくないんだ。今はまだ目立つた事はしたくない。」

「……………善処します。」

心底嫌そうな表情でウリエルは答えた。

クロトスも本当は同じ気持ちだがあまり目立つた事をするとなりが怪しむ。

すなわち、『気味悪がられる』店のお客が減る『売り上げが下がる』。

手を抜いて戦うという事は意外とストレスが溜まるが仕方ない。

クロトスはストレス発散のために帰ったら店の地下でウリエルと実戦訓練でもやろうかとこの時思った。

「後、極力殺しはやめとけ。会場には子どももいるんだからな。」

クロトスの言葉にウリエルは周りを見た。

所々に子どもの観客がいた。

しかし、目の前の変態のためにほとんどの者が付き添いの保護者に目を塞がれている。

それでもクロトスの子どもに対する配慮の言葉、その優しさに先ほどまでの苛立ちが霧散した。

「かしこまりました。神王様。」

だからこそ臣下としてクロトスに敬意をもって接した。

「…敬語はやめろ。今の俺は…」

といってもその主は気に入らないようだ。

長年の付き合いからクロトスが何を言いたいのかわかっている。

『今の俺はクロトスであって神王ではない。』
しかし、ウリエルにも譲れないものがある。

「申し訳ございませんが貴方をお守りするのも私の仕事ですから。」
そう言ってウリエルも構える。

「…たとえば、相手が害虫だとしても全力で駆除いたしましょう。」
その時、係員と言いつついていた伯爵の叫びが会場中に響く。

「あゝ、試合開始！さっさと終わらせろ！」

ここに神々の王と天使の怒りを買った愚者の裁きが始まる。

神に誓いし絆（前書き）

とある事情で忙しくて更新できませんでした。

朝早く起き、帰ったら倒れるように眠る。

本当にこんな生活をしていました。

一昨日にこの地獄生活から抜け出しました。

これから遅いかもかもしれませんが確実に更新します。

神に誓いし絆

舞台上クロトス、ウリエルが愚痴を言っているその頃。
ちびっ子3人（リン、エル、グラム）はというと…

「…本当に我がここにいていいのか？」

「いいのよ。王女の私が許可したんだから。」

闘技場内の王族専用のバルコニーにグラムは招待されていた。
バルコニーには丸いテーブルが設置されており、そこにティニア、
リン、エル、グラムが座っている。
前回のような王族が座るための豪華な椅子は撤去されていた。

「それに私達にも休暇を出しちゃっていいんですか？」

「…ここも関係者以外立ち入り禁止だから休暇中の私達はいれない
はず。」

リン、エルは周りのメイドや兵士達の目を気にしながら聞く。
その問いにティニアはにこにこ自信満々で答えた。

「王女の私が許可します♪」

ティニアは王族の格好だがメイド2人は休暇中のために私服である。
清楚なワンピースのリンとボーイッシュな格好のエルはいきなりテ
ィニアに休暇を言い渡され、ここに連れ込まれた。

そこには鎧打ちのジャケットを着込み、手にチェーンの装飾品を巻
いたグラムが落ち着きなさそうにテーブル席に座っていた。

ちなみにその服のコーディネートはクロトスの趣味。

傍目にはかっこいい美少女というグラムの服装はグラム本人も気に

入っている。

しかし、ウリエルはグラムにかわいい系の服を着て欲しいと思っている。

ウリエルは何度かフリフリのシルクのドレスやワンピース等を着せようとしたがグラムは拒否した。

見た目を気にしないグラムにとってはフリフリの動きにくい服よりもクロトスが勧める若い男性が着るような服の方が丈夫で動きやすい。

ウリエルにしてもクロトスの勧める男物の服をグラムが着ると意外と似合う所かボーイッシュな雰囲気は逆に色っぽく、明らかに自分が勧める服よりも似合うために強くは言えない。

しかし、用意した服はいつか着せようところそり隠してあるウリエル。

主人が選んだ服を着たグラムは選手関係者席で観戦しようと思っていたところに老執事経由でここに招待された。

そのため、今は4人で紅茶を飲みながら試合が始まるのを待っている。

「…もしかして、寂しかったんですか？」

皆で紅茶を飲みながらクッキーを食べている最中にリンがボソッと口に出す。

その言葉にクッキーを取ろうとしたティニアの動きが逆再生のように戻り、小さく、恥ずかしそうに頷いた。

「パパもママも今日は執務で来れないっていうから……そのう……ねえ？」

恥ずかしそうに問いかけるティニアに苦笑するメイド2人。
グラムはその光景を見て、内心微笑む。

年齢で言ったらグラムはこの3人の数百倍生きている。

その人生の中で他者との交流というものはほとんどなかった。

特にこのような温かいものは皆無であった。

ある人に出会うまでは…。

「そういえば、グラムさんとおにいちちゃんはどういう関係なの？」

突然、エルがグラムに聞く。

「あつ、私も前から気になってた。」

その問いにティニアも反応する。

突然のようにやってきたウリエルとグラム。

ウリエルはクロトスの友人と自分のことを説明していたがグラムに
関しては何も聞いていない。

「主と我か？」

「…やっぱり主従関係？」

面を食らうグラムにリンは疑問を投げかける。

グラムがクロトスを『主』と呼ぶためにそう思ったのであろう。

「我と主の関係か…。」

グラムは考えるが明確な答えは思いつかない。

しかし、それだと目の前でグラムの答えを聞き洩らさまいとものす
ごく注目している3人は納得しないだろうとグラムは考える。

そのためにできるだけ言語化して伝えなければならない。

【主従】＝主により秘密と言われているので却下。

【友人】「それだけでは足りないような気がする。

【家族】「将来は側室、できれば正室を狙うつもりだが今は違う。

【道具】「主はそう思っていないらしい。

しばらく考えてグラムの中で1番近そうな答えを言った。

「明確にこれだと言えるものは無いが…あえて言うなら色々な意味で『剣』であろうな。」

「『剣』っていうと…用心棒？」

グラムの言葉をティニアはそう解釈した。

ティニアが昔読んだ物語に用心棒が自分のことを依頼人を守る『剣』であると例えた場面があったのを思い出したからだ。

グラムは少しだけ考えるとティニアの言葉を肯定する。

「守護するという意味では間違いではないが…我は主の『剣』として主と共にある。太古より武器は持ち主の願いを叶えるための道具として存在する。大事な者を守るために、欲しい者を奪うために。我は主のあらゆる願いを叶える『剣』。立ちはだかるものを斬り、なぎ倒し、ねじ伏せる。それが契約…いや、我自身の望みでもあるからな。」

そう言つて一息つくためにグラムは紅茶を飲む。

グラムの真剣な言葉に3人が息を飲む。

「…クロにいの望みって？」

「我からは言えん。主の口から聞くんだな。」

リンの問いにグラムは答えられない。

資格が無いからだ。

3人はクロトスの正体を知らない。

クロトスは恐れているからだ。

正体を知った3人がどのような反応をするかを。

この3人はそのクロトスの恐怖を拭い去るような『が無い。』

その『が無い限り、クロトスは3人に語らないだろう。』

だから、グラムも語らない。

主の意思を守るのも『剣』の役目である。

「他の答えられる問いにだったら答えよう。それでも主との付き合いは長いからな。」

「本当!？」

グラムの言葉にエルが喜びを露わにする。

リンやティニアも目を輝かせる。

それを見て、普段めつたに笑わないグラムもつられてうつすらと微笑む。

「ああ。」

グラムは思う。

だから3人が『を得るまでにこの心地よい場所を守る。

『剣』として、『友』としてのグラムの意思で。

「えーと、…リンちゃん!何を聞こうか!？」

「…迷う。王女様は?」

「あゝ、早くしないと試合が始まる!」

3人が慌てて何を質問しようか考えているとバルコニーにショートカットのメイドがトレイに飲み物を持って現れた。

「失礼いたします。お飲み物をお持ち……なんで貴様らがここにいる!？」

「やばっ!」

突然のメイアの出現にリンとエルは顔をしかめる。

メイアは先日のパーティーでクロトスにノックアウトされてから機嫌が悪い。

ちなみにパーティーの一件は城内では有名である。

日頃の恨みと称してとあるちびっ子双子メイドがあらゆる場所に広めたからだ。

もちろんティニアも知っており、クロトスに剣を向けたメイアにきつい言葉を浴びせる。

「メイア。お客様の前で私に恥をかかせないで欲しいわね。」

「もっ、申し訳ございません、王女様。」

王女の前で醜態をさらしたことに気づいたメイアは慌てて頭を下げる。

ティニアはせっかくの質問タイムを邪魔されたことで機嫌が悪い。

「彼女らは休暇中であり、私の客人としてここに招待しています。

何か問題がありますか？」

「…いえ、なんでもありません。」

頭を下げているが目はこの忙しい時に王女と紅茶を悠々と飲んでいるリン、エルを睨んでいる。

「わかったら下がちなさい。」

「かしこまりました。」

踵を下げて戻ろうとするメイア。

内心では休暇が終わったらかき使ってやろうと心に決めた。

「あゝ、メイア？」

メイアが出て行こうとした寸前にティニアの呼び止められた。
ギクツと動きを止め、内心を悟られないように笑顔で振り向く。

「い、いかなされましたか？」

「その鼻はどうしたの？」

笑顔が引きつった。

1番触れて欲しくなかった場所にクリーンヒットした。

メイアの鼻周辺は赤く腫れ、一文字のミミズ腫れが出来ている。

それを隠すためにマスクをしているがそれでも注意深く見れば気づいてしまう。

前回のパーティーでクロトスに蹴りつけられたトレイの痕が腫れているのである。

恥ずかしくて休みたかったが忙しい時期でもあり、自身のプライドのためにマスクでなんとか隠して仕事をしている。

「少々風邪気味で…。」

「おにいちゃんに襲い掛かって秒殺されたときの痕が恥ずかしいだけでしょう？」

「クツ！」

誤魔化そうとしたらその場にいたエルにばらされた。

ちなみにエルの言葉にその一件を知らないグラムの紅茶を飲もうとする手が止まる。

「どうゆづことかしら?」

事情は知っているがメイアに恥をかかせようとわざと聞くティニア。ティニアは初めてこの話を聞いた時は処刑しようかと考えたほどだ。色々と問題があるのでリン、エルが止めたが…。

「この前のパーティーでおにちゃんに注意されたメイアさんが逆上しておにちゃんに襲い掛かったら返り討ちにあっただんです。」

「…無様。」

ティニアの質問にエルが答え、リンがさらにボソツと貶す。

言い方は引つかかるが間違っていないだけに言い返せないメイアは羞恥と怒りで顔を真っ赤にする。

「本当なのかしら、メイア?」

ティニアは誰が見ても内心は怒っているとわかる笑みを浮かべてメイアに聞く。

もちろんメイアにもそれはわかった。

しかし、ここでメイアは勘違いをする。

ティニアは『クロトスを攻撃した』ことに怒っている。

しかし、メイアは王女は『たかが選手1人に武装メイド部隊隊長が負けた』ことに怒っていると思った。

だからこそ地雷を踏んでしまった。

「あの時は油断していただけです! あんな屑などに私が遅れを取るはずがない! 第一、町で喫茶店を営んでいるような軟弱な者が大会に出ている事自体がおかしいんです。1回戦は棄権者が多数出たためにまぐれで勝ったみたいですし、あのオルガとかいう化け物に勝ったのも相手が見掛け倒しかあいつとグルだったに決まっています。」

今度会った時はあいつの首を切り取ってあいつの喫茶店に飾ってやりますよ！」

空気が凍った。

バルコニーの警備をしていた兵士達でさえわかる。

わからないのは地雷を踏んだメイドのみ。

ティニアはこのメイドの処分を考える。

できるだけ屈辱的なものを、いや、肉体を痛めつける拷問器具が城の倉庫にあった気がする。

そのようなことを頭の中で考えている。

エルはリンにアイコンタクトを送る。

リンはそれに頷き、右手を袖の中に引っ込める。

再び手を出すとリンの右手にはガントレットが装着されていた。

それも様々なギミックが備われているであろう精巧で緻密な造りがされている。

あと数秒もすれば後先考えずに攻撃していたであろう。

ティニアもそれを止めはしないだろう。

その前にグラムが動いた。

「おい。」

「なんだ、小娘？」

「主の侮辱は許さんぞ。」

「何だ、あいつの知り合いか？ 部外者は失せな。子どもが来る場所じゃないぞ。それとも、あの屑の前にお前を叩きのめそうか？」

いささか興奮していたのであろう。

王女の前ということも忘れ、目の前の者が王女の客と言つことにも気づかず、近くににいる兵士でさえもわかるほどの凶悪な殺気を放っている者を目の前にしていることにも気づいてはいない。

「…万死の値する。貴様がこの世界に存在していることを害と判断する。」

「何を言って……ひいつ!？」

メイアは見た。

グラム瞳が赤く染まっていた。

何処かおぞましく、美しく、醜悪な、血の色。

角度的にティニアとリン、エルには見えないだろう。

兵士達は先ほどのグラムの殺気に当てられて目を逸らしているか閉じている。

見ているのはメイアのみ。

恐怖に怯えるメイアだが目をそらすことはできない。

そこでメイアの意識は途切れる。

いや、正確には失われた。

「メイア？」

様子がおかしいと思ったティニアがメイアに問いかけても返事は返ってこない。

怯えた表情で立ったまま固まっていた。

「気絶するほど疲れていたであろう。その兵士、メイアを運んで！」

「はいっ！」

そのまま兵士に担がれてメイアは運ばれていった。

メイアは担がれても石像のように微動だにとも動かなかった。

「…いい機会だから首にしましょう。いくら剣の实力があってもあの性格は問題有りすぎるわ。」

「賛成です。メイド仲間からも前々から要望はありましたし。」

ティニアの発言にエルが賛同する。

メイアが問題を起こしたことはこれが初めてではない。
城でも色々と問題を起こす厄介者である。

「ごめんなさいね。王女としてお詫びするわ。」

ティニアはグラムに頭を下げる。

「そなたが悪いわけではない。気にするな。それよりも試合が始まるぞ。」

「「本当!?!」」

ティニアとエルは試合を見るためにあわてて目線を舞台に移す。
しかし、リンは2人に気づかれないようにグラムに耳打ちをする。

「メイアさんに『呪』をかけませんでしたか?」

グラムはリンが見ただけで気づいたことに驚き、一瞬だけ眼を見開くがすぐに平静を取り戻す。

「主には秘密だぞ。」

「…言いません。彼女にはどうせスパイ容疑もかかっていましたし。」

「リンは何者だ?」

ただのメイドが一発で呪をかけたことを見抜き、裏の内部事情を知っているものなのか。
問われたリンはただ微笑んだ。

「…それ、そっくりそのままお返しします。」

言い返されたグラムも微笑み返す。

「答えは『秘密』だ。」

「…私も『秘密』です。」

「では、主の味方か？」

「…グラムさんは自分を『剣』と言いましたね？」

少し悩んだリンがそう問いかける。

「それがどうした。」

「…『剣』が貴方なら私は何にもなりません。ただ、クロにいのずつと傍にいます。『剣』よりも近く、『友』よりも親密に、『恋人』よりも愛されたい。」

グラムは意表を突かれた。

比較的無口のリンがこれだけ喋ることができたこともそうだが自分の主人にそれだけの感情を持っていたことに。

「…誓えるか？」

「…クロにいとこの絆にかけて。」

グラムの真剣な表情にリンは偽りのない眼で答える。

「主に代わって礼を言う。…ありがとう。」

「…負けませんから。」

リンはそれだけを答えた。

グラムはそれを何に對して言っているのかすぐにわかった。

「…我もだ。」

「リンちゃん、グラムさん。始まるよ」

のん気なエルの呼び声に2人はささやかな笑顔で答え、お互いが好意を寄せる相手の戦いを見に行った。

神と変態兄妹（兄弟）！？（前書き）

39 の熱に卒業レポート、入社準備等で更新が遅くなりました。
お詫びと懺悔に後書きにオマケを付けてみました。
興味を持ちましたらお読みください。

神と変態兄妹（兄弟）！？

戦いは始まった。

兄弟はすばやく衣服の乱れを正し、妹のような弟は両手にトンファ―を構える。

兄はその後ろで隠し持っていた杖を構え、呪文を唱える。

この2人の戦法は弟がトンファ―で敵の足止めをし、兄が得意とする魔法で一気に殲滅という一般的でありながらも効果的な戦法を主としている。

トンファ―というこの世界でも珍しい武器による緩急を付けた動きで敵を翻弄し、敵が手間取っているうちに高威力の魔法でトドメをさす。

2人には優勝とまでは言わないがこの大会でも上位の成績を修められるという自信があった。

しかし、相手が悪かった。

弟がトンファ―を構えた途端、いつの間にか目の前には剣を振り下ろそうとするウリエルがいた。

弟はほとんど反射的にトンファ―を上にも構える。

凄まじい金属音を立てて交差される剣とトンファ―。

弟はその斬撃を痺れる腕で全力で受け止める。

ただ一撃、ウリエルが振り下ろした…ただ一撃で弟の腕がプルプルと震える。

見た目は女だがれっきとした男が女の剣をただ一撃受け止めただけでこの有様。

弟は反射的に受け止められなければ今の一撃で終わっていたと知ると顔を青くする。

「…人間にしてはやりますね。」

ボソツとウリエルがつぶやく。

弟はウリエルをキツと睨みつけ、そのまま固まる。仮面のような無表情ではあるがそれがどこか美しい美術品のような印象を受けるウリエル。

戦いを忘れて、腕の痺れも忘れてただ見とれる弟。

「ですが…所詮は人間ですね。」

そう呟いた瞬間に弟の視界からウリエルが消える。

フツと風の流れを感じた弟は無意識に右を見る。

そこにはウリエルが立っていた、まるで何かを蹴った後のような体勢で。

先ほど自分がいたはずの舞台の中心にウリエルが立っていた。

ウリエルはすでにこちらになど目を向けていない。

「…なん…なのよ、それ…。」

弟は気づいた。

自分が浮いている事に。

自分が先ほどいた場所から飛ばされている事に。

自分が蹴り飛ばされた事に。

相手が異常な存在な事に。

「（何処の世界に…蹴っただけで人間をこれだけ吹っ飛ばせる人間がいるのよ。）」

自覚した途端に蹴られたであろう脇腹に尋常じゃない痛みが走る。なぜか涙が出た。

蹴られた痛みのためか、異常なウリエルに対する恐怖のためか。

「（わけ…わかんないわよ。）」

やつのことで吹っ飛ばされた自分が地面に接触し、転がっているのを他人事のように思いながら思った。

「（なんで…こんな大会に…あんなのがいるのよ？）」

そこでやっと意識を失うことが出来た。

痛みからも恐怖からも、『あれが何なのであるか？』という考えてもわからぬであろう疑問からも解放された。

………

………

…

その様子を啞然と見ていたクロトス。

とりあえず、状況を確認しよう。

舞台中心にウリエルがいる。

その奥には呪文詠唱中にあまりの光景に詠唱をやめて呆然としている変態1号（兄）。

舞台端にはウリエルに蹴り飛ばされてゴミのように転がっている変態2号（弟）。

会場中は呆然としている。

さらに中心を見ると蹴った脚を下ろしたウリエルが残った変態…兄を見る。

剣を再び構えて、今にも飛び掛ろうとする。

ハッとクロトスは慌ててウリエルの所に駆け寄る。

「って、バカかお前は…!?」

「ッッ！」

クロトスは相手選手を蹴り飛ばし、今にももう片方の選手に切りかかるうとするウリエルの頭を殴った。

ゴンッ！つと静寂であつた会場にその音が響き渡り、観客も放心状態から戻る。

「…何をするんですか？」

ウリエルが少々涙目でクロトスを睨む。

クロトスは思わずたじろぐがそれどころではない。

「敬語は…まあ、それは今はいい。それよりもやりすぎだ！」

いつもの癖で敬語を注意しようとするがそれどころではないので少々流す。

しかし、目立つた事はしたくないと言つたはずのクロトスの考えを全力で破壊したウリエル。

「戦闘に手を抜けと…？」

「人間のレベルをいきなり超える戦い方はやめろ！怪しまれるだら！」

前回の戦いでオルガの巨体を投げ飛ばしたクロトス。

その異常性でドーピング疑惑、魔物疑惑、茶番疑惑等の色々な面から疑われた。

一部の研究者からモルモットとしても狙われた。

二度目は御免被りたいクロトス。

「そう言われればそうですね。申し訳ございません。考えが足りませんでした。」

試合が始まる前にその事を言っただろう…と内心、クロトスは思ったが言葉には出さずのため息だけ出す。

「…まあ、わかれば良い。帰るぞ。」

「もう一人いますか？」

ウリエルがそう言ってその相手を見るといつの間にか倒れていた。仰向けに倒れている男を見ると肩、腹、足、腕と至る所に切り傷があった。

クロトスに視線を戻すと微笑みながらいつの間にか握られていた小型のナイフを数本両手に持っている。

「いつ攻撃したのですか？」

「お前を殴った時。ちなみに痺れ毒を塗った投げナイフ。」

さらっと言うクロトス。

「貴方も十分人間レベルを超えているのでは？」

「ばれなければ良いの。良く言うだろ？『犯罪はばれなければA L

L O・K・』って。」

「言いませんよ。何ですか、その犯罪者に都合が良すぎる主義は？」

ジトツと睨み、言い咎めるウリエル。

その視線を無視し、クロトスは笑顔をウリエルに向ける。

「そういうことで試合終わったから敬語禁止。」

「意味がわかりません。文脈が繋がっていません。」

「敬語」

クロトスが顔をウリエルに近づける。

クロトスの笑顔を至近距離で見たウリエルは顔を染めてクロトスから顔を逸らす。

「殴る方の言う事など聞けません。それになんかご機嫌なのがイヤつきます。」

そう言ってむくれるウリエル。

言葉は敬語だが態度はすでにいつものウリエルである。

「あれは思慮が浅いお前が悪い。だいたい神王という立場は隠しているんだから敬語はまずい。」

「女性に手をあげるなんて最低だと教われなかった？」

ようやく敬語はやめたがご機嫌斜めという感じである。

「『女は暴力行為を快感に思う稀な生命体』という事は知り合いの悪魔に教えてもらった。」

思わずこけるウリエル。

「そんなわけないでしょう！？そんな人いません！！」

先ほどとは違い、怒鳴るように注意する。

仕事人モード（クロトス命名）と普段では敬語もそうだが態度もまるつきり違う。

個人的にクロトスは普段のウリエルの方が好きなのでそういう意味でも敬語はやめるように言っている。

「そいつの妻と愛人等は皆そという人らしいけど？」

「…訂正します。ごく一部だけです。」

よくわかっていない様な様子のクロトスは首を傾げる。
特殊な環境のためにそういう知識はあまり詳しくない。
それを面白がって周りの天使、悪魔はクロトスに色々吹き込んでい
る。

「（今度ちゃんとした性教育を受けさせようかしら？）」

ウリエルはなぜか自分がクロトスに教えている光景が頭の中に思い
浮かぶ。

途端に顔を真っ赤に染める。

「（なんで私が教えるのよ！？しかも、そんないかがわしい格好で
！？『続きはベツトで実習ね』って何言ってるのよ、頭の中の私
！？）」

ウリエルの頭の中では段々と行動がエスカレートしていく自分を妄
想してさらに顔を真っ赤にする。

「ウリエル。」

「…だいたい……初めてはロマンチックな場所で……。」

「ウリエル？」

「…いつのまにそんなテクニク……そうね、今夜は…いっぱい…。」

「ウリエル！」

「へっ？…キヤー！！」

「へブオッ！？」

ウリエルの真っ赤な顔を覗き込んだクロトス。

しばらくクロトスと見つめあうがハツと気が付いたウリエルは悲鳴をあげてクロトスの顎をアッパーで殴る。
浮き上がったクロトスにウリエルは思いっきり回し蹴りを放つ。

「へぎゃ！」

「ブフォ！」

「グハッ！」

「……（ガクッ）。」

何度か地面をバウンドしながら転がっていくクロトス。

舞台の端で止まったクロトスは何かを掴むように空に手を向けてそのまま息絶えた。

「あつ……」

あまりのことに会場中は静まり返る。

舞台では変態兄弟とグラムとの戦いから人気急上昇中のクロトスが横たわる。

立っているのはその全てを叩き伏せた美しき女神。

驚きで先ほどからボーっとしていた審判が慌てて駆け寄るが3人に反応は無い。

徐々に会場中の視線が女神に……ウリエルに集まる。

冷や汗をかいているウリエルはとりあえず……

「……えーと、……大変！クロトス、私を守るためにこんな怪我までして……。早くお医者様に見せに行かないと。」

「……………（いや、あんたがしたんだろ！？）……………」

会場中の心の声が一つになった。

ウリエルは顔を真っ赤にしてクロトスを背負うとそそくさと舞台を

後にした。

「…選手戦闘不能のためにこの試合、クロトス、ウリエル選手の勝利？」

審判はなんとなく疑問系でそう宣言した。

神と変態兄妹（兄弟）！？（後書き）

リン（以下りと呼称）「…懺悔のコーナー。」

蛹（作者）「何で俺ロープで縛られてるの！？」

リ「…今回は私、リンがこの罪人を裁きます。」

蛹「罪人！？俺何かした！？」

リ「…最近をウル見てない。」

蛹「ーっ！？」

リ「…最後の登場は19話。今回の28話まで、さらにはすでに書き上げている31話まで一回も出ていない。」

蛹「…………（汗）」

リ「…言わないと爪の間を針で刺す。」

蛹「ごめんなさい、忘れてました！最近思い出して話に出そうとしたら色々と忙しかったんです！！」

リ「…早く出さないとまた呪いかける。」

蛹「またって何！？まさかこの前の原因不明の39の熱って！？」

リ「…クスクスッ」

蛹「その笑い方怖いからやめて！っていうかロープ解いて！」

リ「…駄目。お仕置きがまだ。黒子、スタンバイ。」

蛹「待てコラ、その黒子！何でアイアン・メイデン（鉄の処女）を持つてくる！？それは拷問器具だろ！」

リ「…ウルを忘れた貴方が悪いの。王様の名前を決めるのも忘れてたし。」

蛹「いや、だって野郎なんてどうでもいいし。」

リ「…ジャステイスなの。」

蛹「いゝやゝ！！」

リ「…悪は滅びたの。これから『神は貴方の守護天使！？』をよろしくです。」

蛹「……よろし……く……グハッ！」

リ「∴意外としぶとい。」

神の怒り＝魔王降臨！？（前書き）

短編を書こうかと思う今日この頃。

作品数2作じゃ少ないかなあ？

いくつか書こうかあ？

……と考えている夢を見ました。

神の怒りⅡ魔王降臨！？

試合終了後、公務のために大会を抜け出せないでいるティニアを除くいつものメンバーは喫茶店に集合していた。

ティニアも喫茶店に行こうと止める兵士達の屍（重傷者多数ではあるが死者は0）を次々と積み上げるが最終的には執事のジュニアルの吹き矢の前に倒れた。

筋弛緩剤が塗られた吹き矢を受けて動けなくなったティニアを引きずり、いつのまに用意していたのか特別製の不可視の紐で椅子にぐるぐる巻きに固定された。

観客席からは王女が威厳たつぷりに試合を観戦しているように見えるだろう。

しかし、ティニアは今にも噛み付きそうな獣の目でジュニアルを睨んでいて試合などには目もくれない。

一方のジュニアルは飄々としており、ティニアが拘束から抜け出した際に使おうと考えている麻酔薬の準備をしている。

だが、ティニアは喫茶店に來なくて正解だったのかもしれない。

実際にティニアを見捨てて喫茶店に來た3人は後悔していた。

喫茶店には魔王が降臨していた。

その身に禍々しいオーラを纏わせ、見るものの身を凍えさせる氷よりも冷ややかな目。

カウンター席で氷袋を頬に当てて冷やしながらも顔に青筋を浮かべる鬼の表情。

かの有名な魔界の支配者サタンさえも畏怖するであろうであろうプレッシャーを放つ神王改め魔王クロトス。

原因はもちろん試合でウリエルがクロトスをブツ飛ばした件である。頬はぷっくりと腫れており、奥歯も欠けてしまったクロトス。

診察の後、クロトスは一言も喋らずにもくもくと喫茶店へ向かった。一緒にいたウリエルがいくら謝罪しても一言も話さない。

3人が喫茶店についた時にはクロトスは目の前で土下座をしている
ウリエルを殺気混じりに睨みつけている所だった。

「申し訳ございませんでした!」

はつきりとした声で謝罪の言葉を口にするウリエルだが体は震えて
いる。

クロトスはウリエルの謝罪の言葉を聞いてもそのプレッシャーは変
わらない。

「申し訳ございませんでした。」

「申し訳ございませんでした...」

「申し訳...ございませんでした...」

「.....ごめん...なさい...」

「.....ごめんな...さい。」

「...ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

「.....本当に...ごめんなさい。」

かれこれ30分以上ウリエルは謝罪し続けている。

エル、リン、グラムはテーブル席で2人の様子を落ち着きが無い様
子で見守っていた。

止めようかどうか迷っているがクロトスの迫力に中々決心がつか
ない。

ティニアがさらに何か言おうとしたところでグラムが声をかける。

「主よ。その辺で許してやってはどうだろうか?」

クロトスは視線だけをグラムに向ける。
途端にグラムの体に重圧が押し掛かる。

クロトスのプレッシャーをもらに受け、空気が重くなるような錯覚さえ起こす。

「ウリエル…殿も悪気があって…やったわけではあるまい…？」

プレッシャーに押しつぶさせそうになりつつも言葉を紡ぐ。
グラムという言葉でクロトスの雰囲気は穏やかになった。

「…わかったよ。」

そう言つてクロトスは氷袋を頬から離す。
最初よりは腫れと熱は引いたみたいだ。
クロトスは席から降りてウリエルの肩に手を置く。
置いた瞬間にウリエルの体がビクツと震える。

「もう許してあげるから顔を上げて。」

「本当に…すみませんでした。」

顔を上げたウリエルの頬は涙を濡れていた。
それを見たクロトスは若干の後悔を胸にし、ポケットに手を入れる。

「…【万物創造 《ハンカチ》】。」

ボソツとエル、リンに見えないようにポケットの中で小声で《創造》する。

ポケットから取り出した蒼いシンプルなハンカチをウリエルに渡す。

「…すみません。」

一瞬だけ躊躇したウリエルだったが素直に受け取る。

そして、皆に見えないように横を向いて涙を拭く。

その時、クロトスがウリエルだけに聞こえるような小さな声で囁く。

「お前の泣き顔なんて…小さい頃に見飽きたんだよ。」

ウリエルがハッと目の前を見るとすでにクロトスはキッチンへと姿を消していた。

心配になったエルとリンはウリエルの傍に駆け寄る。

「大丈夫？」

「ええ、ありがとう。…そんなに心配しなくても大丈夫よエルちゃん。リンちゃんもありがとう。」

ニツコリと微笑むウリエルだが目は赤い。

それを見たリンはキッチンへ向かおうとする。

「駄目よ、リンちゃん。」

それをウリエルはハッキリとした言葉で止める。

リンはウリエルの方を向く。

「…クロにいまやりすぎだと思う。」

「…私はね、神…クロトスに怒られたから泣いているわけではないの。」

「えっ？」

エルとリンは頭に？マークを浮かべる。

「だいたいにして主が本気で怒ったらこんなものではすまないぞ。」
「それもそうね。さっきは気が動転していたからわからなかったけ

ど。」

「…あれで本気じゃないの？」

リンは先ほどの迫力で本気ではないなら本気で怒ったらどうなるのか想像がつかなかった。

「私はね、クロトスを守るところか傷つけたことが情けなくて泣いてるの。」

ウリエルは悔しさから手を握り締める。

「小さい頃からあの人に憧れた、尊敬した。あの人を守りたい。支えたい。隣にいたい。あの背中に追いつくために、小さい頃から頑張つて、やっと…やっと隣にきたつもりだったのに！こうして…傷つけてしまった。決意したあの日から…ただあの人のために…なのに。」

唇を食いしばるウリエルはとても痛々しく、儚げに見えた。

エルとリンが元気付けようと声をかけようと思ったが…

「だったら泣くな。前を見て笑え。そして、食べ。」

そう言つてウリエルの前に差し出されたのは1枚の皿に乗ったチョコレートケーキ。

お酒で香り付けされた香りがウリエルの鼻腔をくすぐる。

皿の向こうにはいつもと同じクロトスがウリエルを見つめている。

「とりあえず、これは試合のご褒美と日頃の感謝の印だ。お前が頑張っているのは知っている。けどな、もう少し肩の力を抜け。誰もお前を攻めない。文句いう奴は俺が潰してやる。だからもう少し

お前は笑うことを覚える。笑っている顔の方が今の顔よりよっぽど……ましな顔だぞ。」

ウリエルがプツと嘔き出す。

「ちょっと……ましな顔はないんじゃないの？」

「どうせ、『今の顔よりよっぽど綺麗だぞ、ウリエル。』とでも言うつもりが恥ずかしくて言えなかったのだろう」

「うるさい、グラム！」

グラムとクロトスが言い争っているがウリエルはケーキに手を伸ばす。

そこにリンがフォークを差し出す。

ウリエルはお礼を言って受け取るとケーキを口に入れる。
甘く、ちょっとほろ苦い。

「クロトス。」

「だから……何だ？」

ちょっと興奮しているのか息を切らすクロトス。
ウリエルは笑顔を浮かべる。

「ありがとう。とっても、とっても美味しいわ。」

「……そうか。」

クロトスは目を逸らす。耳が赤くなっているのをウリエルは見逃さなかった。

「おにいちゃん、私達には無いの？」

「あるぞ。2回戦勝利記念パーティーだ！」

「…プリンある?」

リンが目を輝かせて聞く。

「さつき主と2人で作ったぞ。」

グラムはプリンやらのデザートが乗った皿がいっぱいのトレイを運んできた。

それを見たリン、エルは笑顔になってグラムが皿を並べるのを手伝う。

「パーティーはまだ始まってないわよね!？」

走ってきたのであろう、喫茶店の入り口に汗びっしょりのティニアが駆け込んできた。

「これから始めるところだぞ。」

「セーフ!」

クロトスの言葉に安堵したティニアはリンが持ってきたコップを一気に飲み干す。

…飲み干した途端にティニアは床に倒れた。

「って、おい!？」

「リンちゃん、何飲ましたの?」

「…『THE レクイエム』。アルコール度数が高すぎてめったに出回らない幻のウィスキー。…ブイッ」

「ブイ…じゃないぞ!どうするんだよ!？」

ウリエルは苦笑して立ち上がる。

そして、心からの笑顔を浮かべる。
喜びの笑顔を。

「とりあえず、ティニアさんの介抱の後でリンちゃんのお説教ね。」

番外 力ある神々による混沌の一日（前書き）

久しぶりの投稿＆祝30話！

今回の話は番外風味の番外です！？

初めて激しいバトルを書いてみました。

コメディという事も忘れてはいません。

戦いの最中にとある漫画を参考にした場面があります。

そこは気づいても見逃してください。

後書きに投稿が遅くなったお詫び文を載せました。

投稿が遅くなって申し訳ございませんでした。

番外 力ある神々による混沌の一日

事の始まりはほんの些細な一言だった。

その日の喫茶店はたまたま休みだった。

というのもその日、クロトスは新メニュー開発に取り組もうとしていたからだ。

午前中の内にクロトスは新メニューのある程度の骨組みを考えながらいくつか試作品を作ってみた。

試作品をテーブル席に並べ、次に何を作ろうか考えていると閉店の看板がかけられていたはずのドアのベルが鳴った。

開かれたドアから入ってきたティニア、リン、エルはなぜか機嫌よさそうにクロトスに挨拶を交わす。

というのもクロトスは前もって3人に今日のの新メニューの試食を頼んでいたのである。

3人にとっては無料でクロトスのおいしい料理が食べられるので2つ返事で了承した。

ちなみの今回の3人は城脱走の際、烈火のような勢いで脱走を食い止める兵士を骸（全治1ヶ月以上）にし、その時の3人の表情は獲物を求めて涎を垂らす、にやけ笑いの般若のようであったそうだ。

クロトスにとってもその日はウリエルもグラムも隣町まで買出しに行ってもらっているので自分以外の人に味の感想を聞きたかったので都合が良かった。

休業の喫茶店は事実上、3人の貸切状態で新メニューから思いつきのものまで試食してもらい、色々と感想を聞いていた。

買出しに出ていたウリエルとグラムも帰宅すると3人に混じって味の批評をしながらも世間話をしていた。

世間話の内容は色々あったが問題はその話が先日の試合の話になった事だ。

ウリエルがクロトスをブツ飛ばした事はティニアとエル、リンの脳

裏にしかと焼き付けられていた。

赤くなつて言い訳しているウリエルにエルが事の発端となるとある一言がなければこのような惨劇は起きなかったであろうに……

「おにいちちゃんとウリエルさんってどっちが強いの？」

その一言にとある3人が固まった。

それはクロトスとウリエルとグラムである。

と言つてもクロトスとウリエルはすぐに何事も無かつたかのように振る舞う。

クロトスはカウンターで新たな配合のブレンドコーヒーを淹れ、ウリエルは優雅にコーヒーを飲む。

……が、グラムは尋常じゃないほどに冷や汗を掻き、口元が引きつっている様に見える。

「でも、ウリエルさんって試合の時にクロトスを倒したわよね。」

「お願い。それは忘れて……。」

ティニアの言葉にウリエルはまるで生き恥をさらしたというように顔を真っ赤にしてテーブルに突っ伏す。

「……でも、クロにいはオルガさんを倒した。」

リンの囁きとも言える小さな言葉だったがカウンターでコーヒーを淹れていたクロトスはうつすらとにやける。

「どつ、どちらでも良いではないか？それよりもこのパスタはいけるぞ！」

グラムは慌てて話題を変えようと近くにあったパスタの皿を口いっ

ばいに頬張るが口に入れすぎて喉が詰まった。

「そういえば昔はよく手合わせしたっけ？」

「そうね。何度か手合わせはしたけど色々あって決着はついていないわね。」

そのグラムの苦労ももはや手遅れのようにだ。

2人が笑顔なのに目が笑っていない。

「最近…ウェイトレスの仕事が結構楽しくて戦闘訓練してなかったのよね。」

テーブル席のグラムの隣でコーヒーを飲んでいるウリエル。

グラムがチャットとウリエルのコーヒーカップの中を覗き見るとまるでマグマのようにコーヒーが煮えたぎっていた。

「そういえば、この国にきてから弱い奴としか戦ってないんだっけ。ああ、オルガは別だけど。」

そう言っ指をぱきぱきと鳴らすクロトス。

「だが、2人が本気で戦うにしても場所が…。」

「グラム。忘れたか？」

そう言っクロトスは床を指差す。

正確には喫茶店の地下。

グラムはクロトスが何を指しているか気づき、絶望する。

「下に何かあるの？」

「そういえば、ティニアは知らなかったな。この店の地下には秘密

の部屋があるんだ。」

「何それ！？行きたい！」

ティニアは目を輝かせるがそのティニアの反応にグラムは殺意に似た感情を抱く。

喫茶店の前を歩く人がみたらショック死してもおかしくないオーラと放ちながらティニアを睨むが誰も気づかない。

「ああ、いいぞ。…ウリエルもそこで久しぶりに手合わせ願いたいんだが？」

クロトスはウリエルのほうを見る。

その表情は誰が見ても彼が何を考えているかわかるであろう。

彼は【挑発】している。

もちろんウリエルはそれを知りながらも笑顔で返す。

「ええ、雌雄を決しましょうか。エルちゃんとリンちゃんも行かない？」

「行くっ！！」

ティニアは地下空間に興味を持ち、エル、リンは2人の本気の戦いが見れるというので3人共が目を輝かせる。

グラムは気づかれないように喫茶店から脱出しようとこっそりと出口に向かう。

後少しという所で首筋がヒヤリとした。

例えるなら死神に首狩りの鎌と首にかけられ、体中を鎖で拘束され、周りを地獄の餓鬼に囲まれたような状況の方がましと言える様な絶対的な死の気配。

後ろから聞きなれたはずなのにいつもとは絶対に違う声がかけられた。

「…………グラムには審判を頼もうかな。」

「そうね。頼りにしてるわよ。」

それはグラムにとって【死刑宣告】であった。

矛先がこちらに向いた瞬間、全速力でグラムは出口に向かう。

扉に触れるか触れないか、いや、ブチ破ろうかという所で視界が真っ暗になった。

さらに何かに押し込められたかのような圧迫感。

というよりもこれは……

「……って袋に入れたら窒息しちゃうでしょ!？」

クロトスは【創造】した布の袋（グングニルの槍でも簡単には貫通はしない）を逃げようとしたグラムに被せ、袋の口を縛ってサンタクロースのように持ち上げた。

慌てたティニアの言葉にそれもそうかとクロトスは一旦、袋を床に降ろす。

そして、袋の口を緩めるとおもむろに手をつ突っ込む。

クロトスは袋の中でもがいているグラムの頭を上からがしつと驚掴みにした。

それを頭だけをむりやり首の所まで出し、首の所で袋の口を縛る。

袋から頭だけ出された状態のグラムの見た目はダルマのようである。恨めしそうに涙目でグラムはクロトスを睨むがクロトスはクロトスは無視してウリエルに清らしい笑顔でサムズアップする。

「これで問題なし♪」

「そうね。行きましようか♪」

今にも歌い出しそうにご機嫌なクロトスとウリエル。

クロトスは暴れるグラムを先ほどに同じように肩に担ぎ、ウリエルはその間に店の中心の柱を3回蹴り、怪しげな呪文を唱える。唱え終わると柱を中心とした床から突如として穴が現れる。

そこに一切の躊躇もなく、首から下が袋に包まれて身動きの取れないグラムを…

「いつけえ〜〜〜〜!!!!!!」

全力で思いっきり投げ落とした。

片手でグラムの頭を持ち、叩きつけるように穴の中に投げ落とす。

「いゝやゝだあああああつ……………!!」

グラムの悲鳴が徐々に小さくなる。

突然だが井戸の深さを調べるために石を落とすという方法がある。

これは石を落としてから水に落ちる音がするまでの時間により、深さを知るというものだ。

さて、グラムの悲鳴が数秒続き、未だに衝突音がしない。

そのことからこの穴はかなり深い事がわかる。

さらにグラムは両手両足が袋の中であるので自由に動けない。

……………無事に着地できるであろうか？

それに気づいたリンは心の中で大会の時に宣戦布告したライバルの冥福を祈った。

ちなみに、ティニアはあまりの光景に呆然としている。

エルはいきなり空いた穴に興味津々で目を輝かせながら穴を覗く。

「それじゃあ私達も行きましょうか。」

「へっ？」

そう言っただけでウリエルはティニアの手を取る。

いきなり手を取られたティニアはあつけに取られるがウリエルは気にせずそのままティニアの手をぐいぐいと引っ張り、穴に近づく。さすがに今の光景を見て、ティニアは嫌な予感がする。

「ちよつ、ちよつと待って！まさか！？」

「先に行ってるわね。」

ウリエルはクロトスにそう言うとティニアの手を引きながら穴に飛び込んだ。

「いやあああああつ……………！」

穴に吸い込まれていく2人。

ティニアの悲鳴もしばらくすると聞こえなくなった。

顔を青くするリンとエル。

さすがのエルもこの光景には恐怖した。

グラムの人に恐怖を抱かなかったのは単に穴に興味があり、あまり見ていなかっただけ。

「次は俺達だ。」

そう言っがしつとリンとエルの手を掴む。

その手が2人にとって死神の手に見えたのは無理がない。

この日、一番幸せだったのは部屋の隅っこで日向ぼっこをしているウルだったのかもしれない。

………

………

…

6人はクロトスがグラムとウリエルを召喚した地下空間にある草原にいた。
ここに叩き落されたグラムは軽い打ち身と土まみれになるだけで済んだ。

グラム以外の5人がここに降り立った時は地面にクレーターが出来ており、その中心にまるで隕石のようにグラムは目を廻しながら気絶していた。

一方、ティニア、リン、エルは顔を青くし、髪も乱れていた。
クロトスに指摘されると青い顔を赤くし、手で一生懸命直していた。
そして、今現在。

草原でクロトスとウリエルは距離を取り、対峙していた。

「…やめる気はないか？」

袋から解放されたグラムはいやいやながらも2人に尋ねる。

「「無い！」」

「はあ…、仕方ないか。3人とも来い！」

ため息を吐き、グラムはティニアとリン、エルを連れて2人から離れる。

未だに落下してきた時の恐怖が残っているのか特に何も言わずにグラムに着いていく。

3人を引き連れたグラムは少々離れた丘に誘導し、自分達を囲むように出来る限りの強固な結界を張る。

そして、覚悟を決めるように3人の方を向く。

「皆に約束してほしい事がある。」

「何、グラムさん？」

エルが問うとグラムは真剣な顔で言う。

「何があるうとここを動くな。悲鳴をあげるな。2人に声をかけるな。以上を何があるうと厳守しろ。」

「…もしかして、危険なの？」

リンがごくりと唾を飲み込む。

他の2人も緊張のあまりに顔が青ざめる。

「あの2人が戦うと下手したら…国が滅ぶ。」

グラムの言葉に一瞬の静寂が起きる。

恐る恐るティニアが引きつった笑みで言葉を返す。

「……まっ、まさか…。」

グラムはどんよりと影を背負って泣きそうな目で首を振る。

「始まればわかる。…だからイヤなんだ。あの2人が戦うと我もとばつちりを食らうからな。」

グラムはそう言うとき重い足取りで2人の所に向かう。

グラムが2人の所に戻るとクロトスは右手に刃から柄まで真つ白の刃渡り30センチほどの短剣、左には逆に真つ黒な短剣を構えていた。

ウリエルは自分の長年の武器である燃えるように真つ赤な刀身の剣・盾を構えている。

グラムは冷や汗をかきながら仕方なく嘆願するように言う。

「せめて、周りに被害を出さぬように頼むぞ。……始めっ!！」

宣言すると同時に2人は一瞬で相手に詰め寄り、先ほどの立ち位置のちょうど中間で互いの刃を交差させる。

グラムは2人に背を向け、全速力で先ほどの結界に向かう。

グラムの耳には後ろから聞こえるさまざまな数の金属音が響く。

遠くの結界内から2人の戦いを観戦するティニア達でもその凄さはわかった。

お互いが距離を取る事もなく、残像が残るほど剣戟を幾重にも重ねる。

小細工が一切無い火花が弾けるほど重く、疾く、純粹な剣戟。

一步も退くことなく、正面からぶつかり合い。

その中心部は暴風、嵐といったように荒々しい。

遠くから見る3人でも引かれるものがある。

「はあっ!!」

ウリエルの気合の入った声がグラムの後ろから聞こえた。

反射的に後ろを見るとウリエルがクロトスから距離を取り、離れた場所にいるクロトスに向かって剣を振り下ろした所だった。

その振り下ろした剣からは噴き出すように凄まじい炎が放出され、

クロトスを襲う。

それをクロトスが飛び超えるように避け、避けた炎が地面に接触する。

その途端に接触した場所から巨大な爆発が起きる。

グラムは咄嗟に両腕を構えるがその爆発の衝撃波に吹っ飛ばされた。飛ばされたグラムは地面をゴロゴロと転がり、軽く傷を負ったがそのまま運良く結界内に入った。

素早く立ち上がったグラムは魔力で結界を全力で補強する。

チラッと後ろを見るとティニアとリン、エルはぼーぜんとしていた。無理も無いだろう。

3人がクロトスの本気の実力を見たのはこれが初めてである。そもそもクロトスがこの世界に来て、本気を出した事など無い。大会など兎戯に等しい。

明らかに人間離れた（人間ではないが…）クロトスの実力。それに拮抗しているウリエル。

目を疑うのも無理が無い

再びグラムはクロトスとウリエルの方を見る。

クロトスは緩急を付けながら短剣で突き、振り下ろし、払う。

両手の白と黒の短剣で凄まじいスピードで首を狙ったかと思うと軌道を変えて剣を握る右手の手首を狙い、あたかも流星群のように放つ。

しかし、ウリエルはそのほとんどを楯で捌き、クロトスの剣戟の間を縫うように炎を纏った剣で斬りつける。

その剣が纏った炎はかすただけでも相手を包み込む。

それこそ、ただの人間であれば一瞬にして灰塵と化すほどの灼熱。実際に先ほどから刃を交えているクロトスの剣は刃こぼれと若干ではあるが溶けている。

とは言ってもウリエルの剣は神器の中でも最上級の物。

クロトスが【創造】したのはそれより幾分劣る双剣。

それでも神器には違いないのだが簡単にこのようにボロボロにできるような代物ではない。

クロトスも負けじとさらにスピードをあげるが中々斬りつける事ができず、仕方なく距離を取る。

「【万物創造《鉄球》……】！」

クロトスは自分の周りに数多の鉄球を【創造】する。

クロトスの周りには数々の直径50センチほどの黒光りする鉄球がフワフワと浮いている。

ウリエルは追撃する事も無く、その場で剣を構える。

そして、クロトスが手を軽く振るとその数多の鉄球がウリエルに殺到する。

当たれば人を一瞬にして肉塊に変えるであろうスピードでウリエルに迫る鉄の流星群。

苦い顔をするウリエルは横に走りながら自分に当たりそうな鉄球だけを剣で切り落とす。

普通の剣であれば切れることなく、むしろ剣のほうが砕けていたであらう。

しかし、ウリエルは際限なく襲い来る数多の鉄球を自分に当たるものだけ切り落とす。

クロトスはその場から動かずにひたすら【創造】し、鉄球を飛ばす事でウリエルの体力を削る。

その意図に気づいているウリエルは舌打ちをすると目の前の鉄球を払い落とすと同時にクロトスに向かって炎を放つ。

炎は飛び交う鉄球を飲み込み、ドロドロに溶かしながらクロトスへと向かう。

クロトスは仕方なしに【創造】を中断し、炎をさつと避ける。

そして、再び【創造】を始め、自分の周りに新たな鉄球、さらには先ほど叩き落された鉄球の破片を宙に浮かせる。

再びそれをウリエルに向けようとするが遅かったようだ。

「【アンタレス】！」

ウリエルは魔力を自分の剣に流し込み、剣に魔力を変換して生み出した熱エネルギーを溜め込む。

溜め込まれた熱は剣が纏う炎の火力を上げ続け、次第にそのエネルギーが光となって輝き出す。

赤く輝いた刀身は徐々に炎を吸収しながらさらに熱を溜め込む。

眩しいほどに輝いたその剣をウリエルはズカッと地面に振り下ろす。剣が突き刺さった場所を中心に目が潰れるほどの光が放たれ、熱で

周辺一帯の地面が溶け出し、辺りを灼熱の業火が包み込む。業火は津波のように辺りを蹂躪し、そこから噴き出す炎は大蛇のように跳ね回る。

業火は凄まじいスピードで広がり、数多の鉄球を液体状にまで変える。

クロトスは避けるべく大きく上に飛び上がった。

業火の波を飛び越すとそこに灼熱の大蛇達が襲う。

急いで【創造】した空中の空気を固体化した台を蹴り出し、噴き出す大蛇達の隙間を通る。

触れるだけで皮膚が焦げ、呼吸するだけで肺が焼かれるようだ。

クロトスが先ほどまでいた場所も業火に包み込まれ、草原だった周りはウリエルの立っている場所以外のほとんどをマグマと化す。

比較的安全な高さまで飛び上がり、固定化した空気の台に乗ると歌うように言葉に魔力を乗せて呪文を唱える。

「《白き月は孤独を語る。夜の闇は白銀の森に賛美歌を歌った。》」

クロトスは詠唱しながら懷から液体の入った小瓶を取り出し、地面にいるウリエルに投げつける。

「《生まれし世界は産声をあげ、死する魂は星を巡る。》」

ウリエルは警戒し、剣から炎を放って迎撃する。

「《凍る魂は儚い夢を見る。目覚めぬ眠りには幻想を送ろう。》」

小瓶は炎に接触して割れた。

そこにクロトスが予め封じ込めていた魔法の風が暴風となって周辺に吹き荒れる。

例えるなら風の爆弾といった所か、まるで小さな台風のようなのである。

それが噴き出す炎を巻き込みながら灼熱の嵐の化し、辺りを蹂躪する。

「《白銀の夢。それは魂をも凍らす幻。》」

ウリエルは風に吹き飛ばされないように地面に剣を突き刺す。

髪が焦がされるが気にせずには目はクロトスから離さない。

そして、反撃しようにも詠唱が終わる。

「《【氷幻の白夜】》！」

クロトスが叫ぶように唱えるとクロトスを中心に発する絶対零度の冷気があたりの温度を急激に下げる。

クロトスの目の前でその冷気の一部が集まり、まるで植物の種のような形を形成する。

その冷気が凝縮された【冷気の種】が地面のマグマへと重力に引かれながら落下する。

それが地面に接触した瞬間、そこからまるで薔薇の茨のように氷柱が中心から外に向かって生えるように侵食されていく。

灼熱のマグマが瞬く間に凍り付いていく。

凍りついた場所から天を突き刺すような数多の鋭い氷柱が生え、そこからさらに茨を伸ばす様にマグマを侵食していく。

瞬く間に地面一帯が針山のように鋭い氷柱で覆われた。

クロトスはぐるっと周りを見渡すがウリエルの姿は見当たらない。

そのクロトスも多大な魔力の消費により肩で息をするほど疲労している。

吐く息は白く、世界中が凍りついたほどの静寂に包まれる。

「《【氷棺への葬送曲】》！」

クロトスの言葉と共に指を鳴らす音が凍った静寂な世界に響くと辺りの氷柱が音を立てて崩れ落ちる。
1つの氷柱が崩れるとそれに巻き込まれるように周りの氷柱が崩れる。

どこか世界の滅びを創造させるような神秘的で儚くて残酷な光景。しばらくすると全ての氷柱が崩れた。

地面は大きな塊や鋭い槍のような氷塊で埋め尽くされた。再び辺りを凍った静寂が包み込む。

一切の音が無い。

…音が凍った。

…空気が凍った。

…時が凍った。

…世界が凍った。

しかし、クロトスは警戒を怠らない。

まるで少しでも動けば即【死】を意味するかのように…。

「【エル・ダンジュ】！」

ウリエルの声と同時に氷に包まれた地面が一瞬で溶け、辺りを濃い水蒸気が包む。

一瞬で包み込んだ者を黒焦げにするような高温の水蒸気にクロトスは懐から新たな小瓶を出し、風で全て吹き飛ばそうとする。

小瓶を地面に投げ落とすが落下中に何かに打ち落とされ、風が暴発する。

近くで爆発したために風の影響をもろに受けるクロトス。

耐えてやり過ぎそうとするが正面から飛んできた何かに肩を貫かれた。

痛みと熱さに耐えながら見てみると羽の形をした炎が肩に突き刺さ

っていた。

その羽と同じものが先ほどのクロトスが鉄球を【創造】して飛ばした時以上のスピードで次々と高温の水蒸気の間から飛んできた。暴発した風で身動きの取れないクロトスは体に十数本ほど刺さる。刺されると同時に傷口が焼かれ、熱いのか痛いのかさえわからない。風の嵐が止むと同時に炎の羽が止む。

と同時に刺さった羽が一斉に爆発した。

一つ一つの破裂する威力が大きく、クロトスは炎に包まれる。

風で吹き飛ばされた水蒸気の影響から現れたのは炎の天使。

大きな炎の翼を羽ばたかせるウリエル。

その姿は荒々しく、神々しく、美しい。

しかし、よく見ると所々から血を流し、体中が凍傷に侵されている。今にも力尽きて墜落しそうなウリエルはひたすら前を、クロトスのほうを見る。

爆発がはれるとウリエルと同じく満身創痍のクロトス。

血を流し、ウリエルとは逆に火傷に侵されている。

息を切らすウリエルが音を立てて羽ばたくと翼から羽が抜け落ち、それがクロトスに向かう。

紅い紅蓮の炎の羽根。

血と炎を纏う天使が羽ばたくたびに幾重にも、幾重にも途切れることなく、神の王を襲う。

数多の火の羽根に対し、クロトスは【創造】する。

何物も通さぬ強き風、全てを弾き返す拒絶の風、自分の身を守る優しき風、こんな楽しい戦いを終わらせないために必要な風の衣を。

「【万物創造《風の衣》】」

【創造】された風が創造主を守るようにクロトスを包み込む。

風に衝突した羽根は霧散し、逸らされた羽根のいくつかは大地を焦がし、2人の戦いの影響を奇跡的に受けなかった森を焼く。

この行為が無駄だと知るとウリエルは剣を構え、羽根を羽ばたかせながら凄まじいスピードでクロトスに迫る。

風が止むとクロトスはそれを知っていたかのように既に剣を構えていた。

先程とは違い、神界ですら売れば値が付けられないような最高ランクの剣。

例えるなら銀雪。

神秘的な程の白さの刀身はこのクロトスが作った地下空間内の擬似的な太陽の光を浴びるとクリスタルのように輝く。

そして、再び互いの剣が交差する。

お互いが笑みを浮かべて、この楽しい宴をそう簡単に終わらせてなるもんかと歓喜に震えながら。

この宴は更に数時間続いた所で互いが力尽きた。

決着は着かなかったが共に満面の笑みを浮かべていた。

………

………

…

《ちなみにその他の人はというと…》

「くっ、結界が保たぬぞ！全員、死にたくなかったら結界が破られると同時に死に物狂いで逃げろ！」

「イヤー！イヤー！イヤー！」

神の王と炎の天使の戦いの余波で既に結界はボロボロ。

周りは焼け野原。

所々にクレータとマグマの海がある。

結界が揺れるたびに恐怖でティニアが頭を抱えて悲鳴をあげる。

「…あの二人だったら大陸の一つぐらい簡単に消滅させられるんじゃない…？」

リンは顔を青くしながら震える足を抑えて言う。

実際はこの二人だったら星の形を変えるぐらい可能かもしれない。

「キレイイ」

エルは戦いで生じる見た事ない魔法を見ながらまるで花火を見ているかの如く楽しんでいる…ようにも見えるがその目は虚ろな瞳であった。

「イヤー！結界にヒビが入ったー！！！！」

「だから嫌だったのだ！あの二人が戦うといつもいつも！」

「…神よ、懺悔致します。王様、王妃様には言葉では言い表せない程感謝しています。出来れば…死ぬ前に…死ぬ前に…、一度で良いから…父と…、母と…呼びたかったです。」

「あつ、今度の魔法もキレイ、今度お兄ちゃんに魔法を教えてもらおうかな？」

結界が破られると同時に全員が二人が力尽きる数時間逃げ続けた。

奇跡的に四人共が死なずにすんだ。

そして、二人が力尽きて倒れた所で満身創痍の二人を涙ぐみながらリンチ（気がすむまでバキバキと蹴り続けた）にかけた。

それがトドメとなったかは知らないが喫茶店は二週間程閉店の看板が下がり続けた。

番外 力ある神々による混沌の一日（後書き）

久しぶりの投稿です。…ごめんなさい。

短編の投稿、卒業式、就職関係e t c…と言いつつたくさんありますが改めて申し上げます。

申し訳ございませんでした！

引越s h o o t…がありますので落ち着くまでまたこのような状況があるかもしれません！必ず完結はさせます。

これからもよろしく願いいたします。

b y
蛹

神と魔剣の悪巧み（前書き）

引越します。

その後、事情があつてしばらくパソコンに触れられません。
次の更新は来月になりそうです。

神と魔剣の悪巧み

とある日の深夜。

明日の仕込みを終えたクロトスはゴソゴソと灯りの点いていないキツチンの戸棚を探っていた。

クロトスの手元にはぼんやりと青白く光る光球が暗い戸棚の中を照らしている。

クロトスは戸棚の中から使っていない皿、調理器具等を次々と戸棚から取り出している。

取り出した物は崩れないようにきちんと整理しながらもくもくと作業している。

すると、普段は皿や調理器具等の影で見えなかった戸棚の中の壁と接する奥の板が見えてくる。

ほとんどの人がそれを見ても違和感すら感じる事もないだろう。

クロトスはその板に人差し指を突き立て、さらさらっと文字を描くかのようになぞる。

ある程度その動きを続けていたが ある程度になるとボソツと呟く。

「【解】」

その呟きと同時に壁板が障子のように左右に開かれた。

クロトスはその手に手を差し込み、ゴソゴソと手で探る。

しばらくそうしていると目的の物を手に掴み、引っぱり出す。

クロトスが手に持っているのはお酒の瓶。

年代物でこの国でも極上品として扱われるような高級品である。

クロトスはもう片方の手を同じく戸棚の奥に手を入れ、同じく先ほどのお酒と同価値ぐらいある別の種類のお酒を取り出す。

目的の物を手に入れた喜びで口元をほころばせる。

「魔法と万物創造を駆使した秘密の隠し棚……。主のそういう能力はある意味尊敬に値するな」

ピキッとクロトスの動きが止まる。

それでも両手のお酒はしっかりと握っている。

錆び付いた歯車のように音を立てながら首だけ後ろに向ける。

クロトスの後ろにはピンクのゆったりとしたネグリジェを着たグラムがキッチン内の中心に置かれたテーブルの上に腰掛けていた。

薄暗いキッチンに銀髪の少女。

妖しげな美を持つ少女は妖美に微笑む。

「今宵はウリエル殿の不在をいいことに秘蔵の美酒に酔いしれよう
と？」

無言でクロトスはグラムの目からさつと視線を外す。

グラムはテーブルから降り立ち、音を立てずにクロトスに近寄る。

「水臭いではないか。我は主に絶対の忠誠を誓いし剣。我は我の全てを主に捧げ、主の喜びも苦しみも共有する存在。いわば我と主は一心同体ではないか。つまり、主の楽しみは我の物でもある」

クロトスは冷や汗をかきながらこっそりとお酒を自分の背後に隠そうとする。

しかし、クロトスの目の前まできたグラムはクロトスの頬にそっと手を当て、自分に向けた。

クロトスの目の前にはグラムがいる。

後、数センチ近ければ接触する距離。

2人はじっと見つめあう。

今度はクロトスも視線を逸らさない。

「…良いのか？ウリエル殿にこの事を話しても？」

目線が逸れた。

グラムの囁くような声にビクッと体を硬直させ、さっと視線を逸らした。

「我らが元の世界に戻る方法を探しに他国に行ってるウリエル殿が不在中の間の飲酒は禁止とウリエル殿に言われたであろう？ウリエル殿が見張っていないと羽目を外して飲みすぎる主を心配しての事であろうに…。これがばれたらどうなるであろうな？」

「……………対価は？」

しばらくの沈黙の後、ボソッと呟くクロトス。

「我は主と喜びを分かち合いたいだけだ。…その酒とうまい肴というな」

クロトスはしばらく考えるが両手にお酒を持ったまま降参のポーズをし、ため息を吐く。

「しかたない。簡単なものしかないぞ？」

「かまわん。主の料理は全てうまいからな」

ニヤリと勝利の笑みにしては少々黒い笑顔を浮かべるグラム。

ちなみに、グラムもウリエルに禁酒を言い渡されている（共犯）。

「しかし、戸棚の中に隠し棚を作っていたとはな。しかも、魔法で封印、万物創造でカモフラージュもしているとは…。ウリエル殿も気づかないわけだな」

グラムは姿勢を低くし、戸棚の奥のさらに奥の空間を見ている。

「やっぱり出かける前に調べられていたか」

「2、3本は押収されていたぞ」

クロトスはイタズラが成功した子どものような笑みを浮かべた。

「それはダミーの安酒だ。ほかの物はこの店の至る所に隠してある」

「…本当にそういう能力はある意味尊敬に値するぞ」

「執務とか政治とかは飽きるからな。脱走、イタズラ、隠蔽技術は子どもの頃から得意だぞ。それよりも飲ましてやるからグラスぐらいは運べよ」

「イエス、マイ マスター」

グラムは戸棚からコップを取り出し、クロトスからお酒のビンを受け取る。

そして、キッチンから出て行った。

クロトスはささつと隠し棚を封印し、皿、調理器具を収納していく。片付け終わったら手を洗って冷蔵庫から喫茶店を出す料理等で余った材料で簡単なツマミを作る。

それでも味には妥協せずにお店で出せる程の代物である。

それが終わったらトレイに乗せてグラムが待つカウンターへ向かう。グラムはカウンターで空のコップを器用に指でくるくると回していた。

どうやらクロトスを待っていたようだ。

「先に飲んでなかったのか？」

「主より先に飲むような薄情な剣になったつもりはないぞ」

少々ムツとした顔になるグラムに苦笑しながらクロトスはカウンタ

ーテーブルに料理を置く。

グラムはその間に2つのグラスにお酒を注ぐ。
グラムが注ぎ終えた所でクロトスも料理を置きおえ、グラムの隣に腰をおろす。

「それでは…」

お互いがグラスを持った。

ここに共犯者達のささやかな悪事がなされた。

「この鬼の居ぬ間のささやかなる平穩に」

「主の喫茶店と奇妙な友人のいるこの世界に」

「乾杯」

グラスの澄んだ音が喫茶店に響く。

2人の喉を通る久しぶりの酒の味は中々のものであった。

「中々の物だな」

「鼻屑にしている酒屋が安くしてくれたんだ。…しかし、ネグリジエに酒は似合わないぞ」

グラムはネグリジエのままカウンターでお酒を飲んでいる。

ピンクのネグリジエはゆったりとしているがそれでもグラムの突き出た胸はきつそうな印象を受ける。

下着が若干ではあるが線が浮き出て見える。

「この前リンとエルと一緒に購入したものだ。動きにくいが入っている。」

「もはや完全な《女の子》だな。」

「まったく、太古の時代より魔剣と称された我が…。」

苦笑しながら酒を煽る。

「後悔しているか？」

クロトスの問いに先ほどとは違う笑みを浮かべる。

「いや、感謝しているぞ。ただの持ち主の魂を喰らい、斬った相手の魂を喰らうための殺戮道具の我がこうして酒の味というものを知ることができた。主の剣であることを心より誇りに思う」

魔剣【グラム】。

聖剣として産まれた魔剣。

聖剣は数多の悲劇を見た。

その始まりは己の奪い合いだった。

聖剣は主のために数多の血を吸い、魂を喰らった。
その主は復讐のために聖剣を振るった。

聖剣は傷つき、破片となっても蘇った。
新たな主が殺すために、奪うためという理由で。

その剣は聖剣であつた。

聖剣は悲劇を知った。

聖剣は心の闇を知った。

聖剣は絶望を知った。

いつしか聖剣は魔剣と呼ばれた。

いつしか聖剣は魔剣になった。

魔剣となるしかなかった。

魔剣は一人の男に会った。

男は神々の王だった。

神々の王は変わった男だった。

変わった男はその力で自分を女へ変えた。

魔剣は魔剣では無くなった。

魔剣は神々の王のためだけの剣となった。

絶望に染まった聖剣だった魔剣は違う何かに染められた。

悲劇であり、喜劇でもある物語。

魔剣の前には目を丸くする神々の王がいた。

「なら良い」

クロトスも酒を煽るが耳が少し赤い。

酔いのためか別の何かか。

「ただ、おしゃれというものは良く理解できないな。わざわざ動きにくい服を着るなど邪魔なだけであろう?」

「今のお前は《女の子》だからな。そういうものなんだよ。《男の子》の方が良かったか?」

「…それはそれで困るな」

そう言ってグラムはコップを置き、クロトスの膝の上にまたがる。クロトスの首に両手を巻き、じっと見つめる。

「私の今一番興味あることが実行できなくなる」

「…あまり良い予感がしないんだが」

苦笑するクロトスの頬をグラムが撫でる。

「原理も…方法も調べた。後は実行と相手だ。まあ、相手については主以外考えていないがな」

「とりあえず降りろ。酒が飲めん」

その言葉にグラムは笑みを浮かべた。

「それはすまない。今飲ませてやろう」

そう言つてグラムはカウンターからグラスを持つと中身を口に含ませる。

そして、目を瞑り、その口を徐々にクロトスの口元へと…

「クロトス！起きてる！？」

「…邪魔が入ったな」

喫茶店のドアがドンドンと音を立てる。

外からは2人にとって実に心当たりのある声が聞こえてきた。

グラムは仕方なく口に含んだ酒を飲み込み、不満を告げる。

「口移しなんて何処で覚えた？」

後、数秒遅れていたなら実現されていたであろう自分の口に含んだ酒を相手の口に移すという口移しが行われていたであろう。グラムはその問いに含み笑いで答える。

「我と志を同じにする者だ。主との【子作り】というな」

「…………ハア」

頭を抱えるクロトス。

クロトスは神王という立場であり、しかも、顔、性格も申し分ないものを持っている。

そのために神界はもちろんのこと、魔界、異世界等からの求婚の申し出は後を絶たない。

実際にクロトスにはグラムの言う【志を同じにする者】など心当たりが多すぎる。

中には既成事実を作ろうと無理やり（相手によっては軍隊を使用…）という者もいる。

「良いではないか。主であればハーレムという全ての男の野望を叶えられるぞ？他国の王女達の求婚を受ければ神界は巨万の富を得られるぞ」

「…グラム。冗談でもそのような事を言うな」

クロトスがグラムを睨みつけると同時に研ぎ澄まされた刃のような殺気がグラムを貫く。

「…怒るな、主よ。今のは我が言い過ぎたのは認める。しかし、主が《創造》しただけあってこの体はなかなか夜伽向きだと思いがな」

グラムは肩までかかった窓から入る月の光でキラキラと光る白銀の髪を後ろになびかせ、胸をクロトスに押し付けるように強く抱きつく。

上目使いでクロトスを見つめるグラムは今まで数々の女性（ごく一部男性…）に誘惑されているクロトスでさえも来るものがあつた。しかし…

「ちよつとく？クロトス、寝てるの？起きなさい！！」

「…本当に邪魔だな。」

ドア越しで見えることはできないがその者がいる方角を睨みつけるグラム。

クロトスは苦笑しながらもドアの方に呼びかける。

「今開ける！」

「早くく、寒いく！」

クロトスはグラムを抱え、隣の席に降ろす。

「あやつが邪魔しなければ今頃は夜伽の真っ最中であろうに」

「おいおいっ！？」

不貞腐れるグラムの頭を撫でながらクロトスはドアへと向かう。

「はくやくく！」

段々と声が涙声になってきた。

クロトスが鍵を開けると同時にそれは店内に雪崩れ込んできた。

「ふうく」

フード付きのコートのような服を着た者は今まで顔を隠していたのが深くフードを被っていた。

しかし、下から見えているクロトスには相手の顔は丸見えだった。

「…いい加減に退け、ティニア」

「あつ、…ごめん」

仰向けのクロトスの上に馬乗りになっているティニアは氣まずそうに退ける。

ティニアが雪崩れ込んできた時にドアが当たったクロトスはそれにバランスを崩し、さらにティニアの体当たりのためにもつれ込んでこのような状況になった。

「…ティニア殿はなぜこのような時間にそのような格好で来たのだ？」

グラムは少々苛立ち混じりでティニアに聞いた。
ティニアはコートを脱ぎながら答えた。

「ちょっとクロトスに内密のお願いがあつたから城を脱走してきたの」

さらりと問題のある発言をするティニア。

「…まあ、いつもの事か」

「本当はそれで済ましてはいけない事だとは思うがな。それで内密のお願いというのは？」

クロトスのあきらめの声につっこみを入れながらも話を進めるように促すグラム。

ティニアはコートを近くのテーブルに置き、クロトスの方にずかずかと近づく。

クロトスの目の前に来たティニアはクロトスの両手を掴み、必死の目で懇願した。

「私に……お菓子の作り方を教えて!!」

神のお料理教室（前書き）

やっと復活しました。

先日、どたばたな生活が落ち着きました。

これで今まで通りのスピードで投稿できそうです。

とは言っても私の投稿スピードって遅いんですね。

お待たせしてた方々、申し訳ございませんでした。

書くのも久しぶりですので感が鈍っているかもしれませんが未永く
よろしく願います。

以上、作者の蛹でした。

神のお料理教室

夜中に突然やってきたティニアに対し、クロトスは落ち着かせるためにとりあえずカウンター席に座らした。

グラムは店の奥でコップに水を注ぎ、寒さと疲れで顔を赤くし、息を切らすティニアに差し出した。

ティニアはそれを奪うように貰うと王女としての気品も感じさせないような、例えるならば酒場での親父のような一気飲みですぐさまコップの中を空にする。

ティニアは空になったコップを無言でグラムに差し出す。

グラムが何かを言う前にクロトスは苦笑いでグラムを制し、代わりに自分がコップを受け取り、ティニアに渡す。

ティニアはそれを飲むと幾分落ち着いたのかここに來た訳を話し出した。

聞くところによると1週間後にリン、エルの誕生日があるらしい。

ティニアは日頃の感謝に2人にプレゼントを贈りたい。

しかし、そのプレゼントに問題があった。

ティニアはお金が無い。

正確に言えばティニアが自由にできるお金が全くないのである。

今までは欲しい物は自分の世話係に頼めば大半の物は手に入った。

そのためにお金は今まで必要になったことがなかった。

だが、世話係が買った物を誕生日プレゼントにするとするのは2人は気にしないだろうが自分は気にする。

どうせなら心をこめた物を贈りたい。

しかし、お小遣いというものをティニアは一度たりとも貰ったことなど無い。

これでは自分は2人にプレゼントを買うことが出来ない。
では、手作りではどうか。

編み物は苦手。

歌は子どもっぽい。

絵は問題外。

そもそも材料を買うお金すら無い。

そこで思いついたのがクロトスの喫茶店。

材料、講師付きに2人に秘密で作業できる。

これ以上の条件は無いということで2人はもちろん、城の人には一切秘密でここに来たということらしい。

「……あゝ、とりあえず訳はわかった。まあ、わかったにはわかったんだが……なんでお菓子なんだ？」

「無論、あの2人がケーキみたいな甘いお菓子が好きだからよ」

いかにも良い考えでしょう？と言いたげな笑顔で言うティニア。

「んで、ちなみに料理経験は？」

「王女の私が料理した事あると思う？」

いや、俺に聞くなっと思いつつもクロトスは言葉には出さない。

「……どんなお菓子を作りたいんだ？」

「ケーキにしようかなって考えてるんだけど。それに何を作るかも決めてるし」

あまり良い予感がしないが聞かないわけにはいかないだろう。
しぶしぶ聞く。

「……何だ？」

「お城で食べたケーキなんだけど。名前が『ドボシュ・トルテ』だったかな？」

「帰れ」

初心者とかという問題ではない。

『ドボシュ・トルテ』は家庭で作るようなものではない。
フォークで木を切り倒そうとしているに等しい。

「主、その『ドボシュ・トルテ』とは何だ？ うまいなら作ってくれ」
「グラム、無茶言うな。あれはとてつもなく作るのがめんどくさい」

簡単に説明すると何層にも重なるスポンジ生地の上にクリームを挟み、最上段にはカラメルで覆って仕上げる。
手間と技術を要する上級者向けのケーキである。

「作れるんじゃないの。作り方さえわかれば何とかなるんじゃないの？」

「料理をなめんじゃねえ、この不良王女！」

「…あんた、最近遠慮無くなって来てるわね。…まあ、その方がいいけどね」

料理の事になると熱くなるらしいクロトスの説教兼アドバイスで比較的簡単なシフォンケーキを作ることになった。

【step 0 ……作る準備をしよう♪】

「材料は…仕方ないからこちらで用意した。エプロンはそこにしまつてあるから好きなの使え」

「意外と色々あるのね。ウサギ柄、イヌ柄、ネコ柄…ってほとんど動物柄ね」

ティニアはクマの絵が描かれたエプロンを自分の体に当てて尋ねる。

「ウリエルの趣味だ。今度あいつの部屋をしてみる。動物の人形だらけだぞ」

「…ウリエルさんってかわいいわね」
「だろう」

ニヤニヤしながら答えるクロトスにティニアはどこか面白くないといった感じで水玉模様のエプロンを身につける。
フツと横を見るとグラムもエプロンをつけている。

「グラムちゃんも一緒に作るの？」

「我が作るのは自分用だ。2人には別の物を用意する」

密かに大きなものを作って独り占めしようと仮作するグラム。
珍しく鼻歌を歌いながらエプロンを装着するグラムがティニアを見ると微妙な顔をしていた。

「どうかしたか？」

「えっと、そのエプロンは……ううん、やっぱりいいわ」

ティニアは無理に作った笑顔をグラムに向ける。

グラムが着ているエプロン。

生地は真っ黒、柄は欠けた生々しいドロマーク、生地所々には
返り血のような真っ赤な模様がある。

エプロンの紐の部分は全て鉄のチェーンでグラムが動くたびにジャ
ラジャラと音を鳴らす。

後でティニアがクロトスに聞いた話によるとグラムの趣味らしい。
とりあえず、ティニアは気にしないことにした。

【step 1 …生地を作ろう】

「まずはボールに卵黄を入れろ」

「ボールって何？」

思わずクロトスは転びそうになった。

「…そっか、そこから始めないと駄目なのか。…意外ときついかも」

「ティニア殿、これがボールだ」

「あつ、ありがとう」

想像していたよりも難しい事とわかり、頭を抱え、ため息をつくクロトス。

グラムはクロトスの料理をたまに手伝うためにティニアを手伝いながら作業する。

「あれ？クロトス。この卵、変じゃないの？」

「…何がだ？」

ティニアはボールに落とした卵を指差す。

「食事に出てくる奴みたいに固まってない！」

今度はクロトスのみならずグラムもすところんだ。

「それは茹でたものだ！それは生っ！！」

「へっ、変なの」

「…なんかやめたくなってきた」

いまさらながら後悔するがリンとエルのためである。

せめて、食べられるものにしようと固く決意するクロトスであった。

「なんか白いゴミが入ってる!？」

「ティニア殿、それはカラザと言って…。」

…決意が少し揺らいだ。

【step 2 …粉を入れよう♪】

「ふるいで粉をふるいながらボールの中身を混ぜろ」

「このふるいっていうものの必要性がわからないんだけど？」

「まあ、聞き様によつては無駄に聞こえなくも無いが…」

ティニアはふるいを逆さまにしてみたりして観察する。

今までは気づかなかったがティニアは世間で言う一般常識に欠けている。

まあ、王女には必要ない知識かもしれないが。

ここに通う事で幾分マシにはなったであろうがそれでも子どもでも知っているようなことを知らない場合がある。

これで少しは改善できればとクロトスは思うが…。

「クロトス…。粉がボールの中に入らない!」

涙目でクロトスに助けを請う。

ため息を吐くとクロトスはティニアの横につき、そつとふるいを持つティニアの手を上から抑える。

「あつ…。」

「そんなに思いっきりしなくても……これぐらいでいいから細かく振るえば……ティニア？」

ティニアはクロトスに握られている手を見ながら顔を赤くしている。

「ティニア？」

「えっ…、あっうん、わかった。これでいい？」

「ああ、そんな感じだ」

顔をさらに赤くしながらも言われたとおりにこなすティニア。
飲み込みは早い。

「主」

「なんだ？」

ちよっと拗ね顔のグラムはクロトスを呼ぶ。

「すまんが体を支えてくれないか？台が不安定でな」
「不安定？……まあ別にいいが」

作業台まで届かないために台の上に立つグラムの腰を掴むクロトス。
ティニアは作業を続けながらも横目でその様子を見る。

「もう少し上を支えてくれないか？」

「あっ、ああ」

そう言っつて脇腹辺りを押さえる。

「もう…少しだな。こちら辺を頼む」
「そうか…ってそこは胸だろう！？」

グラムがクロトスの手を上から掴んで手を持ってきた先はグラムの小さい体の割りに自己主張する胸であった。

「…………ちっ」

「舌打ち！？ってか顔を赤くするぐらいならやるな」

羞恥か先ほどの酒のためかグラムの顔は若干赤い。

チラツと横を見るとティニアが笑顔でグラムを睨む。

グラムもニヤリと笑みを浮かべ、ティニアを睨み返す。

「…作業が進まん」

2人が火花を散らす横でクロトスは本日何度目かのため息を吐いた。

【step 3 : メレンゲを作ろう♪】

「さつき取つといた卵白を…とにかく泡立てろ！」

「…勝負っ！！」

なぜか2人の闘争心に火がついたらしい。

クロトスの言葉と同時に2人はお互いに自分のボールを片手に抱きかかえて凄まじいスピードで泡立てる。

呼吸をしていないんじゃないかという程の鬼気迫る表情でひたすら泡立て続ける。

なんとなく面白そうだったので放置する事にしたクロトス。

―《15分後》―

「そこまでっ！」

「はあく、はあく、はあく、はあく」

全力を注いだらしい2人のボールの中を見ると泡が角を立つほど泡立っていた。

「二人とも合格。はいっ、拍手」

クロトスが拍手すると2人も釣られて拍手した。
そこで異変。

「はぎやつ!？」

拍手の途中でグラムが右手を押さえる。

「どうかしギニャア!？」

グラムの肩に手を置こうと手を伸ばした瞬間にティニアは奇声をあげる。

「…やっぱり、あれだけ必死でやれば腕が釣るのも当たり前か」

「あつ、主よ!まさか、我らを嵌めたのか!？」

「面白そうだったから…っいつ」

テヘッといったクロトスのお茶目な顔（少なくとも本人はそう思っている）にグラムはこの世の終わりといった絶望の顔で打ちひしがれる。

「面白そうだからってヒギャア!？反対の手も釣った!？」

両腕を動かさないようにピクリとも動かさないティニア。
涙目でクロトスを睨む。

「真面目にやらないからだ。特にティニア、お前は2人のために作
ってるんだろうが!？」

「あゝ、そう言えばそうだったわね」

「我もどうかしていた」

とりあえず反省したようなので魔法でクロトスは2人の治療をした。

「次にふざけたら………殺すぞ」

笑顔でクロトスは言うが目が笑っていない。

「グラムちゃん、今日のクロトスってなんかテンション高くない？」

ティニアは怯えながらグラムに耳打ちする。

「たぶん、先ほどの酒であろう。ティニア殿が来るまでに少し飲んで
いたのだ」

そう言つてグラムは先ほどまで飲んでいた酒瓶を指差す。

「『キュークロス』!？アルコール度数が半端じゃないお酒じゃ
ないの!？」

「そこっ!あまりうるさいと捻り切るぞ!」

「はいつ!」

何処をつ!?!というつつこみすら許されない空間。

「そのメレンゲを生地に少し…まあ、1/3ほど入れて軽く混ぜる。その後で残りを入れてざっくり混ぜる！」

そう言つてクロトスは傍に置いてあつた『キュークロプス』をラッパ飲みした。

ドンツと空になったビンをテーブルに叩きつけ、スツと立ち上がる。

「あの、主？何処へ？」

「鬼が居ない内に楽しむだけ楽しもうかと思つてな。…こんなチャンスないからな」

そう言つてクツクツクツと低く笑いながら戸棚を漁る。

しばらくゴソゴソしていると中から次々と酒瓶を取り出すクロトス。

「もしかして、私達危ない？」

「いつもだったらこういう時はウリエル殿が止めてくれるのだが…」

唯一とも言える対抗手段が今は不在。

「オラァ！ばさつとしてないでさつさと作業しろ！決り取るぞ！」

その日の朝、ウリエルが帰宅すると店の置くには精魂尽き果てたテイニア、グラムが床で倒れており、クロトスは酒瓶に囲まれていきをかきながら体中を真っ赤にしながら寝ていた。

その後、酒臭い喫茶店で天使の説教が数時間及んだ。

神の悪巧み（前書き）

リン、エルの誕生日話はしばらく続きます。

最近、この話がコメディという事を忘れてきているのでこれで挽回したいと思います。

神の悪巧み

「近くから見てもこの世界の城は小さいな。主の城の十数分の一程しかないではないか」

「神界と一緒にするな。こちらの世界とは文明や科学、魔法その他もろもろのレベルが違いすぎるんだからな。それと、間違ってもティニアやリン、エルの前で城が小さいなんて言うなよ」

「主よ。馬鹿にするな。我はそこまで愚かではないぞ」

クロトスとグラムは城の近くの子供達の遊び場になっている広場のベンチに腰掛けていた。

ベンチの隣には2mほどの木があり、その影が徐々に伸びるにつれて、子ども達が家族が待つ家に帰り始めていく。

2人は人がいなくなつた夕暮れに染まる広場と町にいる時より近くに見える城を眺めながらホットコーヒーを飲んでいた。

コーヒーは町で買った普通の水筒に魔術加工を施したものに入れている。

この水筒の中は異空間に繋がっており、水筒の中と外では時間の進み方が違う。

つまり、この中にコーヒーを入れても味が落ちることはないのである。

見た目は子どもが遠足に持つていくようなかわいらしい小さな水筒だが最大容量は小さな湖が入る程度でドラゴンが乗っても傷一つ付かない代物。

この世界の魔法の研究者達に見せたら卒倒し、宝物庫に並んでもおかしくない代物である。

そんな水筒にはクロトス自身が選びに選んだコーヒー豆を喫茶店で焙煎し、豆を挽いたものを水、温度に至るまでにこだわりぬいた至高のコーヒーが入っている。

ちなみにコーヒーはクロトスが【創造】したコーヒーカップに注がれている。

「主よ。コーヒーはうまいのだがこの場にこのカップは合わないのではないか？」

喫茶店内ならともかく、外でこの高そうな純白のコーヒーカップを使うのはかなり違和感がある。

「気になるなら水筒に備えつけられた蓋を使うか？これは蓋がカップの代わりになるタイプみたいだぞ」

「……いや、遠慮しとこう。主が淹れたコーヒーをそのような粗末な入れ物で飲むなど我慢ならん」

「大げさだな。まあ、俺はこっちのほうに慣れてるからいいんだがな」

そっいつてクロトスは自分が淹れたコーヒーを口にしようとするが足に何か違和感を感じた。

「……いつも店にいないお前がなんでこんなところにいるんだ？」

クロトスの足元にはいつのまにか夕焼け色に染まるネコのウルがいた。

ウルも最初の頃はクロトス達を見張るように1日中喫茶店にいた。故人である前の喫茶店のマスターである主人との思い出の店を荒らされないか心配だったのであろう。

しかし、最近は信用されたのか営業時間中はお客の邪魔にならないように外に散歩に出ている。

実はこのウルはほとんど喫茶店にいないにも関わらず、お客の間では非常に有名なのである。

曰く、白いネコの仕草に癒される。

曰く、『喫茶店で白いネコに遭遇するとその日1日幸運に恵まれる。』というジンクスがあるらしい。

曰く、白いネコを見ると故人である前マスターを思い出す。

リンのアイディアでグッズを売り出すと好評を得たばかりかファンクラブまでできた（王都公認猫愛好会、通称【マタビ飯の会】のほとんどが入会。会長はもちろんレイ。ちなみに、オルガも会員。）。

クロトスはお礼としてグッズの売上の2割をリンに払っているがリンはそのお金をクロトスの喫茶店での食費かウルへのプレゼント（玩具やペット用品）にしか使っていない。

そのためにウルは現主人のクロトスを除くとリンに一番懐いている。ちなみに自分の名前の元となったウリエルにはなぜか懐かない。

ウリエルが餌を与えても無視。

撫でようとしたら威嚇され、名前を呼んだら顔を背ける。

嫌われる理由もわからないウリエルは傷ついていた。

しかし、クロトスとグラムは知っていた。

ウリエルがウルに嫌われる理由。

実は可愛い物好きなウリエルは過去、ウルにたびたび色々なネコ用の服を着せようとウルを追い回した。

その恍惚ながらも鬼気迫るウリエルの表情にグラムは過去、同じ目に遭った時のトラウマを思い出し、しばらくの間ウリエルの顔を見るとビクツと体を硬直させる事があった。

ちなみに、ウリエルが持ってきたウル用の服の半分ほどはマタビ飯の会の会長のレイ提供である。

「そうだ。お前も一緒にくるか？」

「そうだな。ウルも連れていった方が良からう。無関係の話ではな

いであるっし」

クロトスは水筒を横に置き、足元のウルを目の高さまで持ち上げて尋ねた。

ウルはされるがままにじつとクロトスを見つめている。

その目は夕焼けの光を反射し、クリスタルのように輝いて見える。

「これからリンとエルの誕生日パーティーをするんだ。本当は喫茶店でする予定だったんだけどな」

「急遽に予定が入ったから2人は夜まで城から出れないそうなのだ」

2人はウルに事情を説明するがその表情はどこか違和感がある。

例えるなら……これからイタズラをしようとする子どものような笑顔。

「夜は警備が厳しくなるからティニア達でも脱走が難しいらしいんだ。だから……城に忍び込もうかと思うんだ」

犯罪です。

「ティニア殿にも了承と内部情報は得たから問題はない」

正規の許可ではないので兵士に見つかったら牢屋行きです。

「ウルも行くよな？」

ウルは了承するかのように元氣良く鳴いた。

クロトスは笑顔でウルを膝の上に置いて優しく背中を撫でる。

「連れて行くのは構いませんけど見つからないようにしてください

ね。見つかったら店の営業停止だって有り得るんですから」

2人が座る木の影から声がかけられた。

グラムは一瞬だけ警戒するが聞き覚えのある声だったのですぐにそれを緩めた。

クロトスはウルの背中を撫でながら動揺すらせずに声を返す。

「ご苦労、ウリエル。けど、気配を消しながら近づくのは趣味が悪いぞ」

「何言ってるんですか？私が近づいてたことは気づいてたでしょう？」

木の影から出てきたウリエルは先ほどとは違い、動く事で生じる衣擦れの音と特有の気配を出しながら2人の前に出た。

クロトスは肯定も否定もせずになだ自分の隣を指差す。

ウリエルはため息を吐いてグラムとは反対側のクロトスの隣に腰掛けた。

その瞬間、3人の周辺からまるで音が消えるかのような錯覚が起きる。

「報告」

そのクロトスの声は普段とは違い、無機質でありながら如何なる者も逆らえない迫力に満ちた低い声であった。

「はい。警備は城門に見張りが4名、城の周りを8名、塀の上に8名、見張り台に4名です。警備は2人一組。城の周りは常に兵士が巡回し、城のあちこちに魔法結界が張られています。城内にも魔法生物の気配がします」

ウリエルの城の警備に関する報告を聞いたクロトスは思わず、ほう…と感嘆の意を表す。

「大会期間中とはいえ…、よく今までティニア王女達が脱走できたものだ」

「それに関しましてはティニア王女には内部に多数の協力者がいたそうです。ひとえに王女の人柄かと」

「確かに…あまり王女には見えんな。王女というよりも下町の元気なお転婆少女に見える」

ティニアをお転婆少女と例えるなら今の2人は王と臣下。

その威厳、迫力はまさに神々が頭を下げる最強の神であり、最高権力者の神王。

そして、その神に絶対なる忠誠を誓った誇り高き天の使い。では、もう1人の少女は…

「エルから聞いた話なんだが前に『私って…そんなに王女らしくないかな?』と部屋の隅っこでぶるぶるといじけていたらしいぞ」

グラムの暴露を聞くと3人とも思わず噴き出した。

それと同時に重苦しい空気は一気に霧散した。

3人の脳裏には部屋の隅っこで涙目でいじけるティニアとそれを慰める双子のメイドの姿が用意に想像できた。

「よっ…用意に想像でき…フフッ…できますね」

「そうだな。無理して敬語を使いながら笑わなくてもいいぞ」

3人ともしばらく笑っていたがある程度落ち着くと目の前の城を眺めた。

これから侵入するこの世界、この国の城。

目的はティニアの部屋で双子のメイドに内緒で誕生日パーティーをするために。

「懐かしいわ。昔も2人でよく色々なところに忍び込んだわね」

ウリエルは呟くようにボソツと言った。

それに苦笑しながらもクロトスは昔を思い出しながら言う。

「肝試しで真祖の吸血鬼に城に忍び込んだ事もあったな」

クロトスの言葉にグラムが目を見開いた。

「良く死ななかったな？真祖といえはかなり強力な魔物であろう」

「意外といい人（？）だったぞ。……血は吸われたけど」

当時、人間で言えば5歳ぐらいであろう。

幼い頃にお互いの身分も気にしなかった時に2人でした冒険の数々。真祖の吸血鬼の城に忍び込んだらすぐにその吸血鬼の眷属に捕まった。

真祖の吸血鬼の前に連れ出され、泣きながら幼い2人はお互いを庇いあつたらその吸血鬼に気に入られた。

ご馳走を食べ、いくつかの金貨をお土産に笑顔で帰つたらお互いの親にこつ酷く叱られた。

今もその真祖の吸血鬼は2人の友人である。

「さて、そろそろ行こうか」

クロトスはウルを地面に置き、立ち上がった。

隣に座っていた2人も立ち、身なりを整える。

クロトスを先頭にウリエルとグラム、その後ろをトコトコとウルが

付いて行く。

夕焼けは後少しで闇に染まる。

神、侵入開始（前書き）

ストックが39話まであります。

実は40話の番外のアイデアがまったくない。

とりあえずはキャラクターの誰かにスポットを当てようかと考えています。

存在を忘れていた事に対する償いも兼ねてウルにしようかな？

それともあえてレイとか伯爵にしようかな？

神 侵入開始

《城門の兵士A・Bの会話》

「今日、王女様は脱走しなかったよな？」

「そうだな。…今日ほど平和を実感した日はないよ…グスッ」

「いや、泣くなよ。…気持ちわかるけど」

「そもそもあいつがこの国に来なければ俺達はこんな苦勞をしなかったんだ！」

「あいつ？…ああ、他国からきたっていう喫茶店のマスターか」

「あいつが来てから王女様は毎日のように脱走するようになった。」

その度に脱走を止める俺達は重症だぞ！俺達は王女に怪我させるわけにもいかないし、あの双子メイドも邪魔するし！」

「そういえば、あいつらは今日が誕生日と聞いたが？」

「知るか！あんな捨て子のやつらなどどうでも良い！大体にして誕生日じゃなくて協会に拾われた日だろうが！女王様が協会から引き取らなければ乞食同然だろうに！」

「おい、言いすぎだぞ！」

「それに俺はあいつ…らに…？」

「…おい、どうした！？……誰か！医者を呼べ！！」

………

………

…

——【王城の倉庫の一角】——

「ちよつと休憩」

誰もいない倉庫の一角。

食料貯蔵庫の中でもワインを保管している一角のようだ。

少しひんやりしており、薄暗い。

しかし、埃などは無く、掃除が定期的にきちんとされているようだ。そこから囁くような小さな声がすると空間が歪むように3人の人影が現れた。

「ウリエル。あとのくらいなんだ？」

最初に現れたのはタキシードを着たクロトス。

細身ながらも鍛えた体は少々高価なタキシードを纏うと貴族のような気品を醸し出す。

「目的地まで…後2/3といった所ね。」

背中がパツクリと割れた大胆な紅いドレスを着たウリエルは肘まで覆われた純白の手袋をはめた手で地図を指差しながらクロトスに示す。

長い髪はシルバーの髪留めで纏められ、首には天使を模った宝石のネックレスをかけている。

「……………」

無言のグラムはシックなデザインの高ウエストのドレス。

青いドレスにグラムの白銀の髪はよく映える。

頭にはささやかな花飾りに両手にブレスレットを付けている。

これで不機嫌な表情でなければ完璧であつたのに…。

クロトスはウリエルとの話を切るとグラムをじっと睨んだ。

「さて、グラム。…気持ちはわかるが他の方法はなかったのか？」

「……………」

クロトスの言葉を無言で返す。

「お前：【魂を喰った】だろう？」

魂を喰らうとは如何なる事なのか？

まず、肉体から魂が離れる＝死ぬという事ではない。

魂無き肉体は起きない肉体、生きるだけの肉体という言ってしまう
ば植物人間状態に限りなく近いものになるというだけだ。

植物人間と違うのは魂が宿っているかないかの違いだ。

前者であれば目覚める可能性はあるが魂のない人形は起きることは
永遠にない。

例外として別の【何か】がその魂の代わりに宿れば別だが…。

グラムが行った行為は先ほどの兵士の魂を略奪、吸収。

すなわち、先ほどの兵士の魂を吸収＝【喰らった】のだ。

「…ちよつとだけだ」

むくれるように言うグラム。

ちなみに魂の一部分を喰らうとどうなるか？

詳しい説明は省くがあおのリン、エルを侮辱した兵士はあの瞬間、発
狂するような痛みに襲われ、数日の昏睡で白髪と化し、毎日のよう
に幻聴、幻惑に襲われ、寿命は大分縮んだ。

ちなみに怒りで思わず喰らったので予定より喰らい過ぎたのはグラ
ムの秘密だ。

「お前なあ……………」

クロトスは呆れ半分、怒り半分のため息を吐く。

その横で地図を仕舞ったウリエルも頭を押さえる

「ばれる所だったろうが。始末するんだったら後日にこつそりと始末しろ。」

「それに未発見の病気とか他国の仕業とかの騒ぎになったらどうするの。偶然の不幸か何かの形で駆除しなさい。」

2人にはあの兵士の魂喰らいなどで怒ってはいなかった。

2人もリン、エルが侮辱された事に対しては怒っており、グラムが何かしなければ2人が何かしらの行動をしていたであろう。

むしろ、グラムが1番軽い罰だったかもしれない。

「すまない。あれの暴言を聞いたら思わず…」

俯くグラムにウリエルは頭を撫でた。

「…しかたないわね。後で情報操作しとくわ」

「すまない」

後日、この兵士は他国で発見された新種の病気と診断され、治療のためにその国に移送された。

しかし、その国にその兵士は運ばれる事は永遠になかった。

「それにしてもこれって便利よね。感触はフワフワして気に入らないけど」

ウリエルが持っているのは包んだ者を透明にする不可視のマント。この町でクロトスを買った漫画に出てくるこの道具をクロトスが【創造】したものだ。

この城に潜入する前に3人はドレスに着替え、時間がかかったウリ

エルとグラムの着替えをクロトスが待っている間にこの存在を思い出したクロトスはさっそく【創造】したのである。
ちなみに3人は城近くの知り合いのプティックで着替えた。

「おい、ウルは何処だ？」

クロトスは先ほどから見当たらないウルを2人に聞いた。

「我は知らんぞ」

クロトスとグラムはウリエルを見るがウリエルは首を振った。
ドレスに着替えて、不可視のマントを被るまでは一緒にいたはずである。

3人になんともいえない空気が流れた。

するとウリエルが持つ不可視のマントがもそもぞと動き出した。
ウリエルはマントを裏返すと爪で一生懸命マントにぶら下がっているウルが前足をプルプルさせていた。

自分に気づいた事がわかると爪を離して地面に降り立つ。

そして、3人を恨めしそうに睨み、いや、ネコの表情はわからないが確実にそうであろう。

その証拠に鳴き声が低く、怒っているように聞こえる。

「あゝ、…ごめんな。お前の事すっかり忘れてた」

クロトスの言葉にウルはクロトスの足にネコパンチを放った。
痛くは無いが罪悪感がクロトスの心を刺激する。

「ウル。私の頭に乗っている。今度は忘れん」

そう言って自分の頭にウルを乗せるグラム。

ウルは器用にグラムの頭の上で丸まり、ふてくさった。
ウリエルは苦笑し、再び自分達に不可視のマントを被せる。

「ティニアの部屋は3階の角よ。慎重にね」

ばれたら牢屋行き、喫茶店は営業停止である。

それを念に入れて3人＋1匹は貯蔵庫から足音を立てないように出た。

ティニアからの情報によると他国からお客が来ているらしく、城のメイド達はドタバタと慌しかった。

3人がキッチンの前を通りがかると目を輝かせたクロトスは皆を引っ張り、中へと入った。

城の厨房は喫茶店のマスターには興味があるらしい。

厨房は広く、コックも十数人はいる。

慌しく、コック長と思われる人の怒声が幾重にも響く。

「スープあがりましたっ！コック長、味見をお願いします！」

その声にコックというよりは山賊といった感じの眼帯をした大男がのしのしと近づいていった。

「おう！……バカやろう！このスープはハバダイ鳥の骨のみで出汁を取るんだ！肉は使わねえ！！スープに臭みが出るだろうが！」

「しっ、しまった！」

コック長はスープを味見をした瞬間に手に持っていたスプーンをスプーンを作っていたコックに投げつけた。

コック長の指摘にそのコックの顔が一気に青ざめた。

「時間がねえ！貯蔵庫からバイダルとコクガンの皮を持って来い！」

「いや、この味だとバイダルより貯蔵庫にあつた隣国の酒を少量加えた方が味が引き締まる」

「それだ！その給仕のメイド！貯蔵庫から前に仕入れた酒もってこい。棚の隅にある酒だ！」

「はっ、はいっ！」

「助かったぜ。ありが…おい、今助言したのはお前か？」

「コック長に俺達が助言できるわけないでしょう？」

「…じゃあ、今のは誰だ？」

………

………

…

2階の廊下隅で3人はマントを取った。

「貴方は何してるんですか！」

ウリエルはクロトスに詰め寄った。

怒鳴っているが場所を考えて、声は絞っている。

「いや、思わず…」

アハハッと冷や汗を流しながら両手を上げて笑うクロトス。

「姿消しているのに料理を摘み食いして、さらにコック長に助言するなんてバカですか、貴方は！？」

「つい、料理人に血が騒いで…」

「貴方は料理人じゃなくて神王でしょう！」

グラムは詰め寄るウリエルと後ずさるクロトスを見ながら床に降ろ

したウルと一緒にパンを食べている。

「グラムも何処からパンを持ってきたのっ!？」

「さっきの厨房からだが？」

首を傾げるグラム。

「グラム。俺のは無いのか？」

「無論、余分に持ってきたぞ」

グラムは何処からかパンを取り出してクロトスに渡す。

「偉い！」

「バカですかつ、貴方達は!？」

ウリエルは2人に拳骨を落とした。

2人は揃って頭を押さえる。

「リンとエルの誕生日は今日なのよ!今は夜!後もう少して日付が変わるんですからね!それを分かっているんですか!？」

「「はいっ!」」

怒りでウリエルのバックが轟々と燃える炎のようなオーラ見える2人。

思わずグラムの手からパンが落ち、地面に転がる。

「いいですか!私たちは…!!」

「何じゃ、騒々しい!」

廊下の角の影から聞こえてくる老人の声にクロトスは2人を抱き寄

せ、不可視のマントを急いでかぶった。
角から出てきたのは…

「ふむ…。誰かいたような気がしたんじゃが。」

元傭兵、ティニアの武術の師匠でもある老執事のジュニアルであった。

緊急番外 貸切にした客は…

「ねえ、クロトス？」

「ん？」

「今日はなんで店を貸しきりにしているの？」

「無論、客が来るからだ」

今日の喫茶店は貸切のために店内に一人も客がいない。

いるのはカウンターでコップを磨くクロトスとその前の席でコーヒーを飲みながら尋ねるウリエル。

「客ってティニア達？」

「はずれ。大体にしてあいつらは公務で隣国に行ってるだろう」

色々遊びまわっているティニアだが王女としての仕事もまったくしてないわけではない。

本当に重要な仕事や暇な時は人の数倍の仕事をこなす場合もあるのだ。

もつともそれもリンのサポートとエルの作ったおやつがあるからこそだ。

そのために3人は一緒に隣国で外交会議に出席している。

ということは今日の貸切の客はこの3人ではない。

「じゃあ、またたび飯の会？」

「はずれ。というかあいつらだったら断る」

以前、またたび飯の会がクロトスの喫茶店で食事会を行ったことがあった。

…一言で言うとかospレパーティーだった。

頭にネコ耳を付けるのは大人しい方。

例を挙げるなら

- ・変身魔法で人とネコの間の生物リアルになったおっさん。
- ・かなり際どい水着で飼っているネコの体の模様がボディペイントした女性。

- ・体中にネコが張り付いている歩く招き猫のレイ。

- ・ドラ○もん

等が多数。

その集団がひたすらネコの魅力について語る。

マスターのクロトスはもちろん、料理を運ぶウリエルとグラムにも語る。

耳にタコ…いや、ネコが出来るのではないかというぐらい語る。

ちなみにそこにウルが現れた瞬間は…

「とすると…誰？」

クロトスが店を貸しきりにするのは珍しい。

前に貴族が貸切を頼んだ時はいくら金を積まれても断った。

貸切にするのはクロトス個人に縁のある者のみ。

「さあ？」

「さあ…って誰がくるかもわからないの？」

ウリエルの当然の問いにクロトスはコップを磨く手を止めずに答える。

「誰がくるかは知ってるが…会ったことがないし、話したことも無い」

「じゃあ、なんで貸切の申し出なんて受けたの？っていうよりもどうやって貴方に喫茶店の貸切を頼んだの？」

ピタッとクロトスの手が止まった。

そして、目線がスウツと天井、さらにその先の遠くを見るような目でボソツと答えた。

「それが世界の理だからさ」

「……？」

よくわからない答えにウリエルは首を傾げる。

「会えばわかるさ」

ドアのベルがなった。

2人が顔を向けるとドアの前にはグラムが立っていた。

「主よ。連れてきたぞ」

「ご苦労様。大変だったろう？顔もわからない相手だからな」

「いや、簡単だったぞ。他の者と魂の作りが違ったからな。……というよりも見た瞬間わかった」

苦笑いのグラム。

疑問に思ったウリエルだがとりあえずそれは置いといた。

「それで顔もわからないのにお店を貸切にしたお客様は何処？店の外？」

グラムは疲れた表情でとある方向を指差した。

「そこにいる」

「そこって……キャアー！！！」

グラムが指差した方向は店の中心に聳え立つ柱。
そこには緑色の塊がへばり付いていた。

それは蛹だった。

それも子供ぐらいの大きさの蛹。

しかし、見る人が見ればこう言うだろう。

「トラン。ル!？」

クロトスは叫んだ。

某ゲームに出てくるモンスターの名前を。

それにしてもなぜに神界の王がゲームのモンスター名を知っているのか？

蛹はもそもぞ動いたかというとピカツと光りだした。

眩しい輝き。

クロトスの頭の中ではとある音楽が流れる。

某ゲームで育てたモンスターが成長し、進化する時の音楽。

光が徐々に収まった。

そして、そこには…

「バタフ…それ以上は色々とやばいからやめて!」…へっ?」

柱に背を向けてよしかかる女性がいた。

ショートカットの黒髪の若い女性。

その女性はクロトスの言葉を遮り、コホンッと咳払いを1つしてからにこりと笑った。

「初めまして…でいいのかな?僕は蛹と言います。この話の作者と
いうかある意味で君達の世界の神です。テヘッ」
「いらっしやいませ。いつも世話になってるな」

「いやいや、僕のほうこそ君らには感謝してるよ」

ほのぼのとする2人。

啞然とするウリエルは徐々に体を痙攣させるように震えだす。

「まあ、とりあえず席に…」

「待ちなさ〜い!」

喫茶店内にいる者は皆、耳を押さえた。
大声を出したウリエル以外は。

「何?うるさいよ」

「貴方何なの!」

「だから作者つて言っただじゃない」

「作者つて何よ!」

「この【神は貴方の守護天使!】を書いている執筆者〃僕に決ま
っているじゃない」

えっへんと無い胸を張る…グハア!

「無い胸言っなあ〜!」

いや、だからって俺に椅子を投げつけないでよ!?

「女性に対する気遣いとかももう少し考えなさいよ!」

……ハッ（笑）。洗濯板風情が何を言うか。
そのスタイルで女性を名乗るな。

「やるか」。このネット廃人!」

黙れ。この（放送禁止用語）の（自粛）な（危険）が俺様に勝てる
と思う時点で貴様は（アラート！アラート！）なのだ。

「それを言っなあー！」

「あの…？」

「何？」

何だ？

「とりあえず話が進まないから落ち着きましょう」

「…ウルっちの顔に免じて見逃してやる」

「ウルっち！？」

仕方ない。これ以上は書くのも疲れるからな。

ウルウル顔に免じて許そう。

「ウルウル！？」

「あゝ、ウリエル？とりあえず落ち着け」

「ウルっちって何？ウルウルって何よ？もしかして私のこと！？」

混乱するウリエル。

パニック状態のウリエルを皆が可哀想な人を見るような目で見てい
る。

「適当なこと書くんじゃないわよ！」

チッ

「舌打ち！？ってか貴方誰！？」

俺？作者の蛹。

「それはこの子でしょう！」

「そう。私は蛹。でも、彼も蛹」

「どういう事？」

蛹（女）はスカートの端を掴み、貴族のように優雅にお辞儀をする。

「私は蛹。世界を創造した蛹。いつか変わることを夢見ている蛹。

そして、今回の進行役の蛹で蛹というキャラクターの一人で蛹の代弁者」

「えーと、とりあえずの疑問。作者って女性なの？」

「女性かもしれない。男性かもしれない。老人、学生、社会人かもしれない。あらゆる可能性から生まれたのが私。私は蛹の欠片」

ニコツと微笑む蛹。

「じゃあ、貴方は？」

ウリエルは明後日の方向を見て尋ねた。

「そうじゃなくて貴方よ」

再び尋ねるウリエル。

しかし、その方向には誰もいない。

「それじゃあ、貴方は何処にいるのよ？」

…俺のこと？

「そうよ」

俺は地文担当の蛹。

ナレーションの蛹。

世界を構成する欠片であり、作者の蛹の欠片。
とりあえず、無視していいよ。

基本的に干渉しないから。

「さつき思いつきりしてたじゃない」

それはその少年がうるさいから。

「僕は女だ！」

じゃあ、僕って言うなよ。

「昔からなんだからいいだろう！」

…
ボソッ
男女

「キシヤーーーーー！！！」

「ストップ！いい加減話を進めて！」

「お願い。すぐにあいつを処分するから放して！速攻で磨り潰すから！」

「お願いだから止まってー！！！」

《しばらくお待ちください》

……
……

…

「えーと、この話は本編とは関係ありません。僕こと蛹も今回のみの登場です。ですのでこんな番外なんてどうでも良いとお思いの方は次話を投稿をするまでお楽しみに♪」

「やっとな話が進むのか…」

疲れたようにため息を吐くクロトス。

蛹はクロトスのコーヒーを飲みながら話を進行する。

「それではまずは…今回の番外を書こうと思った切欠をお話します」
「いつもだったら10話ごとに番外を入れているのにね」

ウリエルの疑問に蛹はニコニコと笑みを浮かべる。

「最初の切欠はPV累計アクセス数がなんと…10万ヒットを突破しました〜!」

何処からともなくファンファーレが喫茶店内に響きわたった。

「それはすごい事なのか？」

ピタッと動きの止まった蛹は一瞬にしてグラムの後ろに回りこみ、グラムの口を後ろからビョーンと横に引っ張った。

「そんなことというのはこのお口かな!? そうなのかな!?」

「イファイ! はなふえ、ふあめふお!」

「グラムのホッペって意外とやわらかい…イタッ!」

突如として空から空き缶が蛹の頭の上に落ちてきた。

「何するのよ！」

「なにこれ？」

天井からひらひらと落ちてきた紙を手取るウリエル。

「『話の進行をしる！じゃないと今回の番外がとてつもなく長くなるだろうが！by 蛹（ナレーション担当）』だって」

「地文で語ると僕達の情景が書けなくなるから手紙作戦できたか」

蛹は椅子に座り、軽く咳払いをする。

グラムは赤くなった頬を涙目で擦るが蛹は無視した。

「とりあえず、アクセス数が大台を突破したことが理由の1つ。もう1つが話の区切り。39話までこの話を書き上げてただけど現在進行中のリン、エルの誕生日の章が38話で終了。新章が39話から始まることになるんだけど40話に番外を入れると中途半端になっちゃうから今回の番外で調整したのが理由の2つ目」

「ストックがそんなにあるならさっさと次話を投稿しろよ」

「前だって一ヶ月以上間が空いてたな」

クロトスとグラムの文句に蛹はテーブルに突っ伏すように倒れこむ。

「僕だって頑張ってるんだけど忙しいんだよ。朝早く起きて帰ってくるのは夜遅くだもん。この話だって休みの日に一気に書き上げたんだから」

ルルルルと涙を流す蛹にクロトスはコーヒーのお代わりを差し出した。

蛹はそれを飲むと幾分落ち着いた様子で顔をあげた。

「まあ、こういう理由で今回は番外を投稿したという訳」

「それはいいが…今回は何をやるんだ？」

「とりあえずは無難に質問コーナーかな？後は話の流れ次第だね」

クロトスの疑問に答えるかのように蛹の手元に紙の束が現れた。

「質問って誰から？」

「小人さん」

「…はい？」

「本当は読者から応募して欲しかったけど時間無かったし、呼びかけもしてないから私の頭の中の小人さん達が読者だったらこういう質問をするのではないかというものを想像でピックアップしてみました」

ウリエルはなんともいえない表情で蛹を見るが無視する蛹はパラパラッとして紙を捲る。

「それでは最初の質問です」

『登場キャラクターのプロフィールデータを知りたいです』

「却下。次の質問に…」

「待てや、コラ！最初の質問からそれか！」

クロトスの突っ込みにしぶしぶ答える蛹。

「あまり詳しいこと書くと後で矛盾が生じるから書きたくないんだ」

「…前の全知全能の事を引きずってるのか？」

「君が悪いんだよ！読者の瑠璃さんから『神王様は神々の王で全知全能なわけですよ、じゃあ戦わなくてもウリエルさんより強いんじゃないんですか？』って質問が来た時は冷や汗が止まらなかったよ！」

テーブルをドンツと叩き、クロトスに迫る蛹。
クロトスは仰け反りながらも苦笑いで答える。

「いや、設定を考えたのはお前だろうが」

「どうやってその質問に答えようかとネットで数日かけて調べまくったよ。運良く良い資料が見つかったから良かったけど……」

「聞けよ！」

「次の質問は何かな？」

「おいっ！」

蛹はクロトスに背を向ける形で質問が書かれた紙の束を捲る。

『クロトスとウリエルの子供時代のお話を書いて』

「駄目！」

「じゃあ、採用」

明らかにクロトス、ウリエルの反応を見て決めた蛹。
ニヤニヤしながら質問が書かれた紙に判子を押した。

「恥ずかしいからやめて！」

「ん、33話で言ってた親祖の吸血鬼の城への肝試しの時辺りでいいかな？」

「一番危ない話を持つてくるんじゃないか！」

2人の剣幕に怯えることなく、ただニヤニヤする蛹。
グラムは巻き込まれないように少し離れた場所でコーヒーを飲んでいる。

「さて、次の質問は…」

落ち込んでいる2人を無視する蛹は話を進行させた。

『グラムが人間になった時の話を書いて』

「いつかね。次の質問は…」

「我に関しての質問に対する扱いがひどくはないか!?!」

グラムの言葉に蛹は指を折って何かを数えだす。

「もしかしたらだけど…その話を書く頃にはこの話が完結してるかもしれないし」

「私の番外を書いてから終わればよからう!」

「実は…次作の小説の構成もある程度考えてあるし、僕って書くの遅いから2作同時進行はちよつと…」

「睡眠時間を削ってでも書け!」

「……………次の質問はつと」

「無視をするなあゝ!!!」

『作品の裏話を教えて』

「えゝと、グラムとレイにはモデルがいます」

「誰だ?」

クロトスの質問に蛹は何処からとも無くパネルの板を取り出した。

「グラムのモデルは…とある漫画の親祖の吸血鬼。600年生きた幼児体型の魔法使いで…」

「ネ。ま！のあいつか？」

「…さっきのトラン。ルといい、何で知ってるかなあ？」

神王は意外と漫画好きらしいようだ。

一体何処で手に入れているのであろうか。

「気を取り直して、レイのモデルは…」

「エヴァン。リオンの赤。博士で名前は同じ作品のパイロットじゃないのか？」

「君って本当に神界の王族？」

蛹の言葉を遮るように答えたクロトスに呆れた声で返す蛹。

「クロトスにはなんで知っているか後で詳細を聞く（尋問）として他に裏話はないのかしら？」

睨みつけるウリエルからクロトスはさつと顔を背ける。

「え〜と、……………そういえば、リン、エルにもモデルがいたっけ？」

「なんで疑問系なの？」

「キャラクター名がわからない。たしかとある漫画に出てきたんだけど…」

頭をかきながら懸命に思い出そうとする蛹。

「なんの漫画なんだ？」

「それは…秘密で♪あまりばらすと面白くないし」

「いいのか、それで」

「というよりもいい加減にこの話題を切り上げないと次の質問入れないし」

言いつつも次の質問の紙を捲る蛹。

『クロトスを巡る恋の行方（ビリッ！）（グシャ！）（ボワッ！）』

「「「却下！」「」」

「…なぜ皆して質問を破る？」

蛹が途中まで読んでいた所で蛹が破り捨て、グラムがそれを踏みにじり、グラムが足を退けた瞬間にウリエルが燃やした。

「これはいろんな意味で答えにくい質問だからパスね」ってか答えたら僕の命が危ない…」

冷や汗をかく蛹の後ろに突き刺さるような視線が複数。

「次の質問は…ふう…なんか疲れた。もう帰るね」

そう言っただけで立ち上がる蛹。

「…なんか大して質問に答えてないんじゃないのか？」

「これ以上答えるとこの話がとてつもなく長くなるもん。じゃね」

蛹は額に指を当てると一瞬にして消え去った。

「瞬間移動ってことはドラゴン。ールか。実はあいつってたただのオタク？」

片足は突っ込んでるかもな。

けど、フィギュアもDVDも持ってないぞ。

you t。be見たいな所で見たりはしてるけど。

「干渉しないんじゃないのか？」

どうせ終わりだし。

最後ぐらい俺にもしやべらせろ。

「別にかまわないが…」

コホンッ、それではいつも神は貴方の守護天使！？をお読みいただき、誠にありがとうございます。

未熟者ですので更新は亀のごとく遅いですが完結は必ずさせますのでこれからもよろしくお願いします。

あと、自分の小説に感想、評価を書いてくれた皆さん。本当に感謝しています。

これからも末永くよろしくお願いします。

それでは登場キャラクター達から一言。

「クロトスです。評価、感想でお褒めの言葉を戴いたことに感謝とお礼を申し上げます。…駄目だ。真面目な言葉は恥ずかしいな。喫茶店の営業も大会も頑張るからこれからもよろしくな」

「ウリエルです。え〜と、……何を言えば良いのかしら？不束者ですが…違うわね。とにかく、これからも精進していくのでよろしくをお願いしますね」

「グラムだ。作者が未熟でコメディというよりもファンタジーに近い小説だがどうか見捨てないでほしい。これからもよろしく頼む」

以上で今回の番外を終わります。

最後にもう一度言いますが今回の話は本編には一切関係ありません。これから神は貴方の守護天使！？をよろしくお願いします。以上、ナレーション担当の蛹でした。

神の人外魔境潜入（前書き）

久しぶりの投稿。

先月は忙しかったのもそうなのですが40話番外編が手間取ってしまい、それを書き上げないことには今回の話は投稿しないという自分ルールのおかげで今日になって投稿。

今月の目標は40話突破

神の人外魔境潜入

「ふむ…。誰かいたような気がしたんじゃが」

ジュニアールはそう言いながら先ほど声がした方へと歩み寄る。そこには姿を隠した3人がいる。

クロトスは息を潜め、じつとやり過ごそうとするが…

「ふむ…。2人、いや、3人か？それも人の気配ではない。…人外の者か？」

呟く様な声に心臓が飛び跳ねた。

マントは視覚は誤魔化せるが音や気配は誤魔化せない。

無論、今は気配は消しているがいきなりの事だったのですぐに隠し切れなかったごくわずかなものをこの執事は感じ取ったのだ。クロトスにとっては計算外だった。

こんな身近にこのような凄腕の男がいたとは…。

「さて、何処の輩じゃ？素直に出てきてはくれんかのう」

口調は穏やかだが老人が放つ威圧感に空気を振るわせるほどだ。

「今じゃつたら…」

老人の袖から蛇のように鎖が勢いよく飛び出し、鎖の先に繋がれたクナイが先ほど、グラムの手から零れ落ちたパンを貫いた。

ジュニアールがさっと手を引くとそれが引き寄せられ、貫かれたパンはジュニアールの手の上に乗っかる。

「このパンのようにはならんぞ？」

パンを持っていない方の手の袖から銃口が飛び出し、数多に連続して発射される銃弾。

しばらくすると銃口の先にあった床に落ちていた他のパンは粉々に粉碎されていた。

「さあ、どうするんじゃ？」

クロトスは思考する。

【このまま動かない】 〓 あの袖の銃で乱射されれば高確率で当たるだろう。

【交戦】 〓 問題外。ティニア、リン、エルの知り合いの可能性大。

【逃走】 〓 逃走後、警備が強化されるだろう。結果、誕生日に間に合わないだろう。

【説得】 〓 リスクが高い。牢獄行き、営業停止。ティニアやリン、エルのも迷惑がかかる。

「反応なし。…仕方ないのう」

思考が止まる。

老人がこちらの方に袖を向け…

「何をしてる？」

老人の動きが止まった。

心なしか顔が青ざめている。
クロトスが声のする方に目を向けると…

「（オーガス！？）」

そこにはメイド服を着た人型の怪物、失礼、女性がいた。
オルガとまではいれないがそれでも十分に巨大なでっぷりしたメイド。

まるで魔界にいる凶暴な怪物、オーガのようである。

オーガとは人の数倍の巨大な図体をしたヘドロのような緑色の皮膚をした人型の魔物である。

ちなみに男をオーガ、女をオーガスと言い、日本では鬼と呼ばれている。

クロトスの目の前にいるのはまさにソレである。

三つ編みツインテールの女性？のメイド？は廊下の角からドシンドシンとこちらに近づいてきた。

執事の目の前まで近づいたそのメイド？は鼻息を荒くしてじろつと執事を睨む。

「…ジュニアル？」

「な、なんじゃ！？」

すぐさま振り返り、メイド？の方へと向く。

執事は冷や汗で執事服の中がびっしょりである。

メイド？はフシューと鼻息を立てながら低い声で唸るように言う。

「メイド長たる私が（フシュー）汗水垂らしながら仕事している中で（フシュー）執事長の貴方がこんなところで（フシュー）パンを食べながらサボっているなんて（フシュー）理不尽とは思わないかい？」

「なっ！？違っ…！」

「しかも…（フシュー）床にそんなにパンくずが散らかるほど（フシュー）食べていたなんてあんたはどれだけサボっていたんだい？」

興奮のためか話の途中に聞こえる大きな鼻息が徐々に大きくなっている。

青ざめる執事が周りを見ると自分の手にはパン。

床には散らかるパンくず。

侵入者はまだ見つけていない（実際にはすぐ近くにいるが）。

「これはわしじゃないっ！これは…！」

「言い訳無用！こっちに来な！そんなに暇なら私がいやって言うほどの地獄を見せてやるよ！」

メイド長は執事の首襟をガシツと掴み、ズルズルと廊下の奥へと引っ張っていく。

「はっ離さんか！わしは侵入者をつ…いやだっ！誰か助けてくれっ！おい、侵入者！何処かにいるのじゃろ？わしを助ける！頼む、後生じゃ！わしはまだ死にたくないんじや…！！！」

執事の叫びは廊下の角へと消えた後もしばらく続いた。

「（執事の方。貴方とは別の形でお会いしたかった。もし、生きてお会いできたならその時は友と呼ばせていただきたい！）」

ちなみにクロトスの場合はサボリが見つかったらウリエルの炎に黒焦げにされる。

なぜか、そういう時のウリエルの炎を避けた事は無い。

結果、黒焦げになったクロトスはウリエルに連行され、ウリエルの

見張りつきで仕事の量が増やされる。

クロトスは拳を握り締め、他人とは思えない執事のことを想った。
しかし、それはそれ。

クロトス達には時間が無い。

「さて、早く行くぞ」

クロトスがそう言うがウリエルとグラムの反応が無い。

マントで見えないが自分にしがみついている感触があるのでいない訳ではない。

首を傾げるクロトスはマントを脱ぐと…

「……………」

なぜかご機嫌な2人が自分にしがみついていた。

「何やってるんだ？」

「…あつ!？」

クロトスの言葉にはつとする2人はパツと離れた。

3人は心なしか顔が赤い。

しがみついていたというよりは抱きしめていたウリエル、グラムは
もちろん、抱きしめられていたクロトスも顔が赤い。

気まずい雰囲気の中、ウリエルは軽く咳払いをし、2人に言う。

「じつ、時間が無いから…ね？」

「あつああ、そうだな!」

慌てて答えるクロトスと無言のまま赤い顔を背けるグラム。

3人は再びマントを被り、ティニアの部屋へと急いだ。

……

……

…

「私はこれで失礼するわ」

「あら、もう部屋に戻っちゃうの？」

「今夜は少し用があつてね…」

「ふん。…まあ、いいわ。部屋まで送るわ。それでは王様、王妃様、私も今日はこの辺で」

「そうか。アイシャ殿も今日は城でゆつくりとくつろいでくれ」

「はい、王様。王妃様もお休みなさいませ」

「ええ、おやすみなさい」

謁見室から出たティニアと一緒に出てきたのは漆黒の長い髪の女性。着ている黒いローブは胸元が大きく開き、生地も薄いために体のラインがはつきりとわかる。

ティニアよりも年上であろう女性の纏う空気は妖美な甘い匂いを漂わせる。

「それで用事って何かしら？」

その声は聞くだけで男を魅了するような甘美な刺激が含まれていた。

「アイシャ様には関係ないわ」

素っ気無く返答するティニアにアイシャと呼ばれた女性は目を細める。

「つれないわね。昔みたいにアイシャお姉さま（ハート♡）って呼

んでくれないのかしら？」

「そんな気持ち悪い声で呼んでいないわ！それにそんな呼び方もしてない！」

クスクスとおしとやかに笑うアイシャと憤慨するティニア。

2人が通路を通ると兵士やメイドは廊下の端により、道を空ける。目を引く2人が通るたびにすれ違った人は2人に目を向ける。

「そういえば、最近の貴方って少しお痛が過ぎるんじゃないかしら？」

「…何のこと？」

ティニアは動揺を隠すように足を速めるがアイシャはその後ろでクスクスと口元を隠して笑う。

「昔からそうだけど、最近は脱走の回数が極端に増えたらしいじゃない？」

「……………」

「しかも毎回行く場所は同じそうじゃない？」

「……………」

「そんなに……………」

「……………」

アイシャの問いから逃げるようにティニアの歩くスピードが上がるが後ろで歩くアイシャは涼しい顔でピッタリとその後ろをついていく。

「そんなにその喫茶店のマスターが好きなの？」

グシャーとバランスを崩したティニアは顔で廊下をスライディング

するように滑っていった。

「この前なんて朝帰りだそうじゃない。おめでとうゝそれで初めてを捧げた感想は？」

「違ゝう！！！！！」

叫びと共に跳ね上がるように立ち上がったティニアはアイシャに詰め寄る。

「クロトスとはそういう関係じゃないです！」

「あら、片思いなの？」

「違ゝわなくもないけど」

言葉の最後はほとんど聞こえなかったがきちんとアイシャの耳に届いた。

にんまりとするアイシャは囁く様にティニアの耳元に言う。

「それにしても貴方が年上趣味だったとはね」

「…はいっ？」

「だって喫茶店のマスターっていったらダンディーなオジサマ以外いないでしょう？口ひげ生やしてコップを拭く渋い男性」

「クロトスは違うわ！」

アイシャの首を掴み、揺さぶりながら怒鳴るティニア。
それでもアイシャの顔は涼しげだ。

「まあそのクロトスさんの事は後日聞くとして…部屋、通り過ぎたわよ」

「あれ？」

2人はいつのまにかティニアの部屋の数メートル先にいた。

「…ごほん、部屋によらない？紅茶ぐらい出すわ」

「それじゃあ寄らせてもらっわ」

顔を赤くするティニアの後ろでクスクス笑うアイシャ。

ティニアは部屋の扉を開け、中に入ろうとするとアイシャに肩を掴まれた。

「どうしたの？」

「…どちら様かしら？」

アイシャはティニアの問いに答えずに部屋の真ん中、テーブルの辺りに鋭い視線を向ける。

ティニアもそちらに視線を向けるが特に変わったところはない。

「…さっきのカラクリ執事といい、メイド？といい、ここは人外魔境か？」

そういつてテーブルの辺りの景色が歪むとそこには…

「失礼しました。ご無礼をお許しください」

「よくぞ人間の身で見破ったものだ」

椅子に座るクロトスと頭を下げるウリエル、そして、感心するように腕を組んだグラムがいた。

神VS魔女&執事

「異空間の創造だけでもすごいのになんの魔法具も無しにこんな小さい水筒に空間を捻じ曲げて繋げるなんて…すごいなんてものじゃないわね」

「貴方こそ初見で私たちの存在を見破り、その水筒の仕組みを一瞬で理解するなどとても人間とは思えませんね」

「別に敬語はいらないわよ。大体にして貴方…いえ、貴方たちも普通の者にはとても見えないわよ？人外っていうレベルじゃない。とても強大で神聖な何かが感じられるわ」

「それは秘密だ。簡単にばらしたら楽しみがなくなるだろう？」

「それもそうね。私も賢者と言われて長いけどまだまだ知らない事が多いわね。だからこそ…この世界は愛しい」

意気投合するクロトスとアイシャ。

アイシャはクロトスが魔術加工した水筒を色々な方向から観察する。この技術はこの世界には無い異界のものであるためにアイシャが見たことがないのは当たり前である。

それでもこれだけ理解できるのは驚愕に値するだろう。

ウリエルとグラムはリン、エルの誕生日パーティーの準備をしている。

なんの変哲も無い布の袋からテーブル、椅子、テーブルクロス、料理、ワイン、ジュースにお菓子等々と明らかに布袋の容量をはるかに上回るものが次から次へと出てくる。

質量保存の法則やらなんやらを無視したこの袋も水筒と同じく魔術加工が施されたものである。

この世界の住人からしたらかなり理不尽な代物であろう。

ティニアはベッドに腰掛け、クッションを抱きしめながらというよりは絞めつけながらテーブルに座る2人を睨む。

「あんたらなんでそんなに意気投合してるのよ…」

「あら、嫉妬？」

アイシャの顔目掛けて、クッションが飛んでくるがスツとアイシャは避けた。

「普通はもっと警戒するんじゃないの！？もし、暗殺者とかだったらどうするの！？」

「そういえば自己紹介がまだだったわね」

「聞きなさいよ！」

スツと立ち上がったアイシャはローブのスカート部分の端を掴み、どこかの貴族のお嬢様のように優雅に頭を下げる。

「名をアイシャ。恐れ多くも王より賢者の称号を戴いた東の森に住む魔女にございます。以後、お見知りおきを」

「名をクロトス。しがない喫茶店を営んでいる者だ」

クロトスも立ち上がり、片手を胸の高さに掲げ、貴族風の挨拶で返す。

「ただの喫茶店のマスターが誰にもばれずにお城に侵入できるのかしら？」

「さて…ね」

化かしあいが続く中、会場準備が終わったウリエルとグラムが近づく。

「お初にお目にかかります。私はウリエルと申します。喫茶店のウ

エイトレス兼クロトスに絶対なる忠誠を誓いし盾に「ございます」

「我はグラム。同じく喫茶店のウェイトレス兼主の前に立ちふさが
る愚者を切り裂く剣なり」

言葉と同時に放たれるプレッシャー。

重い空気の中、アイシャはそれを涼しそうに受け流す。

「本当に…愛しい」

その言葉ははたして何に対してなのか。

恍惚の表情で3人を見るアイシャはまるで子供のようだ。

「まあ、話はこれぐらいとして…ティニア、2人は後どれくらいで
この部屋にくるんだ？」

「えっ？…あゝ、そうね。もうそろそろかしら」

いきなり話を振られたティニアは慌てて答える。

それと同時に部屋をノックする音。

「誰？」

「姫様。ジュニアールにございます」

あつ、生きてたんだ。とクロトスは心の中で思った。

「失礼いたします」

「えっ！？」

ティニアが慌ててテーブルの周りを見るとクロトス達はマントを被
り、姿を消した。

それと同時に部屋へと入るジュニアール。

「ジュニアル。私は貴方を部屋に入れる許可を出した覚えはありません」

「失礼しました。しかし、ここにいるのは本当にお二人だけですか」

「…どうゆうことかしら？」

動揺を隠すティニアだがジュニアルはじっとテーブル周りを見る。そこにはニコニコを微笑むアイシャのみ。

「失礼…」

ジュニアルの袖からクナイが飛び出し、アイシャの対面席へと飛ぶ。

それが空中で止まった。

「ジュニアル!？」

「何者か？」

空間が歪み、椅子にはクナイを指で挟んで掴むクロトスとその横で佇むウリエル、グラムであった。

「実に興味深い。アイシャといい、この執事をいい、実におもしろい。」

「何者かと聞いている!？」

「ジュニアル!」

クロトス達を警戒するジュニアルにティニアは諫めようとするがジュニアルは警戒を緩めない。

「何者かと聞かれてもな。何といえは納得する？町の喫茶店のマスターでは駄目か？」

「ただの喫茶店のマスターがそのようなことができるわけなからう。それに貴様等、人外だな？」

ジュニアールの言葉にティニアはクロトス達を見る。

「ほう。それで？」

「それも強大な何か。隠しているようだが竜種をも上回る存在だな。その子供からは血の匂いがする。その血も人外だけではなく、人を気が遠くなるほどの数を斬らなければその匂いは染み付かない」

ぱちぱちとクロトスが拍手をする。

静かに、不気味にゆつくりと。

口元は裂けるのではないかというぐらい横に広がる。

「人間風情が……。ばれては仕方ない。クッククック……」

静かに楽しそうに笑うがクロトスから放たれるプレッシャーは先ほどとは比べ物にはならないほどにまで膨れ上がる。

それは建物が揺れ、空気が固体化したような錯覚が生まれるほどだ。

突然、クロトスは体制を低くした。

ジュニアールは袖から出した剣を構える。

アイシャは椅子から立ち上がり、突如として現れた杖を構え、魔法を唱え始める。

ティニアは止めようと叫ぼうとするが声が出ない。

そして、クロトスがにやりと笑うと…

「すみません。どうかそのことは秘密にしてください！」

………

………

…

土下座した。

実に綺麗な土下座。

神々しい土下座？

一瞬の静寂の後、再びノックの音。

「王女様、失礼します」

「…失礼します」

このなんともいえない空気の部屋に本日の主役予定だった双子メイドが入ってきた。

2人は入ったとたんに固まった。

ベッドから転げ落ち、頭から床に衝突したティニア。

唖然とするジュニアルはこれ以上はないというぐらい口を大きく開けている。

アイシャはあまりの事態に呪文詠唱中に舌を噛み、涙目で口を押さ

える。

クロトスは見事に土下座をしている。

その様子をウリエルとグラムは苦笑いで見ている。

「リンちゃん、これって何なのかな？」

「…理解不能」

とりあえずなぜか自分の足元にいるウルを抱き、この状況をどうしようか考え始めた。

神に願う古の呪い（前書き）

今つて38話？

でも次は番外のはずじゃあ…計算間違えた！？

本当はここで誕生日話が終わるはずなのに39話目がありませんでした。ストックには40話記念番外と43話まであります。

急いで39話を書き上げ、今月中に投稿します。

頑張れ、俺。

神に願う古の呪い

「……かんぱい！」

「……かんぱい」

「……」

無口のためか若干遅れる者、納得いかずにしかめ面の者。色々いるがとりあえず誕生日パーティーが始まった。

照れる2人に色々な者達がプレゼントを渡す。

すでにテーブルの上にはこの日のためにティニアが作ったケーキが置かれている。

もつとも最初はティニアが作ったということをして2人は信じずにティニアがいじける場面があったが。

「なつとくいかん」

ジュニアルはワインを片手に壁を背にしてその様子を見ていた。流されるままにパーティーに参加したまではいいがクロトス達を信用した訳ではない。

「まあまあ、そういわずに」

「……何当たり前のように隣にいる？」

いつのまにか隣にクロトスがいた。

ワインを片手に皆の様子を微笑ましそうに見ている。

「せっかくの誕生日パーティーなんですから。笑顔じゃないと」

「そうよ。ささっ、ジュニちゃんももう一杯」

「ジュニちゃんはやめてくれんかの。いや、アイシャ様もいつのま

に！？」

酔ったために顔が赤いアイシャはワインをジュニアールのグラスに注ぎ、ビンをラッパのみする。

「おっ、やるね。俺もそうしよう」

そういうとウリエルに片手を挙げて合図する。

するとウリエルの顔は若干歪むもしぶしぶワインのビンをクロトスに投げ渡す。

受け取ったクロトスはさっとコルクを開け、ラッパのみをする。

「以心伝心？ラブラブ」

「もったいない飲み方をしよって…」

それぞれ違う箇所に感想をいうが気にせずに飲み続ける。

「それで、真面目な話。…貴方達って何者？」

アイシャの質問に3人の周りの空気が重くなる。

「さて、何でしょう？」

平然と受け流すクロトス。

ジュニアールは目を細めるがアイシャはクロトスの片腕に腕を巻きつける。

「いいじゃない。せめてヒントぐらい、ね」

耳元に口を近づけ、囁くように尋ねるがクロトスは平然と…いや、

少しだけ悲しそうに前を見る。

「…決めてるんですよ。最初にその話をするのはあいつらだってね」
クロトスの目線の先にはウリエルから貰った自分達と同じぐらいの
大きさのぬいぐるみを抱きしめながら照れくさそうに笑うリン、エ
ル。

そして、それを羨ましそうに見ながらも一緒になって喜んでいるテ
イニア。

「いきなり現れた素性の知れない俺達と友人になってくれた恩人で
すからね。店の手伝いも何度もしてくれました。何度も店に足を運
んでくれました。何度も俺達と一緒に笑い、喜び、困った事があつ
たときも一緒に悩んでくれました。」

自分を兄と呼び、すぐに懐いたエル。

忙しいメイドの仕事の間を縫ってまで店の手伝いに何度もきてくれ
るリン。

身分を気にせずに自分と接するテイニア。

彼女らにどれだけ救われたであろうか。

神王としてしか見ない者達に囲まれた神界での生活。

寂しかった。

ウリエルとグラムのような1部の者にしか心を許せなかった。

怖かった。

周りのやつらの妬み、嫉妬、恐怖で歪む表情。

悲しかった。

夜中に一人で泣いた日は数え切れない。

「だから俺はあいつらに…」

クロトスは言葉を区切り、いきなり笑い出した。

「ハハッ…何を言ってるんだ、俺は。今のは忘れてください。少し酔いすぎました」

クロトスはポケットに入れている小さな箱を2つ取り出し、皆の所へと行った。

その様子を見たジュニアールは小さくため息を吐いた。

「それで…どう思ったのかしら？」

「…保留じゃ。もう少し様子を見る。…文句あるのか」

「いいえ……フッフ」

2人の目線の先はクロトスからプレゼントを開けるリン、エル。

箱の中にはお揃いの形のイヤリング。

鮮やか青の宝石のイヤリングはリン、透き通るような赤い宝石のイヤリングはエルへと送られた。

ウリエルとティニアにそれぞれイヤリングを付けてもらった2人はお互いの顔を見合う。

揃ってうれしそうに微笑み、2人はクロトスの両腕に抱きついた。

「あの光景を見て、疑えという方が酷じゃろうが…」

「…私ね、あの子達があんなに笑う所なんて久し振りに見たわ」

アイシャはグラスのワインを掲げ、赤いワインを通して目の前の光景を覗くように見る。

「ワインに何か入ったのか？」

ワインに異物が入ったための行動かとジュニアールは思ったがアイシャは首を振った。

「昔の呪いよ。願いを叶えるっていう古い呪い」

ワイン越しに見えるには幸せそうなリン、エルと心底羨ましそうなティニア。

「【彼女らに今後とも幸多からん事を、笑顔に満ちた日々を送れることを我は望む。この杯を我の血とし、我を通して神に捧げよう】」
そうしてアイシャはグラスのワインを飲み干した。

「願わんとも送れるに決まっておろうが…」

と言いつつも自分も常日頃から同じ事を願っているというのは秘密であった。

何といつても彼女達が幼い頃から見守ってきた彼である。

アイシャは微笑みながら再びワインを注ぎ、ジュニアールのグラスにも注いだ。

ジュニアールはそれを見て、少々ぎこちないがアイシャの真似をして、リン、エルをワイン越しに覗く。

「【彼女らに今日のような笑顔でいられる日々が未来永劫続かんことを我は望む。この杯を我の血とし、我を通して神に捧げよう】」

ジュニアールはワインを飲み干そうとすると隣でアイシャがワイン越しにクロトスを覗いていた。

「【彼の者が我の伴侶となり、永遠の愛を我に誓うこと我は望む。
この杯を我の血とし、我を通して神に捧げよう】」

半分ほどワインを口に含んでいたジュニアルは勢い良く噴出した。
アイシャはこくこくつと余裕でワインを飲み干した。

「ゴホツ、ごほつ…な、なんじゃと!？」

「…手に入れて見せるわ。私の王子様♪」

酔いとは別に顔を赤くするアイシャにジュニアルは大きくため息
を吐いた。

「（若造、同情はせぬぞ）」

と思いつつもクロトスに向ける視線はなんともいえない哀れみが混
じっていた。

「あつ、ちなみに呪いのワインは飲み干せなかったら災いが自分に
降りかかるわよ」

「何じゃと!？」

ちなみに、次の日にジュニアルはメイド長が大切にしていた花瓶
を割ってしまった。

ティニアの脱走を止めようと追いかけた時に服のすそが花瓶を載せ
ていた台に引っかかったためである。

さらに、その現場をメイド長に見られていた。

さらに言えばその時のメイド長は大変機嫌が悪かった。

さらに言えばその時のメイド長の手にはつい先ほど研いだばかりの
包丁がなぜか握られていた。

呪いのせいかわからないが惨劇は確かに起きた。

神に祝福された夜

「それで？城下でのティニアはどうなの？」

ワイン片手に赤い顔でクロトスに聞くアイシャ。

「元気いっぱいの子供って感じだな。近くの商店街では人気者になってるぞ。たまに店に来る途中で商店街の人から貰ったとかでお菓子や果物を抱えてくるぞ」

よくティニアはお菓子や果物を手に持ち、ホクホクした顔で店に来ることが多々ある。

「よく王女だつて事がばれないわね」

「いや、うすうす感じているみたいだな。けど、皆は気にしていないみたいだ。本人も王女として扱われるのは望んでないしな」

パーティーも中盤に差し掛かり、皆が思い思いに食事をし、酒を飲み、語り合う。

クロトスはアイシャと共にワインを飲みながらテーブル席に座り、ティニアの事を語る。

そこには2人の他に…

「だったら今度は俺も行くかな。ここ最近城下には視察しかしてないしな。エイン、今度お忍びで出かけるか？」

「いいわね。明後日までは特に重要な会議も執務もないし、久しぶりに2人で何処かにいきましょっか」

「うちにくるならサービスするぞ。予約してくれば特別料理も出すし」

「あら、それは私も興味あるわね。その時はお邪魔しようかしら」
「アイシャ、せっかくのデートに水を差すような真似は慎んでもらいたいわね」

「それもそうですね、申し訳ございません」

「はっはっはっはっはっは」

「うふふっ」

「ってちよっと!!」

いきなりティニアが吼えた。

「何?」

「ハモるな!っじゃなくて、なんでパパとママがいるのよ!??」

クロトスとアイシャと同じくしてテーブルを囲んでいるこの国の王と女王。

ティニアの言葉に女王であるエインはにこやかにティニアに微笑む。

「なんでって…楽しそうだったからよ」

「いや、たまたまこの部屋を覗きに…ゴホンッ、偶然に部屋の前
の通りかかったらあまりにも楽しそうな声がするものでついな」

「~~~~っ!!!」

お酒が入って少し赤い顔の自分の両親の顔を見て、頭を抱えるティニア。

「クロトスも何落ち着いてるのよ。あんたは私が許可したとはいえ
王城に不法侵入したのよ!」

興奮するティニアの叱責にワインをコクコクと飲んでいたクロトスは王の方を向く。

「王よ。俺達は罰せられるのか？」

「かまわん。娘の友達をこの程度のことでするなどしはしないさ。後、敬語もいらんぞ。今はプライベートだ」

豪快な笑みを浮かべる王。

クロトスはその姿に同じ王としても好感を持てた。

「ありがとう、ジャンファーさん」

ガシッと王はクロトスの手を握った。

「お礼を言うのはこちらのほうだ！初めてっ、初めて俺の名前が…本当にありがとう！！ジャンファーなんて堅苦しい！気軽にジャンと読んでくれ！！」

涙を流してクロトスに今にも抱きつきそうな勢いの王。

名をジャンファーという。

39話にしてやっと名前が出た哀れな男。

「哀れって言うな！そもそも貴様のせいでブフォラギアアアアア
~~~~~！！」

「暑苦しいっ！！」

涙と鼻水を流しながら激怒するジャンにエインとクロトスのダブル  
アッパーが炸裂した。

弧を描くように吹き飛ぶジャン。

エインとクロトスは高々と掲げた拳を下げ、お互いにアイコンタクトをしたかと思うとガシッと固い握手をする。

何か通じるものがお互いにあったようだ。

その様子にアイシャは目を丸くするもすぐにきやつきやつと笑い出す。

もはやカオスであった。

ティニアには理解できない光景である。

ティニアは視線を逸らすとそこには…

「よって個人ないしは集団による能動的想像力で構築する原型を持ちえれば明確な概念のよる地図のような媒体を用いなくとも能動的創造で再構築されたあいまいな概念でも固定は可能です」

「しかし、それでは投影された概念が管理、調整されたエーテルによる半作用により理解、分解、構成というループの流れを…」

「それを補うために…」

「なるほどのう…」

「……………」

「……………」

あそこも理解できない空間が構成されていた。

一体何の話をしているのかさえわからない。

いや、それよりも…

「いやゝ、勉強になるのう。お主、若いのにたいしたもんじゃ」

「いえ、そんなつ！貴方のほうこそ執事とは思えないほどの博識ぶり。それに先ほどのお考えも実にすばらしい」

「いやいや、貴方のような美しい方にそうまで褒められると照れるのう」

完全に意気投合するジュニアルとウリエル。

「（ジュニアル！？アンタさっきまで警戒心バリバリだったでしようが！何もう順応してるのよ！）」

じろりと睨むティニア。

「ふむ。これはさっそく今後の姫様の教育内容に盛り込まなければならんのう」

さっさと視線を逸らした。

うん。聞かなかったことにしよう。

そして、ティニアが視線を逸らした先には…

「へへ。そうなの？」

「ああ、実に滑稽だったぞ」

「…フフッ」

ちびっ子3人が仲良くケーキを食べながら話に華を咲かせていた。リン、エルにとってはお城にきてから初めての同世代の友達がグラムであった。

お城では大人の人しかおらず、ティニアやクロトス、ウリエルも自分達とは年が離れている。

その中でもグラムは自分達よりは年上だが見た目では自分達に一番近い。

もつともグラムの実際の年齢は2人よりも遥かに上なのだが2人は知らない。

楽しそうに話すその光景に思わずティニアは微笑む。

「そうよ。貴方達にはもつと幸せになつてもらわないと…」

そう呟くティニアだったが…

「料理したこともないのにドボシュ・トルテを作りたいと言い出し

てな」

「え〜！」

「…いくらなんでも…無謀」

ティニアはグラムの言うドボシュ・トルテという言葉に聞き覚えがあった。

そう、あれは…

「実際に作ろうとすると『ボールって何？』とか『粉がボールに入らない〜！』とか言ってたな」

「お姉ちゃん…」

「…そこまで…」

話が進むにつれて頭を抱えるリン、エル。

そう、これは2人にプレゼントするためにケーキを作った時の日の…

「……っ！！！！」

全力でダッシュするティニア。

「後、笑ったのが卵を割ったときに…」

ティニアがそこに乱入し、はちゃめちゃとなる。  
そんな2人のメイドの誕生日。

## 番外 吸血鬼狩りの冒険へ（前書き）

緊急番外でチラッと出たクロトス、ウリエルの子供時代のお話です。吸血鬼の城へ肝試しへ行った時の話し。

もしかしたら後で修正するかもしれませんが今月中に投稿したかったので載せます。

## 番外 吸血鬼狩りの冒険へ

「いや、確かに冒険は僕が言い出したんだけどさ……」

「貴方にしてはいい考えね」

幼い少年と少女。

2人は古いお城の前にいた。

「僕ってこれでも一応王族なんだよ？」

ビクビクと怯える少年は動きやすそうな格好はしているがちよつとした箇所にある装飾がこの少年の育ちの良さを窺わせる。

「私に敬語を使えって言うの？」

イラついている少女はいかにもこれから冒険をしますといった装備を身に付けていた。

少女の言葉に少年は怯えながらもきつぱりと言い放つ。

「それはいやだ」

「…そう」

若干照れた様子の少女は目の前の城に目を向ける。

城の外壁の至る所にはまるで血管のように得体の知れない植物の蔓が巻きついている。

「ねえ、やっぱり危ないよ!」

少年は少女の袖を引っ張り、ここから離れようとする。

その情けなさに思わずため息を吐く。

「冒険に危険は付きものよ!」

「だからって…」

少年が空を見た。

お城の上空には黒いたくさんの何かが自分達をあぜ笑うかのように飛んでいた。

遠くてそれが何かまでは判別できないがこの場所のことを考えると想像はできる。

ここは…

「何もアルカード・ヴァン・バレンシュテッド伯爵の吸血城はないんじゃないの!？」

「今日は絶好の吸血鬼狩り日和ね」

「雰囲気すぎだよ! ってか狩るの! ? 真祖の吸血鬼を! ?」

空は稲光が迸り、自分達と上空の蝙蝠以外は生命の気配がまったくしない。

少年には空気が鉛のように重く感じる。

しかも誰かに見られているような感じもする。

「帰ろう! だいたいどうやって入るのさ?」

「玄関からに決まってるでしょう?」

あっさり言う少女の言葉に少年はガクツとこけそうになる。

「忍び込むのに堂々と玄関から! ? 普通は窓からとか裏口とかじゃないの?」

「貴方! いきなり自分の部屋の窓から知らない人が入ってきたら驚

くでしょう？あんたも王族なら礼儀を覚えないと駄目よ」

メツつと少年を叱る少女。

そして、少女は城門に手をかけた。

「礼儀以前の問題だよ！大体鍵が開いてるわけ……」

「おじやましまゝす」

「戸締りしとけよ、真祖の吸血鬼……！」

少年の咆哮に空飛ぶ蝙蝠達は同意するかのように鳴いた。

……

……

…

「ねえ？」

「…何よ？」

ズルズル

「何か言うことは？」

「……………」

ズルズルズル

「侵入数分後に君は忍び込んだ部屋に飾ってあった宝石に手を触れ、トラップ作動。追ってくる眷族達に僕を囷にしようと僕の足を引っ掛けて転ばせようとしたら自分がバランスを崩して逆に自分が捕まったドジッ娘」

「……………」

「せっかく僕が助けようと隠れて様子を見てたら誰よりも先に見つけた君は眷族達に僕のことをちくつた裏切り者」

「……………だって、なんかずるいんだもん。私だけ捕まってなんか寂しかったし」

「そういう問題!？」

「ウルサイ、ガキドモ」

「「ごめんなさい」」

2人を引きずりながら動く鎧。

青銅の鎧は中身が無いにも係わらずまるで人のように2人の襟を握り締めながら廊下を闊歩する。

ちなみになぜ中身が無いかわかるかというところと中の首がないからだ。

「ねえ、おっちゃん? いや、鎧だから男かどうかわからないけど」

とりあえず声が低いから男? と判断した少年は鎧に声をかける。

「ナンダ?」

「別に引きずらなくて歩いて歩くから放してくれない? ってかおっちゃんの手って硬いから痛いし、冷たいんだよ。それとその体で何処から声出してるの? むしろそれがすごい気になるんだけど?」

先ほどの怯えた様子の少年とは思えないほどふてぶてしい。

先ほどから続く恐怖体験に何かか吹っ切れたようだ。  
無言で手を放す鎧。

少年は体のあちこちをグルグルと回してほぐす。

「ありがとう。意外と話のわかる良い鎧(?)だね。それと僕の後ろで逃げ出そうとしている子からは手を放さない事をお勧めするよ」

「リヨウカイシタ」

少年の後ろからギクツという音が聞こえた気がした。  
それと同時にガシツと鎧は少女の頭を上から握り締め、そのまま持ち上げて歩き出した。

「裏切り者ッ〜！」

「先に裏切ったのは君だろうか？」

「ーーーーッ！！」

ニヤリと笑う少年に少女はプラプラと揺れながらギアギアと喚く。

「ちなみにその子は脇が弱いよ」

「ワカッタ」

「わからなくていいわよ！って待って！ちよっ……」

……

……

…

「オツレシマシタ」

「御苦労」

ぐったりとする少女と堂々とする少年が連れて行かれたのは食堂だった。

蠟燭の明かりに照らされた薄暗いテーブルの上には豪華な食事が並んでいた。

しかし、食卓についていたのは一人だけ。

少年は彼がアルカード・ヴァン・バレンシュテッド伯爵と予想した。

彼は意外と見た目は若い青年だった。

白髪の長い髪は白髪ではなく、地毛であろう。

白髪というよりも銀髪に近い。

その彼は上座に座り、こちらにチラッと視線を向けた。

「さて…」

その瞬間、世界が色を失ったように思えた。

「私の居城に勝手に侵入し…」

アルカード伯爵が一言、一言言葉を紡ぐ度に空気が鉛のように重くなる。

「私の所有物に手を触れ、その輝きを穢したその罪…」

少年は本能的な恐怖で身が振るえ、歯をカチカチと振るわせる。

「万死程度で…」

少女はへたり込み、涙目で体を震わせる。

『償えると思うなよ!』

まるで爆発のようだった。

殺気、プレッシャーによる圧迫感が大気を振るわせる。

真祖の吸血鬼という神に匹敵する魔族。

2人はいくら拒否しても頭が恐怖で勝手に自分達の死をイメージしてしまう。

「しかし…」

静寂。

アルカード伯爵のその言葉に伴い、二人を襲う殺気が消失した。

「相手が子供。しかも、そのような光景を見てしまうと…気が萎えるっていつかなんというか…」

アルカード伯爵の目の前には恐怖で目を潤ませながら少女を自分の背中に隠そうとする少年。

腰を抜かしながらも覚えたての魔法で少年を守ろうとする少女。むしろ微笑ましいとすら思える様子にアルカード伯爵は笑みをこぼす。

「敬意を評そう。汝らを客人として迎え入れる。今宵は我と共に血のワインで…子供にはまだ早い。じゃあ、新鮮な生の血の100%ジュースで乾杯しよう」

きよんとする少年、少女はしばらく固まっていたが状況を飲み込むととりあえず血のジュースは辞退した。

「デハ、ワタシハコレ…」

鎧は無い頭を下げるような仕草で部屋を後にしようとする。

その後姿に少年は微笑を浮かべて手を振った。

「ありがとうね、バロン」

「少年、バロンとはなんだい？」

アルカード伯爵は少年に尋ねる。

そこにもはや先ほどの威圧感はなく、普通の若者と同じ印象を受ける。

そんな彼の質問に少年は隠すことなく、正直に答えた。

「彼の名前だけど？名前が無いっていうからあげた」

「ほう……」

アルカード伯爵はドアの前で佇む鎧を見る。

「そういえば生み出した物に名前などここ数百年付けなかったな。いや、あえて付けなかったと言うべきか。孤独で他人という存在に飢えていた時期にありとあらゆる存在を生み出しても虚しさばかりが僕の心に募った。名が必要なのは他人に認識されるため。所詮、僕のような異端者に……」

「おっちゃん？」

俯くアルカード伯爵に少年は訝しげに声をかけた。

「いや、すまん。僕とした事が……っておっちゃんはやめてくれな  
いかな、少年？」

微笑み返そうとするがその言葉が気に入らなかったのewithと睨みつける。

「普段ならお爺ちゃんって言うところをこっちが親切にもおっちゃんと言うことで譲歩してあげただけど？」

「いや、君達からしたらそうかもしれないけどそれでも吸血鬼の中では若い方なんだ。というか凹むからそういう事は思っても口に出さないでくれるかな？」

あまりにも堂々と言うのでちょっとどころかなり落ち込むアルカード伯爵。

「じゃあ、アルカード伯爵」

少年の言葉にきよんとするアルカード伯爵。

「はっ…はははっ。そうか、君達は他人か！久しぶりの自分以外の他人！それも、異端の僕をアルカードとして認識する他者なんだな、君達は！」

大声を出しながら笑うアルカード伯爵。  
まるで子供のように。

無邪気な笑顔。

その姿に恐怖していた自分達がどこか恥ずかしくなった2人  
いつしか3人は打ち解けあい、お互いのことを色々と話すようになった。

アルカードの過去に戦った自分を狙う者達との戦いの話に少年は目を輝かせ、少年が自分が王族という話をする少女は少年がいかに少年が王族らしくないか暴露し、少年と少女が言い争うとアルカードがその様子を実にうれしそうに眺める。

数時間後、2人はお土産にいくらかの宝石（ウリエルが手に触れようとしてトラップに引っかけた時の宝石も貰った）を貰い、お城へと帰っていった。

- とある日 -

「…アルカードってずるいな。年を取らないから見た目若いままだし」

「年を取ることのすばらしさを知っている僕には君のほうが羨ましいけどね。僕の眷属になれば僕と一緒に永遠を生きれるけどどうだい？」

「それはそれで遠慮する」

とあるお城の屋根の上で2人の青年が酒を酌み交わしていた。

一人は血のように赤いワイン。

もう一人はワインのように赤い血。

見た目はおなじでも中身の違うグラスはそのままこの2人を表すようだ。

「僕のプロポーズを断ったのはこれで何回目だい？いい加減にOKしてくれないかな？」

「せっかくだけどそんな趣味はない」

ぴしゃりと言い放つ青年。

アルカードは苦笑する。

こんな冗談の掛け合いができるほどに成長したあの時の青年は神王となった今でもこうやって異端の僕と酒を酌み交わす。

「昔はあんなにかわいかったのに…本当に時というものは常に僕に牙を向ける」

「大体俺は…」

「そんなにあの子がいいの？」

ワインを噴出す青年。

「あの子もずいぶんと女の子らしくなったよね。そういえば最近は魔剣をヒューマンタイプに【創造】したんだって？チラッと見たけど彼女もかなりの美人だよな。…君が創造主ということは彼女の姿

は君の理想に……」

「【万物創造《純銀製の十字架》《聖水の流水》《ニンニク×100》】……」

「ちよっ…ギャアーーーー！！！！」

「少々お待ちください」

「そろそろ戻るな」

「……は……い」

黒こげになり、ブスブスと煙を揚げる人型の何かは片手をあげて青年を見送る。

「さて……ウリエルちゃん？」

「……ばれてましたか」

屋根の縁から現れる女性。

翼を広げ、輝かしいまでのその姿にアルカードは目を細めた。

「（もつとも彼も気づいてたけどね）神王様を探しにここにきたのかな？」

「はい。でも、出るタイミングが無かったですけどね」

そつと屋根に降り立つウリエルはチラッと青年が立ち去った方を見るが再び視線をアルカードに戻す。

「いいよ。行きなさい」

「でも……」

渋るウルエルにアルカードは微笑む。

「無限を生きる僕に次に会う時まで待つことなど一瞬に近いよ。今度会ったときにまた血のジュースで乾杯しよう」

「…そうですね。それではまた」

急いで立ち去ろうとするウリエル。

しかし、少し歩くとアルカードの方を振り返った。

「訂正をいくつか。私は血のジュースを飲んだことはありませんし、これからも未来永劫飲む気はありません。あと、グラムは若干ですが私の意見も反映されています。後は…」

少し言いにくそうにしていたがウリエルはアルカードに背を向けてボソツと囁く。

「彼は今でもかわいいですよ」

まるで雷の様にその場から立ち去るウリエル。

アルカードはポカーンとしていたがすぐに笑い出した。

「世界よ。初めて貴方に感謝します。僕に彼らとを出会わせた偶然に…」

真つ赤な血を飲み干す孤独だった真祖の吸血鬼。

彼らは化け物と呼ばれる僕を名前で呼ぶ数少ない他人。

彼らは彼に世界を教えた。

世界はもっと広いのだと。

世界はもっと苦しいのだと。

世界はそれ以上に楽しいのだと。

彼は真つ赤な月に真つ赤な血と自分の喚起の涙を捧げた。

## 番外 吸血鬼狩りの冒険へ（後書き）

50話の番外ネタはどうしようかな？  
私の頭の中の小人さん、ネタをください。

## 神のへそくり（前書き）

突然、インターネットに繋がらなくなったので修理に出しました。  
今回は笑う場所があまり無いです。

## 神のへそくり

月明かりが辺りを照らす深夜、グラムはその光も届かぬような深い森の中にいた。

町からさほど離れていない山の麓に広がる広大とまでは言えないがそれなりに生い茂った森。

この日、グラムがクロトスに言われて隣国へ喫茶店で使う香辛料を仕入れに行った帰り道のことである。

森での野宿の準備を終え、焚き火の横でウトウトしていた時にフツとグラムは何かを感じ、寝眠気が飛んだ。

それは死臭のように澱んだ空気と濁った気。それに怯える山の生命。

グラムは焚き火の火を消し、違和感の中心部へと走った。

草木を掻き分け、魔物達は生存本能が告げたのか違和感の中心部から逃げるようにグラムの横を通り抜けていった。

グラムは近づくにつれて肥大していく邪気のようなものを気にせず、にずんと近づく。

しかし、後もう少しという所でその違和感は無くなった。

突然、まるでそのようなものがなかったかのように忽然と。

グラムはとりあえず違和感が消失した場所まで行ってみた。

そして、グラムが藪を掻き分け、その場所についた途端、目を見開いた。

「なんだこれは…？」

グラムの目の前には一本の道があった。

草木は腐り、土は腐り、空気が腐った一本の道。腐った土には足跡らしきものがあつた。

しかし、それは本当に足跡なのであろうか。

その腐った道に等間隔に陥没している穴。

その穴も決まった形を持たず、穴のふちがグニャグニャと曲がっていた。

だが、それに目を瞑れば足跡に見えなくも無かった。

その足跡を形作る腐った土はさらに発酵しているかのように泡を吹き出している。

その腐蝕した道はグラムのいる場所で途切れていた。

腐蝕した道の延長線上には特に変わった所は無いように見えた。

しかし、グラムの鼻にはその延長線上に続く腐臭とは違ったまた別の嗅いだ事の無い匂いを嗅ぎ取った。

この道を作り出した【何か】は一体、何処に行こうとしていたのだろうか？

考えるまでも無い。

この道の延長線上にぶつかる場所はこれから自分が帰る場所なのだから。

「主に良い土産話が出来たな」

野宿など止めだ。

この話を一刻も早く主に話したい。

グラムはその場所から発った。

たぶん、得体の知れない【何か】も自分と同じ場所に向かっているだろう。

「実に面白い。この世界は何かと興味深い」

心が躍る。

体が歓喜に飲み込まれるにつれて徐々にスピードを上げるグラムだった。

「…しかし、あの邪気は覚えがある。まるで…いや、ありえないな。この世界では少なくとも不可能だ」

グラムの呟きは風の音にかき消された。

…

…

…

「ありがとうございました」

お客を送り出したクロトスは窓の外を見ると空は暗雲が立ち込めていた。

「これは降るな。今日はもうお客は期待できないか」

それならそれでやることが色々ある。

掃除、新メニューの研究、鬼の居ぬ間の…。

鬼…じゃなく、ウリエルは不在。

3人娘は雨の日に来店することはめったに無い。

そろそろグラムが買出しから帰ってくる予定だがそれも明日になるだろう。

「今日は何を出そうかな」

ニヤニヤとするクロトスはカウンターテーブルのとある一箇所を握りこぶしで叩いた。

すると、カウンターテーブルの一部分がくると回転し、そこからいかにも高そうなケーキが出てきた。

技巧が凝らされた明らかにそこらのお店では買えないような代物。

どこかキラキラと輝いているようにも見える。

「それとも……」

クロトスがカウンターテーブルを叩くたびにカウンターテーブルの一部分が回転し、次々とクロトス秘蔵のへそくり（お酒、お菓子、おつまみ）が出てくる。

「この国の諺で言うと【灯台で帳簿隠し】だっけ？ウリエルもまさかこんな目の前に隠しているとは思わないだろう」

そう言いながら調子に乗ってドンドンとカウンターを叩き続ける。仕舞いにはカウンターテーブル上にはお酒、菓子、酒の肴があふれんばかりに乗っていた。

「しかし……一人でこれを食べうのも寂しいな」

眩きとほとんど同時に激しい雷と凄まじい雨。そして、来店を知らせる鐘の音。

「いらっしやいます」

もはや反射的に出来る様になった営業スマイルを入り口に向ける。そのドアの前には雨で濡れた白衣を着た銀髪で長髪の男。頬は痩せこけ、肌も白い、見るからに不健康そうだ。どこか作り物めいた印象、さながら人形のようにであった。

「失礼するよ。……もしかして、お邪魔だったかい？」

雨で濡れたメガネを拭きながら低い声で問いかけられた。

だが、そこにはどこか陽気な雰囲気醸し出されていた。

「いや、ちょうど良かった」

「何？」

クロトスはワイングラスを二つ用意し、疑問顔の男に差し出す。

「あんたがこの店の記念すべき客だ。特別にただでご馳走するよ」「ほう。それはこの店の1万人目の客に僕が選ばれたというような感じがいい？」

男は飄々とした態度でクロトスに聞く。

「客の人数なんて数えた事がない。うちのウェイトレスならわかるかもしれないが…あいにく不在でな」

喫茶店の会計や帳簿はウリエルが管理している。

その他にも客の要望やその他もろもろを几帳面にも記録しているのでもしかしたらとクロトスは考えた。

実際にウリエルは毎日の売り上げ、客数、男女比率等をいつ調べているんだと思うくらい記録している。

「じゃあ何の記念なんだい？」

クロトスはずっとカウンターテーブルの上を指差す。

男が目線を向けると今にもパーティーが始められそうぐらいの料理と酒が並んでいた。

「これは俺のへそくりだ」

「はっ？」

「さっき言ったここのウェイトレスはおっかなくてな。禁酒を言い渡されているんだが今は不在なんだ」

男はクロトスが何を言いたいかわかる理解できていない。

無言でクロトスの言葉の続きを促す。

クロトスはカウンターから出て、ゆつくりと男に近づきながら男に語る。

「これから俺はそのへそくりの封印を解き、酒池肉林を満喫しようとした矢先にあんたが来店してきたんだ」

「それは…邪魔をして悪かった。では、日を改めようか？」

男はドアに手をかけるがクロトスは制した。

「そういうことを言ってるんじゃない」

「では、何だ？」

「簡単に言つとだ」

にんまりと笑うクロトス。

「共犯者記念だ」

「はあ…？」

「一人で飲むのは寂しいからあんたも飲め。御代は取らないからこの事は黙っていてくれ。じゃないと俺は灰にされる」

静寂。

雨の音と雷の稲光。

風が窓を叩く音と雨の匂い。

ただそれだけが喫茶店内を支配していた。  
次第にそれが侵食される。

徐々に、少しずつそれは大きくなる。  
それは銀髪の男の笑い声。

「クツクツクツクツ…。実に面白い。噂以上だよ」  
「噂？どの事だ？」

クロトスの噂話なんてものは膨大な数がある。  
それもそのはずであろう。

王女と個人的に親しく、喫茶店の料理は美味、大会では数々の偉業、  
珍業を成し遂げた得体の知れない男。  
もはや都市伝説に近いものさえあるほどだ。

「いや、こつちの話だ。…ああ、そうだな。それも面白い。クツク  
ツクツクツクツ…」

どこか不気味に笑う男。

体を前後に揺さぶり、まるで振り子のように立つ男。

その動きが仰け反った状態でピタツと止まった。

そして、グルツと上半身を回し、クロトスのほうに顔を向ける。

格好や行動の所々が不気味な変わった男である。

「いいよ。申し出を受けよう。よろしく、共犯者」

「よろしく、共犯者。俺はクロトスだ」

クロトスは男に右手を差し出した。

「ロレヲだ。見てのとりのマッドサイエンティストで趣味は化け  
物の解剖と禁忌の探求だ」

男はクロトスの右手を握った。

その手はひんやりとして、死人を思わせた。

## 神と狂人の宴（前書き）

仕事が大変忙しい時期に入っていました。

朝6時起きで戻るのが夜の11時過ぎ（場合によってはそれ以降）。

この前、やっとそのピークが終わりました。

これで更新速度が上がる……のかな？

## 神と狂人の宴

喫茶店では雨音をBGMにクロトスとロレオが酒を飲みながら談笑に華を咲かせていた。

「そうか、君はあの大会に出場しているのか。じゃあ、解説役のレイは元気にしていたかい？」

「ああ。たまに店にくるぞ。知り合いか？」

「昔、同じ研究所の仲間だった。4年前に僕は自分だけの小さな研究室を建ててそこに移ったけどね」

遠い目をするロレオ。

懐かしむように、微笑ましく語る。

そのロレオにクロトスは前々から気になっていた事を聞いた。

「…あいつって昔からああなのか？」

ロレオがピクツと動く。

苦笑し、何処か疲れた様子で答える。

「もしかしてネコ好きかい？」

「ああ」

「……………」

クロトスは同情の視線をロレオに向ける。

ロレオはその視線を受け、目頭を押さえた。

「最初の頃はまだ大人しかったんだ。書類のサインの端っこにネコのマークを付けたりとかコーヒークップがネコ柄だったりとかわい

いものだったよ。次第にメスや白衣、実験器具、仕舞いには研究所の壁の至る所にネコマーク…。まるでウィルスのように侵食している…。」

クロトスはロレオから視線を外した。

ロレオがそれを語る姿があまりにも痛々しくて見ていられなかったからだ。

「ノイローゼになった奴が出始めた頃に数人が抗議にいったら…数日間、行方不明になって見つかった時には手遅れだったよ」

「手遅れって…」

ロレオは微かに呟くようにボソツと答えた。

「…改造されてた」

「洗脳じゃなくてか？」

クロトスの予想としてはいかにネコが素晴らしい存在かを数日間、監禁して洗脳するというものだったのだがロレオは『改造』と言った。

ロレオは首を振り、かなり重い口を開いた。

「40代の脂が乗り切った主任がな…数日後…ネコ耳「やめてくれ、想像もしたくない!!」……うん、僕もこれ以上思い出したいくない

…」

ズンッと2人に重い空気が押し掛かる。

ちなみにネコ耳の他に彼の服装は露出度が高く、言葉の語尾も…ということは言っておこう。

それを見た研究者達もあまりの気持ち悪さに病院送りになったとい

う。

「そつ、それでロレオはどうしてこの町に着たんだ！？レイに会いに着たのか？」

「あゝ、それもあるけどね……」

慌てて話の話題を変えるがその話題もロレオにとっては良いものはなかったようだ。

「僕の弟子が実験体を外に持ち出したみたいでね。しかも、大会に出場してるから見に来てくれっていう手紙が届いたんだ」

「実験体？」

「言つたろう。僕はマッドサイエンティストで趣味は化け物の解剖と禁忌の探求だつて。僕の弟子も才能はあるんだけどネジが正しい具合に取れててね」

クッククックと低く、愉快そうに笑う。

「馬鹿だよね。『研究は発表しないと意味が無い。他人に見せずに自己満足で終わる貴方はただの愚者で死人も同じだ』だつて。禁忌を研究してるのに発表したら禁忌じゃなくなるだろうに。研究者は知的探究心という自己満足のために未知に挑んでるのに、彼は研究者をアイドルか何かと勘違いしているんじゃないのかな？」

「んでお前は彼を止めるためにここに來たのか？」

クロトスの言葉にキョトンとするロレオだが弾けるように笑い出した。

「ハッハッハッ、ちつ、違うよ。彼は手紙に『貴方に教わることはもうない。私は貴方をすでに超えた。死人は死人らしく地面に這い

蹲って私の足跡でも舐めてろ』って書いたんだ。だから、彼の研究成果をぜひ、この目で見たくてね」

腹を押さえて笑うロレオ。

涙を浮かべるその姿は正に『壊れていた』。

「んでそのお弟子さんがしていた禁忌の研究ってのは？」

ピタツとその笑いを止める。

そして、先ほどとは違い、ニヤリと笑みを浮かべる。

「無論、この世でもっともタブーとされる禁忌といえば……命の冒涇さ」

「……死者の復活か？」

クロトスの言葉に首を振るロレオ。

「いくらなんでもそれは無理だよ。魂を理解出来てもいないのに死者の復活なんて……」

「不可能を可能にするのがお前達『研究者』だろう？」

「はっ、それもそうだね。君は実に面白いよ。君に会えただけでこの町に来た甲斐があったよ」

手を叩き、喜びを表現するロレオに苦笑いを浮かべるクロトス。

「それはどうも。んで結局、そいつの研究は？」

「肉体の融合さ。神話にもいるだろう」

知ってる。

クロトスは実際にこの目で見たことがある。

「伝承ではライオンとヤギとヘビの化け物」

自分はその神話の中の住民なのだから。

「科学的には同一個体内に遺伝情報が異なる細胞が混じっている」とを指す言葉だけだね」

どちらも同じ言葉で言い表す。

「『キメラ』もしくは、化け物の方はキマイラとも言っけどね」

## 神とマッドの実験部屋（前書き）

マッドなロレオを書くのが楽しくなってきた。  
出番を増やそうかな？

## 神とマッドの実験部屋

「ここで僕の研究成果の1つを発表しよう！」

「いよつ、待ってました」

酔っ払いが2人、喫茶店でなぜか怪しげな事を始めようとしていた。こういうのはシチュエーションが大事と創造で創った白衣を着たクロトスと何処からとも無く怪しげな器具と袋を取り出すロレオ。2人から出る怪しげなオーラが喫茶店内を蹂躪する。

「この試験管Aの『マンドラゴラのエキス』、『魏害虫の卵』を煮詰める。そこに『青いタヌキから奪った甘いあのお菓子』と『電気ネズミの体毛』を入れて、『侵略型宇宙人と名乗る力エルを絞った汁』を……………」

ロレオが意気揚々と試験管やフラスコ内に怪しげなものを次々と入れていく。

だが、『執事スキルを持つ守護者の…』とか『白い悪魔…』、『頭脳は大人、姿は子供…』、『蛹の…』、『九尾の…忍者…』とか怪しげな言葉をぶつぶつと呟きながらガチャガチャと作業するロレオの姿がたぶん1番怪しいだろう。

「そして…！」

ロレオが白衣のポケットから取り出したのはビンに入った粉状の何か。

「博士！それは一体…！？」

「ふっふっふっ…、これはだね…」

ノリノリの助手役のクロトスと博士役のロレオ。  
意外といいコンビらしい。

「とある山岳に生息する木天蓼という植物を加工したものだ」

「もつ、もしかしてそれは!？」

「そう、これは…」

ロレオは頭上高くにそれを掲げ、高らかに告げた。

「【またたび】だ!」

ロレオの背後で爆発が起きた… ような幻覚が見えた。

「おお〜!」

酔っ払いが2人揃うと不可思議な空間が出来るらしい。

異様なテンションの2人を止める者はいない。

ロレオが怪しげなウニのような機械に先ほどから混ぜ合わせていた液体とまたたびを入れる。

蓋をきつちりと閉め、ロレオがボタンを押すとウニ状の機械のトゲらしき場所から蒸気が噴出し、独楽のように回転しだした。

「よし、完成だ!」

「博士? まだ、この機械は止まっていますか?」

未だに機械は蒸気を噴出しながら回り続けていた。

「ふっふっふっ、この蒸気が完成品なんだよ。… 疲れるから終わりの無いボケやめてもいいかい?」

プシュ〜と風船から空気が抜けたかのようにいきなりだれるロレオ。

「ああ、話がチンタラと進まないしな。というわけで結論から言うてくれ。この蒸気というか煙は何だ？」

クロトスも素に戻り、止まらない煙をパタパタと手で振り払う。

「その名も『ネコ好きまつしぐら〜好きなものは好きだからしょうがないわよ！〜』だ」

「その名前は色々な意味でNGだ！」

ちなみに元ネタが分かる人へ。

作者の蛹にそのような趣味はありません。

「本当か？」

つて地の文につつこまないでくれる！？

つてか疑わないでよ！

「じゃあ、何で知ってるんだ？」

…色々とおったんだよ（泣）

ちなみに私には本当にそのような趣味はありません。

本当に本当にありませんよ！！

「クロトス君、さつきから何独り言を言ってるんだい？」

「いや、なんでもない。ちょっと酔いすぎただけだ。んでこれは？」

「またたびの強化版とも思ってくれ。ただし、ネコじゃなくてネコ好きが引き寄せられる。それもただのネコ好きにはムズムズする

ただだがかなりの重度のネコマニアだと本能的に……」

「ニャ〜ゴ」

「……こうなる」

「なるほど」

2人の視線の先にはウニ状の機械にじゃれつくレイの姿があった。錯覚であろうがレイにネコ耳と尻尾が生えているように見える。それほどレイの仕草はネコそのままであった。

「【万物創造《風》】」

吹き荒れる風に部屋に充満していた煙は何処かしらに霧散し、レイは……

「フニヤ？フニヤニャ〜〜〜！！」

風に煽られ、吹き飛ばされそうな所を床に爪を立てて、耐え忍ぶ。しかし……

「「あつ……」」

2人の声と同時に……

グサツ……

つとレイの額にあのウニ状の機械が刺さった。

……しゅん……

静寂が辺りを包む。

「クロトス君…」

「……………」

お互いが無表情で顔を相手に向け…

「すばらしい働きだ。君は想像以上に素晴らしいよ」

「まあ、結果オーライということで」

素晴らしい笑顔でズビシツとサムズアップをする2人。

「しかし、俺の店で死体は困る」

「任せてくれたまえ」

そういうとロレオは床に倒れているレイの耳元でボソボソと囁く。  
すると…

「だれが売れ残りよ！それに私はまだ三十路じゃないわよ！いつか私にもネコに乗った王子様が現れるのよ！きつとそうよ！」

「…何処から突っ込めばいい？その年でさっきのネコ真似は見苦しいとか見た目もつと老けてるぞとかネコに乗れるほど小さい王子様なのか化け猫に乗った王子様なのか…どっちにしても俺だったら逃げろぞ」

「うん。ほとんどの場所に突っ込んだね。後は前々からこのネタを囁くとどんなに意識が朦朧としても目覚める不死身性について僕は興味あるね」

売れ残…ごほんっ、ネコ好きマッドサイエンティスト、禁忌のマッドサイエンティスト、神王兼喫茶店マスター。

喫茶店内のマッド空間はさらに続く。



## 神とマッドの実験部屋（後書き）

ちなみに私が必死に否定した薬品の元ネタは私の記憶が確かならB  
Lゲームです。

再度、否定しますが私はその趣味はありません。

## 神と共犯者との宴（前書き）

久しぶりの休み。

うまくいけば今月中にもう1話投稿できるかも？

そういえば、50話番外のネタがまだ決まっていないますけどリク  
エストありますか？

## 神と共犯者との宴

「これは…？」

グラムは一刻も早く、自らの目で見た不可解な光景を主に伝えようと山を下し、町を風のように駆け抜け、喫茶店の扉を開けた。そこに広がっていたのは…

「ニヤ〜♪」

「「ニヤ〜♪」」

それぞれが持つグラスをぶつけ、一気に中の酒を浴びるように飲む3人。

乾杯のつもりのようなのだが掛け声がなぜネコの鳴き声なのだろうか？

「クロトス君、酒も酒の肴もぜんぜん足りないよ〜」

「足りないニヤ〜♪」

見ず知らずの男が体を振り子のようにフラフラさせながらクロトスに催促し、レイが妙にテンションを高く、顔を真っ赤にしながらそれに続く。

「よ〜し、それじゃあ…今度はこれだー！！」

クロトスがカウンターをドンツと拳で叩くとカウンターの一部がくるっと回転し、そこから…

「これは…遙か東方の国の銘酒『碧衣乃姫』！『十六夜物語』に『

緋月恋歌』まで…」

「それにこの皿のは…もはや幻の珍味と言われたあの…」

どういった仕組みなのかはわからないがカウンターには山のような酒と料理が並んだ。

「そして…!!」

クロトスはもう一度カウンターを叩くと…

「わが店のウェイトレス達のへそくりのお菓子の数々!しかとご賞味あれ!」

「主ツーーーー!!」

密かに楽しみにしていたとある有名店でこっそり買い、今度一人でゆつくりと食べようと思って隠していたお菓子等がばれていただけではなく、勝手に客に出そうとしている自分の主に護身のために持っていたナイフを投擲する。

「よつと…トワツ!」

それをなんなく指で挟んで受け止めるがそのナイフの死角に飛針が飛んできているのに慌てて体を逸らす。

飛針は壁の棚に置いてあるカップに衝突し、貫通。

そのまま壁に衝突し、ようやく止まる…ことも無く壁すら貫通し、店の外に飛び出す。

どうやら回転がかかっていたらしく、貫通したカップの飛針の穴は若干溶け、赤くなっていた。

「ちよつ……ツツ!!」



だがこれでも良く持った方であろう。

そして、後ろを振り返ろうとするが…やめた。

見なくても唾然とするレイとロレオの様子と背中を撫でる風の感触で大体わかってしまった。

クロトスの後ろの壁には窓が無かった。

なのに風が「後ろから」クロトスの背中を撫でる。

補修費が……と嘆く前にクロトスはグラムに怒鳴る。

「殺す気かつ!？」

「我の秘宝に手を出すようであれば主といえども容赦はせぬ!主を殺して我も死ぬ!」

「いや、お菓子だけでそんな『他の女に手を出すなら貴方を殺して私も死ぬわ!』みたいな修羅場はやめないかいっ!？」

「ロレオ。この店ではこれぐらいは当たり前前の光景なのよ。むしろ、まだ大人しいわ」  
「これでっ!？」

目の前の修羅場に一気に酔いの覚めた2人。  
とりあえず、しばらく口論する2人だが次第に落ち着き…

「ともかく、我の秘宝は元に戻せ」

「ウリエルのは？」

「無論、我らで食す。これは対価だ」

グラムが自分の秘宝の隠蔽と宴に参加する対価として出したのは見ただけで高そうなワインのビンが数本。  
それを見たクロトスはこくりと頷く。

「了解だ。新たなる共犯者よ」

ニヤリと笑う2人。

そして、クロトスが再びカウンターを叩くとグラムのへそくり（秘宝）だけがカウンターの隠し空間に消えていく。

「それでは我ら、共犯者達によるこの宴に…ニヤ〜」  
「「ニヤ〜」」

可笑しな掛け声の乾杯の合図だが皆が気にせずにそれぞれが酒を煽った。

……

……

…

「腐食した獣道？」

「しかも、この町に向かって伸びていた」

グラムはクロトスに自分が見たものを告げた。

「辿ってはみたが途中で忽然とその後が消えていたな。それもこの町の入り口付近の森の出口で…」

「魔物か？」

クロトスは頭の中で色々な魔物や魔獣、悪魔を思い出すがどれもぱつとこない。

そもそもこの世界にもいるかどうか分からないので無駄な考えであろつと考えるのをやめた。

「…もしかしたら弟子の仕業かもしれないね。いや、正確に言つと弟子の実験生物かな」

ぽつりと洩らすロレオの言葉にレイは呆れた口調で言った。

「本当に…アンタの周りつてろくなのがいないわね」

「「お前が言うなっ！！」「」」

「どういう意味よ！」

3人のユニゾンつつこみに反論するレイだが3人の言葉のほうが正論である。

「後、主よ」

「ん？」

グラムがクロトスにこっそりと耳打ちをする。

「残っている気だけでの判断ではあるが…『堕ちている』可能性がある」

「…………へえ」

グラムの言葉にクロトスは最初は面を食らうがすぐに笑みを浮かべる。

無邪気ではあるが黒い笑み。

見る者が見れば鳥肌が立つであろう。

だがロレオとレイは先ほどの言葉で口論中。

グラムは慣れている。

「確証は無いが事実だとすれば…面白そうではないか？」

そして、グラムも笑みを浮かべる。

クロトスの笑みにきわめて近い笑み。

だが、クロトスには無い妖美な色気がある。

「グラム」

「はっ！」

クロトスの雰囲気が変わる。

それは以前、王城に侵入する前にウリエルの報告を聞く際に見せた神王の威厳と迫力を纏っていた。

「この世界は……実に興味深い。そうは思わんか？」

それはグラムが腐食した獣道を見つけたときにふつと洩らしたこの世界に対する感想そのままであつた。

「世界は……いや、人とは時に我らの考えている範囲を超えた行動を起す。それが良くも……悪くもな。………?」

フツとクロトスが周りを見渡すと先ほどまで口論していたロレオとレイがこちらを凝視していた。

「くっ……くっ……クックッハハハッハッハッハッハッ——  
——！！！」

突然、ロレオが笑い出した。

狂ったように。

壊れたように。

そして、ピタツとそれが止まるとクロトスをじっと見つめる。

「君は実に面白い。君との出会いは必ず僕にとってかけがえの無いものになるだろう!」

「そうだな。この出会いも興味深いことには変わりない」

そして、2人は笑い出した。

歪に歪んだ笑い声は狂気に近い何かを含んでいた。それを遮るようにドアのベルが鳴る。

「ただいま戻りました。ずいぶんとたのし……そうで……すねえ……」

店に入ってきたウリエルはまず笑うクロトスと見知らぬ男に目を向け、それを呆然と見るレイとグラムに視線を向ける。

：そして、カウンターに所狭しと並んだ酒瓶と皿。

……クロトスの後ろの大きな複数の風穴。

……自分が隠していた大事な、大事な超有名店のデザートの【空箱】。

「フッフ、 フッフッ あはハハはハハはハハはハハ——  
ツ!!!」

先ほどの2人とは比べ物にならないほどの狂気に満ちた笑い声。

それは黒い笑みを通り越した鬼や悪魔、魔王よりも凶悪で死に満ちたものである。

[illegible]

「レ、レイ……?」

「……何よ?」

「君はさっきの修羅場さえこの喫茶店では当たり前で大人しい方だと言っただけ……納得した」

ロレオの目の前ではとても言葉で言い表せないような地獄が広がっていた。

とりあえず転がっている焦げた黒い2つの物体からは目を逸らす。

「言つとくけど……これにとある3人が加わるとさらに酷いわよ」

「これ以上があるのかいつ!」?

さすがに王女とそのメイドの御用達のお店とは言えない。

さらに王女がこの風景をみても『いつもの事でしょう?』と流すほど遅くなったとはとても言えない。

「……よくこの店が続いてるね」

「大丈夫。明日には店もアレも元通りだから」

視線を向けずに黒焦げの物体を指差すレイ。

「……さすがに嘘だろう?」

ロレオはその黒い物体をチラッと視界に入れ、さすがにそれは……といった感じで聞く。

「明日になればわかるわよ」

次の日

「いらつしゃいませ。おつ、ロレオか」

「…ねえ、解剖させてくれないかい？かなり本気で」

本当に一日で喫茶店は元通り、クロトスも火傷の跡1つ無かった。

## 神に迫るモノ（前書き）

来月は仕事の関係でまた忙しくなりそう…。

今月はできるだけ話のストックを作ればなあと思います。

新作長編も少しずつだけど書いてます。

投稿は来年かなあ？

## 神に迫るモノ

「執事長、ちよつとよろしいですか？」

そう呼ばれたのはジュニアールがティニアの教育中の出来事である。内容は他国の文化、経済、情勢とティニアがもつとも苦手とする分野の一つ（そもそも勉強自体が苦手であるが……）であり、今にもペンを投げ出しそうな様子のティニアに注意しようかとした時に部屋をノックする音が聞こえた。

そして、自分を呼ぶその声はジュニアールには聞きなれた者の声である。

「ちよつと待つてろ。…仕方ない、少し休憩としましょうかのう」  
「やったあゝ！」

両手を挙げて喜ぶティニア。

苦笑しつつもジュニアールは部屋のドアへと向かい、……すぐに引き返した。

そして、部屋の周りを注意深く確認する。

部屋の壁を数回ノックして壁の厚さを調べ、ベッドの下を確認し、本棚の裏を覗きe t c ……。

ようやく安心したのか体についた埃を払うとチラツとティニアを見る。

「念のために罪人用の鎖で拘束しといた方が良いかのう？」

「一国の姫に対してその扱いは何よ！」

隙を見せるとすぐに脱走するティニアを信用しろというのが無理であろう。

特に勉強時間中に脱走を図ろうとする確率は非常に高い。

「脱走したら勉強時間を2倍……いや、5倍にしますぞ」

「跳ね上がりすぎよ……。わかったから早く行ってあげたら？ ずっと部屋の外で待ってるわよ」

ジュニアルは首を傾げ、そして、手をポンツと叩く。

「おお、そういえば呼ばれておったんじゃったのう」

「執事長オ〜！」

ドアの向こうから涙声でジュニアルを呼ぶ声が聞こえた。多大な不安を残しながらジュニアルは部屋の外へと出た。部屋の外には今は兵士長の位にいる自分の孫がいた。

「何かあったのか？ 出来ればあまり姫様から目を離したくないのだからのう」

「もちろん姫様の脱走癖は重々承知なのですが……ちょっと緊急の要件です」

深刻な顔をする自分の孫にジュニアルも真剣な顔で先を促す。

「聞こう」

「数日前から隣国で変死体が相次いで発見されています」

彼はそう言つとジュニアルに報告書を数枚手渡す。

ジュニアルがそれを受け取り、目を通している箇所を確認しながらそれを補足するように彼は説明する。

「最初の内は家畜だけでした。それが魔物のも発見され、先日は人

間にも発見されました」

「……だが、隣国だろう。それがなぜ緊急でこの話がこちらに流れてくる」

「3枚目を見てください」

ジュニアルは書類を捲り、彼が指定した隣国の地図に目を移した。それには全ての事件現場に印が付けられ、発見日と時刻が記載されていた。

「ここが最初の事件現場」

そう言っただけは懐からペンを取り出し、とある事件現場を指した。

「次がここです」

そう言っただけ最初の事件現場と次の事件現場を線で繋いだ。

「次がここ。そして次が……」と続けていくと

「移動しているじゃと？しかも、ほとんど一直線に」

地図上には兵士長が書いた線がほとんど一直線状に引かれた。

「そして、この線の延長線上には何がありますか？」

「この先は森しか……なるほど。森のさらに先はここか」

「そう、私達の国と隣国の国境線です。念のため警備の強化はしましたが……」

「異常には違いないか」

地図を睨みつけるジュニアルはフツと地図上の線を指でなぞり、線が途切れた後もそれを伸ばす。

「この先は森。国境線、そして……いかん!!」

バンツとジュニアルは背にしていたドアを勢いよく開ける。  
そこはすでもぬけの殻だった。

「遅かったか……」

「いや、というか姫様どうやって脱出したんですか？」

兵士長は部屋を見渡しても特に変わった場所はない。

兵士長には密室としか思えなかった。

ジュニアルは部屋をじっくりと観察し、時には壁を叩く。

そして、しばらくすると壁のとある一箇所で止まった。

そこをジュニアルは何度かコンコンツと叩き、頷いた後、思いつきり壁を蹴っ飛ばした。

ズドンツと大きな音がし、兵士長がその蹴られた壁を見ると大穴が開いていた。

「……はっ？」

「この短時間で壁に穴を開け、さらにはすぐにばれない様に隠ぺい工作。リンも協力しておるな」

呆れて、というか驚きで声も出ない兵士長の耳に遠くで何かが落ちた音が聞こえた。

その後、悲鳴と複数の大声。

遠くてよく聞こえないが『大岩の下敷き』とか『医者』とか『血が止まらない』とか聞こえる。

とりあえず、自分は関係ない。

もしもの場合はメイド長にばらそう。

もつとも、あのモンスターと言葉を交わそうとするのも結構勇気が

いるのだが…。

「（フシュー）呼んだかい？」

「ギャアーーーー！！！」

兵士長が振り向くと部屋の入り口にモンスター……じゃなくてメイド長がいた。

鼻息を大きく響かせながらこちらを睨むメイド長という名の化け物。というか今さらりとこの化け物、心を読まなかったか？

「誰が化け物じゃ〜〜〜〜！！！！！」

「やっぱり〜〜〜〜！！！！！」

そのやっぱりが心を読んだことに対してなのか、はたまたこのメイド長が化け物じみていることに対してなのか。

それを確認することなく、兵士長はメイド長の張り手で壁に叩きつけられ、気絶した。

「（フシュー！）まったく、それで（フシュー！）何の騒ぎだい？」

先ほどよりボリュームが大きくなった鼻息混じりにジュニアルに尋ねる。

「手の空いてるものをかき集めてくれ。わしも城をすぐに出る」

そうしてジュニアルはメイド長に書類を渡して部屋を駆け出した。後に残ったのは化け物と死体のみ…

「（フシュー！）あんたも同じ目に会いたいのかい？」

…後に残ったのは美しいメイド長と気絶した兵士長のみですっ！！

「（フシユ）この私に仕事を押し付けるといふのかい？（フシユ）まあ、仕方ない」

そう言つてフツと書類に目を通す。

そこに記載されている気になる言葉。

『昨日まで生きていたはずの腐食した死体』、『大半の死体が何かに捕食された痕跡有り。ただし、菌形の大きさ、形が一定ではない』そして、捲った書類の中にあつた地図に引かれた線。

その延長線上には……

「（フシユ）これはちょうど商店街に（フシユ）ぶち当たるんじゃないかい？」

神だって予想できません！？（前書き）

ストックが49話完成まで完成。

いざ、50話番外書こうにもネタ無し。

今月中にもう2話ぐらい投稿を目標。

次回作の長編も2話まで完成。

神だつて予想できません!?

リンは勉強時間中に脱走したティニアと姉のエルと一緒に商店街を通りながらいつもの喫茶店に向かっていた。

「リンが手伝つてくれると脱走が楽になって助かるわ」

「……本当なら止めなきゃいけない立場ですけど爺さんを困らせ……、こほんっ……姫様のためですから」

リンは咳払いで誤魔化そうとするがそれには無理があつた。

彼女の姉がその話題を手に持った串焼きを頬張りながら広げたからだ。

「リンちゃんって本当にジュニちゃんの事嫌いだね。私はそれほどでもないけど」

「姉さん、ジュニちゃんって……」

口の周りについたソースを拭いながらエルはリンに言う。

「アイシャちゃんがそう呼んだ方が執事長は喜ぶって言うてたからそれにそう呼んだらジュニちゃん、お顔を真つ赤にするほど喜んでたよ」

それは怒りで顔を真つ赤にしていたのでは……というつつこみも無く、エルは言葉を続ける。

「そしたらジュニちゃんが私のほうに何かを叫びながら走ってきたけど私のところに来る前にソフィアちゃんに問答無用で連れて行かれちゃった。あつ、2人ともジュース飲みませんか?あそこのお店

って最近じゃ評判良いんですよ。お持ち帰りできるんで歩きながらも大丈夫ですよ」

「そうね。脱走で体力使ったからちよつと喉が渴いたかも」

ティニアの言葉にリンも頷く。

それを見たエルは笑顔を浮かべると皆の分を買いに走っていった。

「ところでリン。ソフィアちゃんって誰？」

「……私も知りません。爺さんを問答無用で連れて行ける人ならそれなりの地位にいる人だとは思いますが」

2人には心当たりが無く、3人分のジュースを持ってきたエルにティニアが直接尋ねた。

「ねえ、さっきのソフィアちゃんって誰？お城の人？」

それを聞いたエルはきょとんとした表情で不思議そうに聞き返す。

「えっ……、何言ってるんですか？いつも会ってるじゃないですか。ねえ、リンちゃん？」

「……知らない」

知っていて当たり前かのようにリンに聞くエル。  
ということは意外と身近な人物のようだ。

「それで誰なの、そのソフィアちゃんって？」

ティニアはエルが持ってきてくれたジュースを飲み、何気なく空を見た。

空は暗雲が広がり、今にも降り出しそうな感じである。

「王女様もリンちゃんも今まで『メイド長』の名前を知らなかったんですか!？」

ティニアは空に向かって勢い良く噴出した。

一瞬ではあるがティニア達にジュースの色の雨が降りかかった。

「あの人の本名ってあの見た目でそんなにかわいらしいの!？」

かなり失礼な発言ではあるが彼女の見た目を見たことのある人なら否定する者など誰一人いないだろう。

リンでさえあまりの衝撃で放心状態だ。

「あの人はあんな化け物じみた見た目でも中身は名前負けしないほどの優しい女の子ですよ」

エルもティニアより酷い事は言ってはいるが彼女の事をフォローした。

「どんなに忙しくても月一回は孤児院にお菓子と寄付金を持っていきますし、お城に来る小鳥達に餌もあげますし、メイド達の仕事も文句を言いながらもたくさん手伝ってくれますし、花壇のお世話も自ら進んでしているような立派な人ですよ。……あのとても人とは思えない見た目を抜かせば天女のような方ですよ!」

フォローしているのか貶しているのかよくわからないが力説するエル。

「……まあ、どちらかと言えば限りなく微妙だけど良い人ではありますね」

搾り出すように言うリン。

その様子からすると本当に微妙なのだろう。

「けど、やっぱり名前負け……」

ティニアがそのセリフを言い切る前に3人のすぐ横で異変が起きた。  
いきなりの爆音と衝撃。

すぐ近くにいた3人はその衝撃で吹き飛んだ。

3人はすぐさま起き上がり、辺りを見渡すと土煙が立ちこめ、ほとんど何も見えない。

その近くにいた人々が何事かと辺りを見回していると風が吹き、辺りの土ぼこりを吹き飛ばした。

そして、先ほどティニア達がいた場所のすぐ近くには…

「……………（ビクビクッ！）」

大きな岩がいつのまにか出現していた。

いや、岩にしてはきれいな円柱の形をしていて不自然である。  
しかし、それは大きな問題ではない。

その下を見ると一人の男性がその大岩の下敷きとなっていた。  
ジワリジワリと男から赤い液体が流れ出し、地面に広がる。

男は痙攣を起こし、うめき声一つ上げない。

そして、その大岩の横にいた女性と子供の親子連れは茫然としていたが徐々に顔を青ざめる。

そして…

「あつ…あんだー…ッ！…！」

「とうちやああああああんっ！…！」

必死に岩の下敷きになっている男を助け出そうとしている親子。

「医者と呼ばっ！商店街のケーキ屋の旦那が大岩の下敷きになったぞ！！」

「誰でもいいからこの岩を退かすのを手伝ってくれ！早く助け出さぞ！！」

「血が止まらないぞ。医者はまだか！？」

阿鼻叫喚の光景である。

呆然とするティニアだったがすぐさま正気に戻り、リンとエルに指示を出す。

「リンは大岩の破壊。その後、周囲の警備隊と連絡を取って周囲の警戒を。エルは彼の治療を頼むわ」

「了解しました」

指示を受けたリンは大岩を動かそうとする男たちに声をかける。

「…退いて」

「嬢ちゃん、危ないから下がって……」

「退きなさいっ！！」

普段大声を出さないリンが声を張り出す。

その気迫に大岩の周りの男たちはズザッと大岩から離れた。

リンは大岩に近づくのとポケットから白い布を取り出す。

タオル程の大きさの薄い白い布をリンは端を持って軽く振るとその布はまっすぐに延びた状態で固まり、その布の先を大岩に向けても重力で下に垂れることはなかった。

そして、リンはその布をまるで剣のように大岩に向かって振った。

それは確かに金属音を立て、その大岩の一部を斬り落とした。

それだけで嘔然とする周りだがリンは気にせず次々と布を振るう。その白い布はまるで名剣の如く次々と大岩を斬り落としていき、最後には男を傷つけないようにギリギリまで斬り落して小さくした岩が乗っているだけであつた。

「…姉さん」

「お疲れ様」

リンが布を軽く振るうと軟らかい状態に戻り、ポケットに戻した。エルはそんなリンの頭をポンつと撫で、今も痙攣している男の元に向かった。

「手持ちで足りるかな？」

エルがそう呟くとその手元には包帯や治療用の糸、針などが指の間に挟まっていた。

そして、周囲が見守る中で治療を開始する。

それもブツブツと何かを呟きながら治療を行い、その手元も淡く光っているように見える。

どうやら治療しながらも回復呪文も同時に行っているようだ。

言葉では簡単だが実際は片手で絵を描きながらも片方で料理をするぐらい難しい。

しかも、どちらもその技術は高く、医者が到着しても自分が手伝うと逆に足を引く張ると周りで見守るしかできないほどだ。

「あつ……まあいいや」

「……何がっ!?」「……」

つと所々でエルがやばそうなセリフを吐くがおおむね大丈夫そうだ。ティニアは近くにいた巡回中の兵士にこの周辺の警戒等の指示を出

す。

一通り目処がついた処でリンがティニアの袖を引っ張り、呼んだ。

「御苦労さま、リン。異状は無い？」

「…それなんですけど…」

リンは言いづらそうに言葉を濁らすはやがてボソツと言った。

「…あの岩はさっきの脱出で開けた壁です」

「へっ？」

その言葉にティニアはリンがバラバラにした破片に目を向けると確かにあんな感じの色の壁だったという記憶が残っていた。

しかも、破片の一部に人の足形のような窪んだ跡を見つけてしまった。

「あの爺さんにばれましたね」

そう言つて飛んできた方向に目を向けた。

「それがここまで飛んできた…しかも、私たちの真横!？」

ティニアもそちらに目線を向けるがここから先ほどの部屋の壁までは結構な距離がある。

「つくづく化け物ですね」

「ということはこれって間接的に私たちが原因の一部？」

目線を前に向けると呼吸が安定し、顔色も良くなった男の横で涙を流しながらエルにお礼を言う母親と父親に抱きつく子供。

真つ赤になつて照れるエルを2人は先ほどの親子並に顔を青くして  
心の中で謝つた。

## 神の償い（前書き）

今回は文字数が多くなったので前編。  
次回に話が続きます

## 神の償い

ウリエルは商店街にきていた。

とは言っても今日は喫茶店で使う食材の仕入れにきたのではない。

先日、楽しみに隠していたへそくり（お菓子）のほとんどをクロトス達に食べられてしまった。

ザニンタチニハソレナリノバツヲアタエタガ……

それでも怒りの治まらないウリエルにクロトスとグラムはウリエルに弁償代と数日の休暇を送った。

黒焦げの状態で必死に土下座する2人を見て、ようやく怒りが沈静化していった。かに見えたがウリエルがチラッとカウンターを見ると自分が一番楽しみにしていたケーキ（1時間以上行列に並んでやっと手に入れた人気商品）が綺麗に食されていた。

……

……

…

消えかけた赤い炎が禍々しい黒い焰へと変わり、喫茶店内の罪人たちを襲った。

阿鼻叫喚の光景となったがそれは今は関係なからう。

ともかく弁償代+αと数日の休暇を手に入れたウリエルはへそくりの補充にこの商店街に来ていた。

「ウリエルの姉御！今日は活きの良いのが入ったんだが見てかねるか？」

「だから、姉御はやめてくれませんか！？私には似合わない呼び名

だと思っんですが」

ウリエルが商店街を進むとあちこちで声を掛けられる。

お店の人はもちろん、近所の子供にまでウリエルの名前を知られている。

しかし、なぜか必ず皆がウリエルの事を『姉御』と呼ぶ。

「そうは言ってもなあ……。なあ、肉屋の大将？」

「ああ、姉御は姉御だもんな、魚屋の旦那」

「いえ、姉御と呼ばれるとなんか私が悪っぽく聞こえるんですけど」

苦笑しながら話しているとこの近くに住む子供たちが元気よく走りまわってこちらに近づいてきた。

「あつ、ウリエルのあねござんだ〜。こんにちわ〜！」

「「「「あねござん、こんにちわ〜！」「」「」」」

ガクツと脱力するウリエルに肉屋と魚屋は大声で笑う。

一部始終を見ていた周りの皆も笑みがこぼれた。

ウリエルは引き攣った顔を隠しながら子供たちの頭を撫でる。。

頭を撫でられた子供たちは照れながら走って商店街の先へと行こうとするとその中の小さな男の子が屈強な男と正面からぶつかった。

「痛ってな！気をつけろっ！！」

そう言つて男は地面に尻もちを付いた男の子を蹴り飛ばそうとした片足を上げた……。瞬間に軸足を駆られ、地面に転がった。

「何しやがるっ！！」

男が起き上がると男の子を立ち上がらせるウリエルの姿があった。ウリエルは男に視線も向けずに怯えて震えている男の子を立たせ、土を払い、慰めている。

無視された男は怒りで顔を真っ赤にし、背負っていた袋から大きなモーニングスターを取り出した。

そこで初めて男に視線を向けたウリエル。

ウリエルの前にいるガラの悪い男は分厚い鎧を身に纏い、柄に鎖で繋がれた鉄球を、しかも、殺傷能力を高めるために鋭い棘が所々に付けられたモーニングスターを振り回しながら怒りで真っ赤な顔でウリエルを睨む。

「大会の憂さ晴らしに貴様らをへブシッ!!」

何やらしゃべっていたがウリエルは気にせずに跳んで男が振り回していた鉄球を片手で掴み、そのまま男の顔目掛けて叩きつけた。そのまま地面を転がって行った男を確認するとウリエルは子供たちの方を見る。

「怪我はないわね。アレも悪いけど君たちも気をつけないと駄目よ」  
涙眼の子供たちを先ほどとは違い、やさしく、労わる様に頭を撫でた。

すると徐々にはあるが笑みを浮かべるようになった子どもたち。

「さあ、もう行きなさい」

そう言つと子供たちは笑顔で走り去り、途中で振り返って手を振りながら消えていった。

「さて……と……」

ウリエルが振り返ると先ほどの男が顔を真っ赤にしながら立ち上っていた。

怒りだけではなく血で顔を真っ赤にしているが……。

「ぎじゃまあああああああつ！！！」

「呂律が回っていないわよ。後、それはお友達？」

見ると男の周りに8人ほどの男がいた。

どいつも手に獲物を持ってウリエルの方をニタニタと笑いながら見ている。

しかし、一人だけ大きなリュックを背負った商人のような男がいた。ガラの悪い男たちの中で一人だけ異色を放っている。

「貴方は何？」

「私ですか？自称、七つの顔を持つ商人です」

ウリエルはうそくさそうに男を見る。

「自称？」

「実際は商人じゃないですからね。これは変身用で七つの顔の一つです」

周りのガラの悪い男たちはびっくりした顔で彼を見た。  
どうやら彼らも知らなかったみたいだ。

「ぎじゃま、ゆじゅじゃんじょ！ぎじゃぎじゃにぎでやる！！！」

叫びながら再びモーニングスターを振り回す男。  
それを呆れたように見るウリエルと自称、商人。

「呂律が回ってないわよ。何言ってるかわからないわ」

「有料で翻訳しましょうか？」

「セコイわね」

「言ったでしょう？自称、商人なんですよ。……今はね。それでは」

そう言つて男たちから離れる。

「仲間じゃないの？」

「この国つて人数が多ければ多いほど入国料が安くなるんですよ」

そう言つて人ごみの中に消えていった。

「この世界つて本当に変わり者が多いわね……って溜息ぐらい吐かせなさい！」

溜息を吐こうとした所に鉄球がウリエルを襲った。

……

……

…

「諦めたら？勝てないのは解つたでしょう」

ウリエルの前には傷だらけの三人の男。

他はうめき声を上げながら地面に倒れていた。

「まじやまじやあああああああつー！」

「だから何言ってるかわからないわよ」

そう言つて睨む男を呆れたように見るウリエル。  
すると…

「『まだまだー！』だそうですね？」

先ほどの自称、商人が人ごみの隙間からやってきた。

「消えたんじゃないの？」

「いや、面白そうだったんで遠くから見ってたんですけど遠くからじや物足りなくて戻ってきました」

「変わり者ね」

「『面白ければすべて良し』っていうのが私の人生のモットーなんですよ。それより、あっち」

ウリエルが男の指さす方を見ると…

「兄貴、応援を呼んできたぜ！」

そう言つて6人ほどの男がこちらにやってきた。  
まだ仲間がいたようだ。

「それでもまだまだ…」

ウリエルがそう言つと…

「兄貴、応援を呼んできたぜ！」

ウリエルが先ほどの方向を見るとさっきの奴とは別の男たちがこちらにやってきた。

「何人いるのよ……」

「兄貴、応援を呼んできたぜ！」

げんなりしながら同じ方を見ると案の定、男たちがこちらにやってきた。

「しつこいわね……」

「兄貴、応援を「しつこいって言うてるのよっ……!!」」  
「言ったでしょう？多い方が入国税が安くなるって」

切れるウリエルに飄々と声をかける自称、商人。

「もういないわよね」

そういつてウリエルは周りを見渡す。

「それなんですけどね」

自称、商人は苦笑する。

「まさか……」

ウリエルの顔が引きつると同時に……

「兄貴、応援を呼んできたぜ！」

ガクツと肩を落とすウリエルに自称、商人はついに笑いだした。  
それをジロツと睨むもすぐに気を取り直した。

「あゝもう、好きなだけかかってきなさい!!」」

そう言っで叫んだ。

「あゝ、そんなこと言っている…」

自称、商人の眩きと共に…

「兄貴！」

「兄貴！」

「兄貴！」

「「応援を呼んできたぜ！」」

「いい加減にしない！！！」

神：最近、出番なくていじけてます（前書き）

明けましておめでとうございます。

久し振りの投稿です。

というか久しぶりのお休みです。

新年から申し訳ございませんが今月も忙しいです。

来月はさすがに大丈夫です。

新年という事で小説の大掃除（手直し）をしようかと思っています。

いや、こんな駄文が徐々にはあるがランキングが上がってしまい、最初の方の話なんて目も当てられない状態なもので……っというか今も人様に見せられないような文章力ですが。

今月であればもう一話以上の更新を目標とします。

時間はあまり無いですが頑張ってみます。

神…最近、出番なくていじけてます

いつもは賑やかな商店街もこの日ばかりは違っていた。

威勢の良い声で客寄せをする商店街の店主達も…

少しでも家族に美味しいものを食べさせたいと願う主婦達も…

大人達に注意されながらも無邪気に遊ぶ子供たちも…

商店街のとある場所で行きかう人々が足を止め、ただその光景を呆然と見ていた。

人々の視線の先にあるのは死屍累々の光景。

ある者は骨を砕かれ、ある者は血を吐き、ある者は痙攣を起こしながら地面に倒れている。

その中心にいるのは風で靡く長く黒い髪を持ち、視線に貫かれたものは男女問わずにその鼓動を高鳴らせる鷹の目のような鋭い眼を持つ一人の女性。

平均以上の女性らしいスタイルを持ちながらも見る者が見ればその中に潜む力強さが窺えるだろう。

死屍累々の光景の中にただ一人、その中心で佇むその姿みれば普通は恐怖を抱かせるはず。

しかし、誰もが恐怖よりも魅了された。

それが例え、彼女に傷つけられた者でさえも恨みよりも美しいとさえ思った者も少なからずいた。

多くの仲間で囲み、一斉に襲ったにも関わらず、傷一つ付けられず、何をされたかもわからぬままに地に伏す自分達。

地に伏しながらも残る力を振り絞って彼女を睨みつけようと身を起こし、彼女を見た瞬間にその気が失せた。

自分が受けた時はただ痛みと屈辱のみがあった。

しかし、彼女が自分の仲間たちを余分な動きや隙が一切感じられないような身のこなしで次々と捌いていく姿に見惚れてしまった。

「ふう……」

息を短く吐くウリエルがポケットからハンカチを取り出し、自らの拳を拭った。

それは黄色い花の刺繍がされたかわいらしいハンカチではあったがそれはすぐに血に染まった。

とは言ってもウリエル自身の血は一滴も交じっては無く、全てが地に伏してゐる者達のものである。

真つ赤な妖しい薔薇のように染まった花のハンカチをウリエルはチラツと一瞬だけ残念そうに眺めた。

それも一瞬、すぐに怖いくらいの無表情で周りの地に触れ伏す愚者に視線を向けた。

「言っておくけどね……」

呟くように、それでも静寂な商店街には響いた声は周りにいた全ての者の耳に届いた。

血で真つ赤に染まったハンカチをウリエルはそのまま軽く上に投げた。

「これ以上増えるようだったら……」

宙に浮いたハンカチは重力に引かれて下に落ちる前にウリエルの手から放たれた炎によつて一瞬にして灰となった。

紅い血に染まった薔薇は赤い焰によつて漆黒に塗りつぶされ、雪のようにハラハラと散った。

「……同じ目に会いたい？」

ウリエルの視線の先には顔がボコボコに腫れて尻もちを付きながら

涙眼でウリエルに怯える先ほどのリーダー格らしき男。

棘付きの鉄球はもはや原形を留めておらず、棘は取れ、元が何だったかもわからぬほどに歪んでいた。

男が着ている鎧も負けず劣らずボロボロであった。

かなり情けない姿になった男はウリエルの言葉に首を横にブンブンと振る。

ウリエルはその様子に目をスツと細めるがそれにさらに怯える男に呆れたかのように溜息を吐く。

「そう…、ならこれから気をつけなさい」

そういうとウリエルは興味を失ったかのようにその場から後を立つとした。

「………すげえな。さすが、【焰魔】の姉御だ」

周りの観衆の中の一人がボソツと呟かなければ…

立ち去ろうとしたウリエルの動きがピタツと止まった。

それを見た観衆は先ほどの言葉を発した者を止めようとしたがその者の仲間らしき人物達それに気付かずに続いた。

「【焰魔】って…【煉獄の閻（焰）魔】のウリエルか！？」

「あの一夜にして三つの盗賊団をアジトごと滅ぼしたという、あのウリエル！？」

「遠国の生贄の娘を救うために炎竜を軽々と焼き殺した、あのウリエル！？」

「あの一晩で数多の男の心に火を付けたあのウリぐはあっ！！」

一人を皮切りに次々と自分の噂について語っていたがとりあえず一番不快な噂を口にした男を思いつきりぶっ飛ばしたウリエル。

「まったく失礼ですね。私はただの喫茶店のか弱いウェイトレスだというのに……」

反論したいが下手のことを言うと先ほどの男たちと同じ目に逢うことが分かつている（ウリエルの鷹のような目がそう言っているように見える）ので無言でいる観衆。

すると突然、ウリエルの姿が消えた。

観衆は何が起きたのか分からずに目を見開くが観衆の輪の外の方から大きな音が聞こえたので皆がそちらに目を向けた。

見た途端に何とも言えない静寂が辺りを包んだ。

まず、そこにいたのは4人。

一人は素晴らしい笑顔でありながらも魔物でさえ逃げ出すような黒い邪悪なオーラを纏っているウリエル。

右手で何かを驚掴みながらそれを器用に笑顔で睨みつけている。

その右手の先には頭を驚掴みで持ち上げられてプラプラと揺れている小さなメイド。

こちらにも笑顔なのだが眼にはしっかりと涙が零れかけている。

その横には黒いメイドが目を見開いてその光景をじっと見ている。

しかし、注意深く見ればその少女が恐怖で震えているのが見て取れたであろう。

その後ろにいた長身の女性も同じように目を見開くがすぐに苦笑する。

恐怖するでもなく、苦笑とはいえ笑える彼女は一番の大物か凄まじい人生を送っているに違いないであろう（事実、身分的には大物ではあるし、壮絶な人生は送っている。特にクロトスがこの世界に来

てから…」。

ウリエルはゆっくりと口を開け、黒いメイドに詰問する。

「エル、私の耳には貴方が『何処が…』といったように聞こえたのですが…気のせいですよ？ ……ねえ？」

ちなみに、先ほどウリエルがいた場所からエル達のいた場所までは20mほどある。

その距離を一瞬で詰め、エルを鷲掴みにした。その光景は閻魔様と罪を犯した魂の地獄裁判。

「…キノセイデスヨ……エヘッ…」

カタカタつと人形のように語るエル。動きもそうだが眼に生気が宿ってないように見える。

「そうよね、ちょっとイライラしていたものだから空耳でも聞こえたのかもしれないわね。ごめんなさい、エル」

申し訳なさそうに謝っているがエルを掴んでいる手からはミシミシを音が聞こえる。

「キニシナ…イ……デ……エ…」

片言な言葉が徐々に小さくなり、エルの目が潤みだす。

「（壁が降ってきた事と今の事。もしかして、今日は運が悪いのかな？）」

ティニアはちょっとだけ今日、脱走したことを後悔した。

………

………

…

それから時間が少したったとある路地裏。

そこにはボロボロになった大柄な男。

手にはもはや原形を留めていないモーニングスターを引きずりながらズルズルと怒りで顔を歪ませながら歩いていた。

男の頭には如何にして復讐するか、ということしか頭にはない。

傭兵を数十人ほど雇って夜襲を仕掛けよう。

男はそう思い立った。

幸い自分は数十人の傭兵を雇うぐらいは金に余裕はある。

もちろん、貴族とかというわけではなく、表沙汰にできない仕事で得たものであり、ウリエルの働いている喫茶店もこの国では有名であるので問題ない。

男は頭の中では如何にあの女を痛めつけるかを考えるだけで醜悪ではあるが笑みを浮かべる。

もつとも、男がそれを実現できる日は永遠に来なくなったのだが…

「こんにちは」

男の前にいたのは入国する際に自分と契約をした商人。

この国は確かに人数が多ければ多いほど入国税は安くなるがそれは正規の手続きをしている者のみ。

手続きのできない前科者等は入国できない。

この商人からは隣国の酒場で仲間と飲んでいたところに現われ、密入国の依頼を受けた。

酔いに任せて普段の数倍の値段をふっかけたのだがこの商人はすぐに了承した。

その時はこの商人の馬鹿さに仲間と共に大笑いした。だが、この商人は本当にあの時と同じ男なのだろうか？  
そもそも…

「そして…」

あの男の後ろにいるのは【何】なんだ？

「さようなら」

あれは生物なの……

……

……

…

「綺麗に食べなよ。って言うっても理解するほどの知能はまだ無いか」

男の前には貪り、啜る様に何かを喰らう【何か】。

地面には紅い液体が広がるが男の足元に来る前にその【何か】が啜る。

「さっきのお姉さんが倒したこれの仲間たちも喰らってまだこの程度か。先は長いね…」

やがて、【何か】は貪るのを止めた。

「それじゃあ、次行こうか」

そう言つて、自称、商人と【何か】はその場から立ち去つた。  
その場には黒く腐食した地面以外は何も残つていなかった。

神の周りは怖い人ばかり！？（前書き）

久しぶりの投稿…という言葉をつたたび使っている気がする。  
投稿するスピードが徐々に下がってきているし…。

次回は番外編。

完成品を読んで思った事。

「やっべ、色々壊しすぎた」

次回、マッドな方々があの人を…

裏タイトル『恐怖のEF ベクトルシャッフル』

あまり期待しないでね♪

…壊れているのは俺か？

神の周りは怖い人ばかり！？

あのウリエルの大立ち回りの後、ティニア達はウリエルと共に喫茶店へと向かった。

エルがウリエルに対して少々怯えていたが特に問題は無かったといえよう。

喫茶店の前まで来るまでは…

「やっぱり帰ろうかな…」

そう呟くティニアの視線の先には喫茶店の前で口論するグラムと男4人組。

ティニアにとっては空から壁の一部が降ってきたり、ウリエルの機嫌が悪かったりと散々な一日のようだ。

しかし、無視するわけにもいかなないので口論しているグラムにティニアは声をかけた。

「どうかしたの？」

すると初めて気が付いたのか、グラムは相手に向けていた鋭い視線をそのままティニア達に向け、すぐに目を丸くした。

「ああ、今日はいつもより来るのが遅かったのだな。何、この小童共がぶつかった時に骨を折ったとかで金払えとか喚いてるのだ」

どうやらずいぶんとめんどくさい相手にからまれたようだ。

グラムとティニア達が視線を向けた先にはニヤニヤとティニア達を見る男たち。

「お前ら、この糞餓鬼の保護者か？保護者ならちゃんと賤くらいしとけや」

「そうそう。俺の友達がこいつに怪我させられたんだぞ。どうしてくれるんだ？」

ティニア達を値踏みするように見る男達。

一般人に比べて上等な身なりと容姿、特にティニアとウリエルのスタイル。

そのニヤついた顔から考えていることは簡単に想像がつく。

「うわゝ…」

「…怖いもの知らずというか」

エルとリンがそう呟く。

男たちが目を向けているのはこの国の王女と先ほど大立ち回りをした最近、噂になっているらしい最凶のウェイトレス。

「自分の娘が俺の骨を折ったんだ。それ相応の…」

男たちの内の一人が言葉を言いきらぬうちに言葉を止めた。

ティニアとウリエルから凄まじい程の黒いオーラが噴き出している。それに当てられた男たちは恐怖で唇が乾き、体が自然に震え、冷汗が際限なく噴き出す。

「…らしいですよ、ウリエルさん？」

「あら、何言ってるの？貴方に言ってるんでしょう、ティニア？」

「でもあいつの視線は…」

「いえ、それは…」

そう言って笑顔ながらも目がものすごく怖い2人はお互いに今の言

葉の矛先を相手に押し付けあっている。  
しばらく口論していたがしばらくすると…

「フフフフツ…」

突然、笑いだした。

微笑みとは程遠い笑み。

その証拠にいつの間にか喫茶店前の道には彼ら以外誰もいなくなっていた。

男たちもさすがに自分たちがいちゃもん付けた相手が悪かったと悟ったのか後ずさり始めたが彼女らは笑うのを止めて、グルンツと顔を彼らに向けた。

「「「ひひひひひー！！！！」」」

その血走った目線と共に。

「「どっちに言ったの！？」」

そう言って近寄る2人に彼らは恐怖のあまりに彼女らに襲いかかった。

もつとも愚かで身の程知らずな選択である。

そして、彼らにとつてはもつともしてはならない選択であった。

彼らの一人は懷からナイフを取り出し、ウリエルの方に向かった。

それを追うようにもう一人もウリエルに向かう。

ウリエルは彼らを一瞥すると特に構えもせずナイフを突き刺そうとする男の凶刃から体をさつと逸らし、すれ違いざまに彼の手の中にあるナイフにそつと自分の手を添えた。

傍目にはそれだけにしか見えないが男は悲鳴をあげてナイフを放り出した。

男が自分の手を見るとまるで真っ赤に燃えた鉄か何かを掴んだかのように真っ赤に焼けただれていた。

この時、男が目にするのはなかったが彼が放り出したナイフの刀身は真っ赤に熱を持ち、一部が溶けだしていた。

涙眼で自分の手を見ていたが彼がふっと顔をあげるとガシッと誰かに顔を鷲掴みにされた。

指の隙間から見えたのは自分の顔を鷲掴みにする女性を反対の手で同じように顔を鷲掴みにされた自分の仲間であった。

そして、女性がふっと笑い…

「燃え尽きなさい」

ウリエルの手が炎に包まれたかと思うとそれが侵食するかのようになすぐに男たちの全身が火に包まれた。

男たちは悲鳴を上げながら地面を転がるもその火が衰えることはなかった。

口を開けば灼熱の炎と空気が口に入り込み、体内を暴れまわり、閉じれば意識が朦朧とする。

転がっても火は消えることなく、服を脱いでも炎は皮膚に貼りついたかのようにその身を焼く。

しばらくするとウリエルが指を鳴らし、それと同時に彼らを包む炎も無産するかのように消えたが男たちは立つ気力も無く、地面に横たわる。

しかし、彼らは火に包まれたとは思えないほど軽傷とはいえないが重傷ともいえない火傷であった。

ウリエルは彼らが生きている事を確認し、フツとティニア達の方を見ると…

「あゝ、今日って最悪っ！」

と文句を言いながらも襲いかかる男たちを蹴りでボコボコにしているティニア。

ナイフを抜いているようだが器用に足でそれを捌き飛ばし、鳩尾などの急所を中心に華麗に突くように蹴る。

ジュニアルから護身術を習っているとウリエルはティニアから聞いたことがあるがどう見ても護身とはかけ離れた凶悪かつ有効的な攻撃であった。

女性としての非力な欠点を足数と急所への攻撃という面でカバーし、それを躊躇なく実行できる強靱で大胆な精神。

失礼かもしれないが人間にしておくにはもったいないとウリエルはちよつとだけ思った。

それは人間という種族を見下しているわけではなく、これが自分と同じ天使で自分と同じ職場にいてくれたならという願望であった。見る間に腫れていく男たちはしばらくすると地面に力尽いて倒れた。

「くっ…怖いっ!」

と2人から離れた場所でそれを見て怯えるメイド2人。

しかし、遠くから見ていたおかげで気づいた。

ウリエルが倒した2人のうちの1人が体を若干だが起き上がらせていた。

火傷でボロボロだがその眼には怒りと殺意で満ちていた。

「くっ、なめや…がつて。せつ、先生――!!」

そう叫んで力尽きた男。

そして、路地裏から男が一人現れた。

細めの体だが鍛え抜かれているのが解る肉体。

眼はうつすらと開かれているがその隙間からのぞく瞳は色濃い狂気の色に染まっている。

「手合わせ願おう」

そう言つて剣を抜き…

頭に飛んできたワインボトルがぶつかつた。

いきなりの光景に一瞬、その場の空気が凍つた。

男も剣から手を放し、頭を押さえながら激昂した。

「なっ、何者だ!？」

そう言つて男が目線に向けた先には…

「店前で暴れるんじゃないやねえ! 只でさえ小遣い減らされてるのに売上下がったらどうしてくれるんだ!」

エプロン（花柄）を身につけた喫茶店のマスター（現在、財布をウリエルに握られている神王）がいた。

「ウェイトレス共に出す茶菓子を手作りでしかも手抜き&節約レシピで茶菓子代をピンはねしたり、とある3人組に失敗した料理を新メニューと言つて有料で出したりしてやつの状況なんだぞ!」  
「「「「「ちよつと!？」」「」「」」

5人にとつて聞き捨てならない言葉を言うクロトスだが怒りでクロトスの視界には5人は入っていないようだ。

「つてか今考えたらさつき投げたワインつて意外と高いんだつた。  
金払え!」

「ふざけるな!」

「大真面目だ!!!」

「いや、それもどうかと…。ねえ、ウリエルさん？」

ティニアはウリエルに視線を向ける。

ウリエルは疲れたように肩を落とし、頷く。

そして、今も怒鳴るクロトスの所に歩み寄る。

「さっきのワイン代と営業妨害の賠償金とその他もろもろをサービスして総額……ってお前らいたのか？」

「クロトス、両手を上げなさい」

「こうか」

ウリエルの言葉にとりあえず両手を上げるクロトス。

「交代」

そう言ってティニアとウリエルはクロトスの手にハイタッチを交わした。

「はっ？」

訳の解らないクロトスはティニアとウリエルに背中を押された。

「「さっさと行きなさい！」」

「どわっ!？」

突き飛ばされた先には剣を頭上高くに掲げる先生と呼ばれた男。

自分の間合いにクロトスが入ると頭上の剣を振り落とした。

クロトスは自分の頭目掛けて落とされる斬撃をさっと避けるが男はその刃を返し、下からクロトスの足目掛けて剣を跳ね上げた。

それをクロトスは…

「遅い」

右手の親指と人差し指で挟んで刃を止めた。

男はあまりにも現実離れたクロトスの止め方に啞然としていたためクロトスが男のお腹に左手の手のひらを当てている事に気付かなかった。

「奴当たりだ。悪く思っな」

クロトスがそう呟くと男は吹っ飛び、店の道を挟んで反対側にあつた壁にめり込んだ。

「さて、リン。後は頼む」

そう言つてクロトスは喫茶店の中に入つて行つた。

それに続いてグラムとエルも中に入った。

ウリエルはリンに視線を向け、クロトスの言葉の意味を聞こうとしたがリンはすでにいなかった。

「たぶん、証拠隠滅しにいったのよ」

それに私もだいぶお世話になつてゐるしとティニアがウリエルに言つた。

一国の王女がそれもどうかと思うがリンは色々と秘めている事は何となく感づいていた。

こつそりと暗器を隠し持っていたのも知っていたし、たまにふらつと居なくなることがある。

知ろつとは思わない。

ウリエルはリンを信頼しているし、前にティニアと2人で町を歩い

ていた時にこつそりと護衛しているのに気づいたからだ。

時たま見せるその行動に何となくだがウリエルはリンの立場が想像が付いている。

しかし、それはそれとして…

「なんであの人がそれを当然のようにリンにいうの!？」

「もしかして、お世話になるくらい…今のような事をしてる？」

色々と問いただすために2人も喫茶店内へと入った。

ちなみにエルは…

「えいつ!えいつ!」

倒れている男たち一人一人にプスッ、プスッと針を刺していた。

その針はなぜか緑色の液体で濡れ、刺された瞬間に男たちはビクビクツと痙攣を起こし、口から泡を噴き出した。

それを一通りに行った後、ふっと普段からは想像できないような真面目な顔になり…

「掃除はいつもと同じ手筈で。引き続き任務続行を」

そう呟くと表情が崩れ、いつもの呑気で明るい【エル】の顔で喫茶店内へと入った。

彼女が喫茶店に入る頃には喫茶店の前には血の跡も男たちも消えていた。

## 番外 変わりゆく貴方へ（前書き）

祝 50話&PV35万アクセス突破！

ここまで続くとはさすがに予想外です。

さすがに始めた当初に比べたら更新スピードは下がってますが…。

今回の話の後書きにこの話の裏話があるので興味ある人は見てください。

## 番外 変わりゆく貴方へ

それは本当にただの偶然であった。

この日、喫茶店にいたのはとある4人。

喫茶店のマスターのクロトス。

仕事帰りに店に寄ったレイ。

レイに誘われたアイシャ。

偶然、居合わせたロレオ。

アイシャとロレオは面識があるらしく、4人は世間話などに華を咲かせていた。

そこまでは問題なかった。

ふっとクロトスがとある4人の共通点に気が付かなければ。

クロトスはまず、レイを見た。

科学者と本人は言っているが魔法や科学など幅広い知識を持つ彼女は科学者の枠には当てはまらないだろう。

猫好きがなければ各国に名の知られる優秀な研究者だとリンから聞いたことがある。

その右隣には最近になって常連となったロレオ。

研究内容と頭のネジがアレだがこの世界の科学レベルではオーバーテクノロジーに近い研究結果と知識を持つ生物学のスペシャリストだ。

少なくとも話を聞いている限りでは数世代先の科学レベルは十分にある。

クロトスにとってもたまに興味深い研究結果があった時もあった。

レイの左隣にいるアイシャは賢者の称号を持つ東の森に住む魔女で

ある。

初会合の時は初見でクロトス達を見抜き、クロトスの持っていたこの世界には無い技術で作られた水筒等に鋭い観察力を発揮した彼女。彼女は魔法技術もそうだが森に自生する植物等の研究、言わば植物学や薬学の研究も行っているらしい。

そして、クロトス自身は数多の物を創造する力。

この世界より圧倒的に進んだ技術レベルの世界の住人。

クロトス自身も色々な知識を有しているし、趣味の一環ではあるが個人のレベルをはるかに超えた研究も行っている。

その研究結果のおかげで神界でトラブルが起きる事も多々あるが…。

つまり、この4人共が創造する者。

『研究者』なのである。

「という事で手を組まないか？」

そうクロトスは共同研究の案を3人に出した。

クロトスがさつと手を差し伸べるとその上に一つ、また一つと手が乗せられ、最後には全員の手が乗せられた。

ここに様々な伝説を残す研究グループ、この時はまだ無名だが後の名を人呼んで『灰猫』の誕生の瞬間である。

………

………

…

「…っでこれは何かしら？」

ちよつと外に買い物に行っていたウリエルが喫茶店に来てみると喫

茶店内には怪しげな器具や薬品で散らかり放題であった。

その中心部でちょうど研究の試作品を囲み、高らかに、怪しげに笑っていた4人を容赦なく燃やし、黒焦げになった4人に強制的に喫茶店内を片付けさせた後、クロトスに入れさせたコーヒーを飲むウリエル。

他の3人はいつの間にか何処かへ行ってしまったようだ。

ウリエルはコーヒーを飲みながら自分の目の前にある紫色の液体が入ったフラスコをうそくさそうに見ている。

しかも、匂いがキツイ。

ウリエルの持つコーヒーの匂いと合わさって、凄まじい芳香がかもし出されている。

それを手で払いのけようとするウリエルを慌てて止めるクロトス。

「せっかくの『ヘンシン薬』なんだから乱暴に扱うなよ!？」

「変身薬？」

クロトスの言葉にウリエルが聞き返すがクロトスは首を振った。

「漢字じゃなくてカタカナで『ヘンシン』薬だ」

「いかにも怪しげね……」

「そう、これは身体的な『変身』と心理的な『変心』のどちらか、もしくは両方をランダムで起こす画期的なイタズラアイテムなのだ！」

なぜか熱く語るクロトス。

それを聞いてガクツと肩を落とすウリエル。

「そんな馬鹿らしいものじゃなくてもっと人様の役立つ物を作りなさいよ。それとこの薬品の臭いはキツイから早く捨てて」

「ああ、これはまだ蒸留してないからな。完成品は全くの無味無臭

なんだ。実際、そのコーヒーだつて違和感無いだろう?。」

ちょうど飲み干した所であつた。

啞然とするウリエルだったが徐々に顔を青ざめる。

「なっ…、ななななーーーーっ!」

「念のため想定用量の5倍程を盛ったんだが健康に今の所害はなさそうだな」

「あつ、あなたはーーーーっ!」

立ち上がつて顔を怒りで真っ赤にするウリエルに逃げようと背を向けて店の中に逃げようと走り出したクロトス。

「まって…ください、ごしゅじんさま…」

凄まじい音を出しながら転んだクロトス。

慌てて後ろを振り返つた。

「あの…だいじょうぶですか、…ごしゅじんさま?」

とてとてつとこちらに近寄る小さな子ども。

目をウルウルと潤ませ、心配そうにこちらを見る遠い昔に見た覚えのある、リン達より少し幼い位の子供。

その子供におそろおそろ震える声で尋ねるクロトス。

「えーと、ウリエル…だよな?」

「…なにをいってるんですか?…もちろん、ウリエルにきまつてるじゃないですか」

小首を傾げてクロトスをじっと見つめるウリエル（幼）。

その眼が突然見開かれた。

「ごしゅじんさま、たいへんです！おかおにおけがが…！」

そう言つて先ほど転んだ時に出来たクロトスの頬の傷に自分の顔を近づけ…

「イタイのイタイの…とんでけ…です」

傷口をそつと舐めた。

「ウリエルはまだチユマホウができないのでこれでごめんなさい、ごしゅじんさま…」

今にも泣きそうな顔でスカートの端をギュツと握りしめながらも心配させまいと潤んだ目で笑顔を作るウリエル（幼）

……

……

…

レイ、アイシャ、ロレオが喫茶店に戻ってきた時には

「あの…ごしゅじんさま？こんなにいっぱい…いいんですか？」

「ウリエルちゃんのために作ったんだからお腹いっぱいお食べ」

嬉しそうだがちょっと困った顔のウリエル（幼）。

ニコニコでウリエル（幼）に手作りお菓子を振る舞うクロトス。そのお菓子の種類と量は十数人分は軽くあるであろつ。

「ウリエルちゃんの好きなヨーグルトの木イチゴジャムがけもあるよ」

「あつ…ありがとうございます」

満面に笑みを浮かべるウリエル（幼）。

その笑顔を見たレイ、アイシャはふっと視線のクロトスに対し…

「「ありがとうございます！」」

なぜかサムズアップでお礼を言った。

## 番外 変わりゆく貴方へ（後書き）

ちなみに

グラム飲用〓大人のセクシーお姉さん〓クロトス誘惑で修羅場

ティニア飲用〓不良女王〓王様、王女、執事、その他の国民大混乱  
リン服用〓猫耳少女（性格、言語もネコ化）〓町でイタズラしまくるリンの搜索

エル服用〓熱血最強少女〓近隣の魔物、盗賊を粉碎

オルガ服用〓????????

という今回のウリエルルートを含めて6種のお話を考えてたのですが全部載せると長くなるのでサイコロで決めました。

サイコロには従いましたがなんだか最近、ウリエルの出番ばかり増えていくような？

次回からは他キャラにもスポットを当てます。

神にも秘密。でも、ちょっとだけ…（前書き）

仕事の異動で引っ越しました。

ネタだけ溜まってパソコンには繋げない（泣）

そろそろ、完結に向けて話を進めていこうかと思っています。

次回作もプロットはある程度固まっています。

初めての長編という事で未熟な所が多々あったと思いますがここまですり合わせてくれた読者の方々にお礼申し上げます。

それでは、『神にも秘密。でも、ちょっとだけ…』をお読みください。

今回はリンが主役。

神にも秘密。でも、ちょっとだけ…

ティニア達が喫茶店に入った頃、リンは喫茶店からさほど離れていない路地裏にいた。

それもただでさえ人通りの少ない道から入る建物と建物との細い隙間。

しばらく進むと若干だけ広がった袋小路のような場所に辿り着いた。そこにリンは一人でぽつんと佇んでいる…様に他の者がみたら見えるであろう。

「…D - 4から12までの者へ通達。先ほどの戦闘行為の証拠隠滅、情報操作を至急。H、I、J、Kの2、4は倒れた愚者達の処分、方法は任せます。B - 1は無いとは思いますが不測の事態に備えて部隊の指揮をお願いします」

『御意』

リンがぼそつと呟くように語る言葉に返事を返す姿見え無き者。この国の隠密を任務とする名も無い部隊。

リンはメイドの仕事の他にこの部隊の指揮も行っている。ちなみにティニアとエルでさえこの部隊の存在すら知らない。知っているのは王と王妃とごく一部の関係者のみである。

『A - 5より報告します』

リンは頷く事で先を促す。

『コードネーム【GIMMICK】が【SACRED PLACE】に接近中。及び、城で手の空いていた30人ほどが皆様を捜索中です』

普段より大規模な搜索に少し違和感を感じるリン。

普段は【GIMMICK】⇨ジュニアルが単独、あるいは少人数で【SACRED PLACE】⇨喫茶店に押し寄せてくるのが通例である。

「…詳細を」

『はい、どうぞ』

そう言っただけの間にか現れた黒装束の女の子がリンに書類の束を手渡す。

リンはそれを受け取りつつも目頭を押さえて顰め面をする。

「…なんで貴方は隠密の癖に堂々と手渡しなのかしら？…このアホっ子」

「酷っ、アホっ子って酷いですっ！パンちゃんの頭は個性的でチャームポイントねってご近所さんでも空前絶後の絶賛有名中なのですよ！」

むきーっと顔を真っ赤にして叫ぶ隠密（？）のパン。

「…X-2」

『…御意』

いつものまにかリンの手にはなぜかハリセンが握られていた。

「リンちゃん、いつものまにそんな物を！？これが噂のイリュージョンですか！？」

驚愕の顔で叫ぶ隠密（？）のパン。

いや、本名を自分で曝す時点で隠密とは言えないのでは？  
怒りで手に持つハリセンがミシミシと悲鳴をあげているが怒鳴る事をせずに淡々とするリン。

「…隠密ならX-2みたいに姿を見せずに渡すぐらいはしなさい」  
「いやいやいやっ、モニカ先輩みたいな古参と一緒にされても…！  
3（自主規制っ！）歳にもなつて『男より仕事を取る』とか言っておきながらこの前、『彼氏に振られた〜！』とかでやけになって給料3カ月分を使って戦闘用装備を一新して色々な意味で恐ろしくなった人と同レベルの動きをしるなんて私に人間やめろって言ってるようなものですよ！」

リンは溜息を吐きながらハリセンを大きく振りかぶった。

「…仮にも隠密なんだから自分や仲間の本名ばらすな。後、上司をちゃん付けで呼ぶな」

すぱーんつと静かであった筈の路地裏からなんと愉快的な音が響いた。

「痛ってリンちゃ（すぱーん）イタッ、本当に痛いの！だつてコードネームって可愛くない（すぱーん！）って目に！今、目に入っただも、リンちゃんに叩かれるっていうのもちよつと癖に（すぱーん！）クギヤー！じよ、冗談ですよ（ズパーン！……！）た、助け…（ズパーン！……！）（ズパーン！……！）（ズパーン！……！）…」

ピクピクツと痙攣しながら地に伏せている隠密（？）。

顔は真っ赤に腫れあがり、だが、何処か幸せそうにその顔はニヤニヤと緩み…

「って私は変態さんじゃないのですよ！だからその振りがぶったハリセンも片付けてプリーズ！」

チツと舌打ちでもしそうな表情でハリセンを放り投げるリン。それを見てほっとするパンだったが…

「…X-2。任務終了後、好きにしていいわ」  
『御意！』

「ぎゃああああああー！ーっ！ー！」

一気に地獄に突き落とされた。  
パンはあまりのショックに泡を吹いて倒れた。

「…ふう。V-3、これを何処かに運びなさい」  
『御意』

ずっと風が吹いたかと思うと隠密（？）の姿は影一つも見えなくなった。

他の者たちの名譽のために言うが彼女が特殊なだけで他の者はかなり優秀な隠密である。

リンは喫茶店に戻ろうと踵を返そうとしたがフツと思いついたかのように足を止めた。

「…それとX-2」  
『はっ』

「…今度、合コンのセッティングをしてあげるから自棄だけはやめなさい」

『……………きょい……………』

泣きそうな声が返ってきた。

振られたショックか仲間の前で暴露された羞恥かリンのような子供に合コンをセッティングしてもらった自分の情けなさか。

ちなみにその彼氏もリンにセッティングされた合コンで知り合ったX - 2ことモニカ、3（絶対に死守っ！！）歳。

神だってするときはするんです（前書き）

最近ふっと思う。

日本人って働きすぎだよな。

朝8時前に出勤、帰宅が夜10時。

これが日常になってきた私って…（泣）

それでも改善されたんですよ。

異動前は職場で日を越すのが当たり前でした（号泣）。

本当に久しぶりの投稿です。

いつの間にか40万アクセスですね。

番外はどうしようかな？

その前に手直ししたいです

神だつてするときはするんです

ティニア達が喫茶店に入ると喫茶店内の椅子やテーブルはどこにも見渡らず、床にはホウキが転がっていた。

喫茶店内の椅子やテーブルが無くなるだけでずいぶんと広く感じた3人。

ウリエルがカウンターテーブルに近づき、ずっとテーブルを指でなぞった。

なぞった指の腹をじつと見る姿にエルが内心、小姑みたいと考えた所、ヒヤツと背筋が凍るような悪寒が走った。

身の危険を感じて、スパツと反射的にティニアの後ろに隠れるエル。ネコに怯えるネズミのような様子を本当であれば、メイドが王女の後ろに隠れるという行為を叱責しなければならぬティニア。

しかし、苦笑してエルの頭を優しく撫でるだけに留めた。

…決して、今もこちらをジツと見つめる人の目が怖いのは自分も同じだからというわけでは無い。と心の中で自分に言い聞かせるティニア。

ウリエルは何事もなかったかのように視線を逸らし、訝しげに今も床を磨き続けるクロトスに向けた。

「どつという気まぐれ？貴方が私のいない間に大掃除を始めるなんて」

ウリエルでさえ、掃除をしているクロトスなんていう光景は初めて見たのだ。

もちろん、クロトスだつて机の上程度の掃除ぐらいはする。

しかし、神界にいた頃は部屋等の掃除は部下か世話係が行っていた。この喫茶店の清掃もウリエル達が行っており、ウリエル達が来る前はたまに来るリン、エル達がやってくれていた。

基本的に好きな事以外ではめんどくさい事は嫌いなクロトス。

そもそも、ウリエルやグラムにとってはあの神王が喫茶店を営んでいるというだけでこの人が本物なのかとさえ疑うほどであった。

「いや…まあ……、なんというか…愛着？朝になって店を見渡してみたら結構汚れてきたみたいだったからな」

雑巾を絞りながらそう答える神々の王。

神界の者がこの光景をみたらどう反応するのか。

「元がああのボロボロの廃墟だったとはとても思えませんよね。…そういえば、初めてウルちゃんと会ったのもここでしたよね？」

エルがティニアの後ろから覗き見るように呟く。  
どうやら未だに警戒しているようだ。

ウリエルの視線が向くたびにビクツと体が震えている。  
さすがに罪悪感があるのか、ウリエルは苦笑いを浮かべた。

「リンが怪我したウルを追っていつて、私達から逸れたんだっけ？」

当時の事を思い出し、笑みを浮かべるティニア。  
ふっとエルが視線を逸らすとそこには…

「…ねえ、おにいちゃん？」

「何だ？」

「何アレ？」

目を丸くするエルが指さす先をクロトス達も見た。  
そこには真っ白な毛並みと真っ赤な眼の猫。  
先ほど話題に上ったウルである。

「ウルだろ？」

「いや、そうだけど……何してるの？」

エルの視線は床に注がれた。

床には真つ白な雑巾が二枚。

その内の一枚の上にウルが立っている。

そこまでは特に問題ない。

しかし、ウルは雑巾の上から右前足だけを出し、もう一枚の雑巾の上に乗せていた。

その状態でこしこしと雑巾を前後させる。

雑巾にじやれている様にも見えるが周りの状態からするとその行為はまるで…

「ん？ウルには雑巾がけを頼んだんだ」

「「猫に！？」」

確かにそれは雑巾がけの様に見えた。

白猫の雑巾がけ。

そのシュールな光景に思わず聞き返した3人。

「ほら。ちゃんと足で汚れないように雑巾の上に立っているし、少しずつ移動しながら掃除してるんだぞ」

「うわっ、本当にしてるしっ！？」

その動きは遅いが足を巧みに使って、まるで尺取り虫のように足下の雑巾を動かして進む白猫。

虫が苦手なティニアはちよつと気持ち悪いと思ってしまった。

「…ポーズ」

「ってリンちゃんいつの間に！？」

先ほどまでいなかった筈のリンがエルの横でカメラのシャッターを切っていた。

ちなみにそのカメラの開発者はレイ。

これが高性能でシャッターを切ると同時に瞬時に魔法紙にその映像を焼き付けるタイプのカメラ。

クロトスがこれに興味を持って以前にレイを共同制作をし、さらに高性能化。

この世界の技術レベルを軽く超えてしまったオーバーテクノロジーである。

しかし、大本となるレイ作のカメラでさえも完全なオーバーテクノロジーであった。

普段はあれだがレイのその知識は意外と凄まじいものがあった。

しかし、そのすごいカメラで撮られるのは雑巾がけする白ネコ。

ちなみにこの写真は数日後、喫茶店で販売される。

ちゃっかり者のリン（隠密部隊隊長）とクロトス（神々を束ねる王）。

それぞれの部下が知ったらどう反応するであろうか。

「…良いものが取れましたが役立ってるんですか？」

すつとカメラを下ろし、首を傾げながら問いかけたリンにほかの面々も同意するように視線がクロトスに集まる。

「ああ。しかも、隙間に落ちた物とかも色々見つけてくれたんだぞ」

そう言つてクロトスが指さした先にはカウンターの端に置いてある小さなアクセサリーや小銭、紙と色々。

それを見たリンはウルに近づく。

ウルはその気配に気づいたのか、顔をリンに向けた。

「…お手柄」  
「ニヤ」

リンがウルの頭を撫でると眼を細め、気持ちよさそうに喉を鳴らす。ティニアはその少々埃に塗れた落し物の数々に歩み寄った。

触るのには抵抗があるらしく、指でチョンチョンッと突きながらそれを探っていくと可愛らしいアクセサリーからなぜか入れ歯まであった。

なぜに入れ歯？と思うが解るわけもなく、さらに探っていくと…

「あつ、失くしていた宝石箱の鍵!？」

そう言っ取り上げたのは綺麗な装飾がされた金色の鍵。

「それって姫様がいろいろ弄ってたけど結局は癩癩起こして壁に投げつけた後で蹴り碎いたやつですか？」

エルがティニアの手元の鍵を覗き込みながら言う。  
その言葉にグラムが首を傾げてクロトスに訊ねた。

「主よ。宝石箱は開かなくなったら蹴り碎くのも有りなのか？」

「いや、蹴りはしないな、蹴りは」

「碎く方を否定しなさい!」

鍵であれだけの装飾なのだ。

宝石箱だけでもどれだけ見事なものか想像もつかない。

忘れがちになるがティニアはこの国の王女である。

クロトスも神々を束ねる王である。

王族は皆こうであるのかと疑ってしまうウリエル。

そう嘆くウリエルが視線を落とすと視界の中に入ったのは…

「…ちょっと待ちなさい。これって……」

そう言つてウリエルが掴んだのは埃塗れのチラシのようなもの。  
それにはこう書いてあった。

「『『『『大会出場者次試合日程報告書！？』『』『』」

「あゝ、そこにあつたのか」

クロトスが呑気に答えた。

その日付は三日後であった。

## 神に説教できる人（前書き）

忙しいからもつと落ち着いてから書こうと思っていたらいつの間にか2か月以上。

久しぶりに繋いでみたら感想に数件書き込み発見。

こんな駄文に…（感涙）

速攻でストックに手直しを加えて投稿しました。

徐々に感想の返信、文の手直し、更新をしていきます。

## 神に説教できる人

「貴方は何時もそうやって……！そういった重要な物はしっかりと管理してくださいと今まで散々言ってきたじゃないですか！？以前だって貴方が重要な資料を失くしたおかげで私を含め、下の者がどれだけ苦労したと思っっているんですか！？あれを作るのに連日徹夜して、やっと解放された人達に私がどういいう思いで『申し訳ございませんが、もう一度同じの作ってください』と命令したとお考えですかっ！？眼の下にクマを作りながらも笑顔で仕事の打ち上げをしていた会場に乗り込み、彼らに死刑宣告を告げたに等しい命令をした私と絶望のあまりに泣き出す者まで出た彼らの心情を……」

ガミガミと怒鳴るウリエルの前には正座で身を小さくするクロトス。通知書が発見され、それに記載されている日付があと残り僅かだというのにも関わらず、呑気に掃除をしているクロトスに言い寄ろうとした面々。

しかし……

「ななななな……何を呑気に掃除なんかしてるんですか……！……！……」

とウリエルのあまりの剣幕に啞然とし、その剣幕に何も言えなくなった他の面々はテーブル席で嵐が過ぎ去るのをじっと耐えている。しかし、……

「ただでさえ貴方はうっかり者というか、おとぼけている所があるんですから……」

と長々と続くウリエルの説教にだんだんと慣れてしまい、次第に落

ち着かなくなってきた面々。

「…ウリエルさん。いい加減に日も暮れてきたことですし」

リンの言葉にはつと外を見るウリエル。

日がだいぶ落ち、窓から見える空は夕焼けに染まりだしてきた。

ウリエルがさらに周りに目を向けるとじつと自分を見つめる複数の目。

それに慌ててキョロキョロと視線を走らせ、慌て始めたウリエル。

「…さ、さて、それではどうしましょうか!？」

無理やりに話を変えようとしたウリエル。

しかし、いきなり言われても誰もその言葉に続けられるはずがなかった。

妙な静寂が満ちたが軽いため息を吐くとクロトスが正座から立ち上が…

「……っ!!」

立ち上がろうとしたが足が痺れいたらしく、地面に転がり悶えだした。

もはや、ぐだぐだになってしまった喫茶店。

シラーっとした雰囲気の中、ようやく回復したクロトスは何事もなかったかのように立ち上がった。

「とりあえず夕食にしよう。下拵えは出来ている」

そう言って逃げ出すようにキッチンへと消えた。

「あ、私も手伝うよ」

「…同じく」

リンとエルも共にキッチンに消え、あとに残されたのは料理が得意ではない面々。

「掃除する？」

「そうね」

「了承した」

ティニアの言葉に頷く2人。

それぞれが掃除道具を持ってテキパキと動き始めた。

…

…

…

「別に俺だって完全に忘れてたわけじゃないぞ」

パスタやスープを皆に出しながらぼそつと言うクロトスに訝しげに見るティニア。

「それじゃあ「というか俺がなんでこの大会に出ようとした理由って覚えてるか」…へっ！？え」と…」

文句を言おうとするティニアの言葉に被せるように聞くクロトスの言葉に昔の記憶を探る面々。

そして、真っ先に思い当たったメイド2人がポンつと手を叩く。

「「お城の爆破！」」

「待ちなさいっ!？」

ガクツと真面目な顔で言った2人とそれに反応したティニア以外の面々は脱力した。

「確かにそんな話をした記憶がおぼろげにあるけど…」

## 11話 神的喫茶店宣伝方法参照

「え〜と、お城に強盗？」

「…そして、火事。もとい、放火？」

「なんか微妙に違う!??ってか貴方達よく覚えてるわね!？」

なぜか犯罪臭がしてきた会話に呆れる様な溜息を吐くウリエル、グラムの神界メンバー。

「というか貴方達、なんて話してるのよ」

「主からのまた聞きだがこの喫茶店の宣伝のためと聞いたが?まあ、どちらにしる普通ではないがな」

グラムの言葉にようやく思い出した面々。

苦笑しながらもコーヒ―を淹れているクロトスは手元を止めずにふっと周りを見た。

「まあ、そう言った理由で参加はしたけど宣伝ならもう充分できたし、それだったらこのままぐだぐだで参加するなら喫茶店一本に絞った方が…」

「…ダメ」

とグラムを除く4人の拒絶にポカーンとするクロトス。

そして、

「どうして貴方はそうやっていつもいつも…」

「我が国の重要な行事を途中で投げ出すなんてよくもまあ…」

「おにいちゃんの試合って私は毎回すごく楽しみにしてるんだよ！それを…」

「…クロにいに辞退されたら掛け金が…コホン、ともかく辞退なんて…」

と4人に一齐に説教されるクロトス。

再び始った嵐にふうつとため息を吐きながら少し離れた席に移動してコーヒーを啜るグラム。

それを恨めしそうに睨むクロトス。

「……よそ見るな！！！！」

「あ、あはははは……はい…」

鬼の形相で睨む4人に身をさらに小さくするクロトス。

この説教は日が完全に落ちるまで続くかに思えたが突然

「ふむ。すまんがちょっといいか？」

とグラムが皆に問いかけた。

皆の視線がグラムに向くとグラムはジッとクロトスを見つめ…

「主よ。明日は我に付き合え」

「……はあっ！？」「……」

神と闇と真実と…（前書き）

久しぶりの2連休。

一気に書き上げ、ストック58話まで完成。

これに伴い、完結に向けて話を纏めていきます。

プロット通りにいけば70〜80話で完結かな。

同時進行で第1話から徐々に手直し開始。

60話の番外のアイデアは…無し（泣）

今月は短期出張が2回、監査部の調査、学生の職場体験etc。

今月は何回投稿できるのかな？

## 神と闇と真実と…

クロトスは深い洞窟を進んでいた。

地下水が染み出しているのであろうか、歩くたびにドロドロとした地面はグチャグチャと音を鳴らす。

しかし、上の地層を触ってみるとひんやりとしているが固い岩盤のような手触りが伝わってくる。

この洞窟にクロトスが入ってから数時間が経過した。

全ては喫茶店でのグラムの誘いのためである。

あの時のグラムの誘いの言葉をクロトスは了承したもののその目的は一切、聞かされていなかった。

ただ、グラムに誘われるがままにとある洞窟に誘い込まれたのが今の現状である。

この暗闇の中を数時間、手探りと前方を進むグラムの気配のみで進んでいる。

視覚に頼らず、ひたすら前に進む。

それはクロトスの精神を徐々に削っていく。

今も前方のグラムの気配と足音のみが自分を先導している。

「何が目的なんだ、こんな所まで連れてきて？」

グラムの足音が聞こえなくなった。

気配は前方から感じるのに止まったのであろう。

グラムが口を開くまでの一瞬の静寂。

己の手のひらすらも見えぬ暗闇。

本当に今の自分には肉体があるのだろうか。

一寸先も見えぬ暗闇のため、何処か死を連想させるような現実味がない雰囲気満ちていた。

しかし、それを破るようなからかい口調のグラムの声が見えない前

方から聞こえてきた。

「なあに。主に調査の結果報告と報酬を貰うためにわざわざここまできたのだ」

「調査？そんな事を頼んだ覚えは…ああ、前の腐食した道か？」

以前にグラムが発見した森にあった腐食した道。

何かが通ったと思われるそれは生物かもしれないし、他の何かかもしれない。

その何かをグラムに調査を依頼したことがあった。

しかし、グラムからはいささかトーンを落とした声が返ってくる。

「いや、それに関してはまだ途中だ。ある程度は調べが付いているがそれはまだ主に報告する程度の代物ではない。今回は私が勝手に行っていたことだ。しかし、その結果は主が私に報酬を与えるに十分な価値がある」

「明かりを魔法で出す事を禁じ、この穴潜りの苦勞に見合う価値があるか？」

返ってくるのは沈黙と足音だった。

クロトスはそれを追うように足を進める。

このわざわざ暗い道を進むのはグラムの提案だった。

理由は話さなかったがすぐに着くという言葉信じ、その結果がこの様である。

まあ、悪戯にそのような事を言うグラムではないのでクロトスもその言いつけは守っている。

それからさらにしばらく進むと…

「ここだ」

滑り落ちるように下った通路を通り、辿り着いた開けた空間。

今までとは違い、踏みならす地面は硬い岩盤、上を見ると鍾乳石がその鋭い先をこちらに向けている。

天然の半球状のドームのようなその空間はなぜかうつすらとだが光があつた。

苔か鉱石か、何かが光を放つ特性を持っているようだ。

その広い空間の中心点にぼんやりと光に照らされるグラムがいた。背中をこちらに向け、ジッと俯いている。

微塵の身動きもしないグラムにクロトスは歩み寄るがしばらくすると聞きなれた音が聞こえてきた。

定期的なリズムを奏でる弱弱い音。

聞き覚えがあるはずなのに、懐かしささえ感じるのだがそれが何の音かが思い出せない。

それはグラムから、いや、グラムの立っている足元から聞こえてきた。

弱弱しいのに何処か力強い不思議なリズムはその音を徐々に大きくする。

そして、次第に地面から淡い黄色のように輝く筋が浮きあがってきた。

それが徐々に浸食し、次第には全ての地面がそれに飲み込まれた。

それはさながら、魔方陣に近い物があつたがそれが胎動している事に気づくとそれが血管のように見えた。

「地脈、ライムストリーム、龍脈等のいくつかの呼び名があるが…  
我は『星脈』という呼び名を使っている。そのままの意味で解りやすいのでな」

その生命を形作る魔方陣の中心にいるグラムはこちらを振り返り、この正体を語った。

「我が調べたのはこの世界…というよりは宝玉。ずっとここにいるというのも我は構わないのだが神界が大変な事になるからな。暇つぶし程度に調査をしていたのだがそうも言ってられない結果が解つてしまつてな」

そう言つて何処か苦笑交じりに頬を掻くグラム。

「主にのみ反応した宝玉。外に出ることもできず、我を召還した時に感じたこの世界を包み込むような壁。そして、この星脈の状態…」  
「結論から言え。話が長い」

イライラした口調のクロトスにグラムは口を紡ぐ。  
胸騒ぎがあつた。

この光の筋を見た瞬間から生まれた不快感。  
クロトスの内を廻る何かが訴えていた。

「…この世界は主がこの中に入ったと同時に生まれた世界。そして、すでに崩壊が始まつている」

## 神の答え（前書き）

完結に向けて手直し開始。

第6話まで終了。

そろそろPVアクセス数50万突破。

というか明日には突破していると思う。

59話のストック完成しました。

いざ、60話番外書こうかと思いました。がアイディア無し。

感想、評価お待ちしております。

## 神の答え

「…この世界は主がこの中に入ったと同時に生まれた世界。そしてすでに崩壊が始まっている」

沈黙が続いた。

遠くから水が滴る音が聞こえ、それが反響する。

その無言の静寂を最初に破ったのはクロトスであった。

「詳細を」

その雰囲気はこの世界ではごく稀に、神界では頻繁に出していた『神王』だった。

「単純な引き算だ。世界の誕生とともに成長していく星脈。その世界で生命が生まれ、成長し、やがて死ぬ。その魂ともいうエネルギーが星脈に取り込まれ、別の場所で別の何かとして生を受ける。その永遠のサイクルが星脈を成長させ、太く、力強い物へと変えていく。我らの下を廻る星脈はあまりに細すぎる。まるで生まれて間もない赤子のようにな」

今もグラムの言葉の間に聞こえてくる星の胎動は今にも止まりそうに脆弱だ。

クロトスは唇を噛み締め、怒鳴りたいのを堪えながら声を絞り出す。

「では、私がここに来るまでは存在しなかったと？ ティニアとリン、エルが出会ったことも、王…いや、ジャンとエインの愛も、レイやアイシャの努力も何もかも作り物だったというのか？」

痛々しい自分の主人の顔を直視できないグラムは俯きながら、ただ淡々と報告する。

「…歪みがすでに起きている。例えば、文字だ。文字は遙か太古からその造形を表現した絵が変化してできるものだ。その世界の様にある日、突然出来る様なものではない。何処かの学者が懸命に調べてもそのルーツの欠片も発見できていない。他にも魔法、料理、国、人の過去…全ての物に徐々にだがずれが生じている」

全ての事柄にはルーツが存在する。

今はまだ人々が疑問に持つ程度で済んでいるがこのまま悪化していくとどうなるか予想がつかない。

「…崩壊というのは？」

苦々しげに言うクロトスは聞きたくないかと思いつつも聞かなくてはいけないと考える自己の間に苦しめられ、葛藤するが口が勝手に動いてしまう。

「瞬りかけの卵を無理やりに殻を剥いたようなものだ。皮膚がまだ出来てないから衝撃を与えたら簡単に皮膚が裂け、病原菌を簡単に侵入する。その衝撃が…」

「俺たち…というわけか」

すでに神王はクロトスとなり、グラムの言葉に耳を傾けていた。

「そうだ。幸い、手遅れになる前に結果が出た。その派生的な成果として空間に綻びが発見した」

それは朗報であり、別れの決定である。

「つまりは帰れるという事か。しかし…」

「そうだ。我らの帰館と同時に再び、殻を形成し、宝玉を在るべき形に戻す。それ以外にこの世界の崩壊を防ぐ手は無い」

悩む必要はない。

そうしなければこの世界そのものが消滅する可能性がある。

そう理解していても納得できないものがある。

「…期間は？」

それがクロトスにとって、いや、グラム、ウリエル達にとっても一番の問題であろう。

ふうつとため息を漏らすグラムにクロトスは悪い想像が当たったことを確信してしまった。

「さすがに隠せないようだな。ああ、少なくともティニア達が生きている間にこの世界に戻る保証はない」

「…そうか」

人間の寿命は長くて1000年程。

神、天使のように半不老不死の存在に比べたら脆弱で、脆くて、儂くて。

そのような存在にこれだけの情を持っている自分たち。

実が引き裂かれるような思いとはまさにこの事であろう。

苦しくて、悲しくて、気持ち悪い。

鬨ぎ合い、感情が心を腐食させているようだ。

「ウリエルには？」

「話した。判断は貴方に任せますとの事だ」

ああ、あいつも今の俺と同じ、それ以上に苦しいんだろうなあと察するクロトス。

ウリエルはグラムがなぜ、ここに連れて行こうとしたか知っていたのあろう。

だから今回の遠出も止めなかったのだろう。

もしかしたら、今も一人で泣いているのかもしれない。

「…ずるいなあ。おれも誰かに丸投げしたいなあ」

人に任せるとか言いながらウリエルの答えは決まっているのだろう。そして…

「とは言っても主の答えは決まってるのだろうか？」

そして、潤んだ目で無理して笑顔を作るグラムも…

「この世界と心中する気はないよ」

クロトスの答えは『決別』だった。

## 神と剣と…（前書き）

次回から戦闘。

強さのバランスが難しい。

今回は56話で現在は61話（番外60話未定）まで完成。

ストック充分ですので手直しと次回作を執筆予定。

短編も投稿したのですが…失敗かな。

よかったら感想お願いします

神と剣と…

噛み締める唇が痛い。

爪ガ食い込ムホドニ握リシメタ拳ガ痛い

デモ、ココロニイチバンノイタミヲカンジル。

「この世界と心中する気はないよ。ただ…」

それしか選択肢が無い事は解るが心が納得いかない。

頭では理解しようとしても、心が悲鳴を、悲しみを、拒絶を叫ぶ。

『嫌だ』

『いやだ』

『イヤダ』

何度も何度も悲鳴を、絶叫を叫びながら身を食い破ろうと暴れるように痛い。

「そこで報酬の件だが」

突然、グラムがそのような事を言い出した。

クロトスはなぜか、その言葉が頭の中にすんなりと入り込み、心が落ち着いた。

ストンツと憑き物が落ちたかのような感じた。

グラムの言葉に先ほどまでの悲壮感がまるでなかったかのように返事を返す。

「ああ、そう言えばそんな事を言ってたな」

ここに来る途中でそのような話をしていた記憶もクロトスは持っていた。

「まあ、手遅れになる前に解ったんだ。それなりの物を用意はしよう。神王特製スペシャルパスタでいいか？」

この世界の食材をさらに厳選して、拘りに拘ったクロトスの最高傑作と言っていい程の一皿。

個人的に親しい人ぐらいしかその存在を知らず、準備に数日かかる特別なものである。

ちなみに一緒に出されるスープと自家製パンもこのパスタに並ぶ最高のものである。

王女であるティニアでさえ、今まで食べた中で一番おいしいと絶賛するほどである。

神王の知識、力に加え、この世界に来たお陰で仕事から解放されたお陰で信じられないほど無駄に空いた時間。

それを全て自分の好きな事に費やせるという幸福感から有名店に土下座してまで頼み込んで教えてもらい、不眠不休で試作するというハイテンション。

これらが無ければ生まれることの無かった代物である。

それを知ったウリエルは神王がこの人でいいのかどうか真剣に悩んだほどである

「地味にせこくは無いか？ いや、それも捨てがたいが…いや、それも悪くは…いやいや、それではここに来た意味が…」

なにやら真剣に悩みだしたグラム。

ここに来たもう一つの目的とパスタ。

天秤がグラグラと揺れるほどに心も揺れ動く。

そのまま頭を抱え、数分ほど座り込むほど悩むが結論が出たのか立

ち上がってクロトスに顔を向ける。

「いや、やはり我が所望するのは主だ！」

「…プロポーズ？」

傍から見ればまさにそうだろう。

クロトスの言葉にしばし時が止まった。

遠くで地下水が染み出しているのか水滴が滴る音が2人の間に虚しく響いた。

グラムが頭の中で自分が言った言葉を反芻すると顔を真っ赤にして慌てた。

「ばっ！？ちっ、違うぞ！そうでは無くて…主と手合わせを所望するというのがだ！」

「はっ？」

呆気にとられるクロトスにグラムは畳みかける様に早口で喋る。

「前にウリエル殿と手合わせしただろう？あれからどうも疼いてない！」

ワタワタと慌てふためきながらも目は真剣であった。

そして、コホンッと咳払いをするとグラムはクロトスの目を見つめる。

「久しぶりに全力で戦いたいと思ったのだ」

射抜くような真っ直ぐな視線。

言葉よりも目が多くを語る。

その真剣な願いを。

「…お前は剣としては最高峰だがその形態での自身による戦闘は不得手だろう?」

グラムは元々は剣である。

若い頃にオーデインが手に入れたが使いこなせずにとある世界に封印して保管していた。

しかし、その世界の住人がなぜか封印を解き、完璧に使いこなせてはいないがオーデインよりはその力を発揮できる才能を持っていたために様々な騒乱を起こす。

それが様々な世界を渡り、神王の手に渡った事でその神王の力で今の姿を得た。

その形態の歴史はもちろん浅く、やっと戦闘できるといった程度にしか使いこなせていない。

しかし、グラムは薄い笑みを浮かべたと思うとその体が黒い影に覆われた。

包み込む影はグラムを覆い、時折、蠢く紅い光のようなものが不気味に浮かび上がる。

そこから徐々に浮かび上がるは影よりさらに深い黒い色をした漆黒の剣。

星脈の淡い命の輝きに浮かぶ闇のような色合い。

生命の光と死の権化とも言われた剣。

浮かび上がるのは星脈が糸の様に複雑に絡み合った箇所。

グラムが立っていた処にその箇所があったのだが重力に引かれるようにその剣が地面に突き刺さった。

そこから源泉のように噴き出す星の命のエネルギー。

それに包まれる魔剣はそのエネルギーを吸収、いや、喰らうようにそのエネルギーを自分の物にしていく。

そして、その噴き出したエネルギーが徐々に収まると同時に輝きが増していく魔剣。

今まで死を内包していた魔剣は命を取り込み、魔剣にしては輝かしく、聖剣としては禍々しい狭間の剣と変貌を遂げる。

言うなれば神剣となったグラムは再び、人間の形態に姿を戻した。それはいつものグラムとは違う姿。

背はクロトスの胸ほどだった背が170センチとかなりの高身長となり、スラリとしたスタイルでかなりの美女になっていた。

特徴的なガラスのような白銀の髪はショートカットで肩まで揃えられていた。

それはグラムが人間の形態で成長したらなるであろう姿だった。

呆気にとられるクロトスにさも可笑しそうに口元に手をやり、笑うグラム。

それはいつもより大人っぽかった。

「これでもか？」

妖美な大人の色気が出たグラムの声はそのまま声にもその特徴が出ていた。

その声を聞いたクロトスは正気に戻り、吠えた。

「それは卑怯じゃないか!？」

星の力を得たグラム。

それはドーピングに近いが副作用など無い。

例えるなら戦闘中の数匹のスライムが集まりだしたかと思うと合体してキングスライム…を乗り越して魔王（最終形態）になったかのような理不尽さだった。

こんな方法でのレベルアップなどグラムだからこそでき、こんな幾つもの偶然が重なった奇跡があったからこそ可能な…と頭の中で色々な事が廻るがグラムは片手にグラム自身を模した剣を生み出し、構えた。

「ちょっと星脈の力を一時的に借りただけだ。後できちんと返す。そんなことより参るぞっ！！」

## 神と影纏う神剣と（前書き）

仕事でミス続きの凹み中の蛹です。

しかも、新入社員がするようなミス連発。

昨日はとうとう特大のを1発（泣）

頭がうまく回らないし、物忘れが激しい。

仕事中のメモ、マニュアル確認はもちろん、部屋の塩まき、お祈り、  
マッサージ、早寝、日記etc

普段しないことやここ最近していなかった事を初めて見ました。

同経験がある人、アドバイス頂戴。

## 神と影纏う神剣と

剣を構えたグラムに対し、クロトスも自身の力を使って剣を創造した。

現れたのは大剣。

見た目は重厚で斬るというよりは潰す、砕く目的で使用されるような剣とは言えぬ物。

しかし、神剣グラムに対してこれぐらい丈夫でなければ剣ごと両断ということもあり得る。

クロトスが剣を構えると…

「先手は貰うぞ」

すでに目の前でグラムが剣を振り下ろしていた。

一瞬で距離を詰められた事に驚き、動揺するが寸での所で後退した。見切った訳では無く、運よく紙一重で避ける事が出来た。

唯一の太刀、この一太刀だけでクロトスに冷汗が流れた。

振り下ろされたグラムの剣は唸りを上げながら深々と地面に突き刺さる

その衝撃は硬い鉱石で出来た足場を砕き、辺りに一つ一つが凶器になる飛礫を撒き散らす。

その破片がまるで流星群のようにクロトスを襲った。

クロトスは舌打ちしながらさらに一步、二歩と後退しながら、襲い来る飛来物を次々と剣で弾く。

重厚な大剣だからこそ、このように楯代わりとして扱える。

ふっと、その飛来物の隙間に何か鋭い切っ先のようなものが見えた。クロトスは無理やり体を捻り、唸る勢いで突き出されたグラムの突きを避ける。

突き出された剣先に服が切り裂かれ、体中を礫に襲われるがその勢

いに逆らい、体を回転させるように剣に勢いを乗せ、グラムに切りかかる。

そして、突きの状態で腕を伸ばしたままのグラム。剣で防ぐには刹那に間に合わぬ。

そう判断するも腕はその剣を引き戻した。

剣では間に合わない？

間に合わないのは刃の付いた剣身。

ではそこ以外で補えば良いッ！

グラムは己が握っていた剣の柄でクロトスの刃を受けた。

しかし、所詮は柄。

柄は剣を握り、剣の動きを制御し、支えるための箇所。

クロトスの一撃を受けていられるのは一瞬である。

その一瞬でグラムはこの状況を覆した。

一瞬の間に体制を立て直し、刃の下を潜る様に交わす。

クロトスが刃を返す前に軸足を捻じり、この回転を乗せた蹴りをクロトスの腹部に放つ。

動きを察知に後ろに飛ぶことで衝撃を緩和させる事は出来たクロトスであるがそれでもジンジンと痛みが走る。

「なんて避け方するんだよ。一歩間違えば手が落ちてたぞ」

クロトスが痛む腹部を押さえる。

その様子は先ほどまでの戦いから結び付かない、実に楽しそうな笑顔であった。

「あり得ぬな。我が我を使うのだぞ。我以上の使い手などこの世には存在するはずがないだろうが」

そう言つて妖美な笑みを浮かべるグラムはまるで玩具を扱うかの如く、剣を肩に担ぐ。

「それとな。今の我だつたらこんなこともできるぞ?」

そう言つて地面に剣を突き刺す。

刺した先には淡い光に照らされて、うつすらと見えるグラムの影。一瞬の間の後、その影がゾワツとその色を濃くし、ザワザワと蟲の塊のように蠢く。

まるで生き物のように見えるその影は徐々に成長するかのように地面から盛り上がり、ヒュンツと音を立てて影の塊で出来た触手のような物が複数飛び出した。

その内、半分程が上へと伸びあがり、まるで一つ一つに意思があるかのように自身を撓らせる。

それは天井に連なる鍾乳石のつららを碎き、天然の槍を振り落とさせた。

「シャレにならんぞつ!」?

上からは天然の槍、地からは残りの影が蛇の如く、地を這うようにこちらに向かつてくる。

クロトスは一旦、剣を消し、新たな武器として自身の身長より長い昆を創造した。

昆の両端は共に少し膨らんでおり、殺傷力を高めるために棘も付いている。

クロトスはそれを回転させ、地を走る影の蛇を弾き消し、鍾乳石を碎き飛ばす。

影の蛇はそれを学習したのか、クロトスを囲むように回り込み、一斉に襲いかかる。

クロトスは昆のスピードをさらに速め、弾き、碎き、弾き、碎き……

体を回転させ、腕を回し、襲い来る全ての物を自身の領域から弾き飛ばす。

そこでフツと目に入った光景があつた。

グラムが生み出した影が螺旋を描く様に高々とグラムが掲げている剣に纏わりついていた。

その光景から次にされるであろうグラムの行動を推測された。

グラムと目が合い、その表情がニヤツと笑みを浮かべた。

瞬間、グラムはその剣を振り下ろす。

その刃から放たれる衝撃は影を纏い、黒い斬撃となって地を切り裂きながらクロトスを襲う。

避ける間もなく、クロトスはその斬撃に襲われる。

昆で防御は出来たがその衝撃で壁まで押され、叩きつけられた。

同時に斬撃がクロトスを襲い、砕けた鉾石による粉塵で辺りは覆われた。

ほとんど密封空間と変わらぬこの場所。

舞い上がった粉塵は只でさえ薄暗いこの空間をさらに覆い隠す。

地に横たわるクロトスはズキズキと痛む自分の体を起こし、剣を構える。

「（この視界の悪さでは下手に動く相手場所を知られる。まあ、方向ぐらいは見当付くが…）」

自身が吹き飛ばされた方向に視線を向けながらもジリジリと場所を移動させる。

しかし、足を動かすたびに鉾石や砂を踏みにじる微かな音が鳴る。クロトスは動きを止めた。

その音を警戒したのもそうだがその音に混じって微かに風を切る音。その音の方向には…

「ーッッ!!」

粉塵の隙間を縫うように黒い影が蛇のように襲いかかった。

クロトスは昆を回転させ、影の鞭を霧散させる。

粉塵で視界が悪く、あらゆる角度から襲いかかるため休む暇もない。徐々に視界が晴れていくとつつすらとだが遠くにいるグラムの輪郭だけは確認できた。

クロトスは一瞬の攻撃の合間を縫って、その方向に昆を横薙ぎに振るう。

その勢いで吹き飛ぶ粉塵により晴れた視界の先にはグラムとその周りに浮かぶ黒い球体。

その内の一つから影の鞭が伸びていたようだ。

「（…ということはーッ！？）」

嫌な予感がクロトスの頭を横切り、それを肯定するかのようにグラムが笑みが広がった。

瞬間、唸るような音と共にその全ての球体から無数の影の鞭が襲いかかった。

先ほどから襲いかかってきていた数のおよそ十倍以上。

もはや壁である。

クロトスは昆を地に勢いよく突き刺す。

それに連動するかのようにクロトスの前に地面が盛り上がり、強固な壁となつてこの空間を分断した。

クロトスはもたれかかる様に昆にしがみ付いた。

肩で息をし、肩も大きく上下に動く。

本当はこの場で倒れこみたいが壁の向こうからは連続する衝突音が絶え間なく鳴り響いている。

今にも壁をぶち破りそうな状態の今、一瞬でも一息付けただけでも儲け物である。

「あいつ、実はこれを機に俺を始末しようとか考えてないか!？」

所々で垣間見えるグラム表情。

笑顔・笑顔・笑顔…

クロトスが逃げ回るのを実に楽しそうに観察していた。

クロトスはその光景を思い出し、寒気がしてきた。

「…このまま帰るか」

「何を言うか」

何とも情けない一言を漏らすクロトスに返すグラムの声。

バツとクロトスは声がした方向を向く。

そこには突き刺さった鍾乳石のつららの影に佇むグラム。

「手合わせの了承したにもかかわらず、それを覆すなど男子のすべき事ではないぞ?」

「いや、了承してないし」

クロトスがそう返すとグラムは怪訝な顔をする。

「お前、了承する前に襲いかかってきただろうが」

グラムはピクツと体を硬直させる。

ジトゝとしたクロトスの視線を受け、冷や汗を流すグラム。

「コホン。……さて、休憩は終わりにしよう」

「流すな」

グラムはクロトスの言葉を見無視し、両手を掲げる。  
それはさながら指揮者のように佇む。

「第二ラウンドだ」

## 神と決着（前書き）

60話番外が難産過ぎたぞ、このヤロー！？

久しぶりの投稿。

次回作の設定が大体固まってきた。

シナリオも着々考え中。

その前にこれを完結させないと。

長編は初めてだったので設定を行き当たりばったりで始めたら愚作になったので同じ失敗はしない。

それはそうと…戦闘シーン難しすぎだ、このヤロー！

## 神と決着

グラムの言葉と同時に鍾乳石の影から飛び出す無数の影。それはクロトスが見慣れた者だった。

グラム。

それもいつもの少女の姿でなぜがウェイトレスの格好だ。それはグラムが影で作った影のグラム。

そのため色は少々黒ずんでおり、クロトスが振り落とす昆が当たると霧散する。

しかし、それが無数に出現するので徐々にクロトスの体力を削っていく。

「目障りだっ！」

再びクロトスは昆を地に突き刺した。

しかし、先ほどとは違う結果だ。

突き刺した地から生み出されたのは石柱。

凄まじい勢いで飛び出す石柱は影のグラムを突き砕き、舞い上がった粉塵で再び辺りを覆う。

そして、先ほどと違うのが一点。

一瞬、互いの姿が粉塵で見えなくなるがすぐに接近し、互いの獲物が交差した。

「防戦一方ではないか。たまには打って出てはどうだ？」

そう言って交差する剣にさらに力を込めるグラム。

初めて己の主と対等以上に戦えたグラム。

その歓喜、それが一瞬だけの隙となった。

「それではお言葉に甘える……ぞっ!!」

ズドンッと激しい音。

グラムが自分の腹部を見ると地から突き出された石柱。  
その衝撃は全身に広がり…

「これもだっ!？」

その偽りの体を霧散させた。

「影はあの姿のみとは言ってないぞ」

そう言っただけクロトスの背後から振り下ろした斬撃。

そして、グラムの手で剣で何かを切り裂いた確かな手ごたえを感じた。

しかし、その感触にグラムは顔を青ざめた。  
迸る赤い血しぶき。

その尋常じゃない量と転がり落ちた何か。  
足元に転がっているのは見覚えのありすぎる人の腕、その持ち主の腕があるべき場所、その切断面から止めどなく流れおちる赤い液体崩れ落ちるクロトスの体をグラムは慌てて支えた。

「主っ!!」

急激な成長による感覚の差異。

腕の長さ、間合い、身体能力…。

いつもと異なる一つ一つの要因が重なり、クロトスの実力を知っているからこそ防いでくれるという信頼。

それが招いた事故である。

グラムは自身の主を横にし、傷口を見る。

その状態に苦虫を潰したような顔を浮かべ、自身の服の一部を引きちぎる。

それを傷口に当てようとした所、クロトスの体突き破って飛び出した石柱に吹き飛ばされた。

体がバラバラになるような衝撃。

視界の隅に入った己の主の体はバラバラとなり、『霧散』した。

そして、自身が吹き飛ばされた先には無傷の堂々と立ち尽くす己の主がいた。

その表情は笑顔……というには少々黒い笑みだ。

その横にある物は自身の能力で創造されたのであろう物。

それは5 m程の大きさのゴーレムがバットをブンブンと素振りをしていた。

そして、構えるゴーレム。

自身が飛んでいくのはゴーレムのストライクゾーンと真ん中。

グラムは意識が消えゆく直前に思った。

結局、我は主に届かぬか……

最後は遊ばれた形にはなったがそれでも自身の持てる力を出し尽くせた事に満足した。

神様は不在で他の人々はというと…（前書き）

やつとこさ59話投稿。

ストックは63話まであったんですけどね、次回作書いてました。  
3話までストック完成。

神は…は初の長編ということで今見直すと血反吐を吐くほどの痛さと恥ずかしさで何度消去しようと思ったか。

神は…はいわゆる最強物？というものらしいので次回作はできるだけ弱くをテーマに書きました。

予告するとドラクエの現代風味で主人公がスライムに知恵と卑怯な手で辛勝します。

ちなみにスライムはチート化したスライム（溶解液と再生能力有り）。

ギャグ7割とシリアス3割ぐらいで書こうかと。

神は…は特にプロットとか考えずに適当に書いていた所があったので次回作はマジに書こうかと。

ここまで読んでくれた方がいたのなら知っての通り書くのがとてもなく遅いので手抜きなしで書ければなあと。

神は…はこのままいけば67話ぐらいが終了予定。

ここまで読んでくれた方がいるのであれば今まで本当にありがとうございます。  
ございました。

神様は不在で他の人々はというと…

クロトス、グラムが洞窟に足を踏み入れたその頃…

「紅茶淹れるの上手ね」

ティニアは感嘆するように言うと手に持った紅茶のカップに口を付けた。

程良い苦味、心地よい香り。

少なくとも自分が同じ道具や茶葉を使っても同じ味が出せるとは思わない。

「長年やってればコツぐらいは掴めるわよ」

そう言っただけで十分に蒸らしたティーポットをカップに注ぐウリエル。普段はクロトスが立つカウンターに今はウリエルが立っていた。

動きに淀みが無いその姿はそれだけで絵になるほどだった。

とある違和感がなければの話だが…

「前にクロトスから聞いた時はまさかと思ったけど…ほんとだったのね」

「何が？」

ウリエルは自分用に淹れた紅茶を自分の手元に置きながら聞く。ティニアは視線をウリエルの目から少し下の方へ向けた。

「その格好」

ティニアの前のウリエルの姿。

まずはピンクのヒラヒラのエプロン。

模様は真白い猫のデフォルトされたウル。

どちらかと言えばお子様向けのデザインである代物。

ウリエルはその場でクルツと周り、

「かわいいでしょう?」

と少々照れた顔で尋ねた。

確かに似合う。

ちよつとクールな印象もあるウリエルに可愛らしいエプロン。

頬を染めたウリエルは可愛いらしいのは確かだ。

「(でも、何かイメージが崩れるわね)」

なぜかティニアは脱力するようにカウンターテーブルに突っ伏した。フツと指先に当たったのは紅茶を飲む前に飲み干したがまだ冷たさを保った透き通った空のグラス。

グラスからジンワリと指先からその冷気が伝わってきた。

ピンつと指で弾くとキーン…と高い音を奏でる。

「お掃除完了しました」

「…した」

ティニアが姿勢を正し、振り返ると見違えたように綺麗になった喫茶店。

さすがに現役メイドである2人にかかれればこの程度はお手の物なのだろう。

「ありがとう2人とも。2人の分も入れるわね」

そう言つて戸棚から紅茶の葉を取りだすウリエル。

「それじゃあ、お菓子出しますね」

そう言つて何故かエルは喫茶店の端に歩み寄つた。

そこにはただ壁があるだけなのだが。

エルは喫茶店の角に立ち、そこから壁を沿うように歩きだす。

「一步…二歩…三步」

そして、壁に向き合う。

エルはブツブツと呟きだした。

「左ジャブで敵の体勢をくずし突破口を見いだせばすかさず右ストレートを打つべし。これ、拳闘の攻撃における基本なり」

「…エル？」

ティニアが気味悪くなつてきたのでエルに近寄ると…

「右ストレートは右拳に全体重をのせ、まっすぐ目標をぶちぬくように…打つべしッ!!」

「

ズバンツと音が響き、突き出されたエルの右ストレート。

その拳は壁に吸い込まれ、めり込んだ。

いや、めり込んだのでは無く、壁が陥没したのだ。

まるでスイッチのように。

そして、パタンッとエルの近くの壁の一部が回転し、ポンッと弾きだされた布の袋。

エルはその袋から平然とお菓子を取り出し、啞然とするウリエル達

の前に置いた。

「いただきます」

そう言つて食べようとお菓子に手を伸ばし、

「「待ちなさいッ！！」」

ティニアとウリエルにズビシツと手を叩かれた。

キャウツと悲鳴を上げるエルを無視するようにティニアは先ほどエルが打ち抜いた壁をコンコンツと叩いて調べだす。

「あつ、緊急用の自爆スイッチも何処かにあるって言つてましたから下手に叩かない方が…」

「早く言いなさいッ！！」

慌てて壁から逃げ出したティニア。

「何で働いている私より詳しいの？」

青筋を浮かべて聞く笑顔のティニア。

その笑顔を直視したエルはトラウマを刺激された。

先日、大暴れしたティニアの近くでポロツと本音を漏らした時にアイアンクローを受け、その時に見たウリエルの恐ろしい…

「オニイチャンカラオソワリマシタ」

考えるのをやめた。

「何時から知つてたの？」

ただ正直に答えればいい。

「タンジヨウビノスウジツゴデス」

ただすなおにしたがえばいい。

「他に知っている場所は？特にあの人のへそくりとか？」

タダスベテガオワリシダイキオクカラケセバイイ。

「アソコデス。ダミーニヒツカカルトショウコインメツノタメニモ  
エマス。アケカタハ…」

………

………

…

カランカランツと音が喫茶店に響いたと同時に正氣に戻ったエル。  
喫茶店の入り口に目を向けるがドアは開いていなかった。

「あつ、今の音はウル専用の出入り口のドアよ。この前、取り付け  
たの」

すると微かにペタペタと足音が聞こえた。

そして、姿を現したウル。

その口には何かを啜っていた。

小さく、黒いもの。

時折、もぞもぞと動くそれは…

「「「エッ!?」「」」

まだ、目も開けていたい真っ黒な子猫だった。

神様は不在で他の人々はというと…（後書き）

（追記）

ふつと悪戯で神は…という小説タイトルでググったらリンク張っているサイトを複数発見。

思わず、噴き出して呼吸困難状態でマジに死にかけました。

リンク張った方々、正気ですか？

こんな駄文にリンク張って私を。すつもりですか？

怒ってはいないですが…というか嬉しいと言えば嬉しいのですが恥ずかしくて泣きそうです。

## 番外 昔々のあの時に（前書き）

ネタはいろいろ出てくるのに執筆速度が遅い蛹です。

初めの頃は時間に余裕があり、やる気十分だったので1カ月で5本書き上げていたときもあるのに今では月一も危ない。

とりあえず、66話が最終話予定で現在は65話執筆中。

さて、今回は無駄にシリ阿斯で過去話。

コメディ分は無し…すみません

## 番外 昔々のあの時に

『信じてはいけない』

それは幼い頃、彼女達が学んだ何よりも正しい真実。

一人の少女は生れついた身分のために毎日のように笑顔の大人たちに囲まれていた。

誰もが同じ顔を彼女に向けていた。

まるで同じ仮面を付けているかのように。

少女はその仮面を付けた者達にいつしか恐怖を覚えた。仮面を付けた気持ち悪い【化け物】に怯える毎日。

彼女は【化け物】から身を守るために剣や鎧では無く、己の内心を隠す物。

己自身にも仮面を付ける事で己を守った。

その日から彼女も【化け物】となった

……

……

…

今日も彼女は【化け物】と戦った。

幼い彼女に隣国の貴族という名の【化け物】は笑顔で媚を売り、彼女の護る宝を狙う。

彼女の後ろには王と王妃という権力があるのだ。

【化け物】たちにとっては喉から手が出るほどの財宝。

今日も笑顔の仮面を付け、先ほど別れたばかりであった。

少女は浴場へ向かっていた。

——汚い、汚い、汚い、汚い汚い汚いきたないきたないきたないキタナイキタナイ……

【化け物】に手を握られてしまった。

直ちに清めなければならぬ。

その一心で廊下ですれ違う他国の【化け物】達に笑顔で会釈をしながらも早足で浴場へ向かった。

フツと目の前から少女の父のお付きの執事であるジュニアルが彼女よりも幼い少女達を連れて、こちらに歩いてきた。

少女は少し彼女達が誰なのか気にはしたが特に会話することもなく、すれ違うつもりであった。

ジュニアルは少女に気づき、その場で立ち止まり、深々と会釈をする。

それに目を向けることなく、少女は彼の横を通り過ぎた。

しかし、少女は数歩進んだ先で立ち止まり、後ろを振り向いた。

ジュニアルはすでに少女に背を向け、先に進んでいる。

しかし、ジュニアルと共にいた2人の幼い少女はジッと少女を見つめていた。

いや、幼い少女達は少女を睨みつけていた。

自分の横にいない幼い少女達に気づいたジュニアルは後ろを振り向き、慌てて幼い少女の手を引いていった。

少女はしばらくその場で固まっていた。

もしかしたら初めてのことでないだろうか。

睨みつけられたのだ。

それも仮面ではない、素の表情で。

少女は王女であった。

その王女に睨みつける己よりも幼い少女達。

少女は彼女たちの事を忘れる事は無かった。

……  
……  
……

『普通になりたい』

それは幼い頃、彼女達が切に願った願望。

一人の少女は幼いながらも己が境遇を理解していた。  
親はいない。

教会前に捨てられた自分の身を呪った。

愚かな自分は毎日のように居もしない神にお祈りを捧げた。  
いるのであればなぜ、あんなに優しくかったシスター達が賊に皆殺しにされたのだ。

今でも床下に隠れていた時に聞こえてきた悲鳴と断末魔が夢に出てくる。

誰かがそれは試練だったのだと私に言った。  
仕方ないことだと言った。

——もし、神が本当にいるのなら私が殺してあげよう。  
——賊に天罰すら与えられぬ神なんて私はいらない。

悲劇の数年後、その時の賊を皆殺しにした彼女が神を否定した日に  
呟いた言葉。

……  
……  
……

「お付きのメイド……ねえ……」

「私の方で何人が選抜はしました。後は王女様のご意見も伺おうかと…」

それは偶々、私が執事長の仕事の補佐をしていたある日のこと。執事長と共に入った部屋の中には王女様がいた。

どうやらお付きのメイドをどうするかという話をしているようだった。

私は片耳にその会話を耳にしながら紅茶の準備をしていた。

「選抜の基準は？」

「メイドとしての力量と王女様を守れるだけの實力。裏関係も調査済みです」

紅茶を注ぎながらチラッと資料を覗くとそこにはメイドの中でも古参でベテランと言える先輩達の名ばかりであった。

王女様はその資料を手に持ち、チラッと目を通すとその資料を両手で持ちかえた。

すると、ビリッ、ビリリッと音が聞こえ、次の瞬間には部屋に紙吹雪が舞った。

「なっ、何を…！」

執事長の慌てた様子を見ても王女様はフンツと不機嫌そうに肘をつくだけであった。

何が気に入らなかったのかわからないが私は顔にそれを出すことなく、紅茶を王女に差し出した。

「ありがっ……！？」

王女様は紅茶のお礼を言おうと私に顔を向けたが何かに驚き、言葉

を失った。

そして、穴が開くのではないかという程に私の顔をジッと見つめてきた。

なにか粗相をしてしまったのであろうか？

「…面白いわね」

王女様はニヤリツと王女にあるまじきまるで悪人のような笑みを浮かべたのだ。

…それは私の顔の作りが面白いという意味でしょうか？

「この子にするわ。お付きのメイド」

啞然とする執事長の顔を私は生涯、忘れる事は無いでしょう。

王女様は立ち上がり、私に顔を寄せてきた。

「私は王女。貴方に拒否権は無いし、異論を述べる許可も与えない。」

横暴。

ただそれだけの言葉で表現できた行い、命令。

「ただ、私の命に忠実に、速やかに行動しなさい。それが貴方の存在理由よ」

何を言っているのだ？

そんな事が私が生まれた理由？

それは私に対する侮辱、存在の全否定だ。

捨てられたのも、虐められたのも、皆が殺された時に生き残ってしまっただけ、全てはこの時のためだ、とこの女は言ったのだ。

「勝手に決めるな」

敬語なんてこいつには必要ない。

「王女様に何て口のきき方を…！？」

「いいのよ」

執事長が何か言っていたがあの女がそれを手で制する事で止めた。そして、カップに手を伸ばし、それを飲み、それをテーブルに置く。その際にカップで隠れていた女の口元がまるで悪魔のようにその口の端を吊り上げていた。

「あんたって姉妹がいるのよねえ？」

女の笑みがとつともなく恐ろしいものに見えた。それ以上に怒りで頭がいっぱいになった。

「妹には手を出すなっ！」

「言ったでしょう。貴方には拒否権、異論は認めない。私の言う事に従ってればいいの」

そして、次の言葉をその口から語った。

「命令してあげましょうか？」

女は自身の首に親指を突き立て…

『妹の首をここに持つてきなさい』とか」

それを首を切る様に横に動かした。

その瞬間、あれだけ熱かった体と頭がまるで氷のように冷え切った。私が握りしめたのは近くに置いてあったペーパーナイフ。

武器としては心もとないが関係ない。

女はナイフを握った私を見ても笑みを浮かべている。

ダンツと音が響くほどに強く地面を蹴り、手に持ったナイフを傷つけやすい女の眼に突き立てようと振り掲げた。

だが、あと少しというところで執事長に取り押さえられた。

物音に気付いたのか、部屋の外にいた衛兵も部屋に入ってきて、私を取り押さえた。

「王女様っ、なにとぞ慈悲をっ！この子たちはいまだ幼い身。許される行為ではありませんがこの私の首を差し上げますので何とぞっ！」

執事長が頭を床に擦りつける様に懇願しているが女はただ笑みを浮かべていた。

「解放しなさい」

「「「はっ？」「」」

女は私を取り押さえる衛兵たちにそう言った。

呆気にとられる衛兵とジュニアルに女は再び同じセリフを言った。

「解放しなさい」

「しかし、こいつは王女様に危害を…「これは王女としても命令です」しっ、失礼しましたっ！」

サッと顔を青ざめて私を開放する衛兵たち。

私は床に座り、目の前で笑みを浮かべて私を見下す女を睨む。

「ティニア・セヴィオールの名において、汝は妹と共に私の専属のメイドに任命します。拒否、異論は認めません」

堂々と言う女に誰もが口を挟めない。

「殺してやるっ…！」

私だけは恨み事を言う事ができた。

それすらも女の前には笑みを浮かべる理由にしかないのだ。

「それは結構。そういえば、貴方の名は？」

この時の私はただ、目の前の女を殺す事だけを考えていた。

「エル」

「そう。エル、殺せるものなら私を殺してみなさい」

この時、将来は私がこの女を姉のように慕う事など微塵も想像がつかなかった。

……

……

…

『自分以外のニンゲンと呼ばれる他人』

それは幼い頃、彼女達がもっとも恐れ、それでも求めた存在。

ある人は私達を協会に捨てた。

ある人は協会にいた人達を殺した。

ある人は保護すると言っていたのに私達をお金で売った。

『誰も私達に関わらないでください』

『誰か私達を助けてください』

矛盾だとわかっていてもいつもそう願っていた。

……

……

…

目が覚めると数人の男達に囲まれていた。  
意識が朦朧としている。

歪む視界で男達を捉えるが皆が酒を煽っていた。  
酒独特の匂いが鼻についた。

酔っていて呂律が怪しいが男達が話している話を纏めると私を人質  
に姉に暗殺を依頼したとの事だ。

相手は王女。

どうやら国家転覆を企む者達に捕まったようだ。  
周りを見渡すと使われなくなって久しい倉庫の中のような。

次第に視界がはっきりすると倉庫のあちこちに男達が確認できた。  
拘束状態や周りを確認し、脱出は不可能と判断した。

人質となった私もこいつらは律儀に取引に応じて、私を開放するわ  
けはないだろう。

そうなるとやる事の一つ。

どうせ、生まれてから碌な事が無かった人生だ。  
姉の足を引っ張るなら自決ぐらい訳ない。

病弱で引っ込み思案な私を支えてくれた姉さん。  
神を信じぬ私達なのだから祈るのであるなら悪魔であろうか？

この命を代償に、最愛の姉に幸多からん事を…。

そう願いつつ、舌を噛み千切り……どうやら、私は悪魔にも嫌われているようだ。

……

……

…

「昔、誘拐されることに憧れた事があったわ。でも、なかなか私の所までやってこれる悪人っていないのよね。ちよつと羨ましいって思うわ」

「……そう……」

私を見下ろす王女がいた。

「王女である私を差し置いて、貴方が先って言つのは生意気ね」

「……馬鹿……？」

いかにも高級そうなドレスは所々が破れ、王女自身の傷と返り血で赤く染まっている。

「それはあんたの姉。私の目の前でナイフを取り出して、『私の姉が町はずれに囚われています。この命と引き換えに姉をお願いします』って言つて首にナイフを当てたのよ。おかげで掌が痛いわ」

そう言つて差し出された掌には一本の切り傷があった。  
ろくに手当てもしておらず、今も少し出血している。

「ジュニアル。そういえばあの子は？」

「私たちの足に追いつけなかったようです。間もなく来るでしょう。」

… 一国の王女が乱闘騒ぎとは……」

そう言つてやつてくる私たちの保護者のジュニアル。

彼は怪我もなく、お城で見る姿のままであつた。

しかし、『この責任、私の首を差し出すしか…』と物騒な事を呟きながら、頭を抱えている。

「責は私が被ります。王女の名にかけて、この場にいる者に責を負わせません」

「そう言つわけには…」

「恥じる事は何一つしていません。誇ればよいのです。貴方は家族を命がけで守つた。非難する愚か者がいるのならその者を私が許しません」

「…本当に立派になられて嬉しいやら悲しいやら」

複雑そうに呟くジュニアルは一礼し、袖口からズルズルと鎖を引っ張り出した。

そして、地に倒れる男達を拘束していく。

次々出しては拘束していくジュニアルに何処にそれだけの鎖を隠しているのか疑問を持つがそれよりも倉庫の入り口に息を切らす姉の姿があつた。

「…………どうして貴方が助けたの…？」

そう私が聞くと彼女は何故か驚いた表情を見せた。

「貴方…5文字以上しゃべれたの!？」

…姉よ、なぜこいつを暗殺しなかった？

『新記録ね』とか呟く彼女を睨むとその視線に気づき、笑みを浮かべた。

「それは貴方が私の……」

何か言ったはずなのだが飛びついてきた姉に押し倒され、聞けなかった。

……

……

…

リンはむくつとベッドから起き上がった。

ずいぶんと懐かしい夢を見たためか何処か余韻に浸るかのようにポロロとしていた。

夢で見た昔の夢は王女様に助け出された日。

それから本当に色々な事があった。

王女を支える人が増えるに連れて、王女が本来の優しさを出し始めた。

それにつれ、姉が明るく子供っぽくなった。

昔の彼女たちを知る者はその変貌ぶりに苦笑いをしている。

彼女自身は2人に比べるとそれほど変わっていないと考えていた。

『貴方が一番変わったわよ』

未だに寝ぼけているのか、それともこれも夢なのか。

王女様ではなく、あの時の【王女】の声が聞こえた。

「…そんなことないですよ。貴方達に比べたら私なんて背が伸びたぐらいです」

夢か幻のような存在の問いかけに声を出して答えるリン。

その幻影は今の王女様は絶対にしない、人を小馬鹿にするような皮肉な笑みを浮かべる。

『あの時でさえ5文字。今の言葉は30文字以上よ。6倍も成長したんだから』

…姉よ、本当に何故に彼女を暗殺しなかった？

『いいことよ。それだけ貴方は自分を表に出せる。それだけの絆と強さを得たのだから』

「…王女様がいつのなりともかく、貴方が言うとおかづきますね」

『未来も今も過去も私なのにね。根本的な所は変わっていないのに』

そう言つてこちらを見る。

その姿にデジャブを感じた。

……ああ、助け出された時に会話をしていた姿と酷似していたのだ。特にその表情。

その愛しい者を見るような微笑み。

「未来も今も過去も貴方が私の……」

何か言つたはずなのだが今回も聞けなかった。  
言葉の途中で部屋の扉が勢いよく空いたのだ。

「りゅんちゃん。朝だよー!!」

姉に目線で挨拶をし、再び前を見ると彼女は居なくなっていた。

## 神と来訪者（前書き）

もう開き直って月一更新でいいんじゃないですか！？、と自虐に走る蛹です。

読むほうが好きなんですよ！

でも、書くのも好きなんですよ！？

毎日のように更新している作者ってすごいですね。

## 神と来訪者

「どうすればいいかしら？」

ウリエルの目線の先の真っ黒な体毛の子猫とウルに向かって困惑の声を上げた。

生まれたばかりであろう、目も開かぬ小さな子猫。

それを愛おしそうに舐めて、毛繕いをするウル。

くすぐったいのかモゾモゾと身動きをしている子猫は実に愛らしかった。

実際にリンとエルは子猫に顔を寄せ、口元を緩ませている。実に微笑ましい光景なのだが…

「何も洗濯物の上に居座らなくても…」

太陽の光をたつぷりと浴びた、フワフワの洗濯物。

その上で微笑ましい姿を晒されても少し複雑であった。

「とにかく移動してもらわないと…」

そう言って手を伸ばすと今まで子猫を愛でていたウルの顔がクルツとこちらを向いた。

威嚇する訳でもなく、ただジッと見つめてくる。

そう、ただジッと見つめているだけなのだが…それだけでウリエルの動きが鈍った。

「ちょっとだけ。ちょっとだけ移動してもらっただけだから」

そう、自分に言い聞かすようにブツブツとウリエルが呟く。

フツと視線を落とすとリンとエルがジッとウリエルの顔を凝視していた。

エルはちよつと眼に涙を溜め、リンは無表情だが今はそれが逆に怖い。

「あう、ね…猫の毛ってね、服に付くと洗濯が大変なのよっ」

まるで子供が親に悪戯の言い訳をしているかのようにだと傍目で静観しているティニアは思う。

うろたえているウリエルに3対の目がジッと何かを訴えるかのように見つめる。

その視線を受け、見る見るうちに挙動不審になっていくウリエル。

「落ちにくいしね、他の洗濯物に移…るう…ううっ…」

湧き出すような罪悪感がウリエルの口を石のように重くしていく。

ウリエルは自身が正論を言っていると思っではいるがそれなのに自分が悪い事をしたかのような気がしてくるという間逆の感情で混乱していくのであった。

「……今日だけね」

観念し、絞り出すような声で呟くとリンとエルがパンツとハイタツチを交わし、再びじっくりと子猫を観察する。

ガツクリと肩を落とし、カウンターに向かうとカウンター席でクスクスと笑みを溢すティニアを見つけた。

「フフツ、災難だったわね」

ティニアの笑みに殺意を覚えるも大人げないので感情をコントロール

ルするウリエルであった。

ウリエルは息を大きく吸って深呼吸し、落ち着いたところでティニアの隣に座った。

「ウルの子供…だったりしてね？」

ティニアがそう言って子猫を指さすがウリエルは首を振る。

「それだったらお腹が膨らむはずよ。何回か見かけたけど特にそんな様子は無かったわ」

2人が後ろを向くとエルが子猫に手を伸ばそうとしてた所をリンに注意されたようだ。

ウルと子猫。

体毛の色は正反対だが傍から見ると親子にしか見えない。

「この子も飼うの？」

ティニアがそう問うとウリエルは首をかしげた。

「飼わないわよ。それと、王女なんだから言葉は正しく使うべきよ。『この子も…』ってまるで私がペットを飼ってるように聞こえるわよ」

そうティニアに注意するが返ってきたのは呆然とした顔であった。

「えっ！？だって、ウルが…」

そう言っただけでウルに指を指すがその手をウリエルが掴み、手で覆う様に包み込んだ。

さらにズイーツと顔を寄せ、子供に言い聞かせる様に、まるで諭すように語った。

「あの子は飼ってるんじゃないくて住み着いてるの。喫茶店を営んでるのにペットなんて買えるわけじゃない。衛生上の問題があるんだから」

ティニアに言い聞かせるように一言一言をゆっくりと告げる。

確かに飲食物を扱う店でペットを飼うのは問題だ。

だからと言ってそれは無いんじゃないかなあ、とティニアは思っ

「専用の餌入れがあるのに？」

実際にエルの名前の刻印が施された専用の食器があったりする。

それも先ほど、ティニアの目の前の人がピッカピカに磨いていたりもしていた。

「ええ」

そんな人はティニアに対して実にさわやかな笑顔で返答された。

「名前も付けて、グッズも販売しているのに？」

売上は好調で一枚噛んでいるリンも最近はホクホク顔であったりする。

「ええ」

そういった売上の会計処理をしている筈の当の本人は聖母のような笑顔でご返答されていた。

「たまに一緒に寝てあげて、寝る前には語尾に『ニヤン』を付けて語りかけているの？…くすっ」

情報提供者：Gさん

「……ええ、グラムには後でお仕置きしないとね」

笑顔…、から一転して般若降臨。

「痛い痛い痛い痛いっ……ッ!？」

ビキビキッとウリエルに包まれていた手から嫌な音が聞こえてきた。ちなみに、遠くで情報提供者：Gさんは悪寒とくしゃみが止まらなかったそう。

今にも砕け散りそうなティニアの手を救ったのは来店を知らせるドアのベルであった。

「お客様、申し訳ございません。本日は定休日となっております」

般若から一転して商売人となった神界では偉い立場だったはずのお方。

ティニアは真っ赤になった手を冷やすように息を吹きかけ、チラッとウリエルの影からお客を確認した。

「いえ、御客ではないのですが。申し訳ございませんがクロトスさんはいらっしゃいますでしょうか？」

そこにいたのはいかにも商人といった男であった。大きなリュックを背負った小太りの無精髭を生やした男。

「失礼ですが貴方は？」

というウリエルであつたが彼女にはこの男に見覚えがあつた。それもごく最近。

「あゝ、これはしつれいしました。私は……」

ふつとデジャブを感じるそのうそんくさそうな笑みは……

「自称、七つの顔を持つ商人です」

以前、ウリエルが町で大男達に絡まれた時にいた男であつた。

神に宛てられたラブレター！？

クロトスの手には2枚の封筒が握られている。

裏返して見るとそれぞれには宛名が記載されていた。

片方には自分の名前。

もう一方には何故か知り合いの名前が記載されていた。

「これは？」

クロトスはそれを差し出したウリエルにそう問う。

喫茶店に戻ってくるなりにいきなり差し出されたものだ。

しかも、得体のしれない物でも中に混入されているかのように微妙な表情で。

今も心なしに喫茶店内の皆から微妙に距離を取られている。

「【自称、七つの顔を持つ商人】からの…ラブレター？」

クロトスの問いを疑問形で返すウリエル。

差し出した本人もよく分かっているらしい。

しかし、クロトス自身は例え心当たりのない相手だろうと自分宛てにラブレターが届いたのだ。

見た目は興味無さそうに封筒を光で透かしたりして弄んでいるが内心はちよつと興奮していた。

「…ちなみに男」

「グラム、処分しとけ」

リンの補足説明を聞いた途端に汚物でも触っているかのように封筒を指先で摘み、顰め面でグラムの方に差し出すクロトス。

ちなみに、グラムはすでに元の人型に戻って、今はケーキをパクパクと頬張っている。

「読むだけ読んでやればどうだ。減るもんでもあるまい」

「いや、減る。というか、色々と大事なものが壊れそうだ。…今もちよつと寒気がしてるし」

「気持ちわかるが…。まあ、読んでやれ」

そう言つて再び、ケーキを頬張り始めるグラム。

先ほどの戦いによる消耗で回復に努めているのであろう。

…でなければ吐き気がするような量のケーキをあの小さな体に収められるはずがない。

「…でさ。そもそも誰なんだ？」

封筒の端をビリビリと破きながら問いかけるクロトス。

中に入っていたのは一枚の紙だけであつた。

クロトスは紙の角の本当に端の所だけを摘むようにし、出来るだけ触れる面積を少なくしている。

重力に従つて折りたたまれた紙は広がり、クロトスは怪しい物を見るかのような目つきでそれを流しみている。

「唯の顔見知りよ。ウルがお店に子猫を啜えて連れてきてね。その黒い子猫がさつきまでいたのだけれどその人が飼い主だったみたいね」

ウリエルの言葉に顔を俯かせるリン。

せっかく可愛がつっていたのに早々にお別れだったので寂しいのだからとウリエルが慰めてあげようとリンの頭に手を…

「…せつかくの稼ぎ……お友達だったのに」

なにやら黒い事を言いかけたが他の人の耳には入らなかった…わけでもないが意図的に無視した。

「それでその子を引き取る時に貴方と自分の知り合いがこの店の常連らしいから渡してくれって」

気を取り直し、クロトスに視線を向けると本人は先ほどの手紙を両手でしっかりと持ち、笑みすら浮かべていた。

「それがこれか…」

ぼそつと小さな声でそう呟くクロトス。

とその時、カランカランつと音を立てるドアに付けられたベル。喫茶店内にいた者がそちらに目を向けるとティニアとエルがドアから入ってきた所だった。

「御苦労さま」

ウリエルは劳いの言葉を2人に向けた。

「さつきも言ったけど王女にお使いをさせる人なんて聞いたこと無いわよ？」

「じゃんけんで負けたんですから文句は無しよ」

ブツブツと文句を言うティニアにやんわりと諭すウリエル。

「…この店は本当に非常識だね」

2人の後から入ってきたのはロレオであった。  
レイと同じ研究所で働いたこともある狂科学者。  
以前にクロトスとおかしな発明品でトラブルを起こしたこともある。  
それ以来は常連となり、度々来店してはクロトスと怪しい密談をする仲となった。

「王女がいきなり僕の研究室に来た時はもしや、あれとかあの時の実験事故の隠ぺいが発覚したのかと思えば喫茶店に連行され、王女が来た理由がじゃんけんで負けたから？いや、そもそもこの国の王女が城の外を当たり前のように闊歩してるのがそもそも…」

ブツブツとロレオは呟きながらカウンター席に腰を下ろし、テーブルに倒れこんだ。

「気にしない方がいいぞ。いつもの事だから」

「諸悪の根源が慰めるな」

「コーヒー、頭皮で味わうか？」

「…謝るから舌で味あわせてくれないかい？」

笑顔でロレオの頭上でこぼれる寸前までに傾けられたコーヒーカップ。  
プ。

中のコーヒーはマグマのように煮えたぎっている。

冷汗をかきながらクロトスに言うところを戻し、それを今もコーヒーを頼張っているグラムの席に置いた。

グラムはその煮えたぎったマグマの如きコーヒーを一気に飲み干し、再び、ケーキを頼張りだした。

それを見ていたロレオとクロトス。

ロレオは目を丸くし、クロトスに慌てて視線を向けるがクロトス自身はそれがまるで当たり前のことのようにそれを流した。

「淹れ直すから少し待ってろ」

そう言っただラムが飲み干したカップを回収している。

「…ブラック、少し濃い目をお願いできるかい？」

ロレオも理解した。

——ここはこの程度の異常が普通とされる魔境なんだと…。

しばらくゆつたりとした時間が流れ、クロトスはコー淹れたてのコーヒーと共に先ほどの封筒を差し出した。

「これは？」

「俺達宛てのラブレターらしい」

そう言っただひらひらと自分宛の封筒を見せる。

そして、クロトスは気づいた。

クロトスがそう言った瞬間、ロレオの目がほんの少しだけ弛んだのが。

男は皆、単純らしい。

「…ちなみに男」

「僕にそんな趣味は無いのだが…」

再び、リンが呟く言葉に苦い顔を浮かべたロレオ。

ますます、男は（略）。

まるで汚物を見るかのように封筒の端を破っていくロレオ。

「そういえば、お兄ちゃんの手紙はなんて書いてあったの？」

エルは頬にクリームを付けた状態でカウンターテーブルに身を乗り出した。

好奇心のためか、目がキラキラと輝いている。

「挑戦状…かな」

そう言っただけでクロトスが差し出したのは折りたたまれたトーナメント表だった。

そこにはクロトスの名前もあり、その隣、つまりは次の対戦者の名前の所が赤丸で囲まれていた。

「【匿名希望の商人】ってつまりはあの人のね。……リン、これって当日まで秘匿じゃなかったの？」

ティニアがリンに問いかけるがリンは問いに答えずに席を立った。

「…クロにいい。姫の事をお願いします」

そういつて出口に向かう背を見て、エルはケーキを頬張りながら慌てて立ち上がる。

「ム〜！ふあふえ〜、ふあふあふい…モグモグ…一緒に行く〜」

ドアから出て行った2人を見送った後、クロトスは席で封筒の中身を見ながらニヤついているロレオを見た。

「甘い言葉でも書かれてたか」

「ああ。ハチミツよりも甘ったるく、雷に打たれたかのような痺れる言葉で書かれた、思わず惚れそうな最高のラブレターだよ」

ロレオが見せたのは覗き見たティニアが顔を顰めるほどの難解かつ高度な文章の羅列。

とてもではないがラブレターとは程遠い代物であった。

「研究資料。レポートの一部だね」

恍惚の表情を浮かべ、悦に入るロレオは明らかに異常だった。手がガクガクと震え、頬が上気している。

「あああ、いい…いいよ。素晴らしく…おぞましい。僕と道は違えど…フフフツ」

「おゝい、落ち着け」

クロトスが声をかけてもまったく反応しない。

グラムとティニアは引いたのかロレオから距離を取っている。

クロトスは悦に入るロレオを見るのは初めてでは無かったので免疫が出来ていた。

「以前に話したよね。僕の弟子が肉体融合の研究しているって」

しばらく放置していると落ち着いたロレオはそう切り出した。

「キメラ、キマイラがどうかいってたな」

「そう。同一個体内に遺伝情報が異なる細胞を交え、新たな生命を誕生させる研究。これを見る限りは研究成果を僕に見せれるレベルに到達したようだ」

「…俺にはこれが入っていた」

クロトスは自身宛のトーナメント表をロレオに見せた。

それをロレオが見た途端、再び壊れた。

「『研究は発表しないと意味が無い。他人に見せずに自己満足で終わる貴方はただの愚者で死人も同じだ』。彼の残した言葉の答えがこれか！」

「俺との試合」研究発表。そうか、俺との試合はその程度の…クツクツクツ……」

二人の笑い声が重なる。

しかし、それは笑い声と言ってよいのであろうか。

喜色の欠片さえ含まれていない笑みをお互いが浮かべている。

「黒い猫をそいつは飼っていると聞いたがそれか？」

クロトスの言葉にティニアとウリエルが反応した。

ロレオはその言葉に頷く。

「彼はレイの猫中毒の性で猫は嫌いだ。研究モルモットならまだしも飼うなんてあり得ない」

「そんなっ!？」

ティニアの言葉にロレオは顔をティニアに向けた。

「悪いけどこれは確実だ。彼の師でもあった私が断言しよう。それは…」

——【化け物】だ

## 神と夜と3人で（前書き）

《進行状況》 最終話67話予定。

現在63話。

ストック65話完成。

《前書き》

上記のとおりです。

転勤が決まってドタバタです。

通知から10日以内に1500キロ先に転勤、通知前日に事故ったので新車購入。

納品が引越し前日で引越し当日に軽い接触事故。

現在、その車で3泊4日かけて移動中。

： そんな状態なので更新遅れたのは勘弁してください（泣）

## 神と夜と3人で

夜闇に包まれた喫茶店。

月明かりが差し込む静寂の中、クロトスはなるべく音を立てぬように戸棚の奥を漁っていた。

常人ではそこにある事にすら気づけない仕掛けを解き、ぽっかりと戸棚の奥に隠し穴が開く。

そこにクロトスは手を伸ばし、酒瓶を取り出した。

ひんやりと心地よい冷たさのそれを手に、さらに戸棚からグラスを取り出し、普段はお客が座るカウンター席に腰を下ろした。

酒瓶の栓を抜き、トクットクツとグラスに半分程注いだ。

酒瓶を横に置き、水滴が浮かぶグラスを手に持つとまるで煽る様に喉に流した。

空になったグラスをクロトスはジッと見つめ、軽くため息を吐きながらテーブルに置いた。

「…ウリエル、本当に俺の判断に任せてよかったのか？」

「気付いてるのなら言ってもらえませんか？」

喫茶店の隅、闇夜から浮かびあがる様にウリエルが姿を現した。

テクテクと足音を立て、スツとクロトスの隣に腰を下ろした。

「残りたい…、そう思っただろう？」

「お返ししますよ、その言葉…」

お互いが何処か哀愁漂う声色。

ウリエルは何処からかグラスを取り出し、クロトスは何も言わずにそのグラスに酒を注いだ。

会話無しに淀みなく行われたこの行動から2人の付き合いの長さが

うかがい知れる。

「グラムが言うには帰ろうと思えばすぐにでも帰れるそうです。…  
今にでもすぐに」

やや俯きながら呟くウリエル。

しばらく、2人がグラスを傾ける音のみが喫茶店内に響いた。  
言葉を出すと何かが壊れる、自覚しているからこそ苦しかった。

「決めたんだ」

そう切り出したのはクロトスだった。

「【クロトス】としてこの世界にきて、友が大勢出来たんだ。この  
まま世界が崩壊するなら笑って…別れたい」

走馬灯のように駆け抜ける思い出。

一つ一つが今も色あせぬ宝石のように鮮明に、輝かしい光を放つ。  
輝いているのに今はそれが辛い。

「いつ言うの？」

「次の試合の後…、それでいいか？」

若干の間、ウリエルは小さく溜息を吐くようにして頷いた。

そして、テーブルに肘を付き、憂鬱な表情でグラスを指で弾いた。  
ピーンッと澄んだ音が響く。

ただそれだけなのにその響きが何処か悲しげに聞こえた。

それにつられた様にトコトコつと足音が近づいてくるのが聞こえた。

「…起きていたのか？」

クロトスの視線の先には目を擦りながら寝間着姿で姿を現したグラム。

「子供は寝る時間よ」

「われは剣じゃぞお…」

眠気のためか何処か舌足らずなグラムはふらつきながらクロトスの隣、ウリエルの反対側に座った。

頭をふらふらとさせ、椅子から落ちそうになっている。

「疲れてるの？」

「ううう…」

グラムは呻きながら手を伸ばし、テーブル上の酒瓶を掴んだ。それを引きよせ、躊躇なくそれを一気に煽った。

度は決して低いものではなく、中も半分程残っているのに関わらず、喉を鳴らして酒瓶を空にした。

「…足りない」

「明日にしろ、明日に」

若干、眼は覚めたが不服そうに酒瓶の中を覗くグラム。

クロトスは酒瓶を取り上げ、自分も中を覗くが見事に空だった。

結構値段の張る酒の寿命は短命であった。

「臭いはまだ取れてないのか？」

グラムは鼻をスンスンツと辺りの臭いを嗅いだ。

初めの時よりは薄まっているがそれでもはつきりと分かる醜悪な臭

い。

腐り、穢れた魂と肉体の痕跡を残す臭い。

その臭いの元はあの手紙であつた。

その人では解らぬ臭いはグラムを不快にさせた。

普段であればその手紙を消滅させていたであらう、嗅いだ事のある匂いでなければ。

「腐食した獣道。以前にグラムが見つけた痕跡がキマイラだったとわね」

「道理で嗅いだ事のある臭いだと。まさか、本当に魔界のそれも奥深くにしか生息しないキマイラを人が作り出すとは……」

ウリエルとグラムはそう言うが彼女らにすれば本当に驚きなのだ。

猿が英語を話せるであらうか？

蟻がライオンを倒せるであらうか？

人がキマイラを作れるであらうか？

これはそういうレベルの事なのだ。

「問題はどのレベルまで再現出来ているか……。完全に再現出来ていたらこの国なんて滅ぶぞ」

クロトスと言う事は大げさではないのだ。それだけ強力な魔物、いや、魔獣なのだ。

「まあ、全ての問題は明日からだな」

そう、全ては明日なのだ。  
明日、全てが…

神が挑む…（前書き）

私生活で色々あったのですが復活しました。

以前に比べたらあまり執筆の時間も取れないと思いますが少しずつでもやっていきたいと思っています。

とりあえず、ストックを投稿。

改めて見直すと駄文だな。

神が挑む…

扉に背を預け、手に持った書類を見ているティニア。

後ろから聞こえる歓声をBGMに何度も読み直した書類を暗記する程見ていた。

これからクロトスが戦う相手の調査報告書である。

「【自称、七つの顔を持つ商人】って七つどころじゃないじゃない」

【科学者】として研究した成果の一部を【旅団の一員】等として侵入した他国に【商人】としてそれを軍事目的に販売、悪用する悪質な行為の情報。

今現在は他国の【間者】として当国に侵入し、一部の国家反逆勢力に与している。

それ以外にも彼が関わったと思われる事件等の記載がずらっと記されていた。

書類ごと握りつぶしたくなるような悪質な事件内容に唇を噛み締めると前方から乾いた足音が聞こえてきた。

書類から視線を上げると…何とも眠そうなクロトスのそりのそりと今にも死にそうな顔で歩いてきた。

「…なんて顔してるのよ」

呆れた声で問うティニアにクロトスは答えることなく、大きな欠伸をし、目を擦っている。

「試合大丈夫なの？今にも倒れそうだけど」

ティニアが近づくとその酷さがより見れた。

眼にはクマが出来、充血。  
そして、何よりも…酒臭い。

「暗い雰囲気吹き飛ばそうという感じで…うぷっ…ひ、秘蔵の酒のオンパレードでひたすら…飲み食いしてたら…朝でした」  
「馬鹿じゃないの!？」

クロトスの顔面に叩きつける様に手に持った書類を突きだした。  
バキッとシャレにならない音が聞こえた気がするが…。

「そんなんで大丈夫なの?それ見る限りは危険な奴みたいだけど」  
「それって…ふん」

クロトスは顔にへばり付く書類を引つpegし、眺めると眼を細めた。  
ぱらぱらと流し見る様に中を確認するがすぐに興味が無くなったのか、ティニアに差し出した。

「まあ、何とかなるだろうさ」  
「何とかって…」

ティニアが呆れたように頭を押さえる。  
その姿に苦笑するクロトスは後方から足音に反応し、後ろを向くと走ってくるエル、リンの姿が見えた。  
心なしかエルとリンの目つきが吊り上っている気がするのは何故だろうか?

「やばっ、抜けだしたのがもうばれたの?」

正解は『執務を放り出して、一人先にクロトスの応援に来た王女に怒り心頭』。

逃げ出そうとするティニアだったが首根っこをクロトスにがっしりと押さえられたために逃げ出せない。

「逃げるなっ、この不良王女っ！」

「仕方ないじゃないの。それしか会いに行く方法なかったんだから。…後、私もこれでも王女なんだからその発言は不敬罪で投獄なんだけど？」

フツとティニアから首にかかっていた圧力が消えた。

クロトスの方を見るとピシッと背筋を正し、深く頭を下げる彼がいた。

「…申し訳ございませんでしたティニア姫。姫に対する数々の非礼、誠に…「ごめん、気持ち悪いからやめて」…まあ、今さらだしな」

いつもに比べ、真剣な声色と表情は新鮮ではあったが普段の姿が姿だけにティニアにとっては悪寒が走る程の違和感だった。

「…何をいちゃついてるんですか」

そうこうしているうちにティニアの背後からゴゴゴツと凄まじい怒気を発する2人がいた。

「……逃げるの忘れてた」

顔を真っ青にしているティニアにはとてもではないが怖くて後ろを振り向けない。

一方、クロトスはというと…

「これでいいんだろう」

「足止めありがとう、お兄ちゃん。これ、約束の金一封」  
「ありがとう、エル」

ちゃっかりとエルに買収されていた。

ちなみに二日酔いも油断させるためと時間稼ぎの話題作りのための演技である。

しなくても良かったのだがつい悪乗りしなくなったのだ。

補足だが一晩中飲み明かしたのは事実であるがそれでも二日酔いにはならなかったようだ。

クロトスがエルに貰った報奨金を懐に入れ、振り向くとリンに静かに、だが有無を言わさぬ迫力でティニアを説教している姿が目に入る。

―自分は後どれだけ彼女らとこうして過ごせるのだろうか？

ふっと昨日、散々悩んだ考えがぶり返した。

「クロにいい」

フツと顔を上げると3人が微笑んでいた。

「これが終わったらパーティーだよ。忘れないでね」

元気なエルにはおいしいものを求めて、あちらこちらに振り回された。

「ああ。エルの好きなものもたくさん用意してあるぞ」

その天真爛漫、無邪気さに自然と笑顔でいられた。

「…がんばって」

無口なリンはその分行動的でウルグッズ開発やらお店の経営に手を貸してくれた。

「ああ。エルもティニアのお世話で大変だろうけど頑張れ」

彼女にどれだけ助けられ、感謝しているだろうか。

「まあ、怪我しないようにね。どうせ楽勝でしょうけど」

王女という身分にも関わらずに自分と対等でいてくれるティニア。

「それは解らんが善処するよ」

人間の王女、その生き方とあり方に尊敬すら覚えた神王としての自分。

心から彼女らに会えた事に感謝したい。

だからこそ…

「じゃあ、後で」

これが終わったら今まで言えなかった事を言おうと思う。

自分たちの事、これからの事、色々な事を話そう。

それを胸に試合場へと続く扉に手をかけた。

神が挑む…（後書き）

残業月50時間＋サービス出勤合わせると120時間以上。  
もらえる残業費40時間程。

…アレ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0643c/>

---

神は貴方の守護天使！？

2010年10月10日14時20分発行